

圍棋神髓

金

795.

H 633i



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

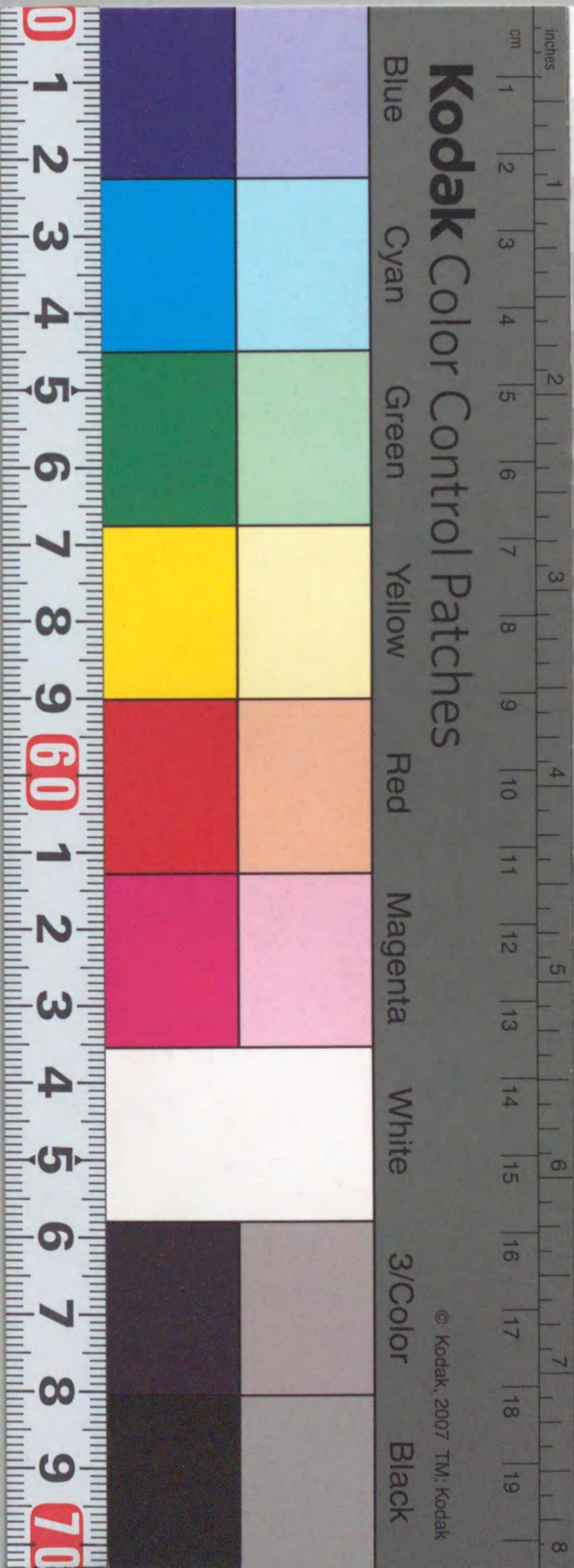


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





名人本因坊秀哉講述

圍棋神髓

全

瀨越圃碁文庫

寄贈者

八幡恭助

松井明夫

互先定石

三間夾之部



互先定石「三間夾」の部 目次

三間夾	……………(二 圖)	……………一六七	白 頁	……………一六八	……………一六八
三々頂	……………(五 圖)	……………一六九	……………一七三	……………一七三	……………一七三
斜走掛	……………(二十 圖)	……………一七四	……………一九二	……………一九二	……………一九二
大斜走掛	……………(十 圖)	……………一九二	……………一九七	……………一九七	……………一九七
二間飛	……………(二十一 圖)	……………一九八	……………二二二	……………二二二	……………二二二
高三間	……………(七 圖)	……………二一三	……………二二七	……………二二七	……………二二七
一間夾返	……………(二十 圖)	……………二一八	……………二二二	……………二二二	……………二二二
二間夾返	……………(五十三 圖)	……………二二三	……………二六九	……………二六九	……………二六九
三間夾返	……………(十三 圖)	……………二七〇	……………二七六	……………二七六	……………二七六
手 拔	……………(五十八 圖)	……………二七七	……………三二四	……………三二四	……………三二四



寄贈  
瀬越国基文庫  
殿

617192



三間夾の  
主意

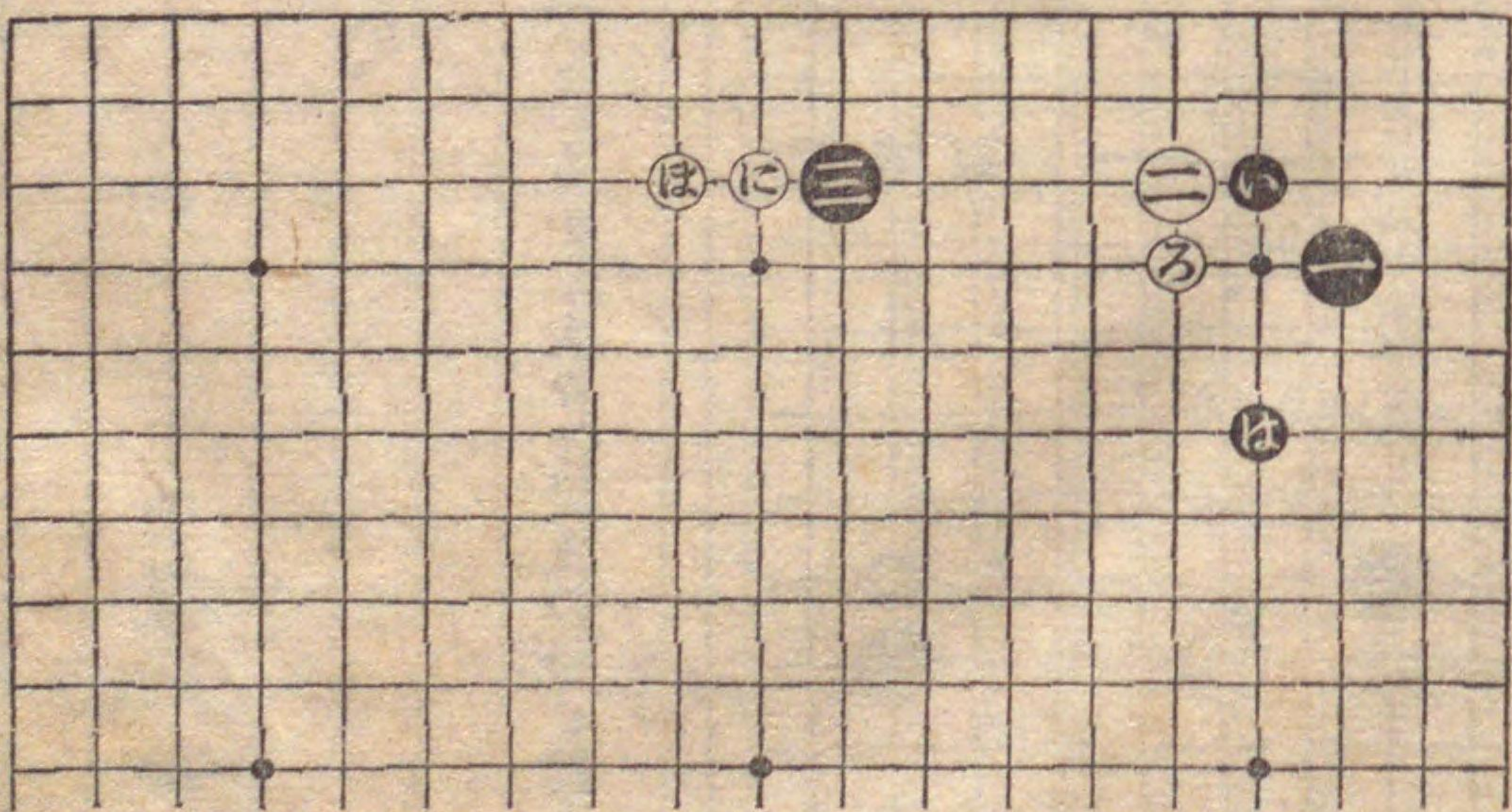
互先  
定石「三間夾」の部

(三間夾とは黒三の手を指し、三々頂とは「第參圖」の白四の手を指す)

○(第壹圖) 黒が三の手で此く三間に夾んだ主意は、白二が㊦方面に拓かうといふのを妨げて之を夾み攻め、白が若し手抜したならば●と尖頂け㊧と立たせ●と煽つて之を攻めやうといふのである。

「註」是等の詳細は「一間夾」及「二間夾」の初の説明を參酌されると思半に過るものがあらう、白一は「目外」といふ外部發展に便利な位置にあるから此の「目外」の特長を利用して㊦若くは㊧と極端に廣濶な拓きも出来るが、策戰次第で、態と三の點に窄く三間拓をする事もある、が其等は已に「布石法」の條下で繰返し詳述してあるから、彼を參看せられたい、  
要するに黒三は此の白二の拓きを妨害した手である。

(圖壹第)



~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



三間ニ夾マ  
レタ時ノ  
應手如何

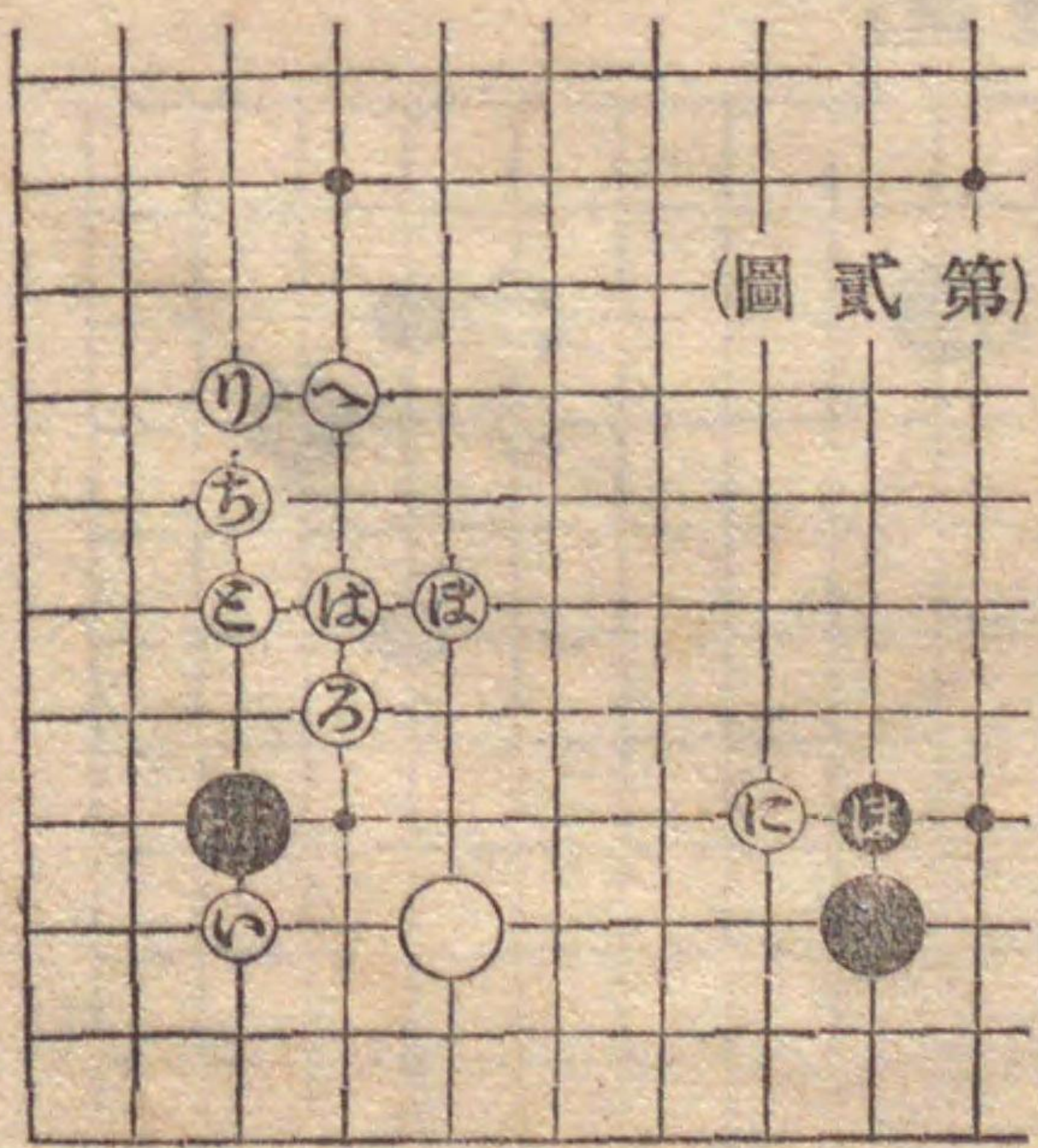
日卷  
百九十一頁  
参照

○(第貳圖) 黒に三間夾せられた白の應手は①と頂げるか(之を三々頂と呼ぶのは一間夾及二間夾の場合と同じ)

- ①と斜走に掛けるか、
- ②と大斜走に掛けるか、
- ③と黒の肩に打つて、黒に④と應せしめた後、⑤と大斜走掛するか、
- ⑥と二間飛するか、
- ⑦と打つか、此の⑧の點は⑨の大斜走より更に二路を躍進した點であるから大々斜走の掛と稱されて居る、
- ⑩と一間に夾返すか、
- ⑪と二間に夾返すか、
- ⑫と二間に夾返すか、或は全然「手抜」するか。

以上十種を正當の應接とするのである、此の順序を逐うて講解を加へる事としやう。

「註」 此の中⑩の三々頂、⑪の斜走掛け、⑫の一間夾返、⑬の二間夾返⑭の三間夾返、に就ては「一間夾」及「二間夾」の條を參看せられたい。



三三ニ頂ケル  
意

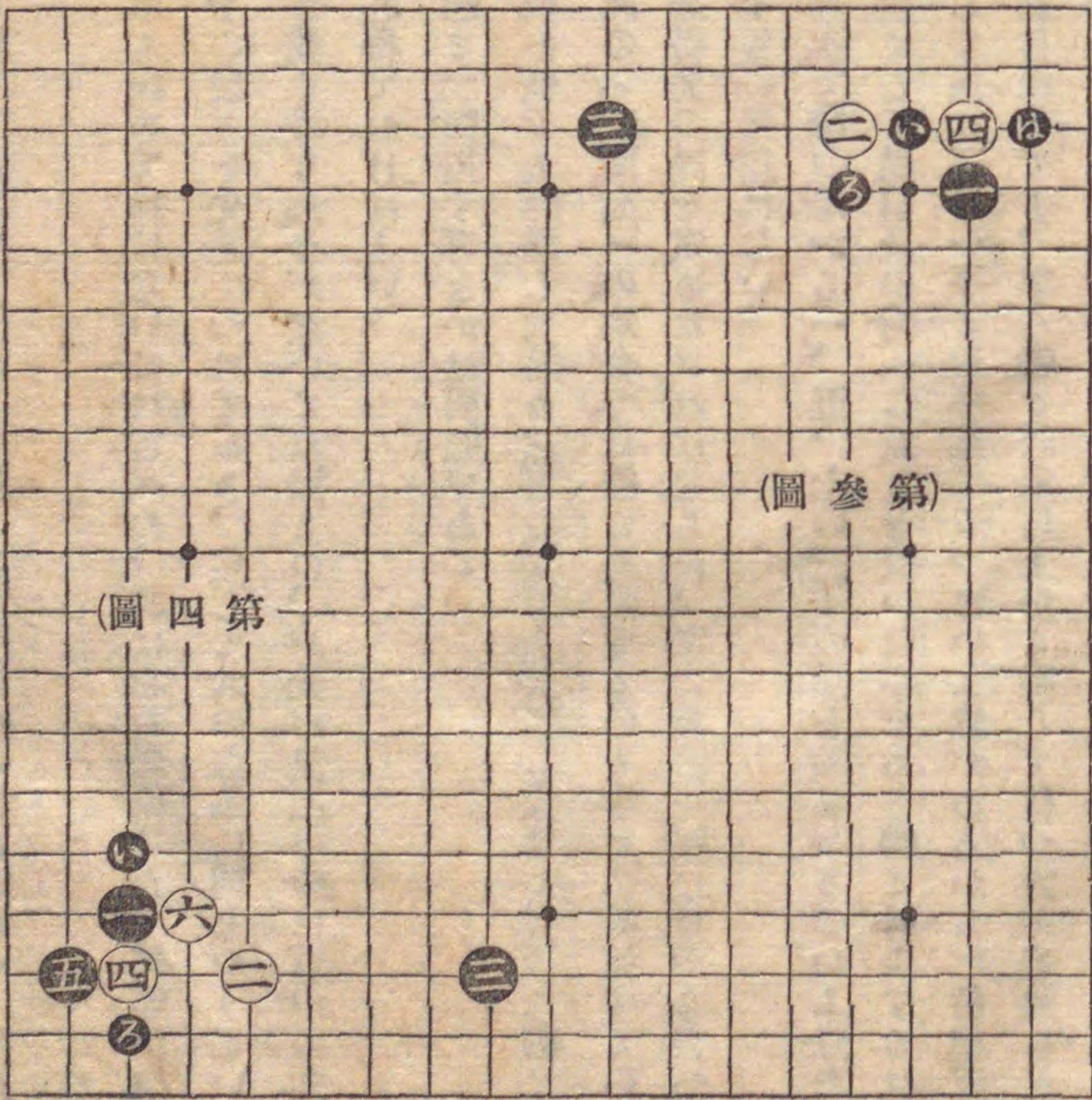
三間ノ時ニ  
頂キナシ  
五六ノ手  
只此一手アル

○(第參圖) 白が四と頂げるのは黒から①と尖頂けられるのを拒ぎ之を凌いだのである。

「註」 若之が一間夾の場合なれば白四は黒②の頂けに備へた譯になる、又二間夾の場合であれば③の尖頂と④の頂けとを併せて凌いだ事になる、然し本圖三間夾には⑤に頂げる手は無いから⑥の尖頂を拒いだ一方と見てよい。

白四に對する黒の應手は如何なる場合でも⑦と隅へ綽る一手である其の他は非理である。

○(第四圖) 黒五の時、白の應手は之亦六と上へ綽るより外に手はない、其以外の打方をすれば自ら不利に陥るのみである、白六に對する黒の應手は⑧と行るのが普通正則で、極めて稀に⑨と綽る手もないではない。



(圖四第)

~~~~~(石 定 先 五)~~~~~



○(第五圖) 黒が七と行び、白が八と隅を下るのは、「一間夾」及「二間夾」の時の説と同じく、殆んど約束手とも稱す可き手である。

「註」 白が八と下る手を手抜する事も極めて稀にないとは言へぬ、其は布石關係として何等か他に重大な急場のある時、白二に多少の凌ぎを先手をつけておき、然して其の急場に轉じやうといふ様な時に四、六と打ち八の手を手抜く様な場合が無いとは限らぬ、が先づ黒七の時は百中の九十九迄は八と下つて間違はないと心得ておけばよい。

黒は九の手を○と斜走す可きか或は○と二間拓す可きかは問題である。

「一間夾」及「二間夾」の時に在つては彼の條でも詳述した通り、○と斜走するのが正當であつて、○と二間に拓くは稍變則の手であるが、此の「三間夾」の場合では○と斜走するの○と二間拓するの○も布石關係即ち場合問題によつて是非得失の評を定めなければならぬ、單に此の一隅だけから言へば孰れを正則とし孰れを變則と認める程の等差はない。

「註」 強いて言へば(白八の下りは次で○の邊から一、五、七の三子の黒を攻めやうといふ意を含んで居るから、黒○の二間拓は主として黒自身の備へに重きを置いた手であり○と斜走するは多少二、四、六、八、の白に響かして遙に三の二子と相呼應する、といふ意があるから)當初三と夾んで白二を攻めやうと出た主意に照しても、寧ろ○と斜走に上から壓して打つ方が普通に近い道理である最も是には——全然場合の關係を離れて——といふ條件が伴うて居る、

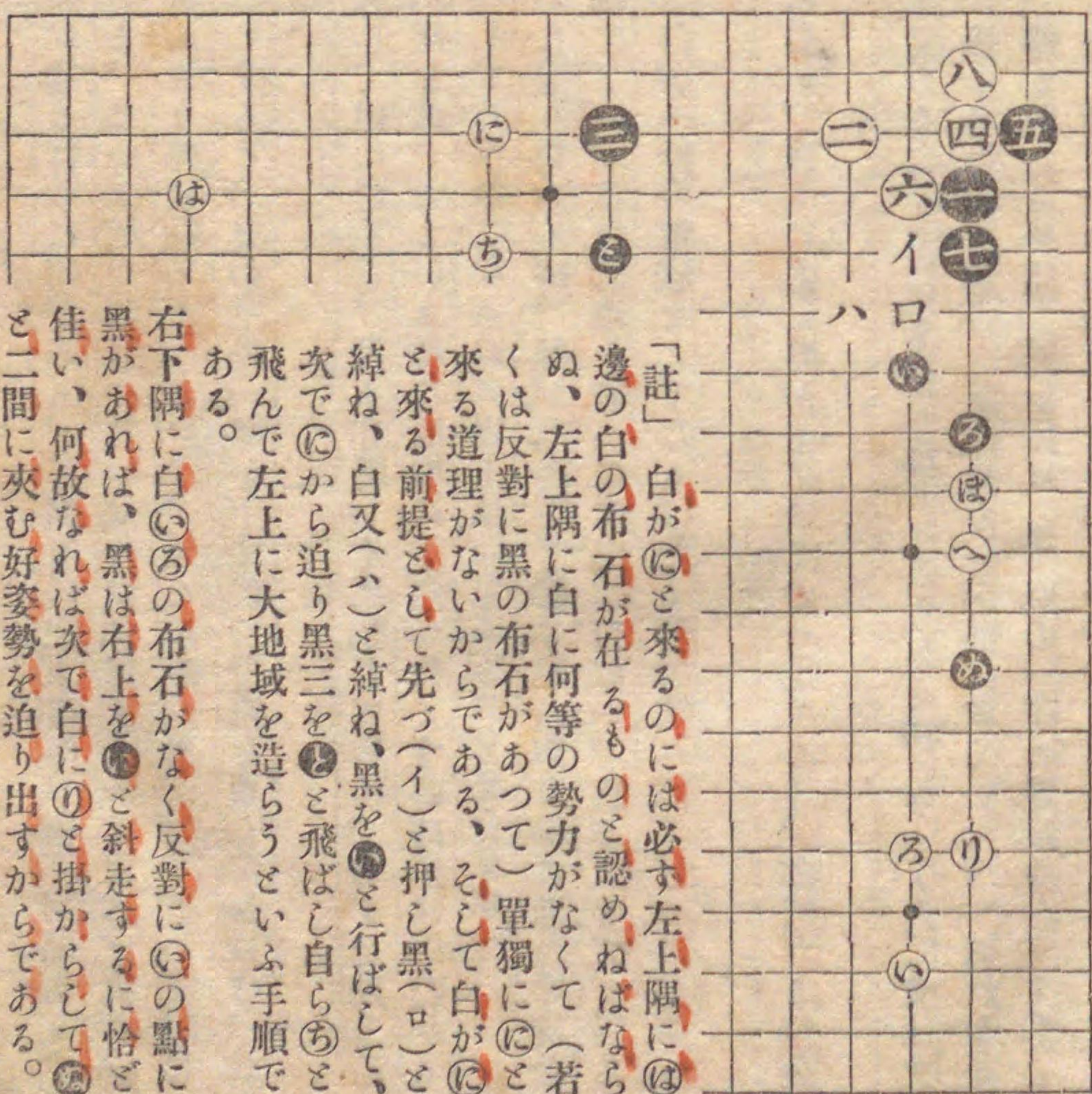
九ノキヲ斜走ス(キカニ間ニ拓ク)キカ  
一ニ間拓ト三間夾ノ時ニ差  
ハ下リ何ヲ意味スルヤ

九ノキヲ斜走スルカニ間拓スルカ其場合關係

注  
白がニト來ル場合及其前提トシテキ順

即ち黒九の手を○に打つか○に打つか、といふ場合關係を大體に就て一言すると、例せば右下隅に○、○といふ様な布石が已にあるものとするれば(黒が○と高く打てば)次で白に其の右下方面からの好拓きを兼ねて○若しくは○と明碁を覗はれる恐があるから、黒は○と二間に治つておくがよい、是は已に「一間夾」及「二間夾」で述べたのと同意である、  
若又左上方面から○と黒三に對して白から迫られる手が急である場合は○と斜走して暗に黒三に聲援を興へておくがよい。

(圖 五 第)



「註」 白が○と來るものには必ず左上隅に○邊の白の布石が在るものと認めねばならぬ、左上隅に白に何等の勢力がなくて(若しくは反對に黒の布石があつて)單獨に○と來る道理がないからである、そして白が○と來る前提として先づ(イ)と押し黒(ロ)と綽ね、白又(ハ)と綽ね、黒を○と行はして、次で○から迫り黒三を○と飛ばし自ら○と飛んで左上に大地域を造らうといふ手順である。

右下隅に白○の布石がなく反對に○の點に黒があれば、黒は右上を○と斜走するに恰ど佳い、何故なれば次で白に○と掛からして○と二間に夾む好姿勢を迫り出すからである。



前圖の殘説

「註」但し右下方面の布石關係は黒が②と打つに便であり、又同時に左上方面の布石關係よりすれば③と一路高く打つ方が便宜である、といふ様な兩者衝突の場合は何するかと言へば其の時は兩者の輕重を計つて其の重きに從ふより外に途もあるまいが、然し本來は黒が三と夾む當時に已に其の布石關係が出来て居たものとすると、其の三の一手を下す前に考慮を費しておけば、其ういふ難關に逢着する患はあるまい、

又黒一、白二、黒三、の後白が手抜して他に着手し、黒も亦同じく手抜して居て、右下及左上の關係が上述の様に黒の④何れも不便を感じるといふ様な状態に立到つたとすれば黒は、白から四と頂けられるに先立つて之を處分して置かねばならぬ。(以上は前頁第五圖を見合す事)

△(參考1號圖) 前々圖でも一寸説いた通り白六の時、黒が七の手で⑥と隅へ綽るのは極めて稀な手で、普通は打つ可らざる手と心得てよい(若白黒地を變へて居て、白が一、三、五と打て居る様な場合で、他の布石關係からして白が一種の策戰としてならば此く⑥の點へ綽て打つ事が無いとも言へぬ)

黒⑥に應じ、白は何等考へる必要はない、直ちに⑦と外からアテるの一途である、(如何なる場合でも其の他に善い着點はない)

白⑧の時黒は⑨と打抜く是亦決り手である、次で白は本圖の通り一の方から⑩とアテるか、或は次圖の様に九の方からアテるかは一に場合と策戰次第で(單に此の一局部に就ていへば)何れを是とし何れを非とす可き理由はない、⑩と綽ねさせ第二線を這はして三の二子と連絡させても苦しくないから⑩方面を遮斷しやう」といふ時は、本圖の通り打つがよい。

參考ノ2圖  
ハセ、キデイト  
隅へ綽ネタ  
打オデアル

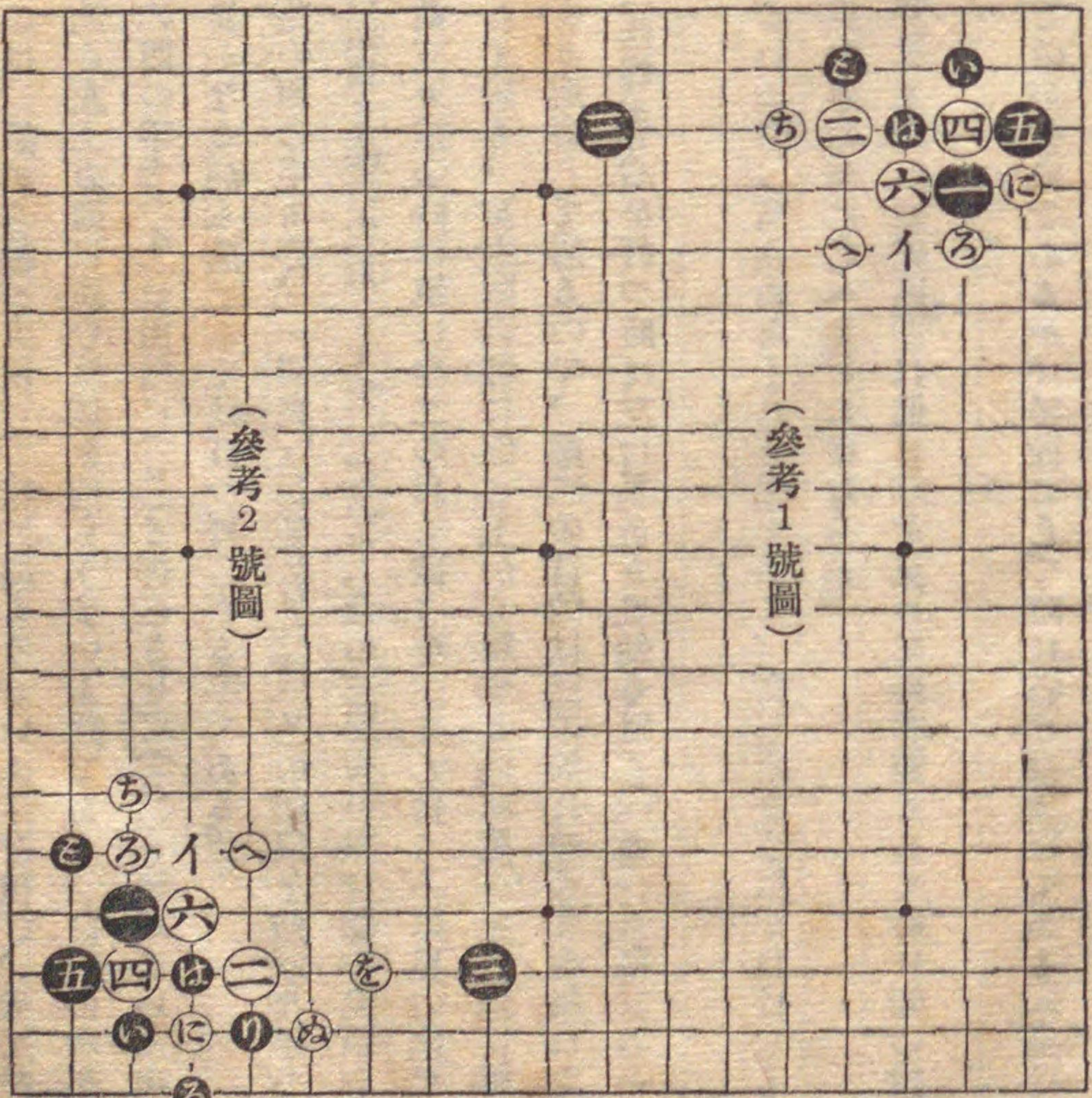
△(參考2號圖) 若又①の方へ

這はしても苦しくはないが三の一子を隔て、之を攻めやうといふ時には此く打つがよい以上兩圖に就て、白④の時黒が⑤と四の點を粘ぐのは普通である、白⑥の掛粘ぎ是亦正當な手である、之の手で(イ)と堅く粘ぐのは何等理由のない手である。

「註」(2號圖)の場合で白④の時黒は必ず⑤へ綽ねておかねばならぬ、若手抜して、白⑥と下られ黒から⑦とアテ⑧の一子を提らねばならぬ事になると自然に⑨、⑩、と白の勢力が、三に接近するだけ黒三の一子が薄弱になつて其だけ黒の不利益である。

(二間夾第五圖及第六圖、二間夾第參圖以下參照)

黒④は四の點を粘ぐ



(石 定 先 五)



斜走ニ掛ケル  
意

出截ハ黒  
トシテ打ツ  
カラス

右ヲ打ツ時  
左ニ手アリ

出截ハ他日  
師ノ註ヲ煩  
ス

○(第八圖) 白が四と斜走に掛けたのは、黒から●と尖頂けて○と煽らうといふ手を拒ぎ、兼て茲に勢力を加へておいて○から黒三を攻め左上方面に廣い地域を造らうといふ意である、白四の次黒は●と行びるが普通の手である、此の四の手で(イ)と出白に(ロ)と押へさせて(ハ)と截るといふ手もないではないが、變化多様で紛れ易くなるから黒としては打つ可らざる手である。

「註」前圖四の手で説明した通り此の四の手も亦、「一間夾」の場合なれば(ロ)の頭頂を妨げた手であり、「二間夾」の場合なれば(ロ)の頭頂と●の尖頂とを拒いだので、此の三間夾の際は●の尖頂を防いだ手たるは言ふ迄もないが、前三々頂の時は單に白二の自ら凌ぎを主とし傍ら一の黒の隅に於ける根據を奪はふといふ意を兼ねて居る、が本圖の様に四と上から壓するのは黒一を低地に壓迫して、其が安全に活に就くは元より認容して居るので、第二の目的は三の黒に迫つて最後に左上に地域を拓かうといふのである、此等が「右を打つ時は左に手ありと知る可し」といふ格言の一部分を證據立てたものである。

白四の時、黒が五の手を手拔するといふ事は萬々あるまじき事である、若し之を手拔せねばならぬ様な急場がありとすれば、三と夾む手の時に考へなければならぬ。

「附言」「一間夾」「二間夾」「三間夾」とも此の出截問題は他日章を更めて參考圖として特に師の説を煩はさうといふ考へである(絶)

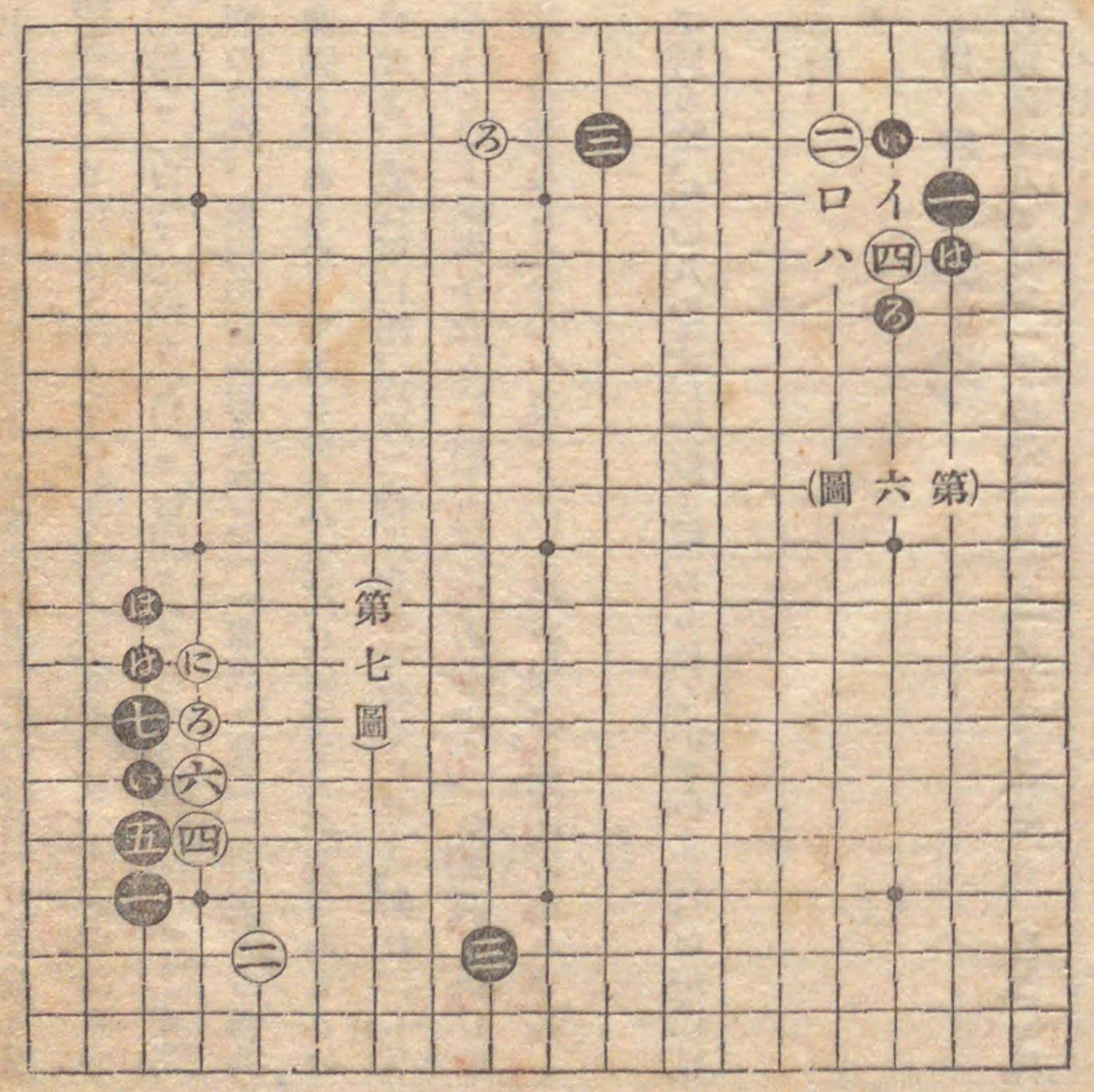
○(第七圖) 黒五の時、白は六と行るのが普通であるが、手段として時に○と飛ぶ事もある(是は後章に説く事とする)

三子四子行  
ビル時ノ意  
如何

三子行ニ  
時ハ隅ノ味  
ヲ消スルヲ得

白が六と行びた時、黒が七と飛ぶのは是亦通則になつて居るが場合によつては、尙一子●と行びて、白○の時●と飛ぶ事もあり、稀には●、七と四子行びて●と飛ぶ事もないではないが黒として言へば已に一、五と二子行びた以上は少くも早く飛ぶ方が利益である、又一、五、●と三子行びた時は、大抵は更に七と行びて白○の時手拔しやうといふ意の時である。

「註」黒が●と三子行びるのは左上方面への發展から見るに損ではあるが、其の代り白に●の點へ出截られる患がなくなり、隅の味が消えて、此の方は黒の利益となる譯である。





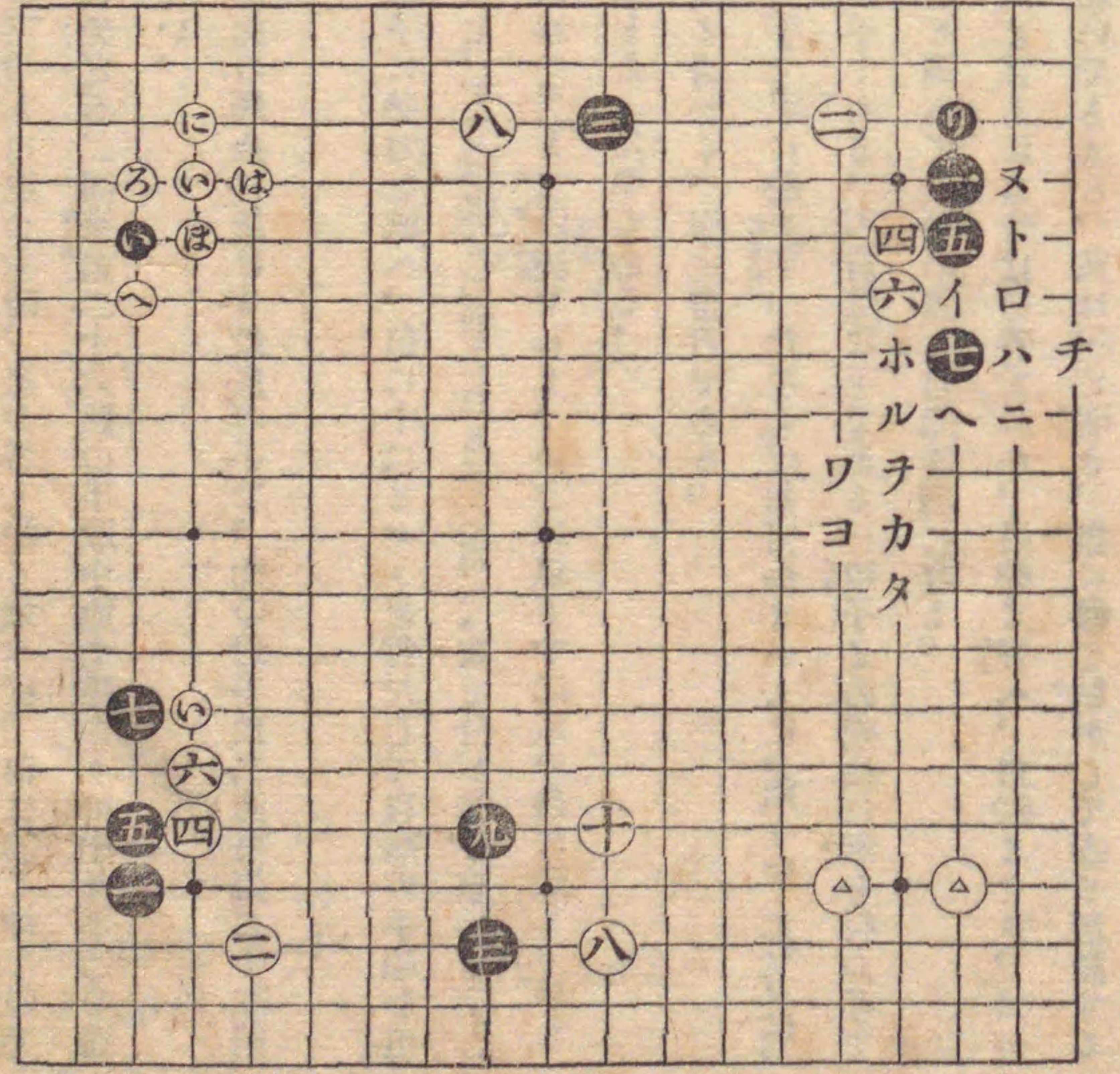
イト突出シ  
キマリヲ付ケル  
ノ手順時機  
并ニ極度迄  
押ス意  
目外ヨリ目下ヲ  
四ト掛ケテ前  
一考スキ  
三間ニ夾シ  
敵ノ子ヲ一問  
ツメ攻ムルニ適  
シタ場合

○(第八圖) 白が四、六と打ち黒が七と飛だ後、白からは(イ)と突出し黒(ロ)の時白(ハ)と截り黒(ニ)白(ホ)黒(ヘ)白(ト)黒(チ)白(ニ)黒(ヌ)と運んで極まりをつけて終ふ手順と、又(イ)と突出さず(ホ)と押し黒(ヘ)と行び白(ル)黒(ヲ)白(ワ)黒(カ)白(ヨ)黒(タ)となつて其の後に(イ)と突出す手順との二通りあるが、此等手順の前後、應用の適否等は既に「一間夾」及「二間夾」の部其の他布石法の條に於ても屢々繰返し詳述してある通りであるから今更茲に繰述する必要もあるまいが、前述通り茲に幾分の手数を費すにせよ、或は單に四、六の二着に止めておくにせよ、何れにしても次の着手が八と打つて黒三を攻めやうといふ準備子たるに過ぎぬのであるから、白は四と掛けやうといふ時に、左上隅の關係が八の詰を有効ならしむるや否やといふ事を能々見極はめた上でなくてはならぬ、  
然らば左上隅が如何なる布石になつて居る時、此の八の手が恰好と認められるかといふに、白が(ニ)と一子星にある時、  
或は(四)、(六)と「一間高締」となりをる時、  
或は(四)、(六)と「一間飛」して居る時、  
然らずんば(四)、(六)と「大斜走締」になり居る時、  
以上孰れかの場合なれば、其の布石の關係上八と打つ一子の効力は黒三に對する攻撃と、自己の地域の劃定と二つに働いて居るから申ブンはない、

八、詰カ無意  
味ナル場合

或は黒(ニ)に對し白(四)、(六)の交換が行はれてある様な時でも、やはり八の詰はよい手である、其で左上隅に以上記述した様な何等かの白の布石があればよいが若も全然白の布石が無い或は反對に黒の布石でもある様な場合であれば、白八の詰は全く無意味である、随つて白は最初に四、六、と運ぶ手からして考へなければならぬ。  
○(第九圖) 例せば本圖右下隅に(△印)の様な布石のある場合と假定して、白が八と詰めた時黒が九と飛ぶのは普通である、次で白は十と飛ぶ手と(ニ)と押す手との二途がある。

(圖八第)



(第九圖)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



志んカラサル手  
白十ノ時黒ノ  
最良ノ手

○(第拾圖) 白が十と一間飛して黒の三、九に迫つた時、黒が若も●と飛べば、白は○と押すのである、此の○と押した後の手順は、互先定石二間夾第二十六圖の手中第十手より第十九手迄の通りであるから、彼の條を参看せられたい、  
白十の時黒は本圖の通り十一と打つが此の場合に於ける最良の手で、此の着手は二間夾第二十五圖第十一手の説と同意である。

「註」即ち十一と打つて三、九の二子に勢力を添へ、白に十二とダメを打たして自然の手順を迫り出し、十三と隅の要點に下り、暗に白から④と出截られる手に備へ、次で白が⑤と來れば(イ)と應し、白(ロ)、黒(ハ)、白(ニ)、の時(ホ)と二段綽をして、一方二以下十二迄の白に迫り、傍ら右下方に黒の勝景を劃さうといふ意を含んだ手である、

○圖中(△印)二子の白は前圖と同じく、假定布石である。

△(第拾圖の参考圖) 黒が十一と打つ手で單に⑥と下つたならば如何かといふに、此ういふ打方は、所謂調子外れの手である、間の抜た手である、不自然な手である、敵子との交換に利を得ぬ手である、即ち黒が⑥と下れば白は(ロ)と備へて二子の黒は自然薄弱になる。

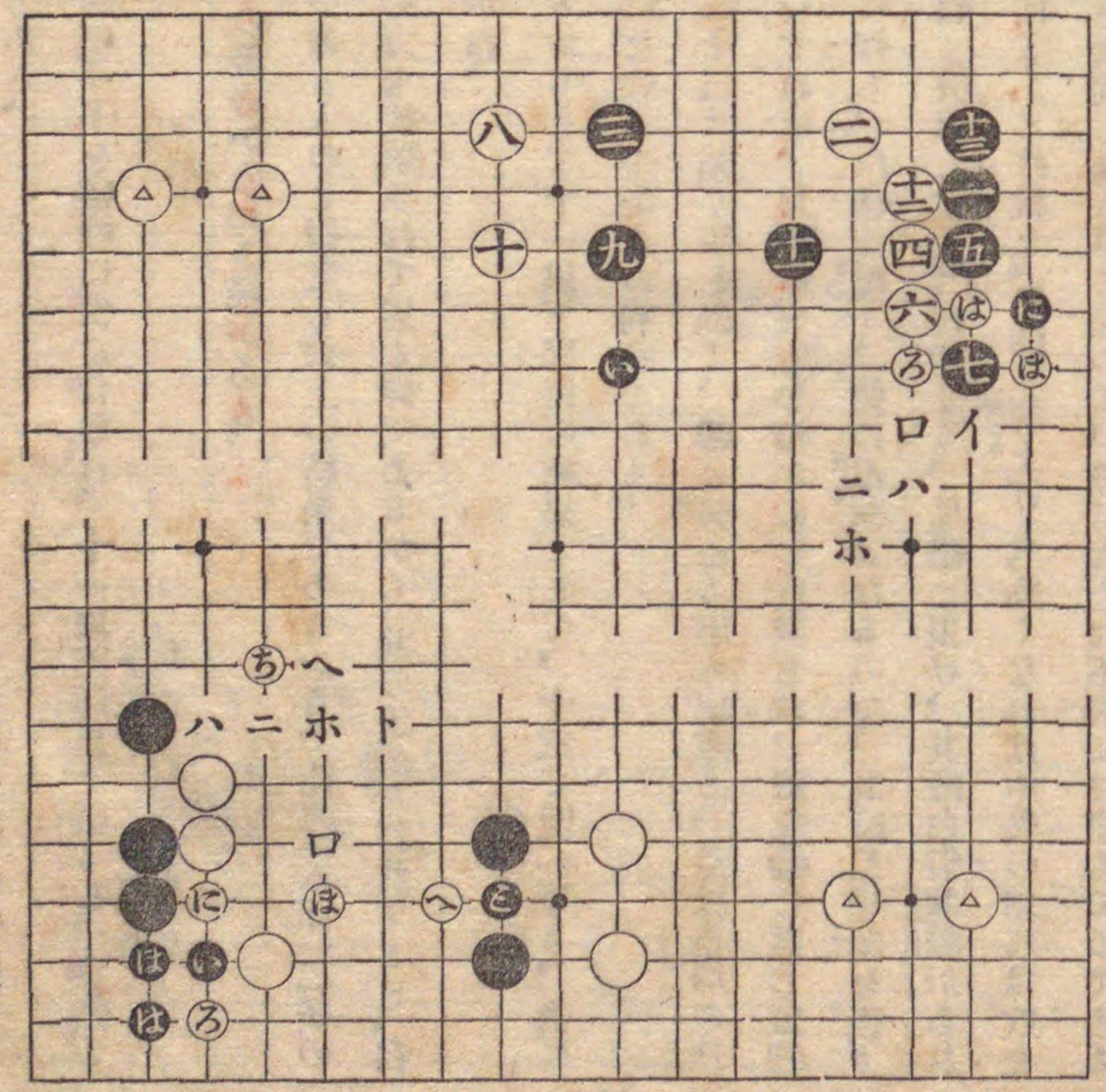
然らば黒●と尖頂けたならば如何かと言ふに其時は白○と綽ね、黒●と押へ、白○とアテ、黒が⑥と粘いだ時、白は單に⑦と掛粘いでもよし、又は⑧と覗き、黒に●と粘がして⑨と活動する

調子外れノ手

十ノ手ロ  
外ニ好着  
点ナシ

打方に出られるかも知れぬ、何れにしても二子の黒は危地に陥る事になる、サリト黒が左上方面に厚壯を加へる方針を執り白から押される機先を制して(ハ)と立ち白(ニ)黒(ホ)黒(ヘ)白(ト)と運ぶものとしても、やはり下側二子の黒は益々薄弱を感じるのみである。  
要するに、本形の時に黒が十一と運ぶ手順は(ロ)の點に打つより外に、好良の着點はないのである。

(圖拾第)



(第拾圖参考圖)







十ノ手ニテハト打  
ヌズナトセノ頭  
ス意

十ノ手ヲテハト打  
ツカナガ可  
カ本末如何

十六ノ出十八ノ  
截ハ手順中  
最肝要ナリ

○(第拾貳圖) 白が十の手で①と打たず、本圖の通り七の頭を押すのは、前圖の様に黒から②の點に打たれるを嫌ふ時である、即本來の手順として言へば、前圖の様に①と③、九の黒に向つて直ちに迫るよりは、本圖の通り十以下の手順に運ぶ方がよい、何故なれば白が十と打つ前に④から迫れば、黒は⑤と打つか、或は⑥と飛ぶか(大抵は⑤と來るのが利益であるから⑥と打つものと思像は出來るか)或は(ニ)に尖頂けて來るか、又は十の點へ押して來るか、其は分らぬ、が白が此く十、十二、と押して打てば黒は何として十一、十三と應じるより外に打方はないのである、即白十は黒の應手を制限するといふ意味にもなる、

本圖の結果、白は二十の手で⑦と一間して黒に迫り、黒は之に應じて⑧と飛ぶのが普通である、或は⑨と應せずして、右側から⑩と曲り、白之に應じて⑪と行びる様な手に運ばぬとも限らぬ、然し此うなれば⑫の曲りによつて右下方面は非常に厚壯を加へるが、其の代り三、九の二子は益々孤弱に陥る事となるから黒は⑬の曲りは容易に打てぬ手である、溯つて白十六の出、十八の截は手順中最も緊要の手である事は、已に「一間夾」第三十三圖以下及び「二間夾」第二十五圖△二十六圖以下其他「布石法互先第七局」第五十九頁(及互先第十一局第九十頁參看)に於て詳述した通り、早く(十と押す手で)出截れば十二、十四と押す手が利かぬ事になる又、後れて黒から隅へ(ニ)と尖頂けらるれば是亦出截の味をなくして終ふ、乃ち此の出截る手順の前後といふ事が大切なる心得である、即ち從來屢々説いた通り、白が十六と出、十八と截つた後、黒が(ロ)から提れば更に十九に截られ(ハ)と頂けられて白に隅の始末をされる上に十三、十五の二子が遊んで終ふ道理になる、乃で餘義なく本圖の様に運ぶのである、此の結果は何處迄も(ホ)の截味を白に觀て居られるといふ苦痛がある、是が白十以下十八迄の手順宜しきを得た効果である。

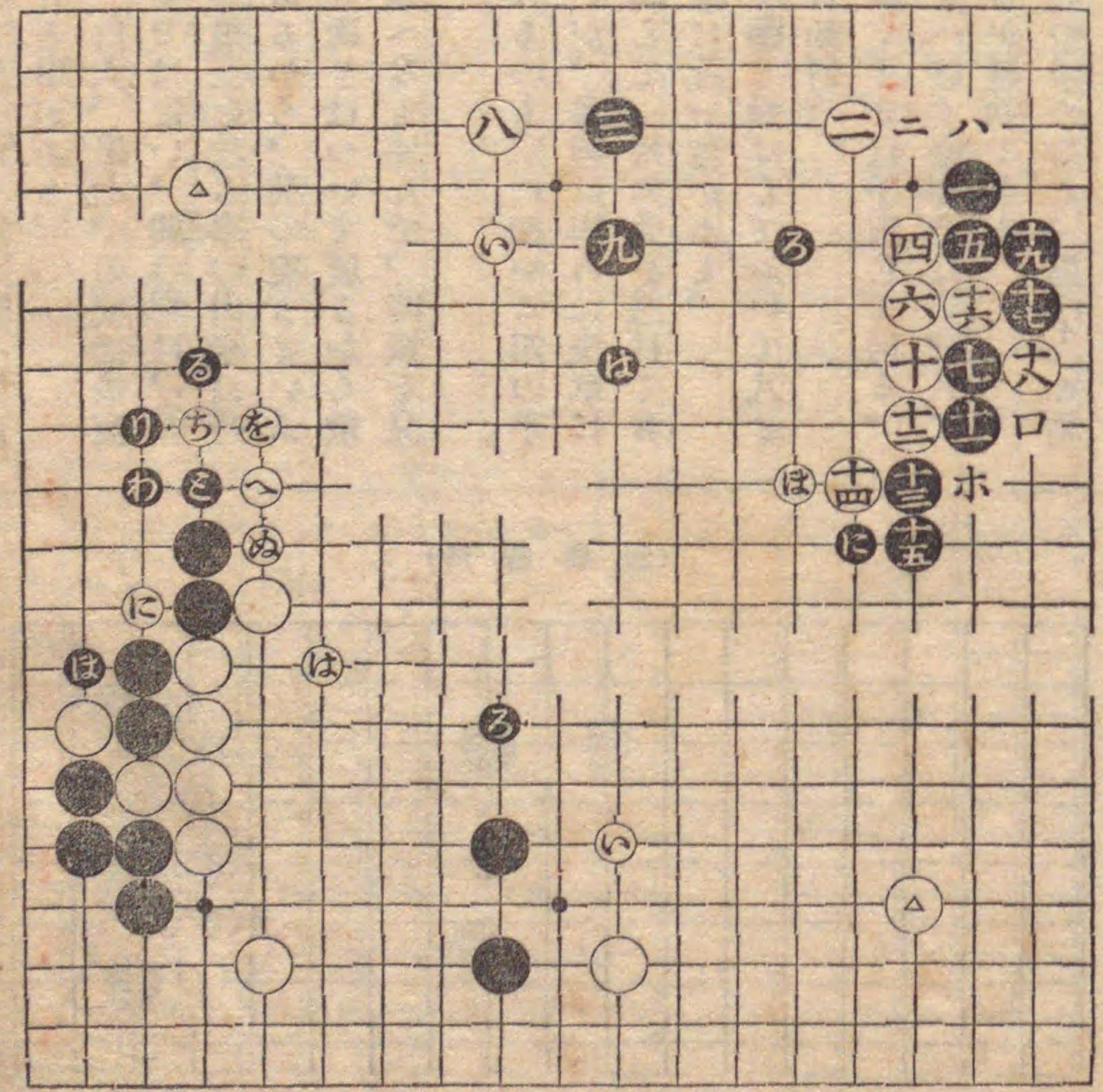
自己ノ欠点ヲ  
補ヒ然ル后  
敵ノ弊ニ東  
スルハ正道ナリ  
初心者ノ戒

△(第拾貳圖の參考圖) 前圖白出截の次、①と飛び黒②と應じた後、白は③の截を利用するに當つて先づ自ら缺點を補うて④と備へるが緊要である。

「註」 敵の備への立たざる前に之を追窮して以つて自己の薄弱に備へるといふ場合もないでは無いが、先づ自らの缺點を補うて然る後、敵の弊に乗じるといふが正道である、初心者には兎角自己の缺陷のある處を顧みず一意に敵を攻撃しやうとする通弊がある、誠しめなければならぬ。

白④と備へた後黒若し手拔すれば、白は⑤と截り⑥と掛けて以下符號順に運ぶ様な手もある。

(圖 貳 拾 第)



(第拾貳圖參考圖)  
百八十三

(石 定 先 互)



ハノ手ハ何ヲ  
意味スルヤ

問答

白ハニ應シ  
黒ノ應手

○(第拾參圖) 白が四と掛け六と行びて黒一から⑤の點へ尖頂けられるを拒いだ後、八と三々に頂ける事がある、茲に注意す可きは、此の白八の手は、白六、黒七、の交換後直ちに打たねばならぬといふ意味の着手ではない、其の譯は、元來此の八と頂ける手は、④の方面から黒三を攻る事の出來ぬ時に、單に自己の凌ぎとして打つ手であるから、其の凌ぎといふ意味から言へば四、六の二子で一時の凌ぎはついて居るから敢て急ぐを要せぬ、即適宜に何れの方面へなり運んで、時機を見て八と頂けるのである。

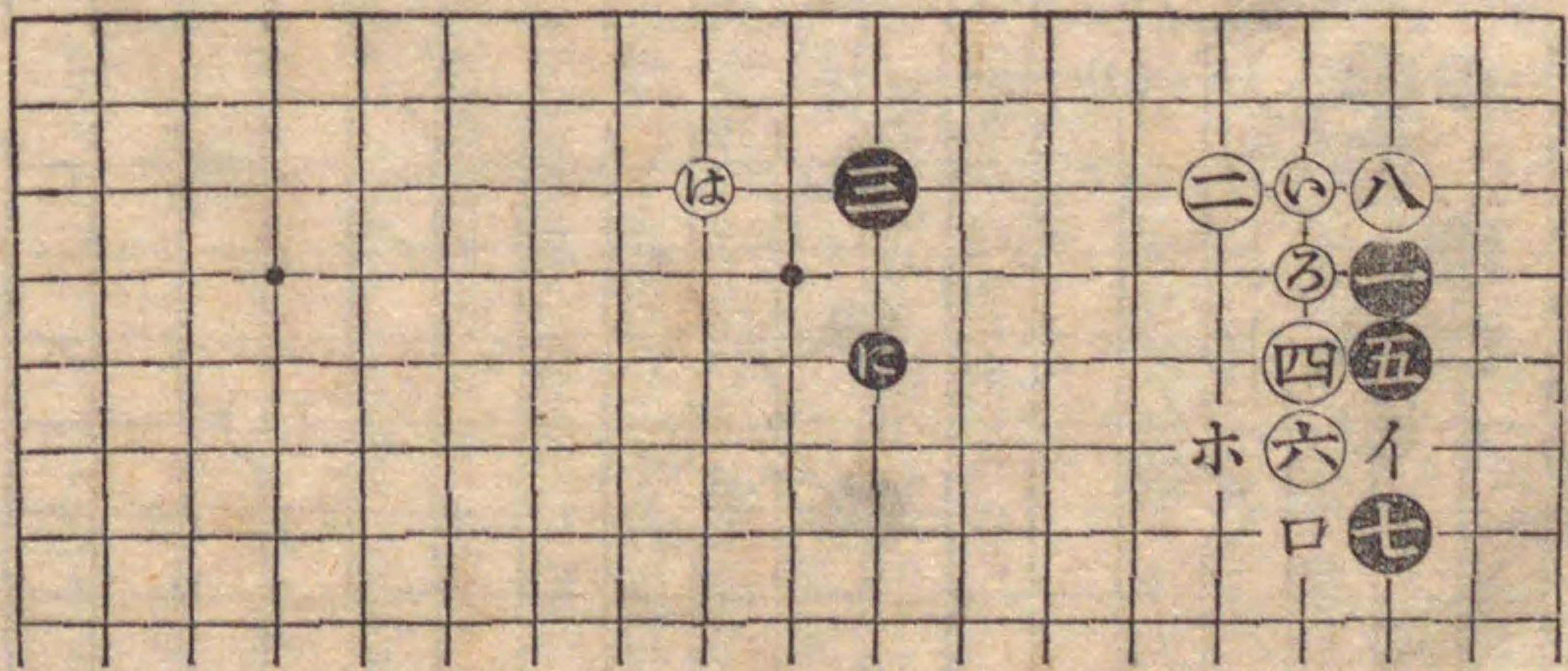
「註」 四、六と運んでから八と頂けるのも單に初から四の手で八と三々に頂けるのも大差はないが、本圖は寧ろ(後章に出る定石の)白四の手で(ホ)と二間して一時の急を避けておいて、後に八と三々に頂ける手の意に近い趣がある。

△問 或書に八の手で④から攻め黒を⑤と飛ばして置いて八と三々に頂けたのが出て居る其の正否如何。

△答 前述通り④と攻る手と、八と凌ぐ手とは矛盾して居る、④と攻め得られる處なれば八と三々に凌ぐ必要がない、八と凌がねばならぬ様な處なれば④の手が無効である。

白八の時黒は(イ)と粘く手と(ロ)と立つ手とある、黒(イ)と粘げば、白は⑥である、又黒(ロ)なれば、白も⑦である。

(圖參拾第)



黒ノ棒粘ハ  
何故ナルヤ

黒はト二間  
ニ拓ク場合

黒はト五ツ  
場合

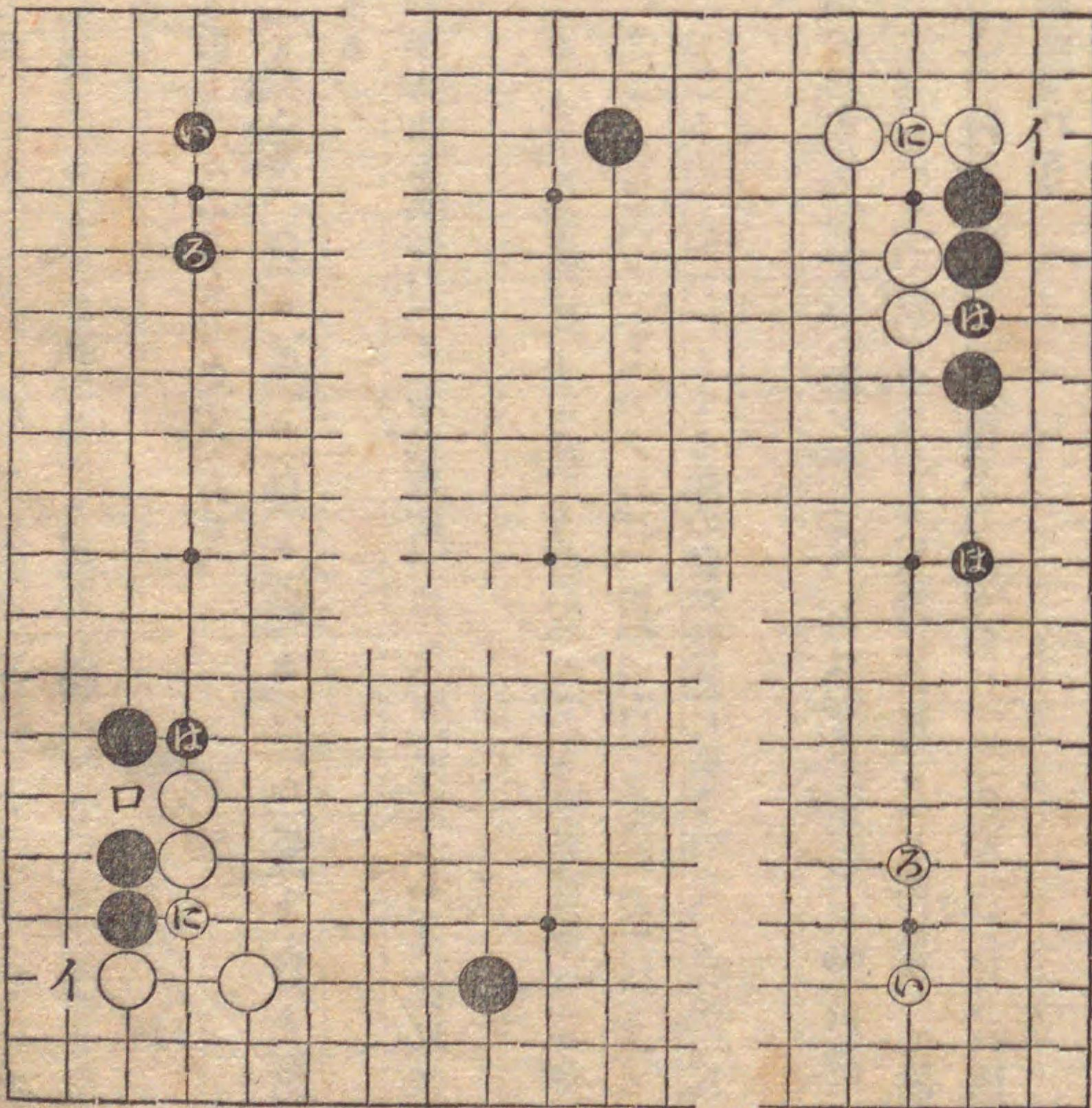
△(參考甲號圖) 黒が④と堅く棒粘にした時は白亦⑤と堅固に粘がねばならぬ、何故なれば黒に(イ)と隅へ縛られる手が酷しいからである、次で黒は⑥と二間に拓く手順である、

此の黒が④と粘ぎ⑤と拓のは右下隅に例せば⑥、⑦等の如き白の布石がある時である。

△(參考乙號圖) 黒が④と立のは左上隅に黒の(例せば⑤)の如き(布石のある時である、次で白は⑥と押へる、黒若(イ)と縛ねれば白に(ロ)と突出されるの患がある。

(參考甲號)

(參考乙號)



互(先定石)



黒イト粘々  
場合

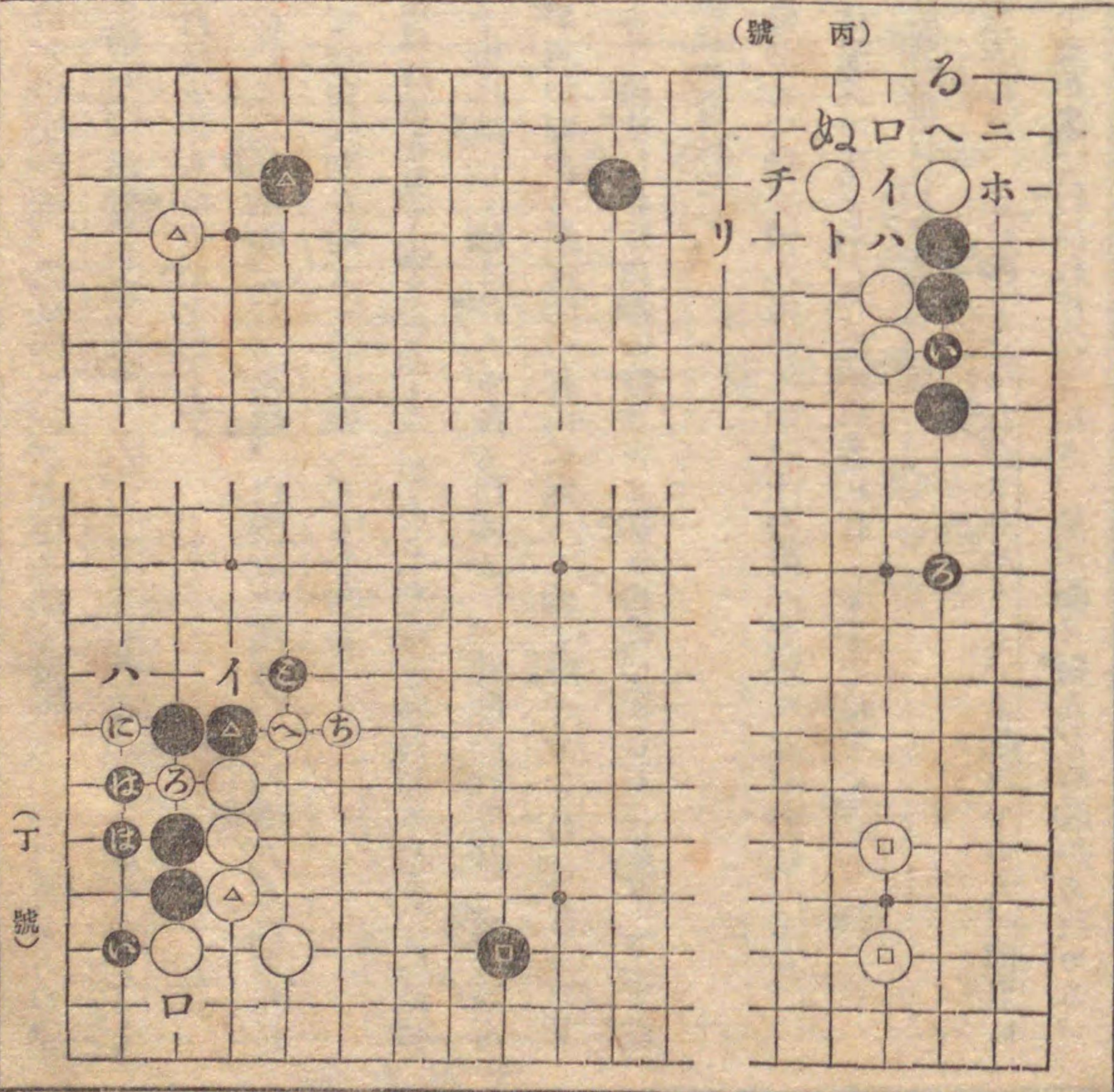
黒棒粘々時  
白手抜セバ

△黒△白交換  
後黒イト  
隔、俾ネタ  
場合

△(参考丙號圖) 黒が●と堅く粘いた時、白が(イ)と粘げば、黒は●と二間拓する手順であると前圖で示したが、此の白が(イ)と粘いた後は(ホ)の絆が利かぬから、黒若し●の拓きを手抜すると忽ち白に●方面から攻められるの恐がある、  
 溯つて黒●の時、白(イ)を手抜する事も萬々あるまじき手である、  
 何故なれば黒●白手抜の時、黒(イ)と縛込み、白(ロ)黒(ハ)白(ニ)黒(ホ)白(ヘ)黒(ト)白(チ)黒(リ)となつて白の不利益は非常である、  
 又黒は(イ)と縛込む手(ヘ)と夾む手もある其時白(イ)を粘げば、黒に(ホ)と盤られて白の根據は丸潰れである、  
 又黒(ヘ)の時、白が黒の盤を嫌つて(ホ)と下れば黒は(イ)と截り、白が(ハ)から来れば黒(ロ)と粘いで隅は全然黒の有である、又白(ハ)から来ず(ロ)からアテれば、黒(ハ)白(ニ)黒(ぬ)白(る)となるか、或は黒(ハ)白(ぬ)黒(ニ)となるか、何れにしても此の白が慘境に陥るのは、必然の理である。  
 △(参考丁號圖) △印黒と△印白との交換の後、黒が隅へ●と縛れば、白は●と突出し、黒●、白●、黒●、の後白●と縛ね、黒●の時●と行びて(イ)の截を覗ふがよい、後に白は(ロ)と隅に備へて黒に(ハ)と手を引かす理もある、白(ロ)の時黒が(ハ)と手を引かねば、白に(ハ)の點へ行びられ隅の黒を捕られるか或は左側上方を蹂躪される。  
 「註」 前々圖で説いた通り已に△印黒の立ちは左上方面に黒の布石があつて大地域の割せ得られ

輕々一子  
下ス勿レ

る時である筈故、黒は(イ)の截り及(ハ)の行びを白に觀て居られるといふ事は少からぬ苦痛であるから油断なく之に備へる必要がある、  
 殊に白の勢力が●●と運んで来た上は口印一子の黒も多少其の影響を受けるのは、是亦止を得ざる勢である、即苟も一子を下せば其の石及其に交換する敵子の影響は那邊迄及ぶか、若手抜するにせよ其の結果は如何なるかといふ事を豫め十分考察した上でなくてはならぬ。



(丁) 號

先定(石)



△(参考戊號圖) △印、黒と△印、白との交換後、黒は●と行びる手と○と飛ぶ手との二通りある、(直に此の時白が◎と出れば、黒●白△、黒◎、白○、黒(イ)白(ロ)と黒は二子の黒を捨てて先手を取つて他の大場に着手するから白は少からぬ不利を招く)

又白手抜、黒◎と縛ねれば、白は◎と出、黒◎、白△、黒◎、白◎の次黒は◎と押さぬと此の白に響かぬ、已に黒から●と押されては白は勢ひ◎と一着を備へざるを得ぬ、

茲で双方共一時治つて居るが、白は時機を見て◎と行びる手がある、其時黒◎白◎となり、黒最初の一子が◎の行であれば、此處で黒は酷しく◎と押へる事も出来るが、若◎の行でなく◎と飛んである様な時なれば◎の押へが利かぬから黒は◎の打込に備へて◎と縛っておかねばならぬ其時白は(カ)と縛上げる手順になる、何故なれば白◎の時黒カと緩め白◎の點に行び黒又(ヨ)と緩め、其の時白に◎と打たれては黒は生命はない、

即ち此の◎に行るか、或は一步働かして◎と飛んでおくかは十分考へた後でなければならぬ。「註」然し白が◎と行びる云云は唯其の味を示した迄で容易に打てる手ではない。

◎(左上及右下の□印四子は假定布石である)

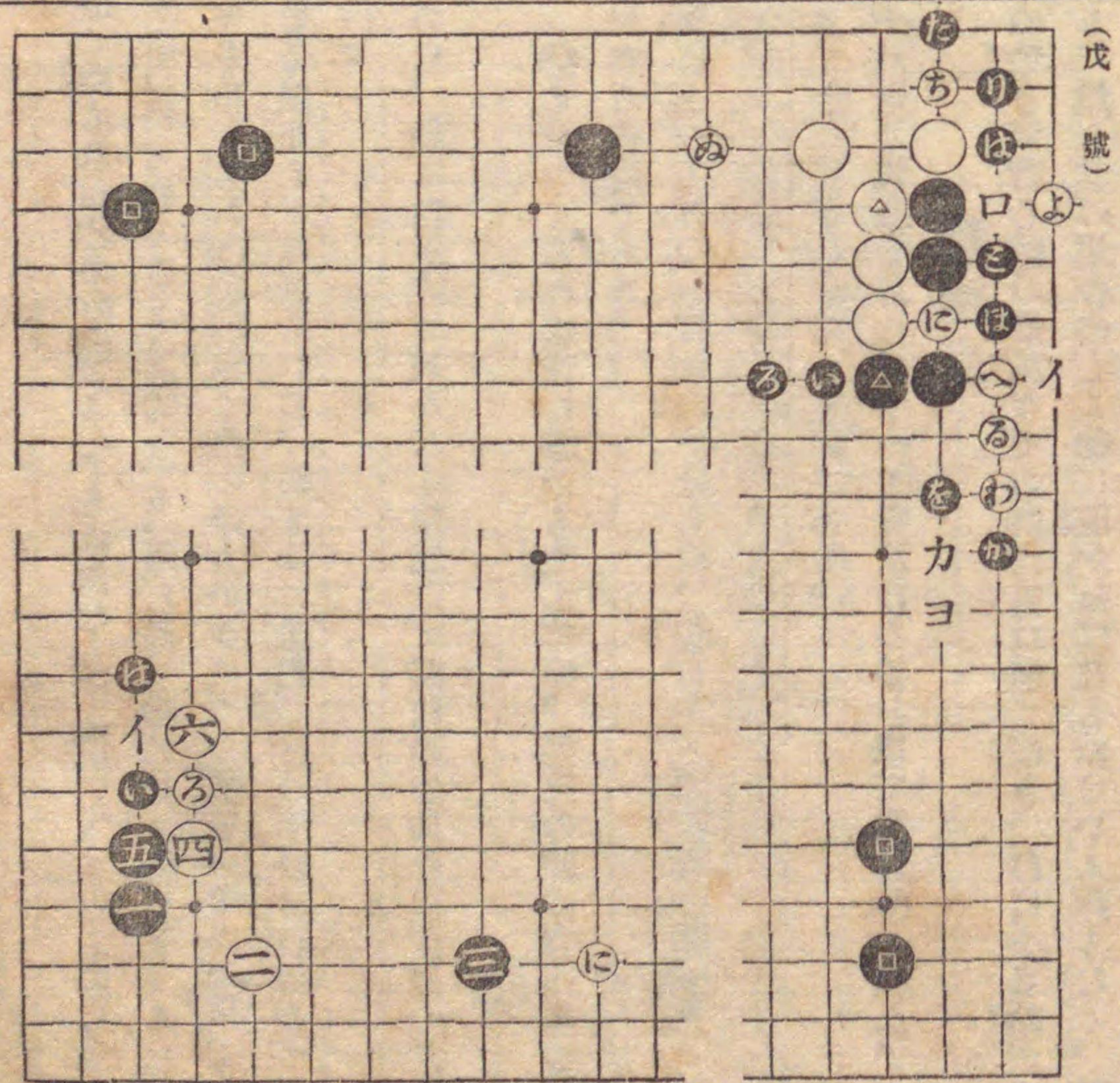
○(第拾四圖) 白が圖の如く六と飛ぶのは、黒に◎と三子行びさせやうといふ趣向である、即黒に(イ)と飛ばせまいの意である、乃で黒が◎と行びれば◎と粘ぎ、黒が◎と飛んだ時◎から攻める、

此くなれば從來の様に單に白

四、◎の二子の勢力の時に比して、四、◎、六の三子の勢力の加はつた後の方が黒三に及ぼす感じが急である、

白六の時、黒は七の手で◎の點に縛込むのが普通であるが、尙且白の意中を行つて◎と行びる打方も無いではない、

此の詳細は更に繼續第十六圖として次頁に掲げるから、反覆熟讀せられたい。



(圖四拾第)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



△(第拾四圖の参考圖)

「註」白が六と飛んだ時、黒に○と曲られ白の時○とアテられたならば如何か、といふのは初心者に起り易い疑問である、又初學者の得て打ちさうな處である、然し黒が○と打ち○とアテるは悪手である符號の通り白に△印一子を捨てられ○△○△と白の勢力が加はつた結果、次に○から攻られる手も急になり、且つ隅の黒も黙止しては居られぬ、要するに○△と打つ手段は百害あつて一利なき悪手と心得ておくがよい。

○(第拾五圖) 黒が七と縛込んだのは、初に白が六と飛んだ(前述の)其白の趣向を多少破つたといふ趣きもある、

白十の手で○と掛粘ぐ打方もある(○と打つてあれば後に○から夾んだ時、黒三の頭の方へ多少響きが利く)が此く十と堅く粘ぐ方が寧ろ普通である、

黒十一の尖頂けは、下側右方の關係によつて打つか打たぬか分らぬ、若し左上隅布石の關係上、黒三が○から攻られるを非常に不利と感ずる場合であれば、黒は此く十一と尖頂け、白を十二と尖ませて、其の調子に乗つて十三と二間に拓き凌いでおくのである、

若又白○の攻撃をさまで苦痛と感せぬ様な場合であれば十一と尖頂ける手を以て單に○と飛んでおくがよい。

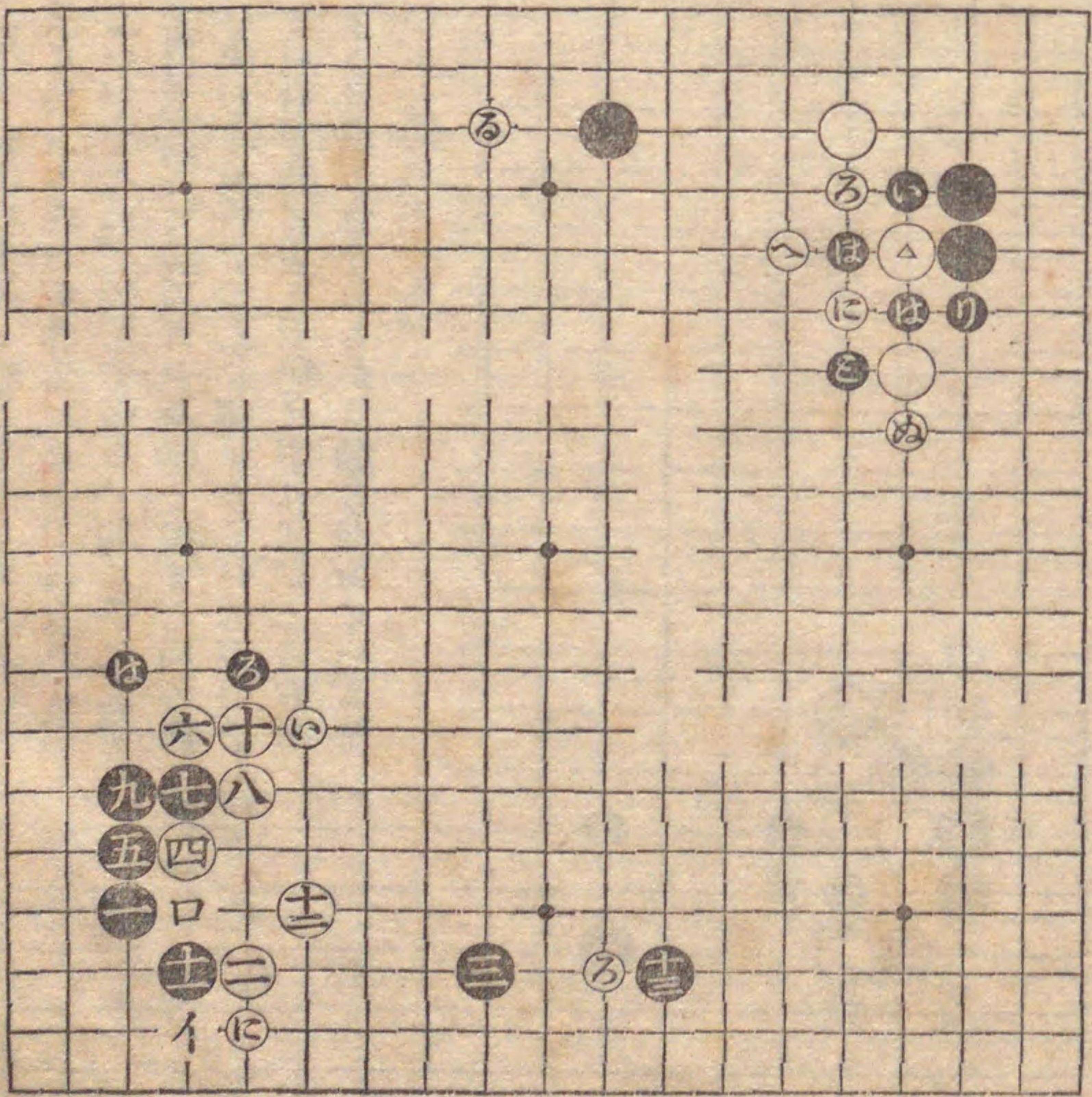
「註」此の○と飛ぶ時に、白十の粘ぎが若し○の掛粘ぎであれば黒は○と覗き、白に十と粘がせて○と飛ぶのが普通の手順である、然し其の場合必しも○に覗かねばならぬといふ譯もなく、又

覗いて粘がせるが利か不利か斷言も出来かねる、何故なれば○の掛粘ぎの場合○と覗いて十の點を粘がしてあるのと○十の交換のないのとは十一と尖頂けた後の味に多少の影響を及ぼすからで、是は已に「二間夾」(を號圖)第百二十六頁で詳述したのと同意味であるから參看せられん事を望む。

黒に十一と尖頂けられた時白の應手は○と下るか、本圖の通り十二と尖むかの二途である。

「註」白が最初六と飛び黒に七と來られて居るため、今茲で十一と尖頂けられても、(イ)と縛ね(ロ)とアテるといふ手段は不可能である。

(考參の圖四拾第)



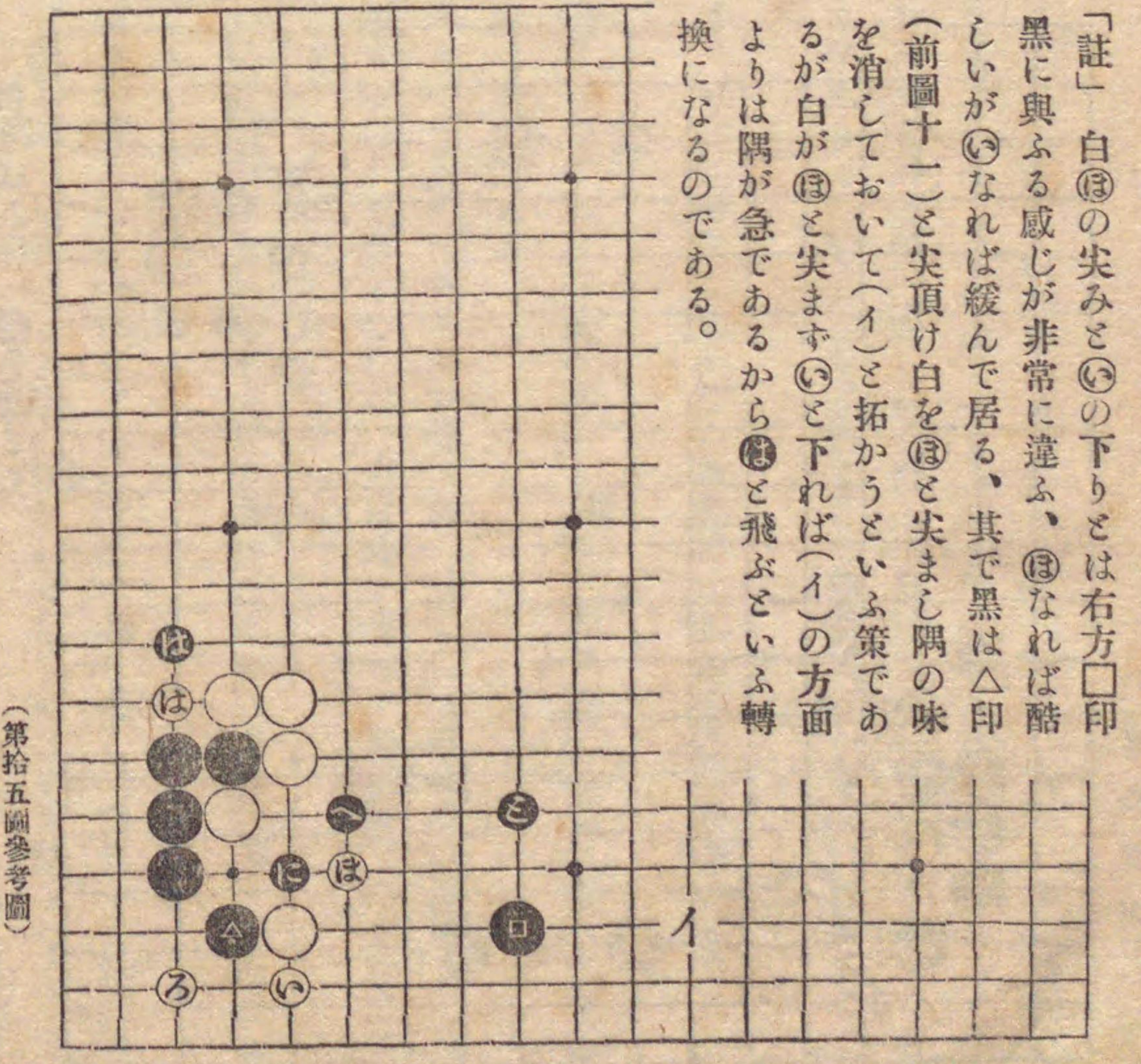
白○は△印へ○印を切とる

(石 定 先 互)



△(参考圖) 黒十一の尖頂に對し、白⑬の點に尖ます⑭と下れば、黒は直ちに⑮と飛ばねばならぬ、此の飛は白に⑯と外から押へられるを拒いだのである(⑰の下りから⑱と隅を消される理があるため⑲の押へは、單に外部發展の問題ばかりではなく隅の死活にも關係する、

白⑳黒㉑の後、黒から㉒と綽ね白㉓の時㉔と二段綽の味がある、若し黒の勢力が㉕の邊に加はつた後であれば白は四分五裂の慘狀に陥らねばならぬから其の備へをせなければならぬ。



「註」白⑬の尖みと⑭の下りとは右方□印黒に與ふる感じが非常に違ふ、⑮なれば酷しいが⑯なれば緩んで居る、其で黒は△印(前圖十一)と尖頂け白を⑲と尖まし隅の味を消しておいて(イ)と拓かうといふ策であるが白が⑲と尖ます⑳と下れば(イ)の方面よりは隅が急であるから㉑と飛ばといふ轉換になるのである。

(第拾五圖參考圖)

極古キ定石

ヘト上ラツク定石變化也

普通、應接

大斜百變手

大斜定石に就て

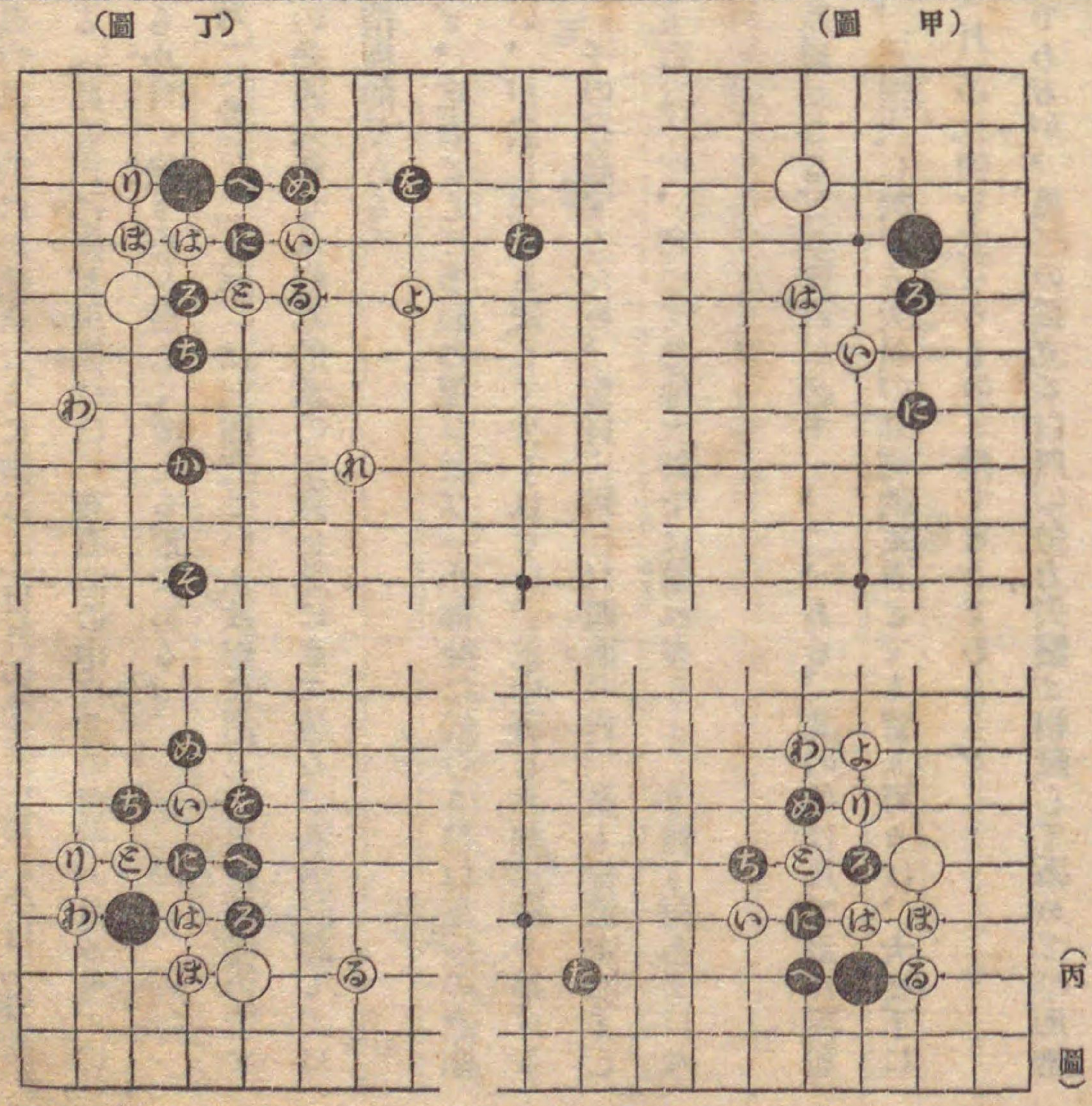
△(甲圖) 此の形で白が㉑と掛ける、之を大斜走掛と云ひ略して大斜ともいふ、次で黒が㉒と並び白⑬黒⑭と運ぶ、之は極古い定石であるが、黒の不利といふ事で、今日には行はれぬ、が然し少しも紛れない形である。

△(乙圖) 黒が㉑と頂け白が㉒と綽込む定石、之は方今盛行はれる、然し此の黒が㉑と上を粘ぐ定石は之亦簡短明瞭で變化は少ない。

△(丙圖) 本圖の符號の順序に運ぶのは極めて普通の應接である(黒⑮は⑱の一子を提る、黒⑲は⑳の點を粘ぐ)

△(丁圖) 黒が圖の如く㉑と行びる其以後の變化は極めて多い、俗に「所謂大斜百變なるもの」是である、本圖は其の一種である、

以上四圖は三間夾の大斜を論じる前提として参考のため示したのである。



(石 定 先 互)



大斜元来ノ意味

三間夾ニ於ル大斜ノ意味

三間夾ノ時ニ前記ノ圖ノ手カ普通ニ行ル

三間夾ニ於ル大斜基礎ニ在ル

○前頁四圖で示した大斜定石は（黑白其の孰れが先着たるに論なく）目外の先着に對し小目「掛り」を打つた時用ゐられる定石である（此の内乙圖及丙圖は已に布石法の中に其の實例が屢々出て居る）から目外に在る先着の石から小目の掛り石を壓して攻める形である、處が今茲に説かんとする「三間夾」に於ける「大斜」は三間夾といふ攻撃に應じて自衛防禦の策として打つのであるから、前四圖の普通大斜とは根本的其の主意を殊にして居る、前者に在りては積極的であるが後者にありては消極的である。

此く趣意に積極消極の差はあれど、定石として手順の運び及び一小部分に於ける自他應接の意味に至つては相通する處も頗る多い、が然し差點も決して少くはない、就中著しき相違點を擧げると、「三間夾」の場合では三間夾一子の存在するため、前頁に掲げた四圖の内、最も普通定石として用ゐられる丙圖はあまり用ゐられなくて、却つて普通大斜では紛れ多しとして餘り用ゐられない丁圖即黒が○と行びる方が普通定石となつて居る事である、

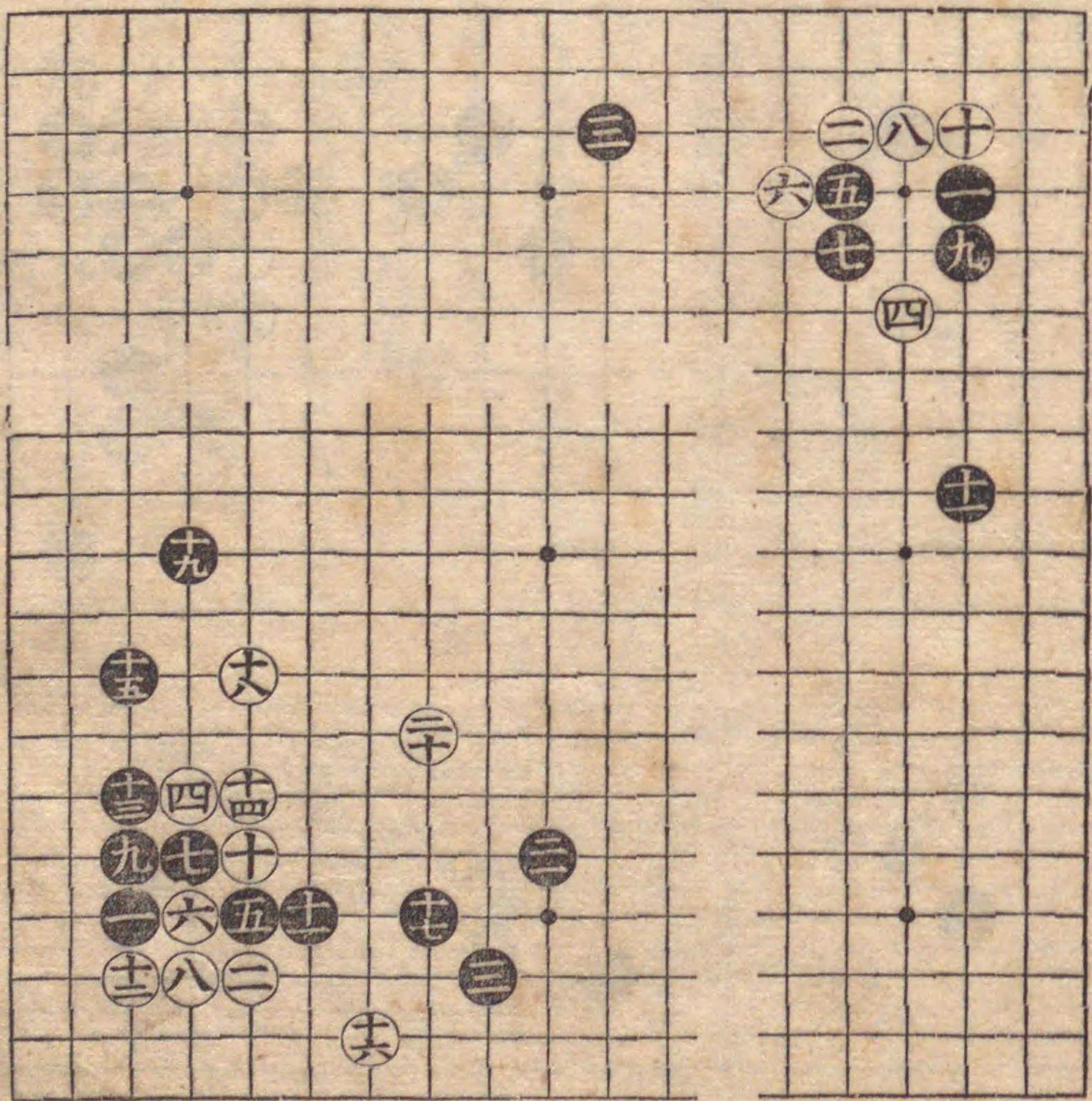
然しながら如何なる定石にも、基礎となる可き定石が必ず一、二、ある、其の他は凡て場合問題から多様の變化を起すのである、三間夾に於ける大斜の基礎的定石とでも言ふ可きは、大要下に記す(天)(地)(人)三種及び(花)(月)の二種を主なるものと推す可きであらう。

△(天圖) 本圖は勿論場合の定石であるが、黒三の孤立と白四の勢力失墜と相殺して極めて平凡無

趣味にして、もはや何等變化を惹起す可き餘地はないのである。

△(地圖) 本圖は極めて普通の應接である、黒が三の一子と連絡して白を一隅に遮斷する方策を探り十一と行び十七と尖み、一方十三と掬ひ十五と飛び、白の十八に應じては十九と迎へ白の二十に對しては二十一と煽り「常山の蛇」首尾相援ふの壯觀を呈して居る、此の一隅黒先着の處として見れば先づ互角である。

(圖 天)



(地 圖)



△(人圖) 本圖は十三の緯十九

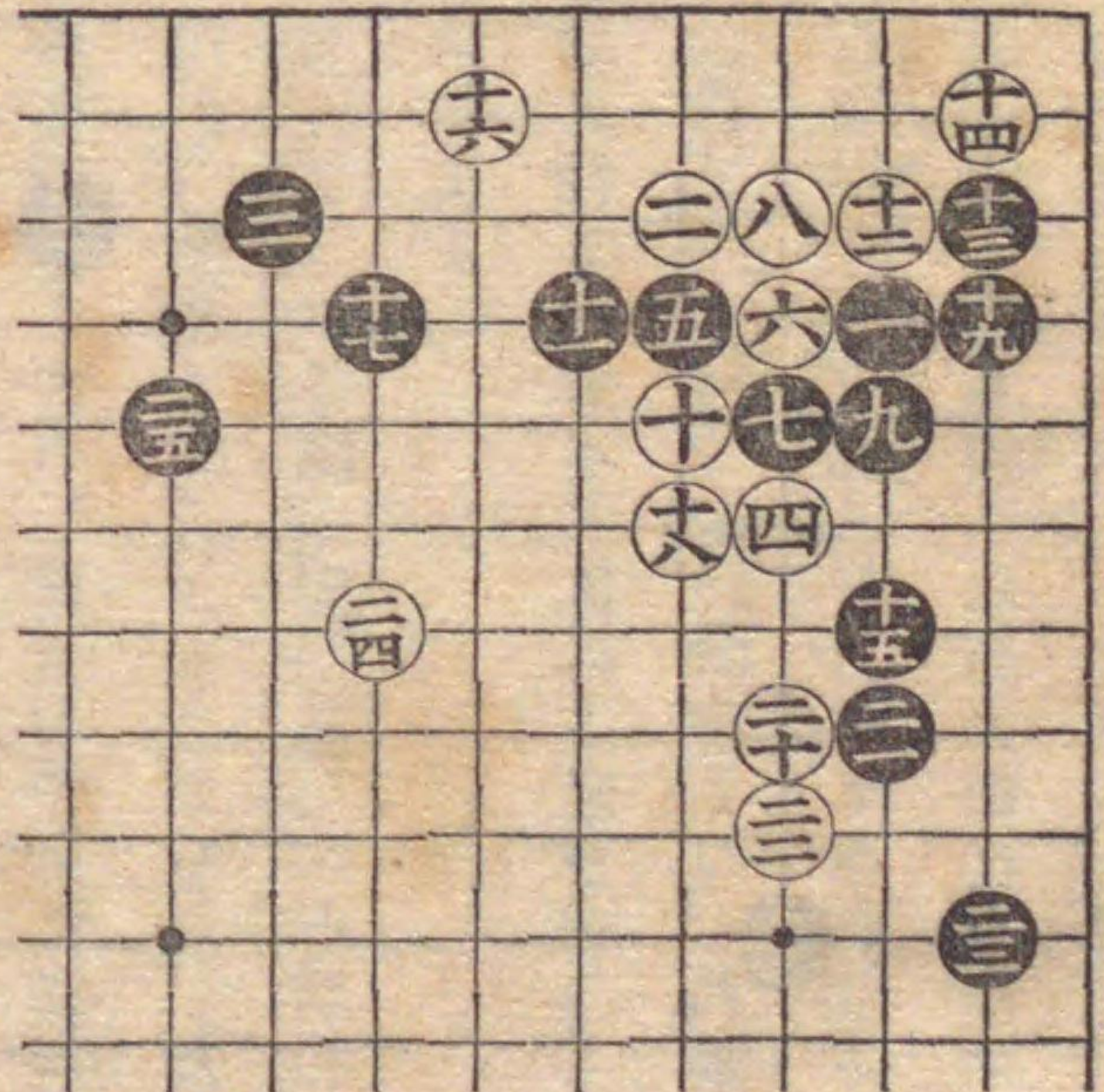
の粘を巧に利用したが、白に二十、二十二と迫られて三と自ら治つたのが、前圖との差點である、大體に於ては是亦五角の形勢である、

△(花圖) 白大斜に掛けた時黒が●と頂ける手がある。其の時白の應手は○と引くか④と抑へるかの二つである。

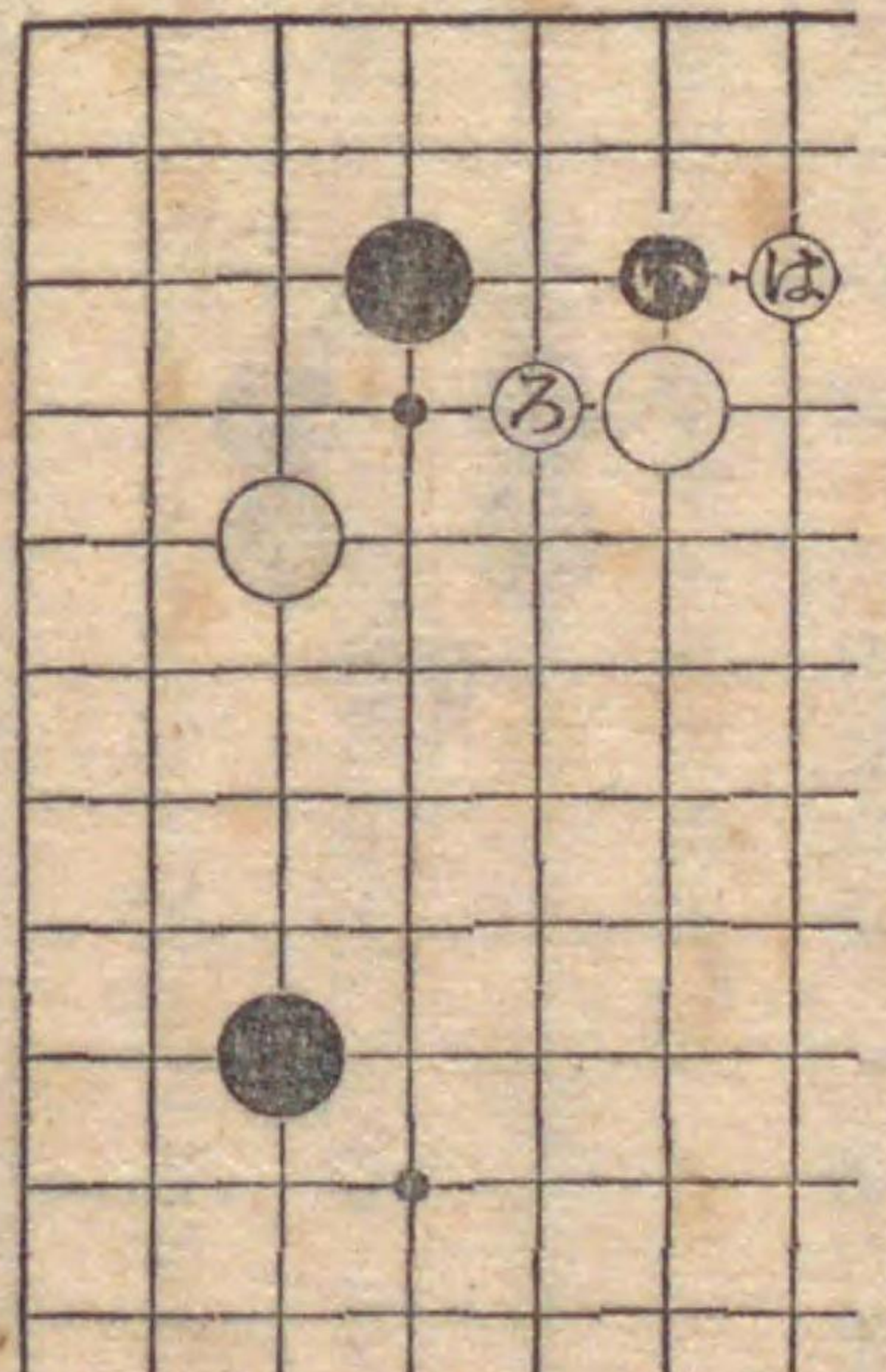
△(月圖) 黒が●と尖頂る手もある、其時白は○と抑へるか、④と下るかの二途である。

上述符號以後の變化と手順とは普通大斜の場合と大差はない。

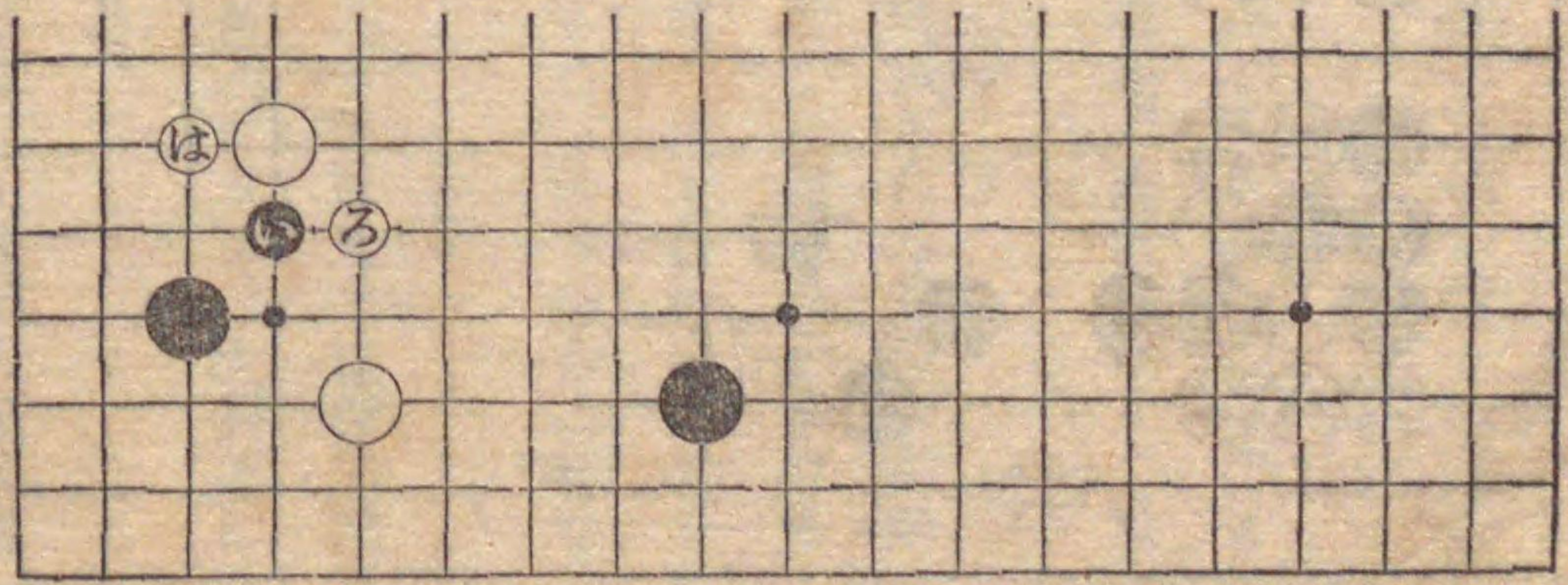
(圖 人)



(圖 花)



(圖 月)

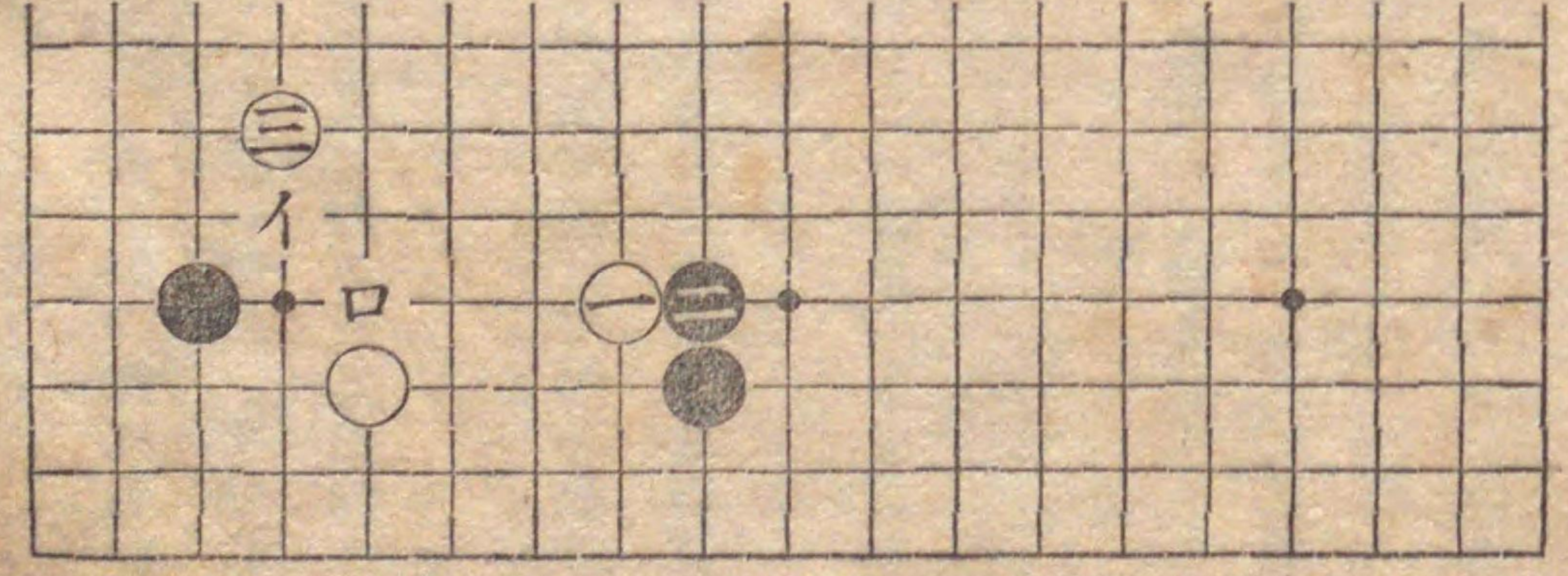


○(第十六圖) 三間夾の場合に於て白が本圖の通り一と黒の肩側に打

つて黒が二と行びた時に三と大斜に掛ける事がある、其時黒の打つ手は(イ)と尖頂るか或は(ロ)と頂るかの二様である、要するに白が一と黒の肩に打つたのは三と掛けるが爲の準備である、先づ此の一の子で三間夾の黒の勢力を阻止しておいて然る後三と掛けやうといふ手で、隨つて白に三と掛られた時の黒の應手は白一の子の無い時とは多少の相違を生ず可きは必然の理である。

▲注意! 本圖に基く定石も數種あるが、之は大斜定石の部類に編入す可きものであるから、大斜定石を詳解する時迄お預りとしておく、さて大斜定石に就て(一)單純なる大斜定石、即ち前第九十三頁に出した甲、乙、丙、丁の四種を基礎とした定石が随分數多くある、次には三間夾の場合の大斜定石即ち同第九十五頁以下に示した天、地、人、月、花、及今茲に説いた第十六圖等の變化である是等は別に一纏として研究録の最後に別冊として出すか、或は時機を見て單行本として刊行するかといふ計劃である事を茲にお断々豫告しておく。

(圖 六十 第)



~~~~~(石 定 先 五)~~~~~



「二間飛」

三間夾二間  
飛近時流行

白二間飛ノ

意味(二十四

参照)

黒五ノ手ニ三  
種アリ

二間飛、後

白ヨリ運フ手  
順

○(第十七圖) 黒二と三間夾した時白四と二間飛するは近來盛に行はる、着手であるが、此は黒から尖頂けられ白②と立つた時黒に③と煽られるといふ急な手になるのを一旦拒いでおいて他に着手しやうといふ意向の時に一時の緩和策として打つ手である、随つて白四に應じ黒が五と二間に應ずれば、茲で一先づ此の定石は形づいて居るものと見て可いのである。

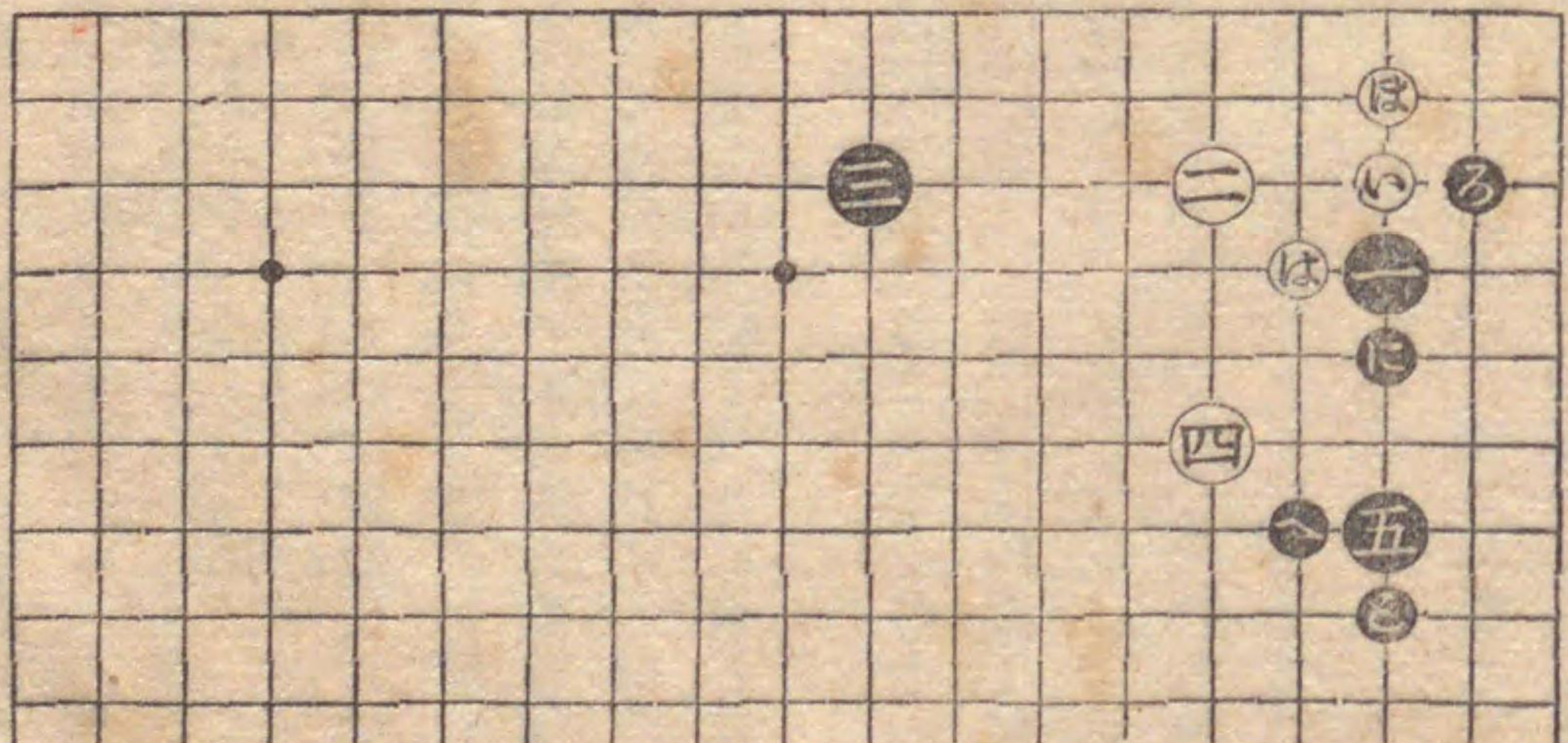
「註」 何故なれば一、二、三、四、五と打つて更に引つゝいて互に數着の交換を遂げて形を熟させるつもりならば敢て此く二間飛をする必要はない、他に幾らも打ち方があるのである、此の意味に就ては更に以下記す諸圖の説明を仔細に參看せられたい。

○(第十八圖) 白が四と二間した時黒の應手は本圖の如く五と二間拓しておくのが普通の手であるが場合によつては五の手で直に③と尖頂ける手と、④と頂ける手と其から全然手を抜いて他に着手する時との三種がある、其は順序を逐うて説明の歩を進める事としやう。

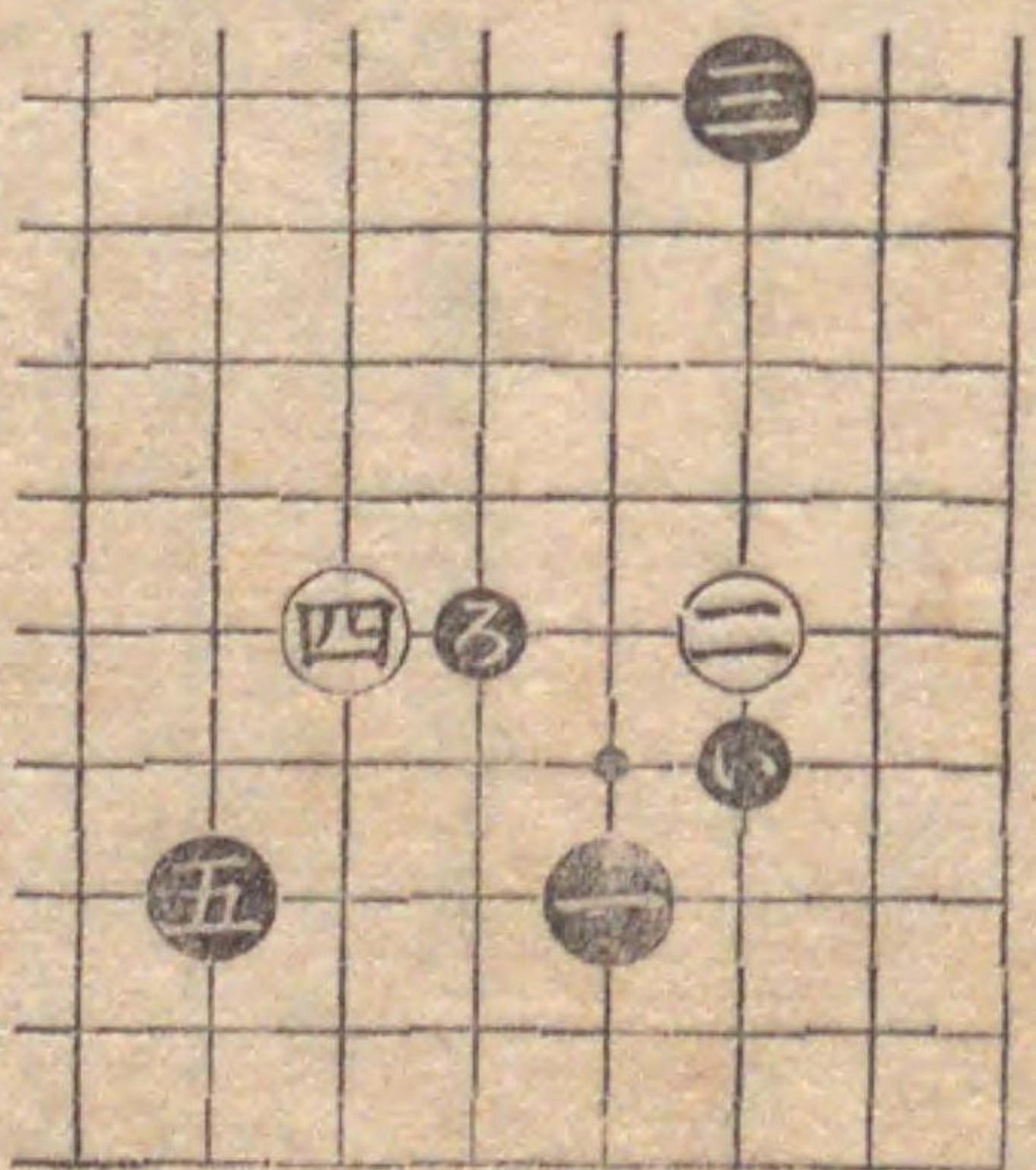
○(第十九圖) 第十七圖に於て説いた通り二間飛の定石は本圖白四黒五で一時治つて居る譯であるが、白から隅へ手を運んで始末をつけやうといふには以下符號で示す通り、白②と三々に頂け、黒③と緯ね、白④に膨らみ、黒⑤と行び、白⑥と下る手順である、茲に於て特に注意を要するは一此の白⑥以下の數着の交換は決して急いで運ぶ可き手ではない、局勢の進み時機の熟して此く打つて必要と感ずる際は断じて打つ可らざる手である」といふの一事である。

「註」 若し局勢の如何をも顧みず急いで⑥以下の手を運ぶものとすれば、其の着手は極めて無意味なものになつて終ふ、何故なれば若し是を四、五の交換の行はれざる以前に(第百七十一頁第五圖)の様に(本圖⑥以下の手順に)運んだならば黒は⑥の斜走若くは⑦の二間拓をして居らねばならず乃で白は先手の取れる所であるを四、五の交換後である(本圖)白③と下つて後手を引かねばならぬといふ非常の不利に陥らねばならぬ。

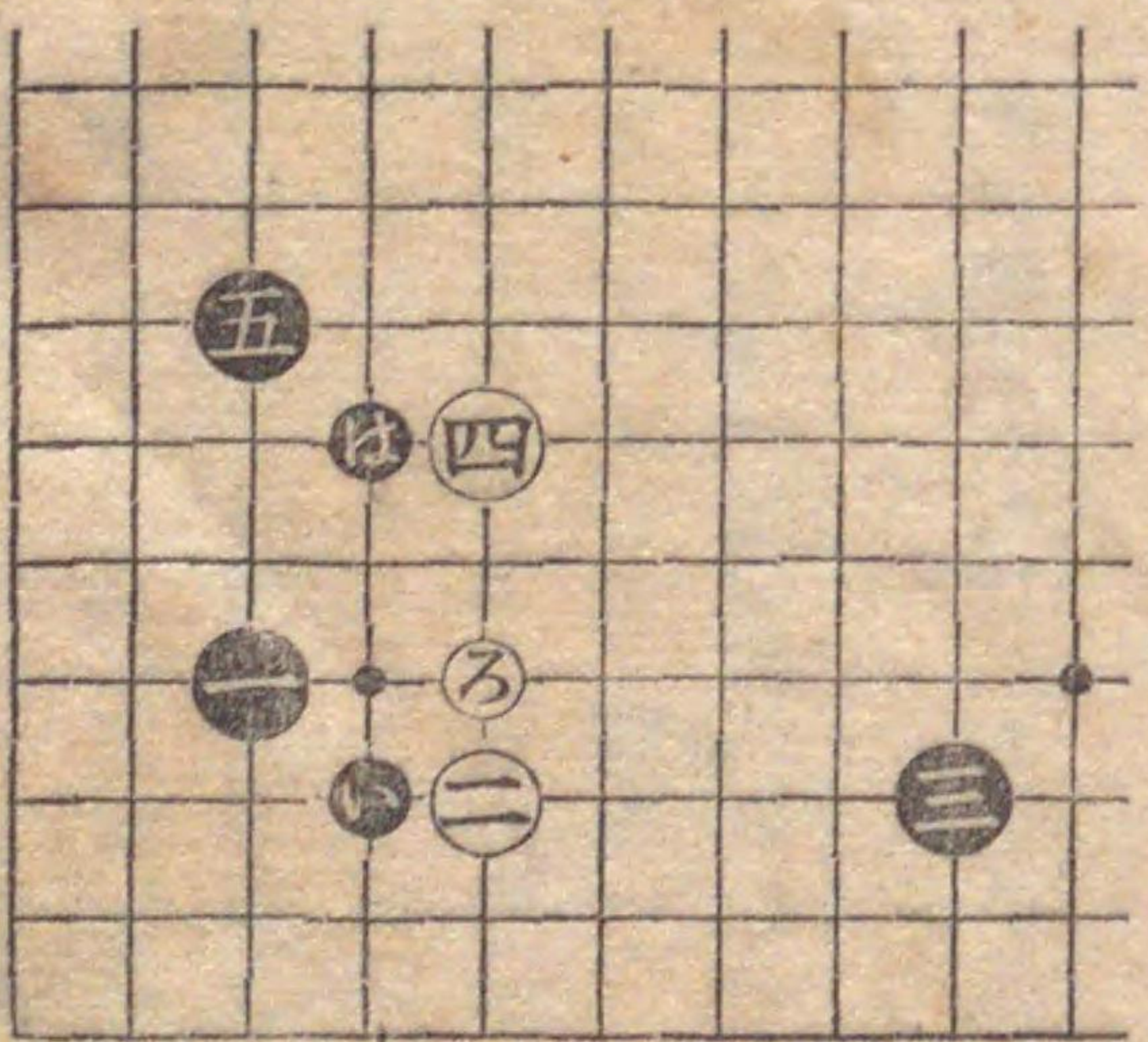
(圖九十第)



(第十八圖)



(第十七圖)



(石 定 先 互)



白二向飛ノ意  
ニツアリ

白ノ三三ニ  
對シ黒ノイ  
ト緯ルヲ最  
良トス

世ノ理違ヒ  
手ヲ得タトシ  
テ説シタカ  
クカラス

○(第二十圖) 白四の二間飛は黒から④と尖頂られる急な手の凌ぎであると言つた、が然し其は白が四と飛んだ意味の一半を言うたに過ぎぬ詳に説くと更にモ一つ意味を含んで居る、其は三間夾の黒三を③と攻め④と追つて右下隅に大利益を収めやうといふ策戦である、但し是には右下隅の布石關係といふ事が重大なる勢力を及ぼすのである、若し右下隅の星に(イ)と白の布石があるか或は其の他大斜走等の形で白の布置がある様な場合であれば無論白は④と黒に追つて右下方面の利益を保有する事となるから、此ゝる場合は白の四は自ら守ると同時に黒三を攻る意味を兼ね居るのである、然しながら若も目外の白⑤に對する黒⑥の尖でもある様な場合であれば④⑤等の攻の利かぬ事勿論であるから白四は單に自らを守る意味と見ておけばよいのである。

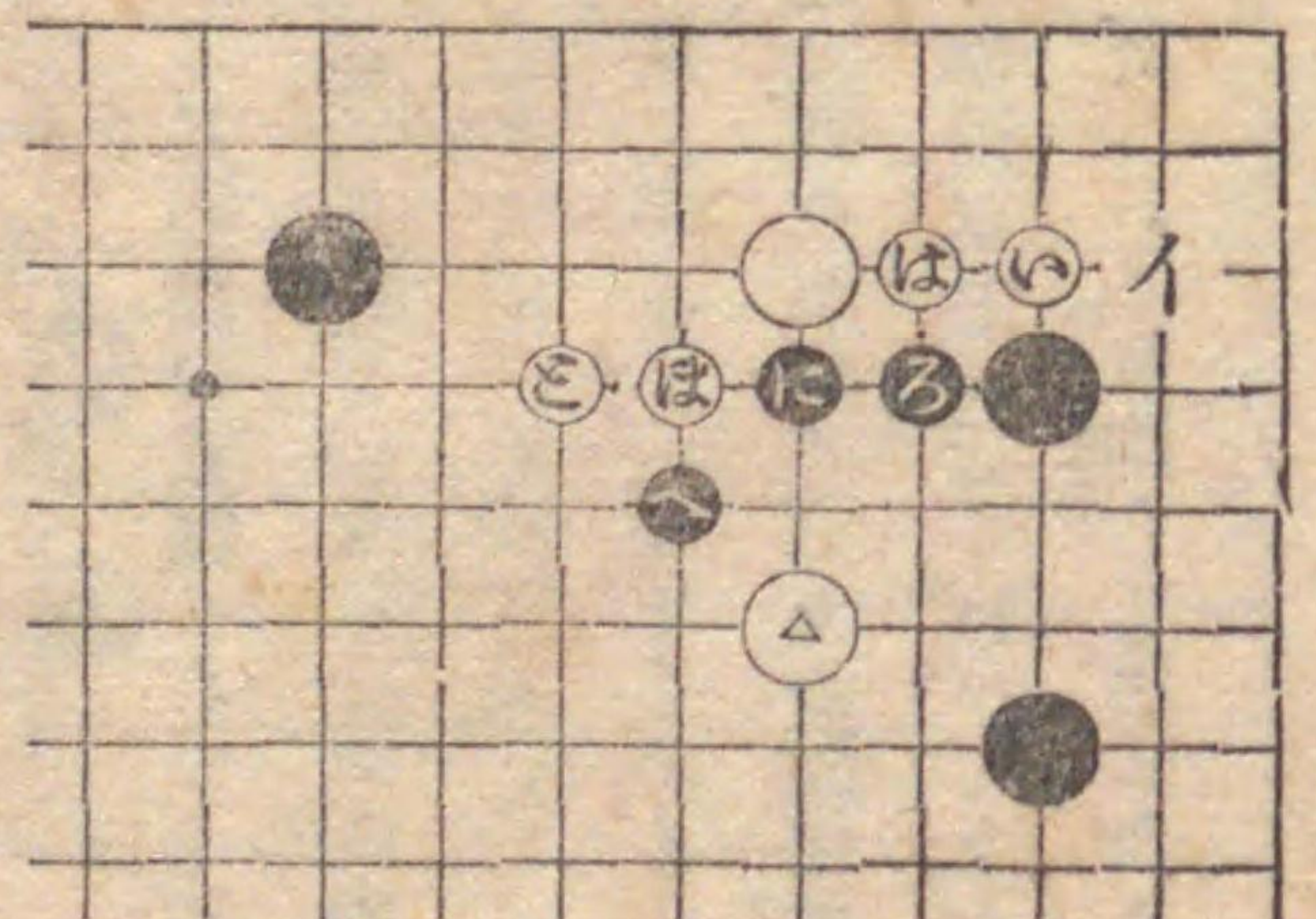
△(質問第一圖) 問、ふ圖の如く二間飛の場合白が④と三々に頂けた時に黒が⑤と上へ行びる手を見たる事あり其の利害得失如何、

○「答」白が④と三々に頂けて来た時は何時如何なる時でも必ず(イ)と隅へ緯るより外に手なしと心得ておけばよい、若し是が三間夾の場合でなく、一間若しくは二間の時で外部を完全に閉鎖して、白を一隅に封じ込められる時ならばイザ知らず、本圖の様に白の勢力が③、④、⑤と来ては三間夾の黒一子は酷しく其の感じを受ける事になり、且つ△印の白が恰と黒⑥の接續點を截らうとする手になつて居るから、黒⑥の不利は言はずして明である。

質問録に連關して思出した事があるから序を以て一言しておく、其は理に無い手、其も少しは何か據り所のある手ならば兎も角太だしき不法非理な手を列擧して「此ういふ手も何書に出て居る此んな着手も何雜誌に出て居る」として質問して来る人があつて實に閉口するのである成る程今日

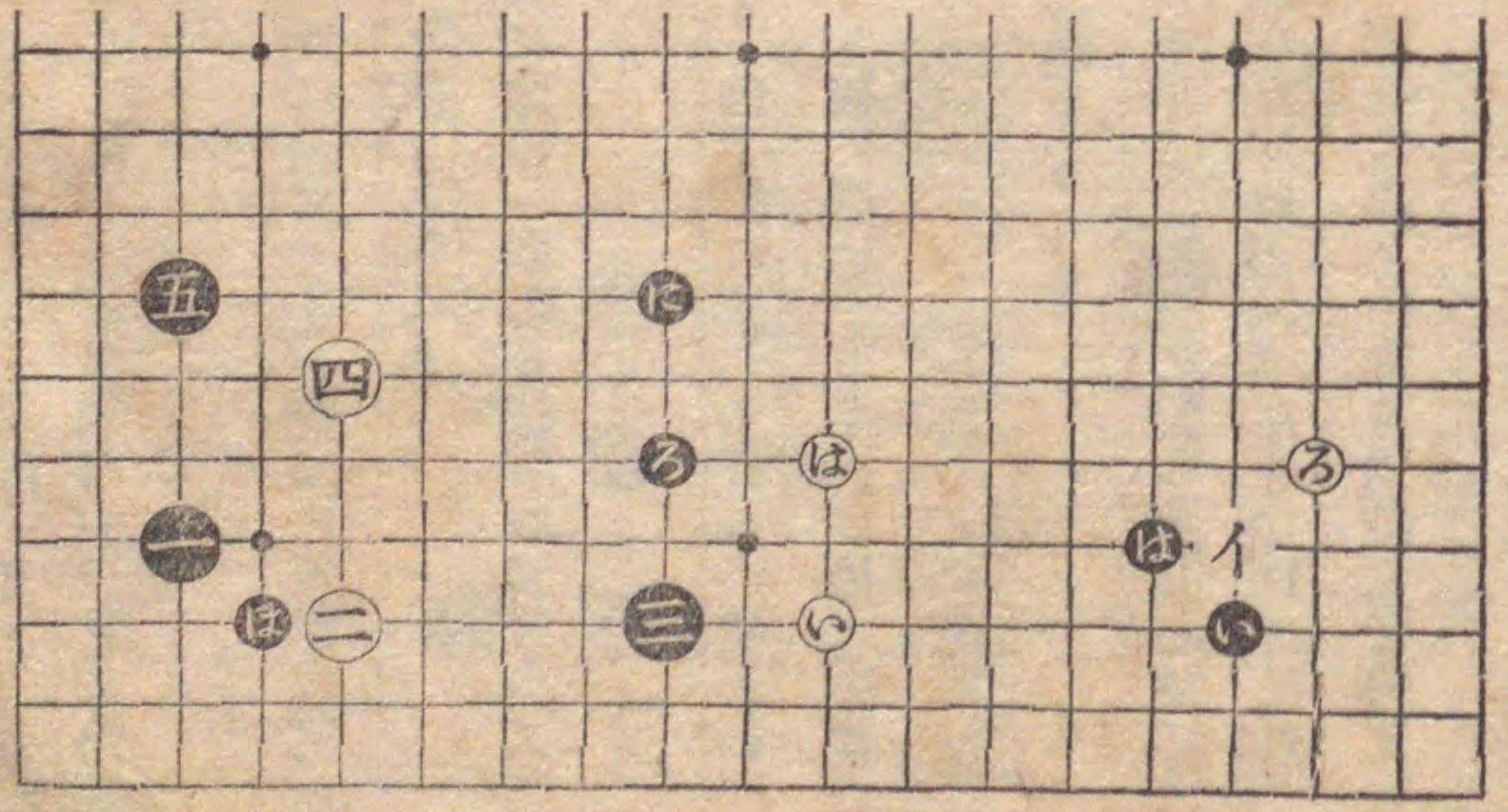
世に行はれてゐる棋書の多くは本因坊師の詮衡を経ると随分如何はしい理違ひの手や有る可らざる形を得々として出して世の同好者を誤つてゐるのも少なくはない様であるが此研究録には今日の進歩した棋理に照して本因坊師の是認せらるゝものより外は出さぬ稀に本理でないものでも(世に盛に行はれてゐるとか古昔は行はれてゐるとか若しくは陥り易い誤り)とかの手だけは特に質問圖若しくは参考圖として掲載する事とはするが甚だ

(圖一第問質)



しいものは凡て省く事としてある何故なれば、悪手や異手を一々出した日には何千何萬と數を重ねても盡きる時節はないからである。

(絶軒)



(第二十圖)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



二向ニ飛ヒタル  
白ノ處置法

二間飛ノ白  
對スル黒ノ  
着点三種

黒一ノ單關  
ニ對スル白手  
二種

二十三圖  
白ニ對シ  
黒ハ三ト下ル  
ヲ良トス

○(第二十一圖) 前第二十圖で示した三の黒を白が○と攻めるといふ事が已に布石問題に移つて居るのであるから、其以後に起る此の一隅の應接は無論單純な定石として見る事は出来ぬが、兎に角日常行はれ易い二三の應接と其の意義とを詳解して置く事としやう。

本圖の如き形になつた時に白は必ず二子の處置方として●の點即三々に頂けて是が處理に着手す可きかといふと、必しもさうとは限らぬ、是亦場合によつては白は更に手抜する事もある。

「註」 此の際に手抜するといふ事は其の手抜して運ぶ場所の利益と此の一隅の手抜きの爲に失ふ損害との比較上から、手抜の可否は定められる譯である。

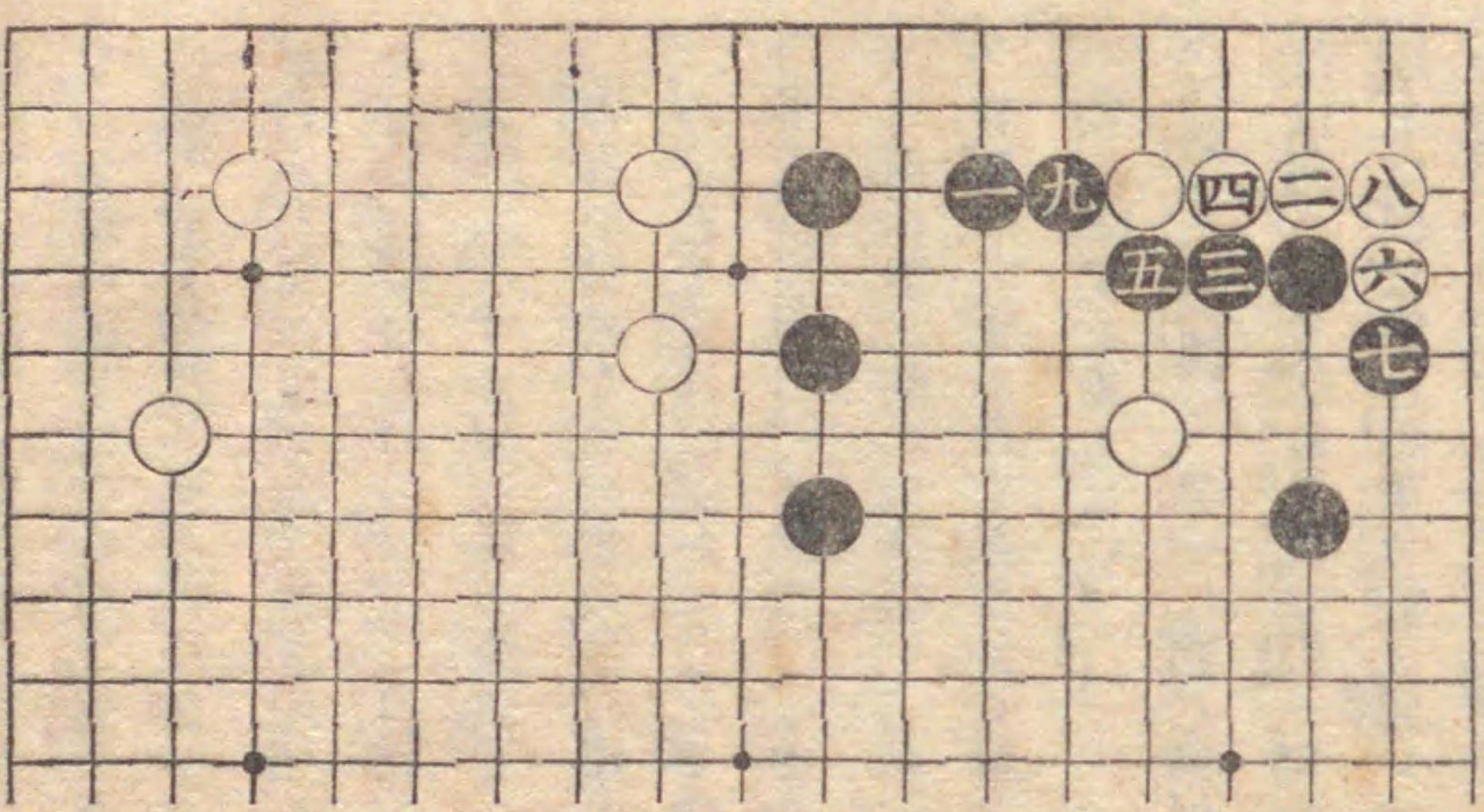
若白が手抜した時黒は茲を如何打つか(是亦黒の立場としても同じく白手抜に應じて直ちに茲を衝かねばならぬといふ事はない既に白が他の着點との比較上之を捨て、他に赴いたとすれば黒も亦他の着點と此の隅とを能く比較し研究した上で去就を決しねばならぬ事勿論である) 黒からの着點は●と單關する手と、●と尖頂る手と、單に●と下つておく手との三通りある。

○(第二十二圖) 黒が一と單關して來た時白が二と三々の點に頂ける手と、黒三の點へ尖頂ける手との二種ある、此の白二の際に於ける應接は黒は三と行びて上を塗る方針がよい、なせなれば已に左方に三子の黒の勢力が加はつた上、更に一と單關して居るため、完全に白を一隅に閉鎖して終ふ事が出来るからである。

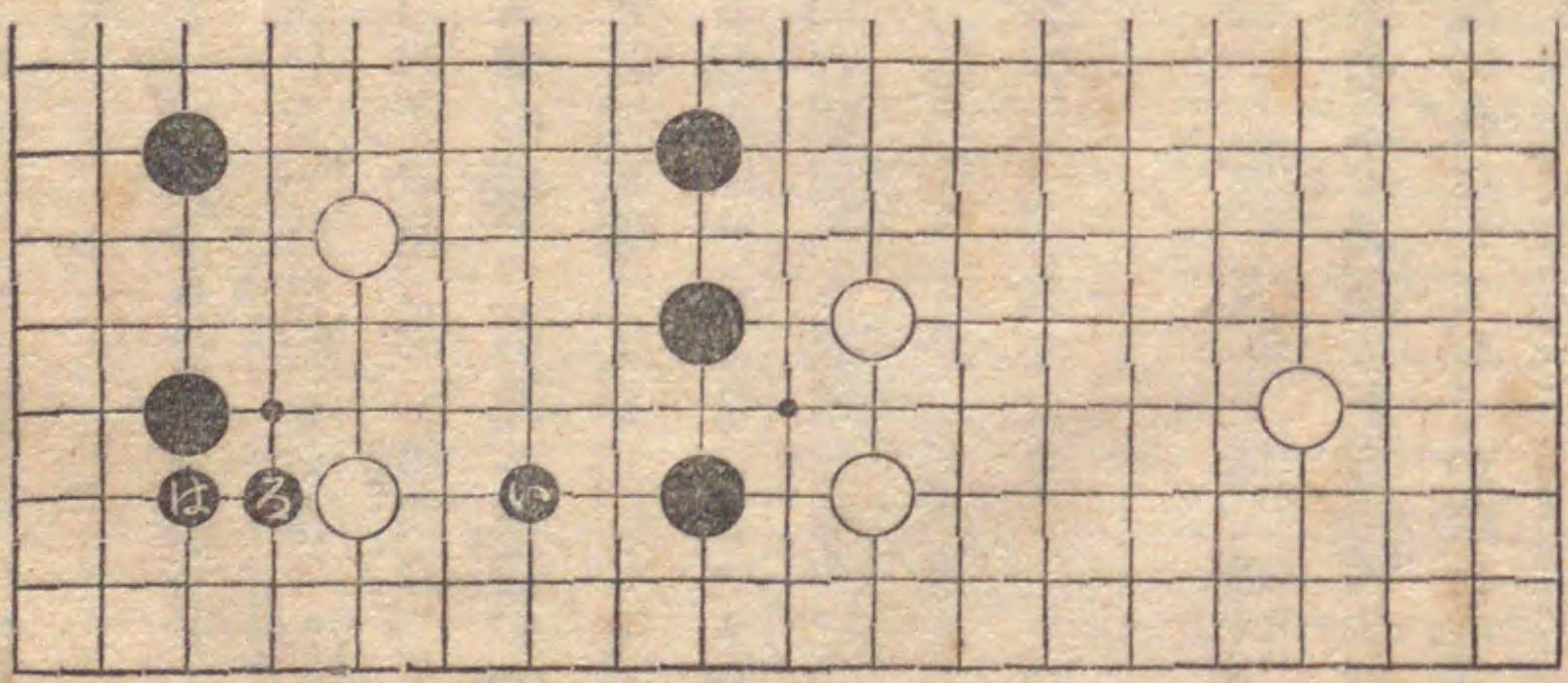
○(第二十三圖) 白が二と尖頂けた時黒は白の根據を奪つて三と下るがよい以下の應接は圖の數字が示す通である、若白二の時黒が三の手で四の點へ行れば白は三と縛て普通三々頂手に戻るるので此の場合の黒としては不利益である。

又第二十二圖と第二十三圖とを比較すると第二十三圖の方は白の根據が無くまだ治つて居ないだけ白不利益である。

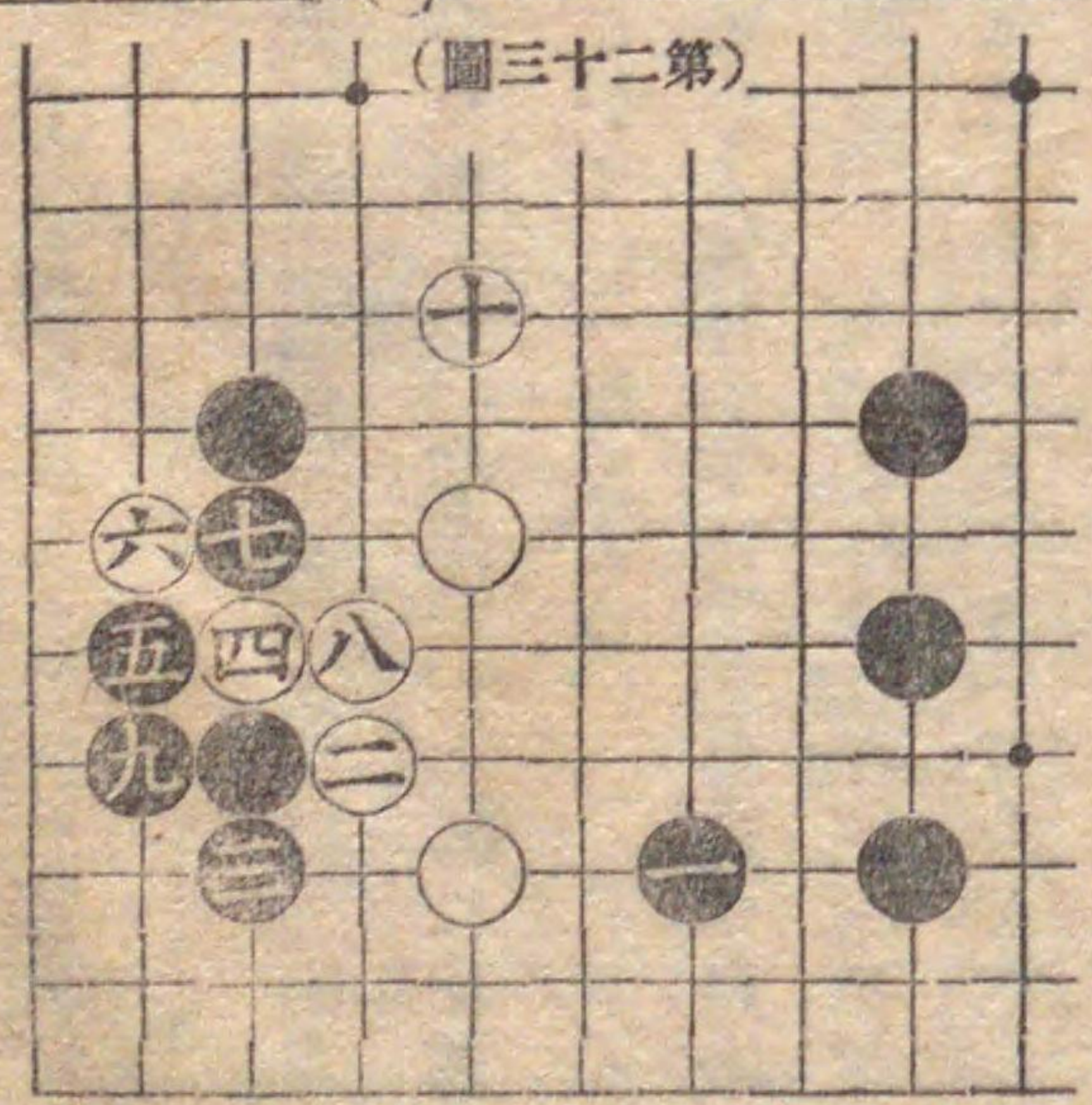
(圖二十二第)



(第二十一圖)



(圖三十二第)





白二子二通

白二子行ハ  
五迄ハ普通

白六子二種

イト打ハ理違

白ハ時黒ニ  
ニ規カハ如何

白ハ手二種

○(第二十四圖) 黒が若し隅から一と尖頂て来た時は白如何に應接す可きかといふと、(イ)と尋常に立つか或は(ロ)と尖むかの二途である。

○(第二十五圖) 黒一の時白が二と行びたならば以下圖の通り黒五迄の普通の手順に運ぶのであるが白六に至つては此く黒五の頭へ頂けるか或は(イ)と飛んでおくか其は解らぬ、唯此の形の時に注意せなければならぬのは(イ)の點へ白の子の運ぶのが理違ひであるといふの一事である。

「註」(イ)と打つ事の違法といふ理由は(ハ)の點へ頂越が利くといふ條件の下に(ロ)の點へ白の棒石が出来るのが左の黒に感じを與へる譯になる、して見ると此の(ロ)六、と白の棒石があるものとして見れば其から(イ)と曲る道理は決してないといふ理由も自ら明了であらう。又白が六の手で(イ)と飛んだ時黒に(ニ)と中間を絶たれる恐はないかとの懸念を抱く人があるかも知れぬ、然し此の形の時には何時でも白から(イ)と窺いて(ロ)と粘がせるか或は(ハ)と窺いて(イ)と粘がすといふ手が利いて居る譯であるから若も黒が(ニ)と来ても白は(ロ)の點へ突出して行く事が出来るから敢て心配する要もない。

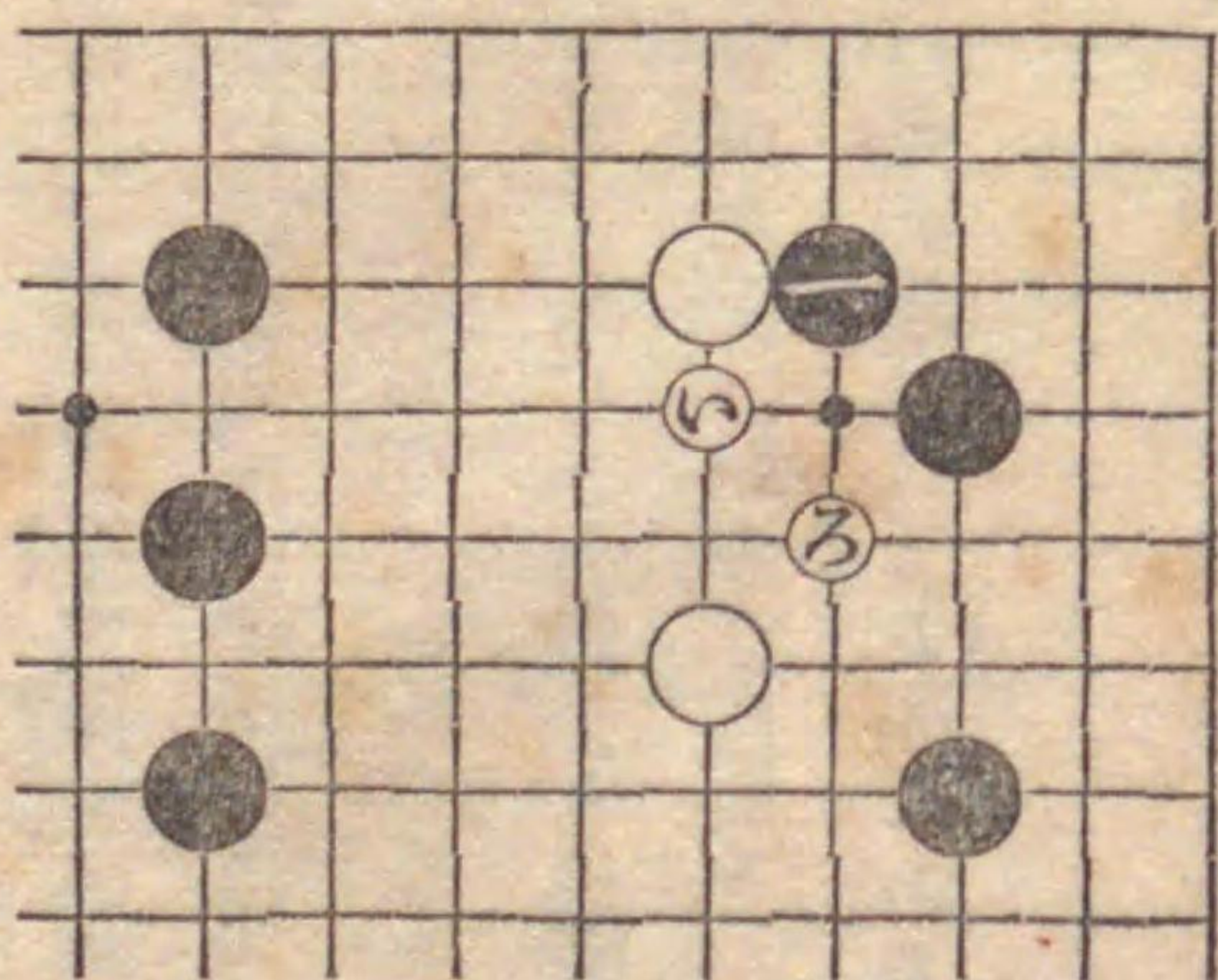
○(第二十六圖) 黒一に應じ白が二と上から尖んで来た時は、黒は三と受けるの一手である、次で白は隅へ四と縛ね黒五と抑へ白六黒七迄の交換は双方とも約束手といつてよい、既に茲まで運んだ以上は白は第八の手で(イ)と窺いて間に合はしておくか或は(ロ)と尋常に備へておくか、兎に角此の處に一着を費しておくといふ事は必要である。

黒一白ハ  
普通ナレモ  
大抵ハ手技

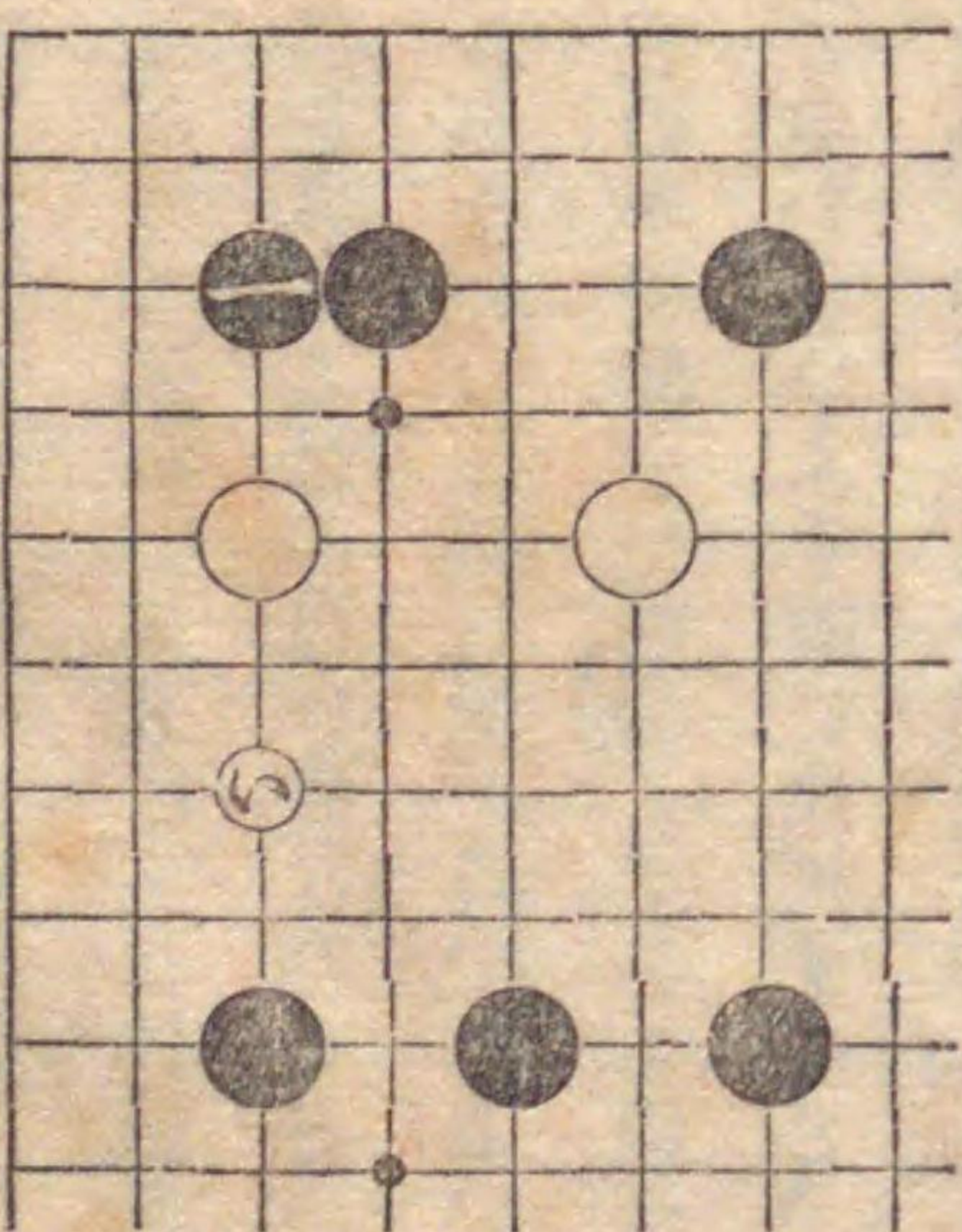
○(第二十七圖) 黒が一と隅を下つた時は、白は之に備へるとすると(イ)と飛ぶのが普通であるが、然し大抵は手抜して他に着手するのである、次で黒が又一着を費して此の白に迫つて来ても、白は顧みずして他に着手するのである、即ち茲に二子の犠牲を拂つて他點に其だけの代償を得やうといふの策戦である。

「註」此の二子の白を擒とさるゝは決して少い損失ではな

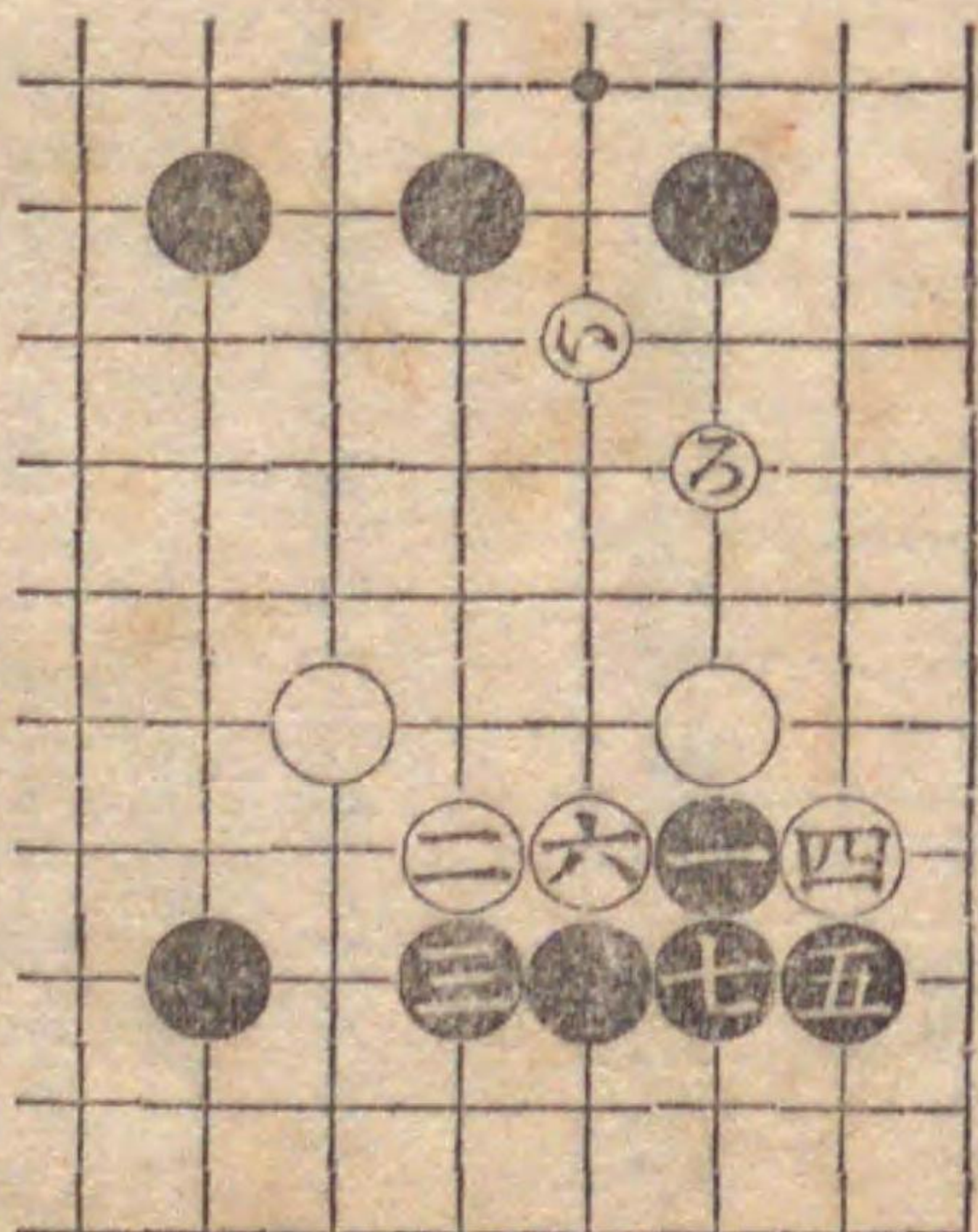
いが然し已に初に於て左下隅に利益を占め今又二着を他に運んだのであるから其の代償としては十分であらう。



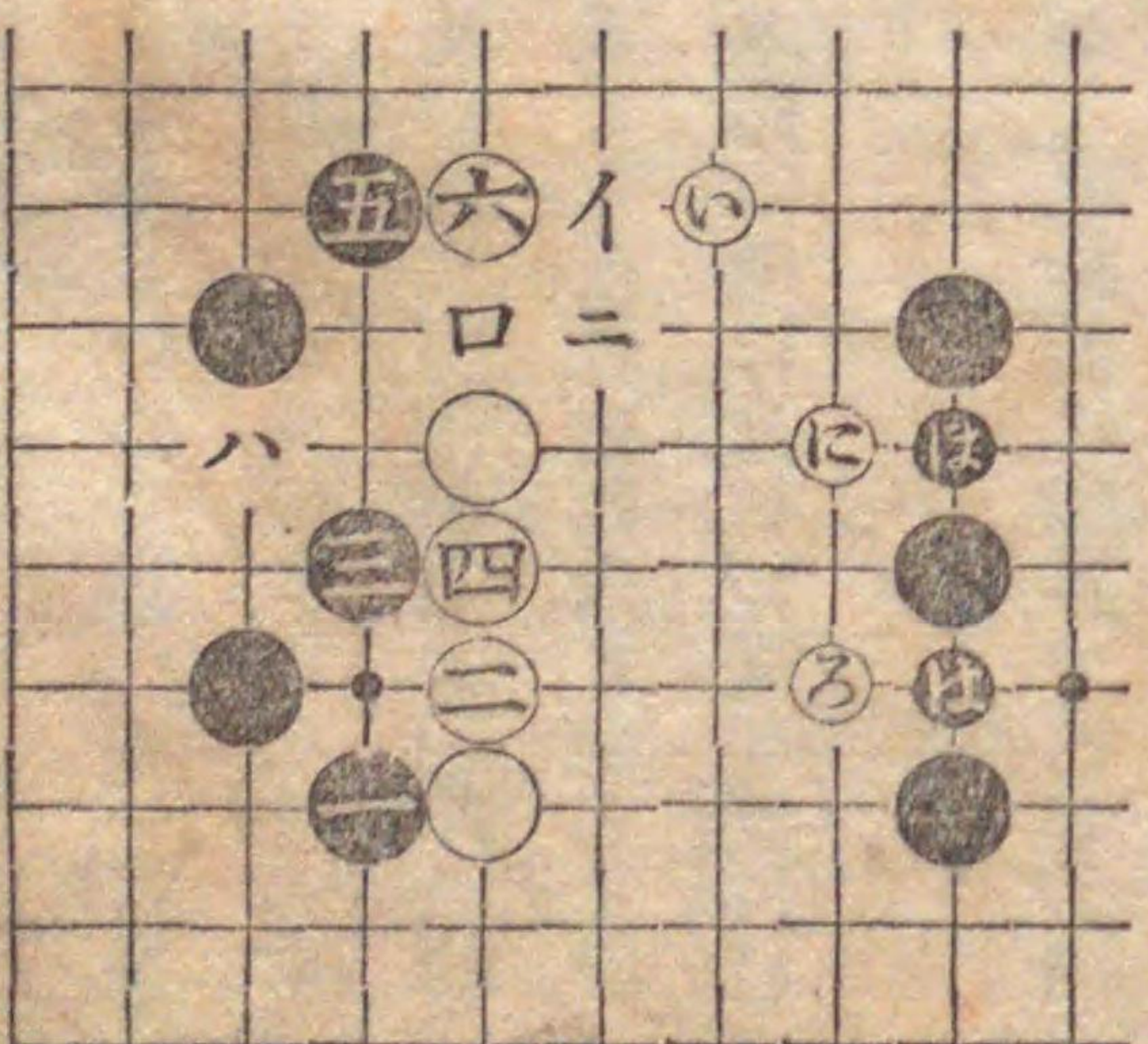
(第二十四圖)



(第二十五圖)



(第二十六圖)



(第二十七圖)



白二間飛、  
時黒五ト  
尖頂ケ、手  
如何ニ場合  
ニ此尖頂  
カ適スルカ

白二間飛ノ時  
五ト頂ル手

○(第二十八圖) 黒が五の手で⑤の點に二間飛するのは普通の着手であるが本圖の様に直ちに五と尖頂るのは場合の手である、然らば如何なる場合が黒五の尖頂に適應するかといふと黒三の一手を⑥方面から攻られても白に大なる利益を興ふる恐のない様な時であつて且つ此の五の尖頂によつて白の根據を奪ひ隅の我石を治まつておかうといふ様な意の時である、此の五と尖頂け七と一間飛する手を(前の第二十五圖の様に)先づ五の手で⑤と二間飛してある後に五と尖頂け白に六と立たせ、(イ)と覗き、白に(ロ)と粘がせ(ハ)と尖むといふ手順に比較すると、本圖の様に最初に五と尖頂けて七と單關した方が一手を省略して効果を同じうした様なものである。

其から次に白の側に就て言ふと、單に二、四と二子二間飛の時は軽いから取捨共に容易であるが、已に六と立つた以上は重い姿勢になつて居るため一方黒の三、④、⑤と勢力が加はれば白が其の感じを受ける事も酷しい道理になる、随つて白が黒三の二子を⑥、⑦、⑧と攻るといふ事が効果の少い事になる何となれば⑥、⑦の二子によりて攻られる黒よりは④、⑤、⑥と勢力の加はつた黒によりて二、六、四の白の受ける苦痛の度の方が大きいからである。

○(第二十九圖) 黒が五と頂けるのは是亦場合による手である、其の場合問題は次頁に於て第三十圖を以て詳解しやう。

黒に五と頂けられた時白は極めて稀な場合に於て⑥と打つ様な事もあるが大抵な場合は六と縛るの

白六ノ手ニ種

黒七ノ約束  
手

白  
黒八ノ手ニ種  
三十四参照

黒九ノ手ニ種

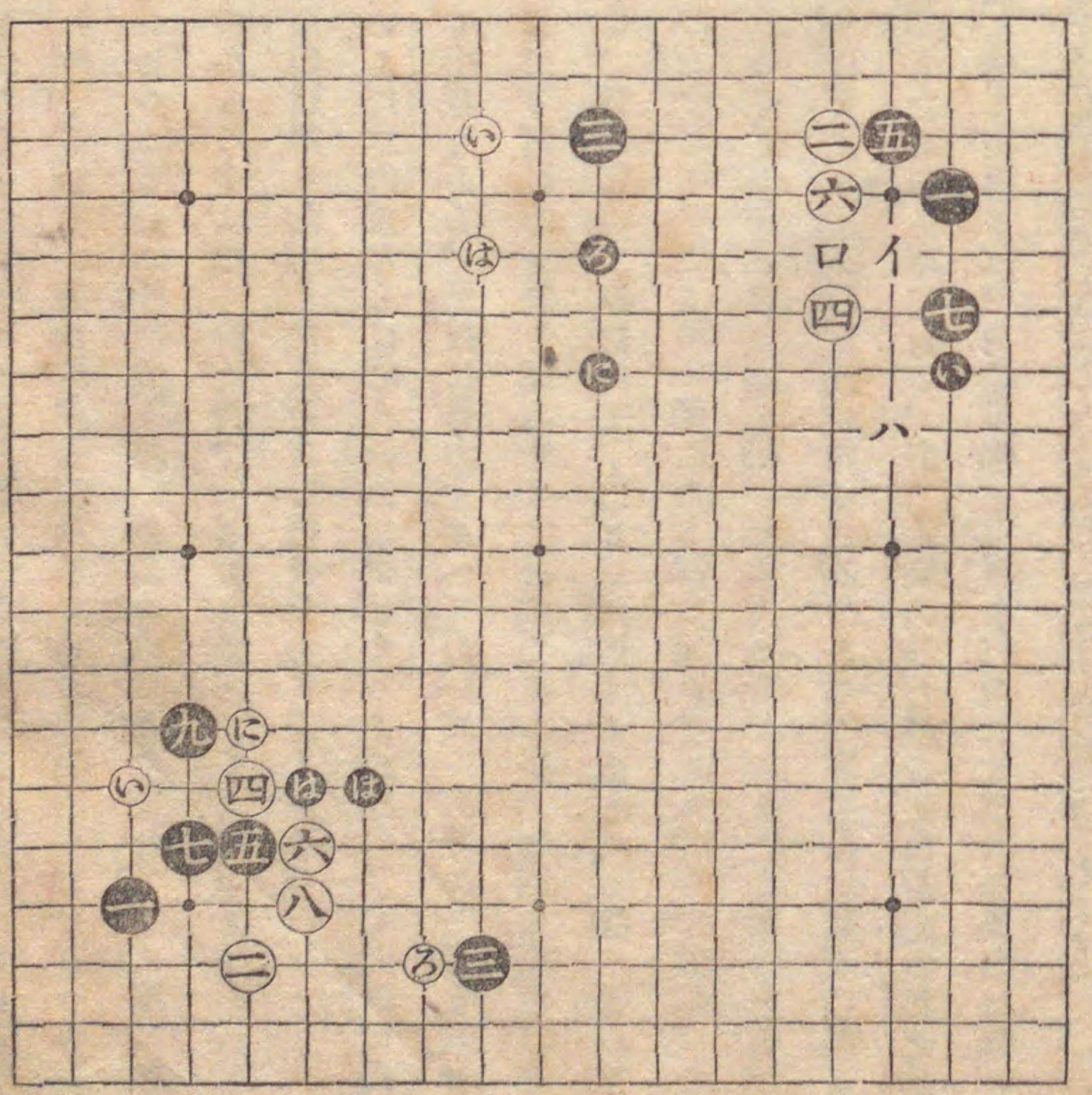
が尋常の手となつてゐる。

白に六と縛られた時黒が七と引くのは約束手で此く打つより外に手はない。

白は八の手を此く引くのが穩健であるが或は此の手で⑧と黒三に頂ける事もある。

白が八と引いた時、黒が九と飛んで此方面の地域を守るのは普通の手であるが、場合によつては九の手で⑧と截る事もある、其時白は⑨と行び、黒亦⑩と行びるといふ順序である、此等の意味は次圖に於て詳解する事としやう。

(第二十八圖)



(第二十九圖)

(石 定 先 五)



○(参考甲圖) 前圖に於ける黒五の頂手を説く前提として茲に再び二間飛の意義を敷演せねばならぬ、白二間飛には黒一からの尖頂を軽く凌いで一時を緩和しておくといふ消極的手段と、一方三の二子を攻めて其の方面に利益を占めやうといふ積極的手段との二つの意義を兼ねてをる事は數説いた通りである、今茲に再び説かんとするは「軽く凌ぐ」といふ此の「軽く」といふ言葉に無量の意義を含めて更に右下隅方面の状態と關聯した策を含む場合があるのである。

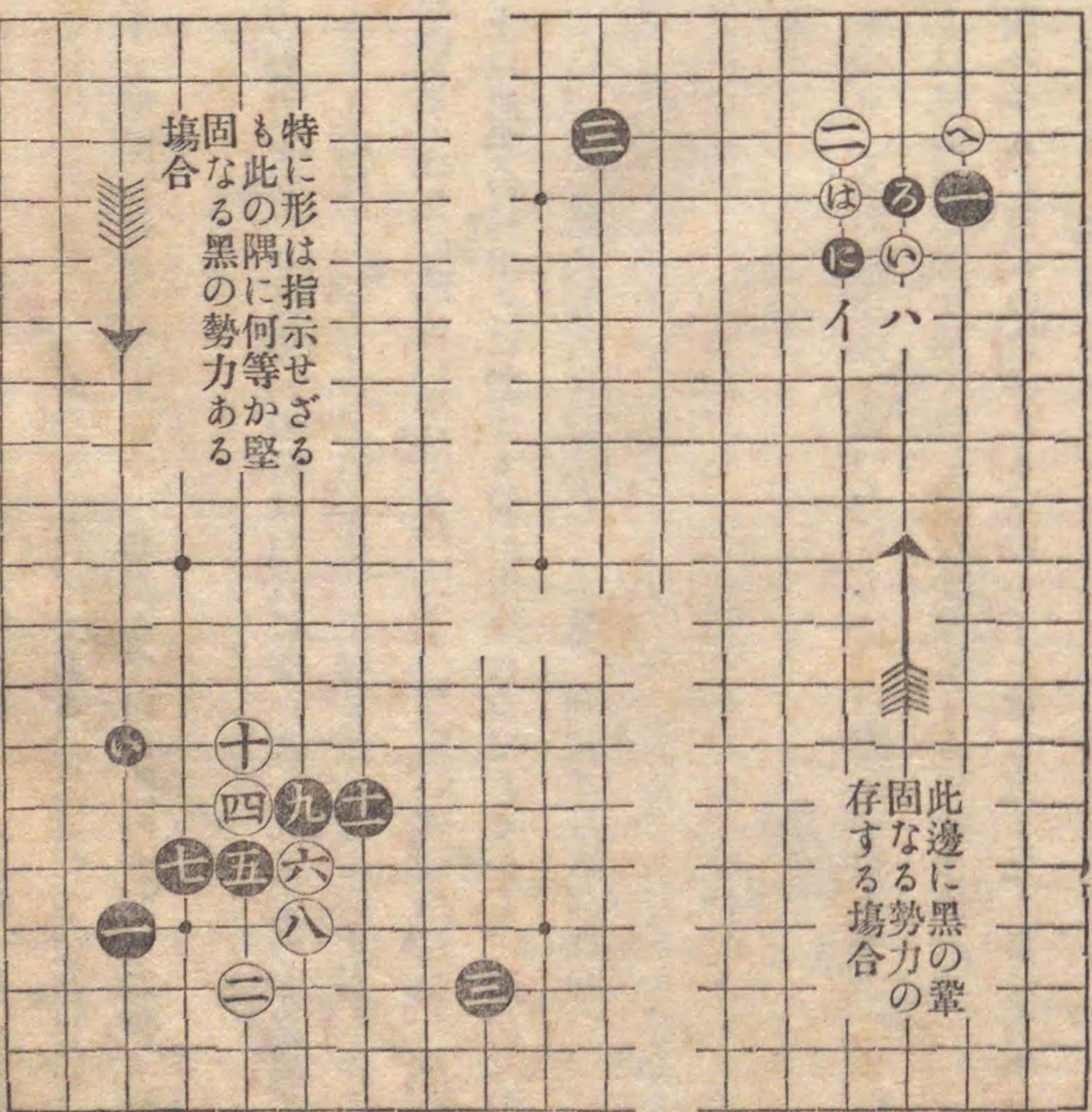
若黒一からの尖頂を凌いでおくといふだけの意ならば(ハ)と斜走に掛けやうと或は(ハ)と大斜に掛けやうと又は(イ)と三々に頂げやうと隨意である、又茲に勢力を加へておいて一方三の二子を攻めやうといふにしても同じく(イ)の斜走以下何れの手段を用ゐやうと任意であるが、唯困る問題は形が早く熟して終ふといふ一點である、乃で此の二の白から(イ)と二間飛する主眼は「軽く捌いておく」「成る可く形の熟さない様にしておく」といふの一點にある事は明かである、が今茲に説かんとする場合問題は本圖に於ける右下方面の關係で、即ち假に右下矢印方面に堅固な黒の勢力が存在して居るとすると、白の二間飛に更にモ一つの意義が加はるのである、乃ち白は危険に陥る事を避けるために軽く(イ)と二間飛したといふ事になる、若し本圖の様な場合に白が(イ)の斜走掛でも用ゐやうものならば、忽ち黒に(イ)と突出され、白は黒(イ)と出截を打たれて其の結果白は極めて不利の状態に陥らねばならん(以上詳解の趣意を咀嚼して次圖の説明を熟讀せられたし)

白二間飛ノ真意ハ形ノ熟サナイ様ニシテサナイ様ニシテ置クニアル

白ニカライト斜走ニ来タ時乃チ出截ルノ好機

白四ハ黒トイト普通ニ飛ハシメテ上方面ノ低キ黒トノ關係上テ不利カニ形ニスルニアリ  
黒五ノ手先ニ於テ味アリ

○(第三十圖) 白四は黒五をこて(イ)と普通の着手に運ばしめやうといふ考である、何故なれば左上方面矢印邊に位置低き黒の布石があるものとして、乃で又黒が(イ)と低く二間するといふ事は極めて氣の利かぬ姿勢であるから、白四の二子には黒をして此の不利を犯さしめやうとの意が含まれてあるものと見る事が出来る、前述白の截斷さるゝ危険及今茲に説いた意の反面を見ると黒が五と頂げる場合問題は自然に明になるであらう。



(参考甲圖)

(第三十圖)



此處接

白八黒九必要

白十の時黒土  
忘ルカサル手

○(第三十一圖) 白八の手で黒⑨の綽出しに備へて⑩と打ち黒に十の點を截られた時⑪と行びる手がある、本圖八と三の一子に頂けたのは⑫と打つ手を一層働かしたのである、其時黒が九と行びて、白に頭を壓せられぬ様にした時、白十と堅固に粘り、黒も亦十一と飛んで白に此の方面を遮斷されぬ様に備へを立てるのである、

茲で注意すべきは黒が若し三の一子の効力を零にせぬ考への時は白八に應じ必ず九と立つが必要である、誤つて⑬と綽るといふ様な手を下しては宜しくない、若し誤つて⑭と綽ね白に⑮と引かれては、徒らに彼の姿勢を調へしめた上早晚自らは九の點に一手戻らねばならぬ、此の差は少なからぬ損害である、又白が已に入と打つた以上は黒⑯の綽出しに對する備が出来たのであるから、黒が九の手で⑰に綽込むといふ様な俗手に出ては、其の結果如何に變化しても黒の利益となる譯はない、要するに此の形の中で白が十の點を黒に截らせるや否や、又黒が三の一子を捨るや否やといふ事は雙方の策戦によるのであるから敢て是非する限りでないが、白に十の點を粘られた時黒が十一と飛ぶのは決して忘る可らざる要點である。

○(第三十二圖) 白八の時黒之に關せず九と白の接續點を截つたならば、白亦之を顧みず十二と打つて振替るがよい、此の相互の振替りは局面の形勢次第で孰を損得と斷定する事は出来ぬ。

○(第三十三圖) 黒が白八の來攻に關せず九と截るのは必しも三の一子を捨る意と見る事は出来ぬ何となれば白十の攻撃に應じて十一と圖の通り行る事もあるからで、只此の場合は黒は九と截つた

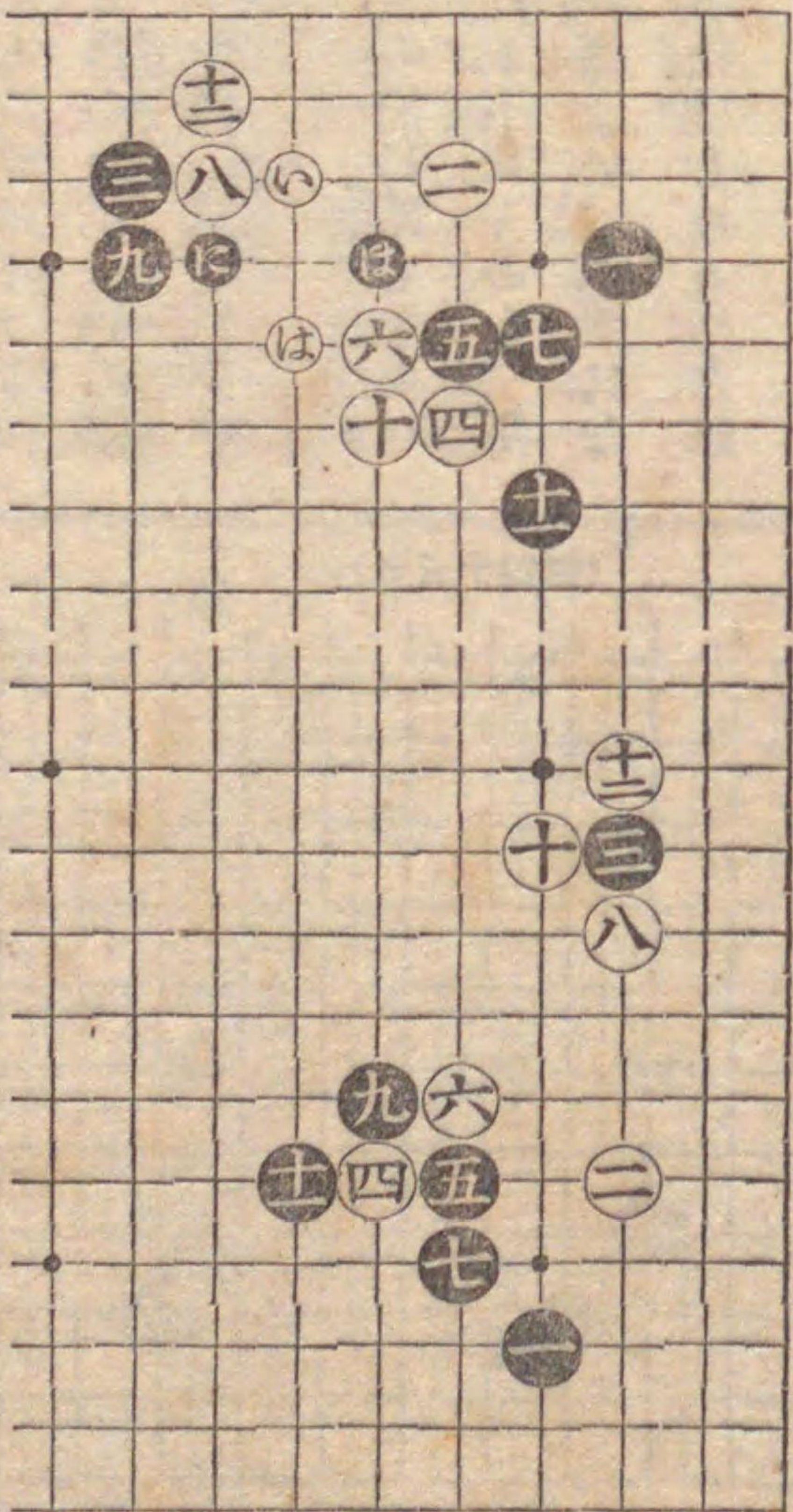
以下、應接

ロハノ攻撃  
点ニ注意

二十六ノ攻撃  
点ニ注意

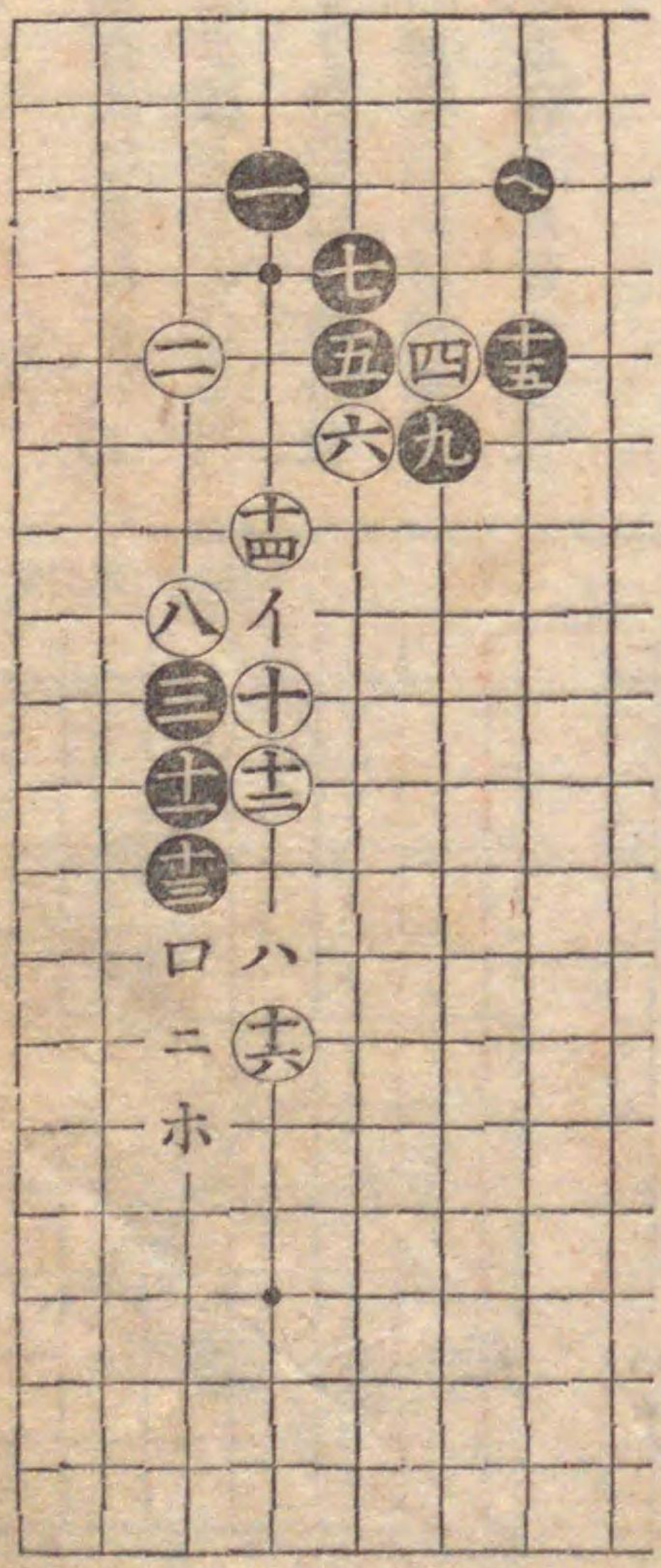
方面に多少の利を占めて居るかはり、三の一子は少からぬ迫害を蒙つて居るからである。

白十二の手で(イ)の點を堅固に粘り、黒若し十五と白を抱れば(ロ)若くは(ハ)の點から黒を攻る、若又黒が十五と白を抱へず(ニ)の點に二間拓したならば、白は十五の點に立つがよい、本圖の様に白が更に十二と押すも前説を一步進めたに過ぎない、即黒が十五と打てば(ニ)若くは十六から攻る、又黒が(ホ)と二間に備へれば白は十五の點に立ち黒亦⑰と備へる順序である。



(第三十一圖)

(第三十二圖)



(第三十三圖)



黒五ヲ手扱シ  
シ三ヨリ二間ニ  
拓クイテ得

黒五ヲ手扱シ  
白ト来々時  
ろト尖頂ステ  
活ハナクテ

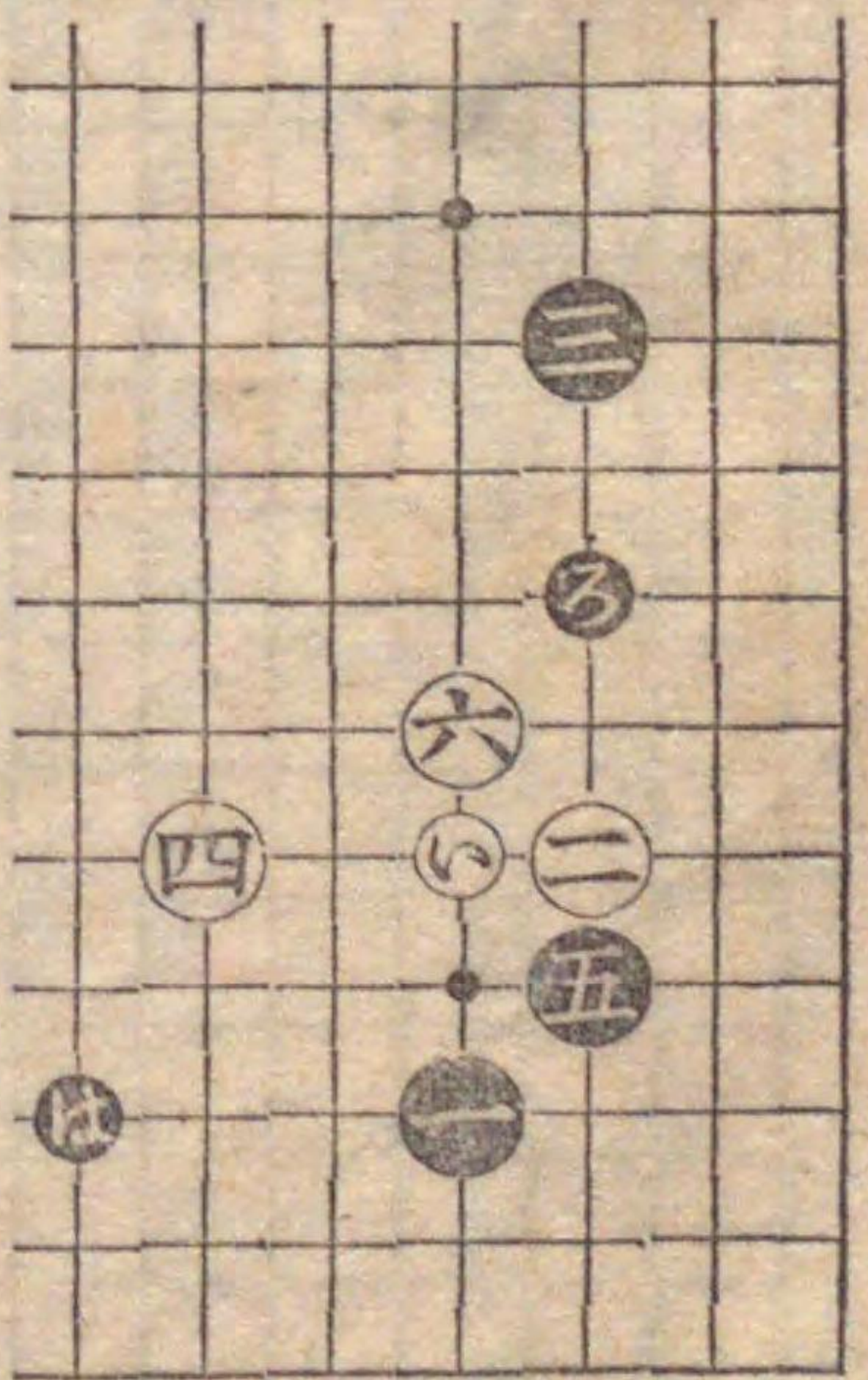
「手 扱」

○(第二十四圖) 黒五の手を必ず應せねばならぬといふ事はない、他に重大なる場所があれば手扱しても差支はない、「或は三の一子から(ハ)と二間する」要は手扱のため受る損害と手扱して得た利益との度合の比較問題である、次に白が⊙と来た時黒は⊙と尖頂けておけば活は充分である。

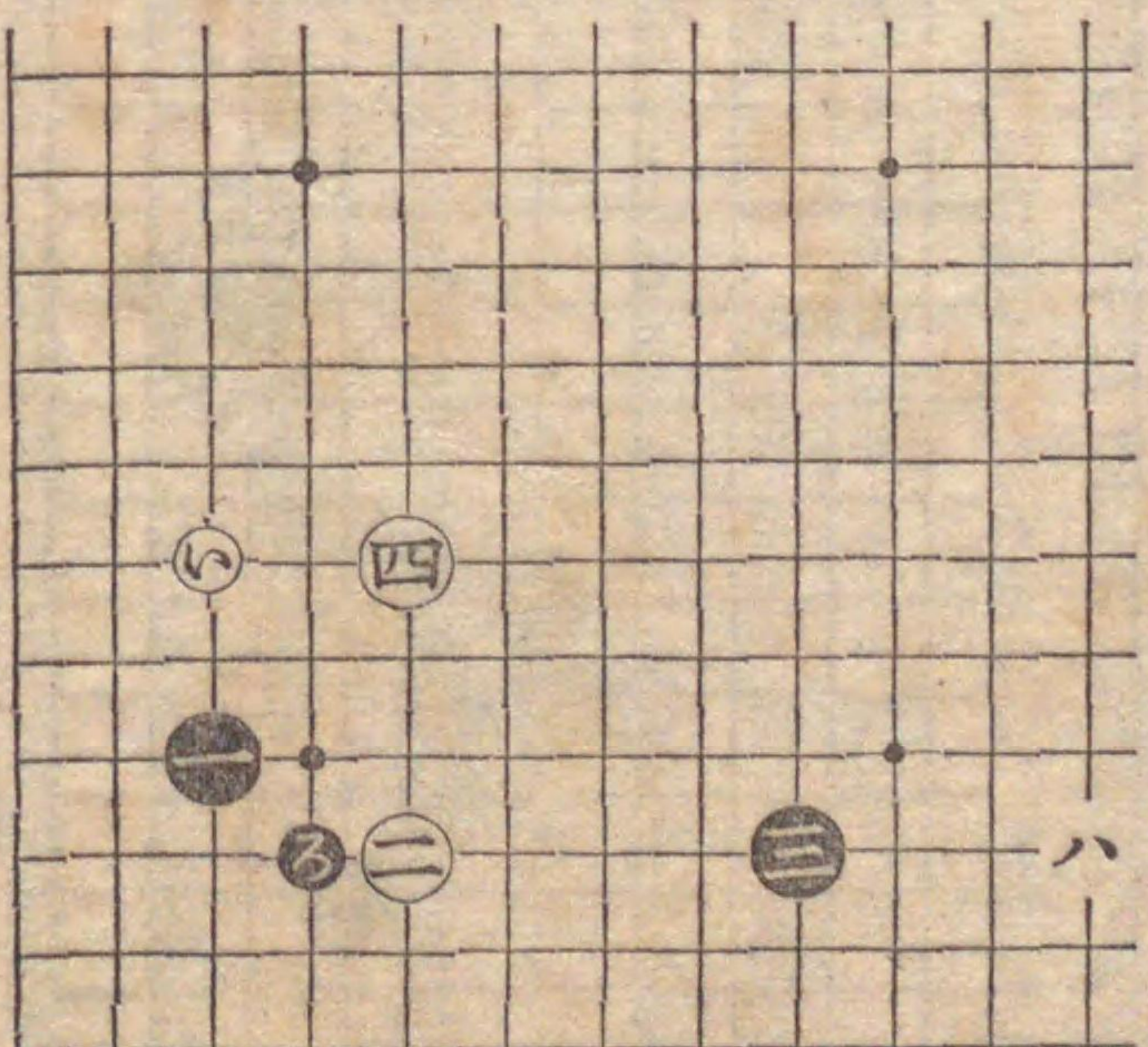
△(質問第二圖) 問ふ黒が五の手で尖頂けた時白が六と尖んだ應手を或る定石集にて見たる事あり是は⊙の點に行る手を多少働かしたもなりや如何。又次に黒の着手如何。

○答 白六の尖は悪手である、一方左の黒に感じを與へず又、右の黒から⊙の飛を利かされる不利もある、黒は平然として⊙と二間に拓いてをればよい、相手になつて行くと却つて白をして其の過を補はしめる様な結果になる。

(圖二第問質)



(圖四十三第)

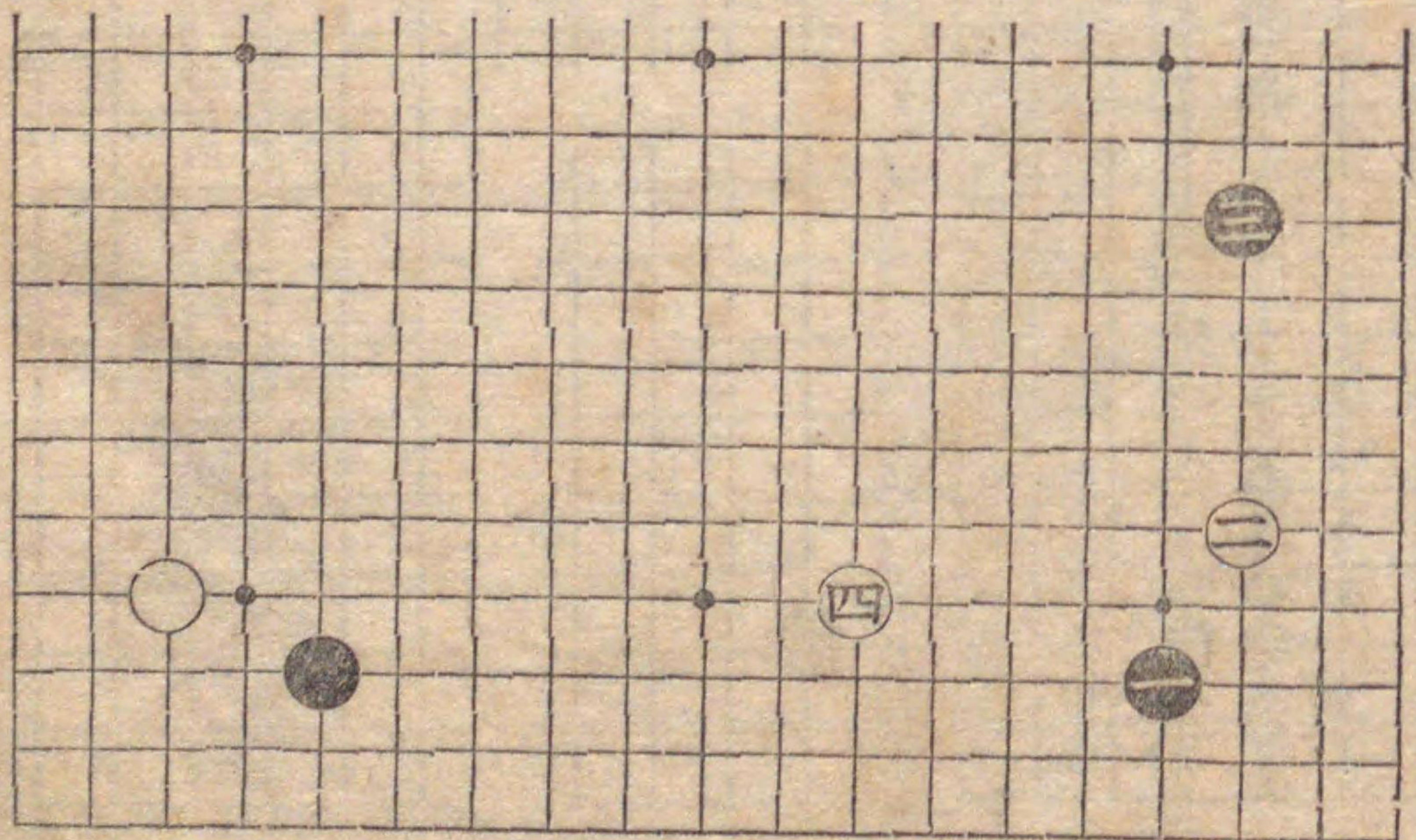


「高三間」

○(第二十五圖) 是は別に新定石といふのではないが、此の四の手が白二を基點として四路を隔てた斜走の形であるから、從來大々々斜走など、稱して居るが少し窮した命名である、定石としての系統から言ふと斜走掛にも屬し夾返しにも屬して居る、其で這回新に命名して「高三間」と稱する事とした、要するに三間夾返しの一高路高い形である、只呼び易い名に隨うたといふまで、敢て六かしい理屈はないのである。

此の「高三間」は如何いふ時に主として用ゐられるか、單獨定石であるか又は場合定石であるかといふと、無論場合の定石である、例せば圖の如き左下隅方面の布石關係からして黒を夾攻める必要のある様な場合に行なふ定石である、此の四と打つ意味は少し複雑であるから次頁に於て詳解じやう。

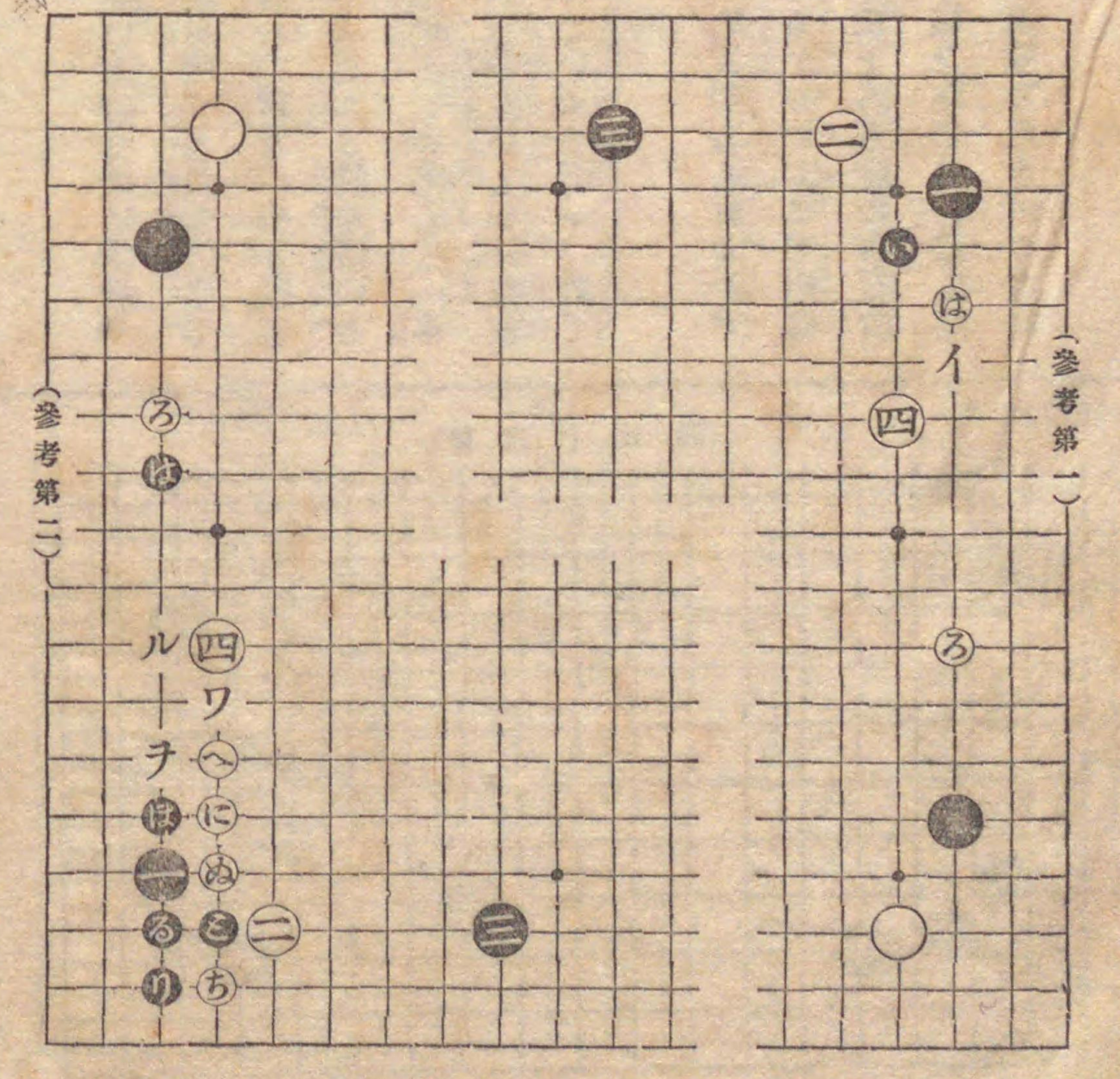
(圖五十三第)



先(五)定石

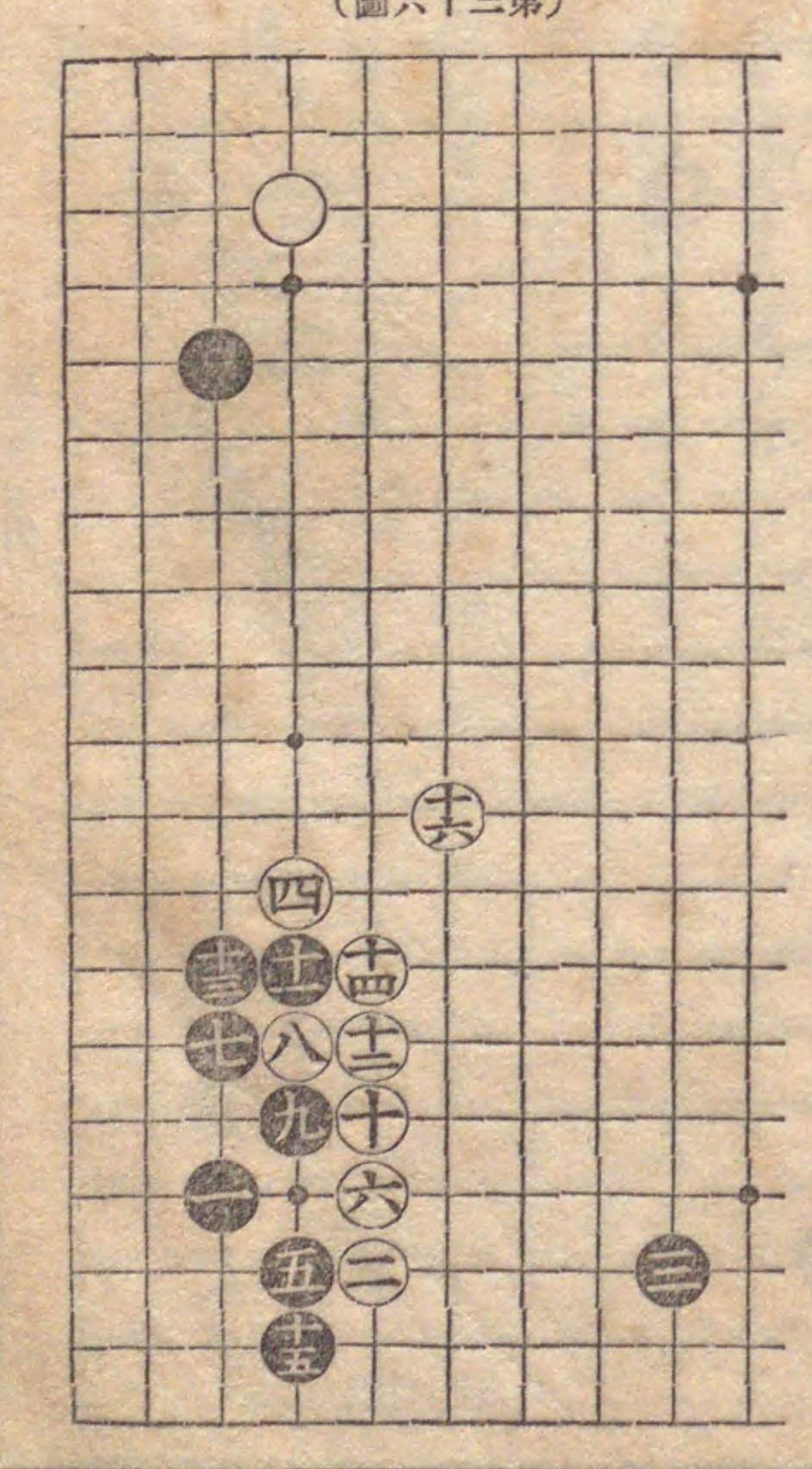


○(参考第一圖) 白が四と打つ  
 のには注文がある、其は黒に  
 と尖ませて②と二間夾にじやう  
 といふ策である、すると後に白  
 からは④と黒⑤の脇下に侵撃す  
 る好姿勢があるが、黒一、③の  
 尖から(イ)に歩を進めるのは狭  
 くて頗る拙い、即ち白四の時次  
 で黒が⑥と尖んで呉れ、ば白に  
 取つては申分のない形になる。  
 ○(参考第二圖) 然し黒が必し  
 も白の注文通り来るものとは限  
 らぬ、白四の時黒が若しも⑦の  
 邊に拓いて来たならば白は如何  
 處するか、其の時白は一を隅に  
 封鎖する方針で⑧と掛け、黒⑨  
 と行び白⑩の時、黒⑪と尖み頂  
 け、白⑫と緯ね、黒⑬と抑へ、



白⑫と極めつけると粘がせる手  
 順になるが、此く運んぢ結果か  
 ら見ると白四が(ル)の點「即一  
 路低き三間夾返」にあるよりは、  
 此く一路高くある方が多少働い  
 て居る、本來はたどへ左上隅に  
 白から⑭と夾むに適當した圖の  
 如き布石があるとしても、白は  
 (ル)と三間夾返にして次で⑮と  
 二間夾とする方が堅固でよいの  
 であるが、只白の立場として些  
 少働いた手が打たれたいといふ意  
 の時に此く打つのである。  
 △「註」 白が四の手で(ル)と三  
 間夾返しの時に此の形が出来  
 たとすると黒は⑯の手で更に  
 一手(ヲ)と押し白も亦(ワ)と  
 行るのである。

(圖六十三第)

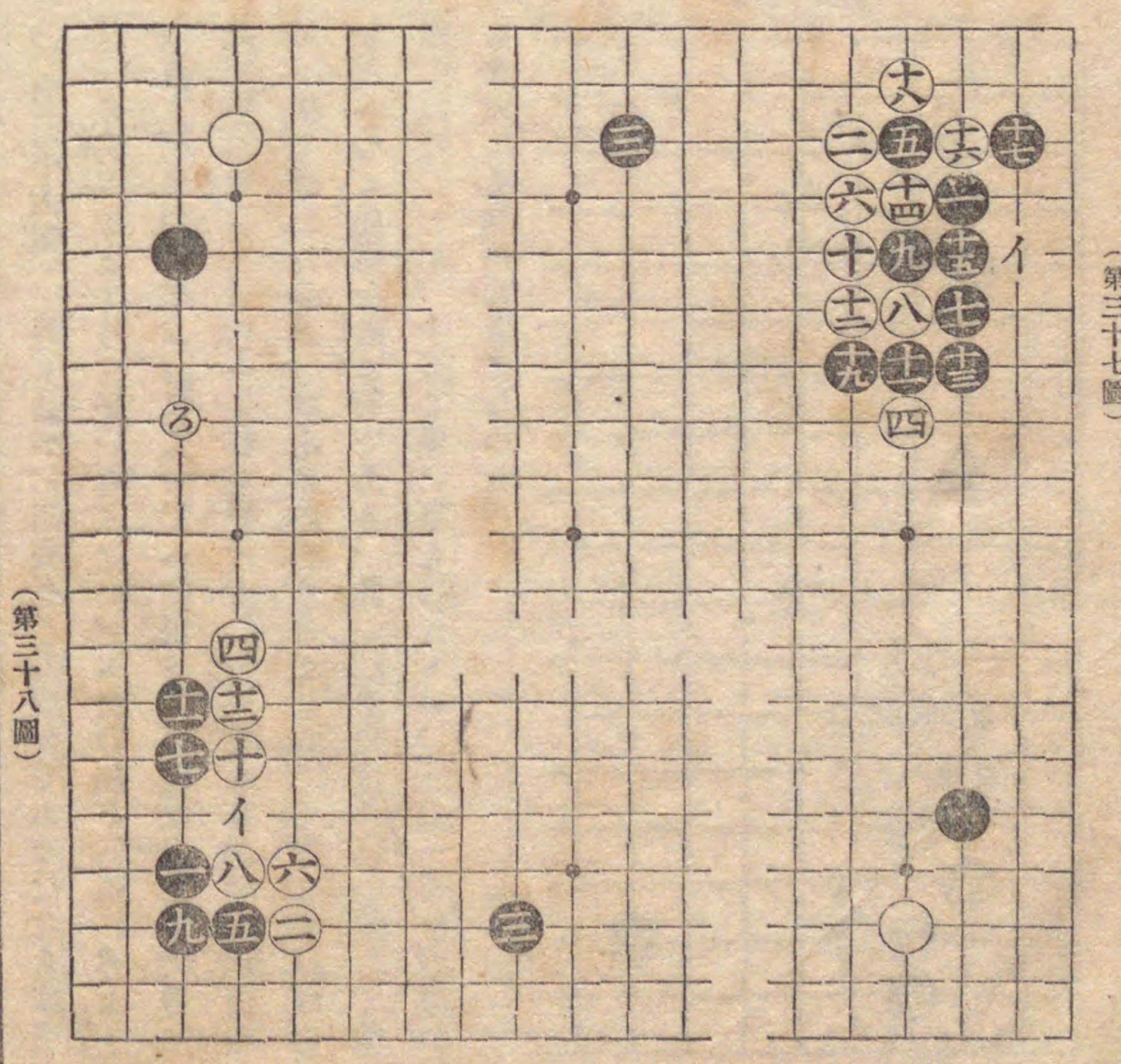


○(第三十六圖) 若も是が二間夾返の場合であつたならば黒  
 は九と尖出すより外に好い着はないが本圖の如く三間に然も一  
 路高く四と白が来た時に九の點へ尖出すのは緩慢である、乃で  
 此際黒の執る可き唯一の好着點は五の尖頂である、然らば白も  
 手を抜く譯に行かぬ、黒七の時白が八と接觸して来たのは感じ  
 を與へつゝ此處を治る考である、此の結果白は外部を壓して鞏  
 固にはなつたが、十五と黒に下られたため、三の二子を右方か  
 ら攻めても利かぬ事となつた。

(石 定 先 五)



○(第三十七圖) 白が本圖の様に十四とアテ、十六十八と打ち五の一子を截り提つたのは、前圖の様に黒に下られぬ用心である、且つ眼形も出来た、然しながら十九と突出され、最初に打つた四の一子が零に歸して右下方面に於ける活動は困難になつた、是は一得一失何とも致し方がない譯である白十四の時黒は十五と粘ぐ手で十六の點を粘がぬとは言へぬ、其時白は十五と九の一子を提り、黒が(イ)と盤つた時白は十九の點を抑へるのである、此の結果は、白に五の一子を與へなかつたから白の根據は出来なんだが、其の代り十



(第三十七圖)

(第三十八圖)

九の點を閉鎖されて居る、尙且つ此の形では黒からマサカ十八の點へ下るといふ愚形にも出られまい、即ち十六と粘ぐは黒の不利益である。

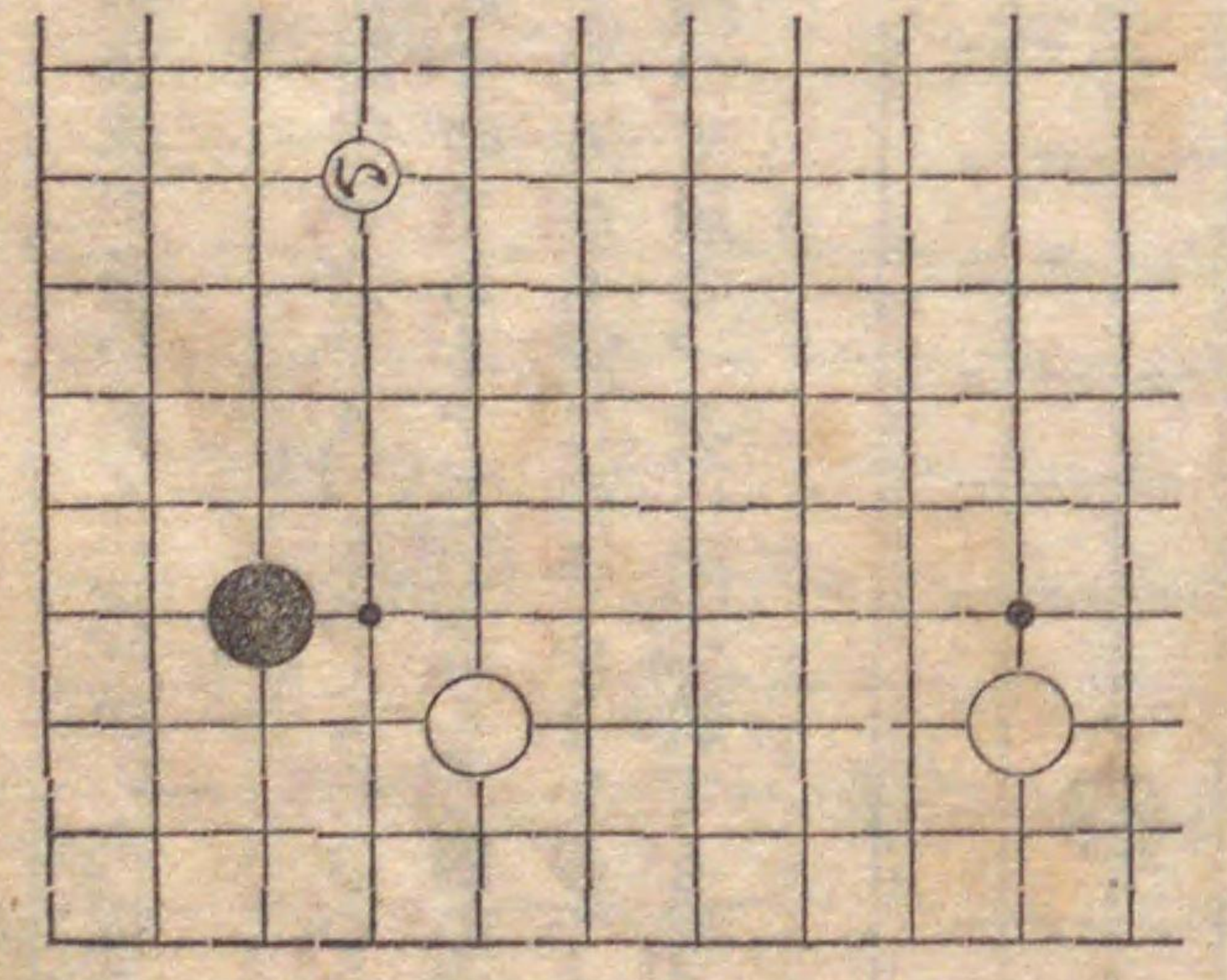
○(第三十八圖) 本圖白が八の手で此く極めつけて黒を九と粘がしたの、前圖迄の様に(イ)の點へ縛込ますまいといふ手段である。

以上第三十六圖、第三十七圖、第三十八圖、の三種は定石として數へられるのである、内第三十六圖と第三十七圖とは白が先手にはなるが、一方では得をし一方では少からず失うて居る、前二圖に比較すると此の第三十

八圖は、一方では隅の下りを防ぎ、一方では外部を封鎖して居て、白の勢力優秀なる點に於ては第一であるが、其の代り後手である。

乃で注意を要するのは、白が四と高く飛ぶ手に出る隣隅(左上)の場合は、黒を夾攻め得られる様な布石に出来て居る時に限るので、若も黒の締りになつて居るか或は白の勢力が十分である様な場合なれば(イ)の邊に白の石を運ばす必要がないから溯つて四と高く打つ事から無意味になるのである。

○(参考第三) 白が「高三間」に打つのは敢て三間夾の時には限らぬ、圖の如く星下邊に白の拓きのある場合でも用ゐられるのである。



(圖三第考參)

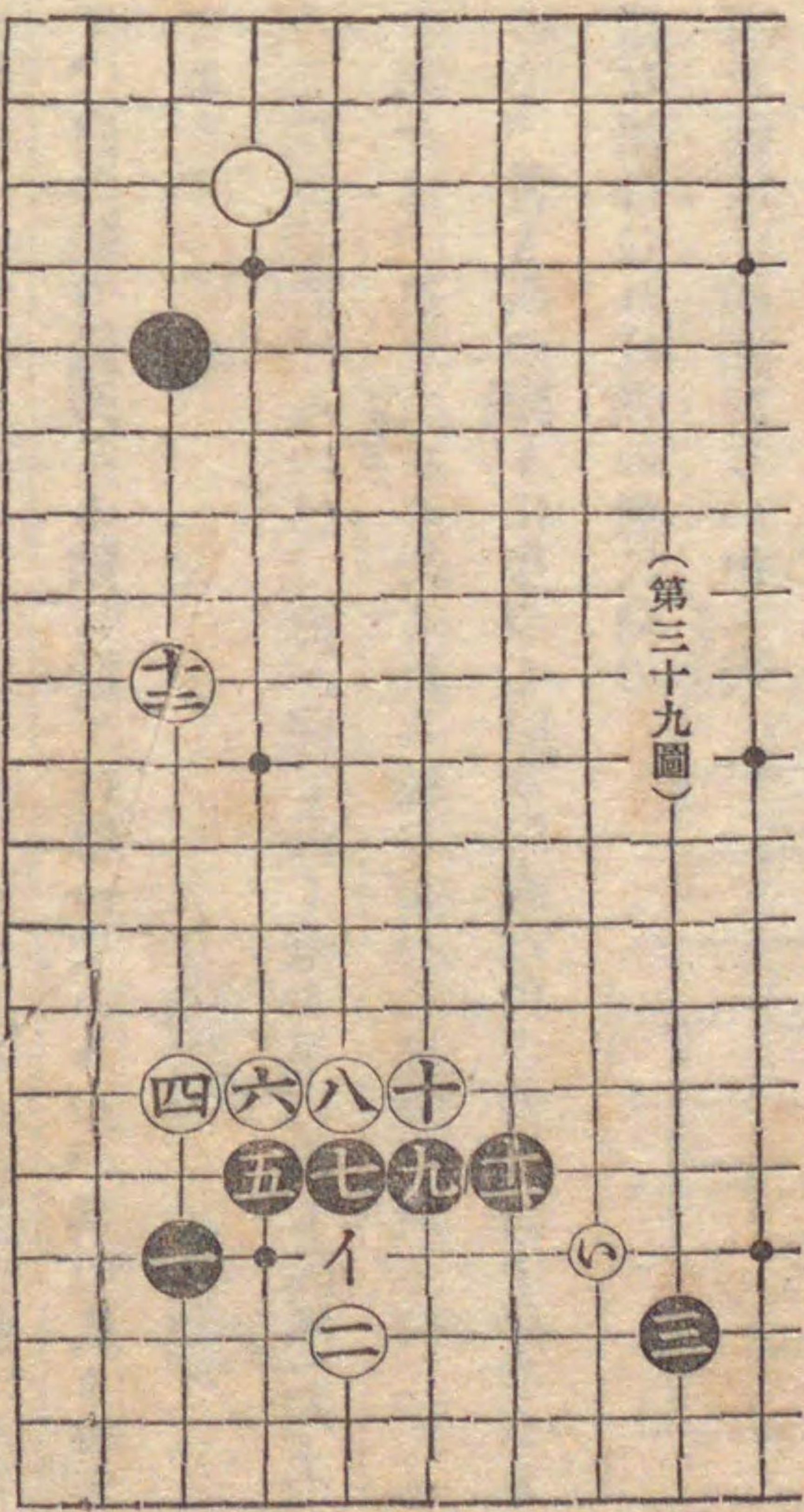
五)先定(石



一間夾返、二間夾返、及三間夾返し何れも皆二間夾の時と共通の意味が多いから二間夾の夾返の條を十分參看ありたし。

○(第三十九圖) 白が四と一間に夾返すのは、黒が五と尖んで來た時之を六、八、十、と押しつておいて次で左上隅へ拓かうといふ、其の拓き工合によつて四と夾返すのである、乃で若しも圖の様に左上隅に黒白の布石がある様な場合は十二と拓く手が同時に夾となるから誠に都合がよいのである、此くなつても尙白からは④と間に打つて此の黒地を削る手が残つて居る、次に隅に於ても尙多少の味が存じてをる、

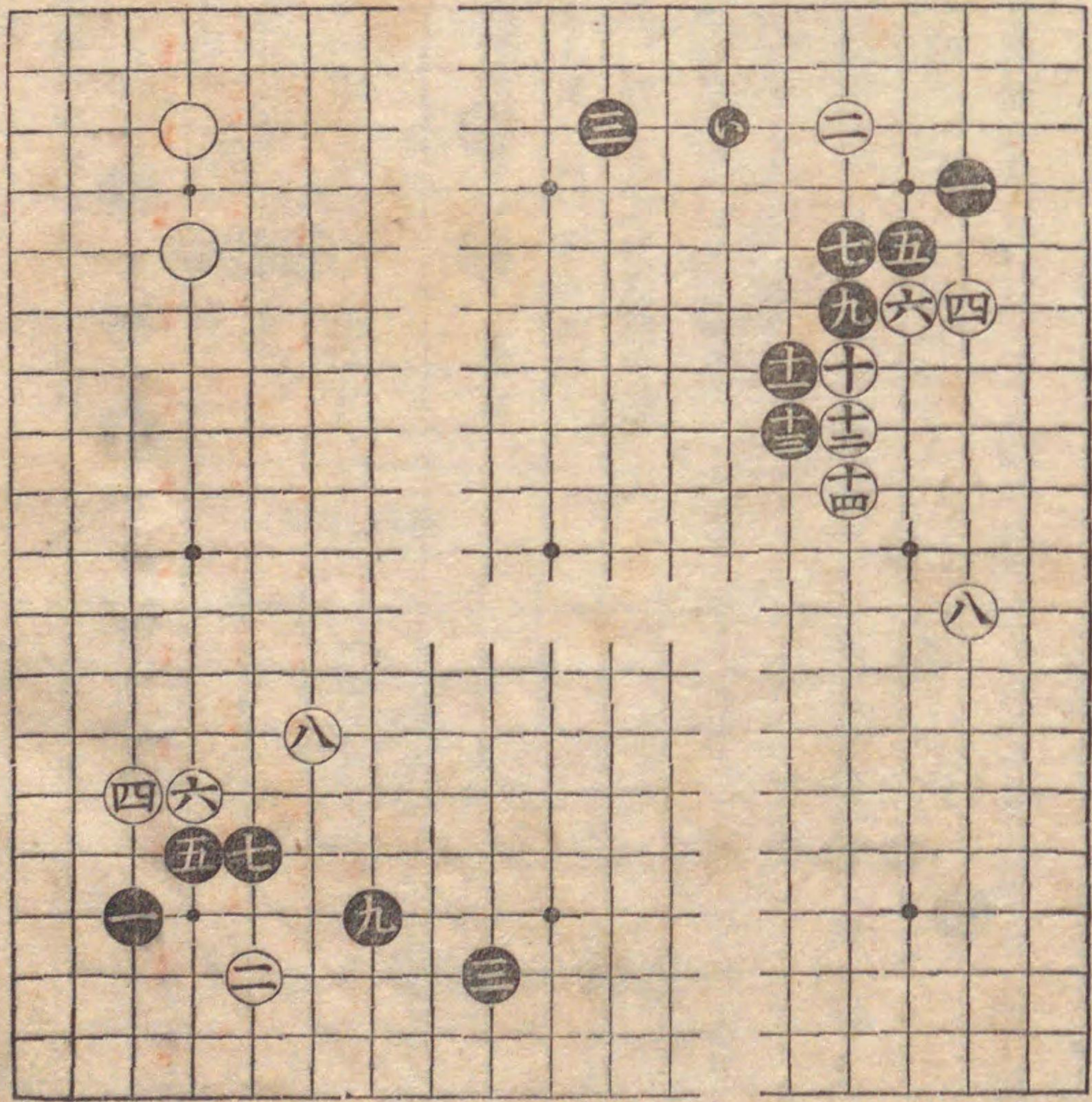
白が四と夾返す時には、多くは左上方面に向つて拓若くは詰の必要を感じた時と見てよい、が然し黒が五と尖めは拓をする手順になるも、若黒が(イ)の點に頂けるか或は六の點へ頭頂をされるのと拓く違がないのである、但し黒の手に就て言うると五と尖むのは普通の手であつて(イ)の頂及六の頂は稍變則の着手と言つてよい。



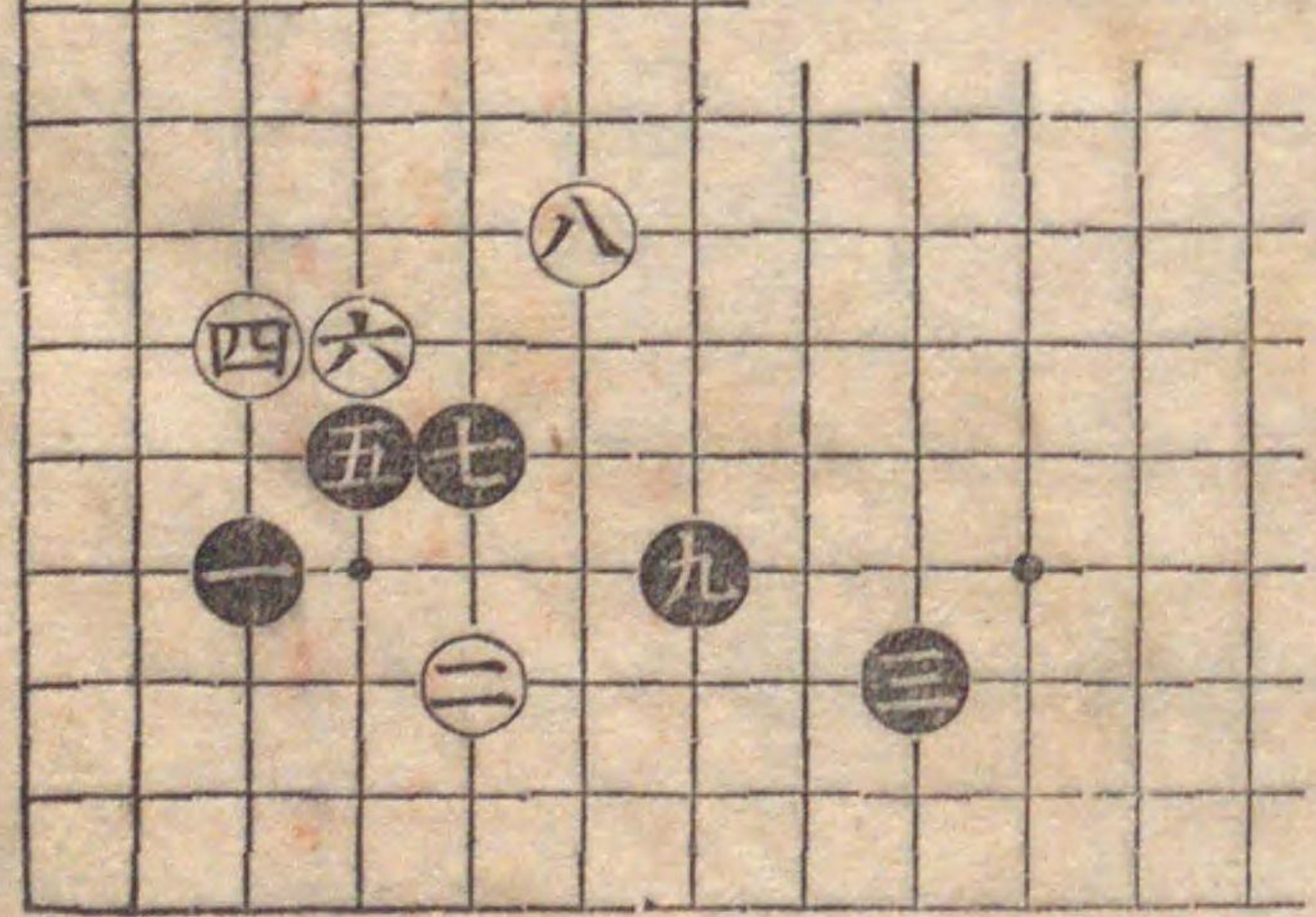
(第三十九圖)

○(第四十圖) 白が八の手で圖の通り拓いたならば黒は直に九と曲り十一、十三と壓するがよい、次で黒若十五の手で⑩と打てば茲に全く白二の死命を制する事になる。

○(第四十一圖) 白が八と斜走するのは多くは左上方面に白の布石のある様な場合である、此の時黒は九と打つて白二の出路を閉塞する手になる、然し此の形では九の方面が多少緩んでをるから隅に多少の味が残つてをる、即局勢の推移によつては白から隅へ着手して何等か此の味を利用される事が無いとは限らぬといふ事だけを覺悟しておけばよい。



(第四十圖)



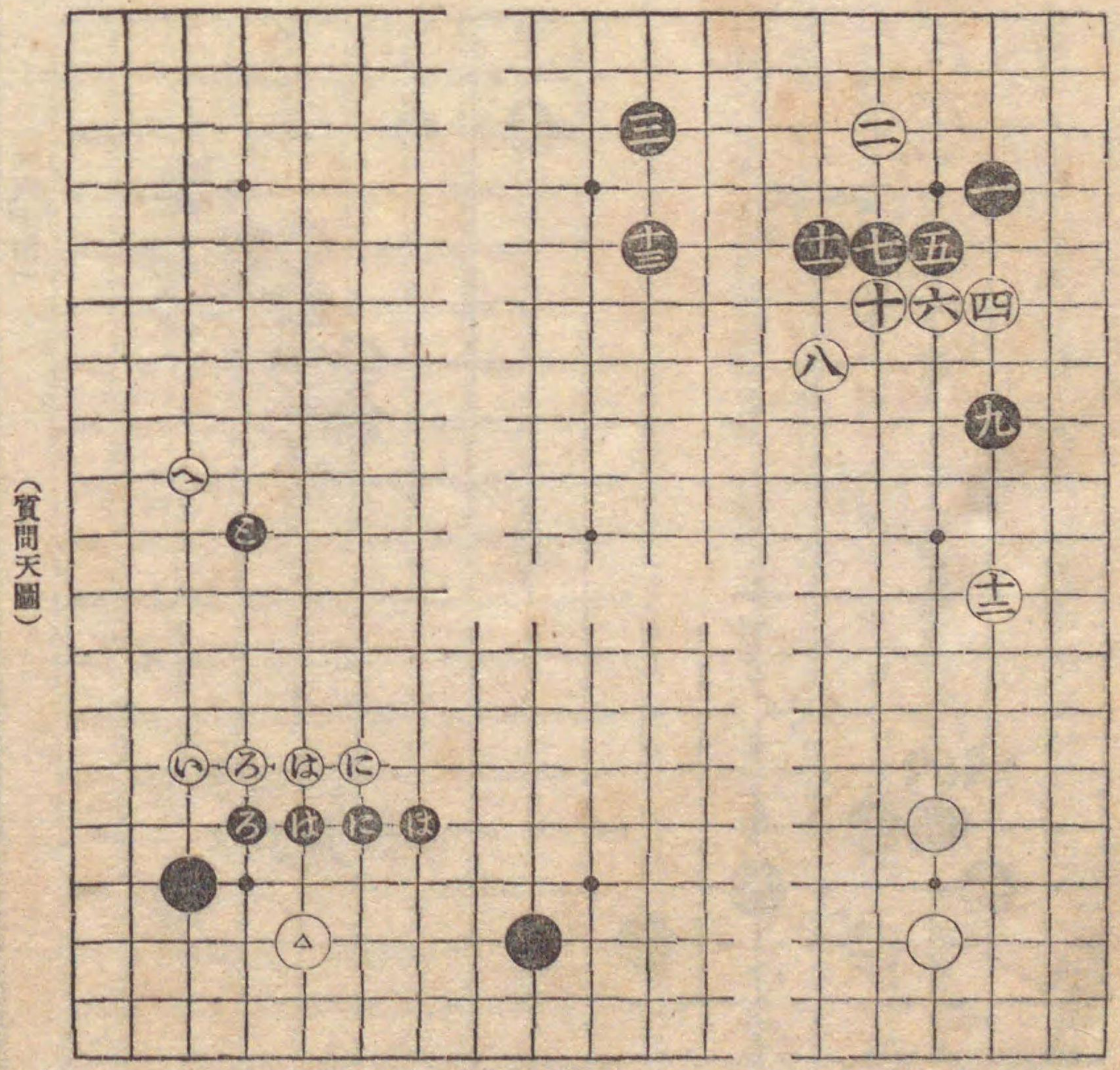
(第四十一圖)



(第四十二圖)

○(第四十二圖) 黒が九と打つのは白に十と押させて十一の行を自然的に打たいからである、茲で黒九の一子は犠牲に供した意であるから敢て逃げる必要はない、何となれば十の押しと十一の行とは白のため頗る不利の交換である即此の結果八と最初に斜走した一手が、今では尖みといふ如何にも働きのない手に歸して終うたからである、白の十二、黒の十三各その好着點である。

△「註」 九の一子は時機の如何をも顧みずに逸走を企て、は却つて不利を招くが、局勢の如何によつては一旦捨石をしておいても、相當に利用する事も出来る、決して空しく死ぬものではない。



(質問天圖)

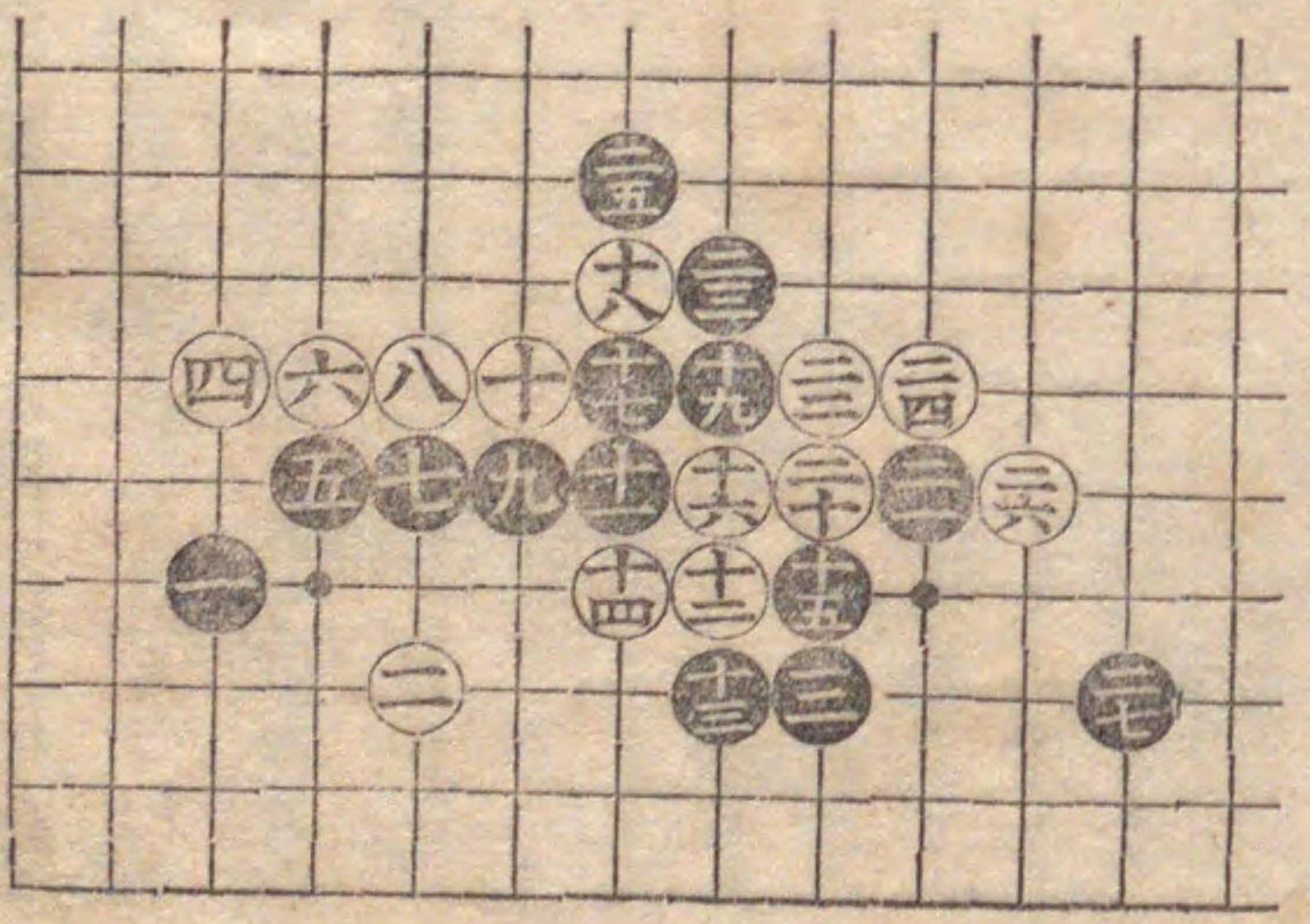
▲(質問天圖)(問)

已に白は△印の一子を犠牲として(すてるつもりで)①と夾返して打つたので且つ隣隅に廣い地が出来やうといふ希望がなければ元より②とは夾返さぬのであるから、此く夾返した以上は③よりは④、④よりは⑤と一子でも餘計に押しした方が利益ではないか。

○(答) ⑥方面が無事に廣い地域になる事が明かであれば其も好いが、若も⑦の肩から⑧と消されて低く這はされる始末になると、折角押した効力がないばかりでなく、押された黒は益々堅固になるとして見ると、押された方は確實なる利益が出来て、押しの方は左程の効力がないといふ様な結果にならぬとも言へぬ、であるから二子押しておくか三子押すか或は四子迄押すかといふ事は頗る考へものである。

○(第四十三圖) 左上方面に白何等かの備へがあつて四以下十迄押した白が非常な迫害を受けるといふ様な患のない時、且其と同時に右下方面に黒の大地城が出来る悞のない時に本圖の様に十と押しておいて直ちに十二と間から打つて出るのである、本圖黒二十五、白二十六の交換は申ぶんのない互角の手である。

(圖三十四第)



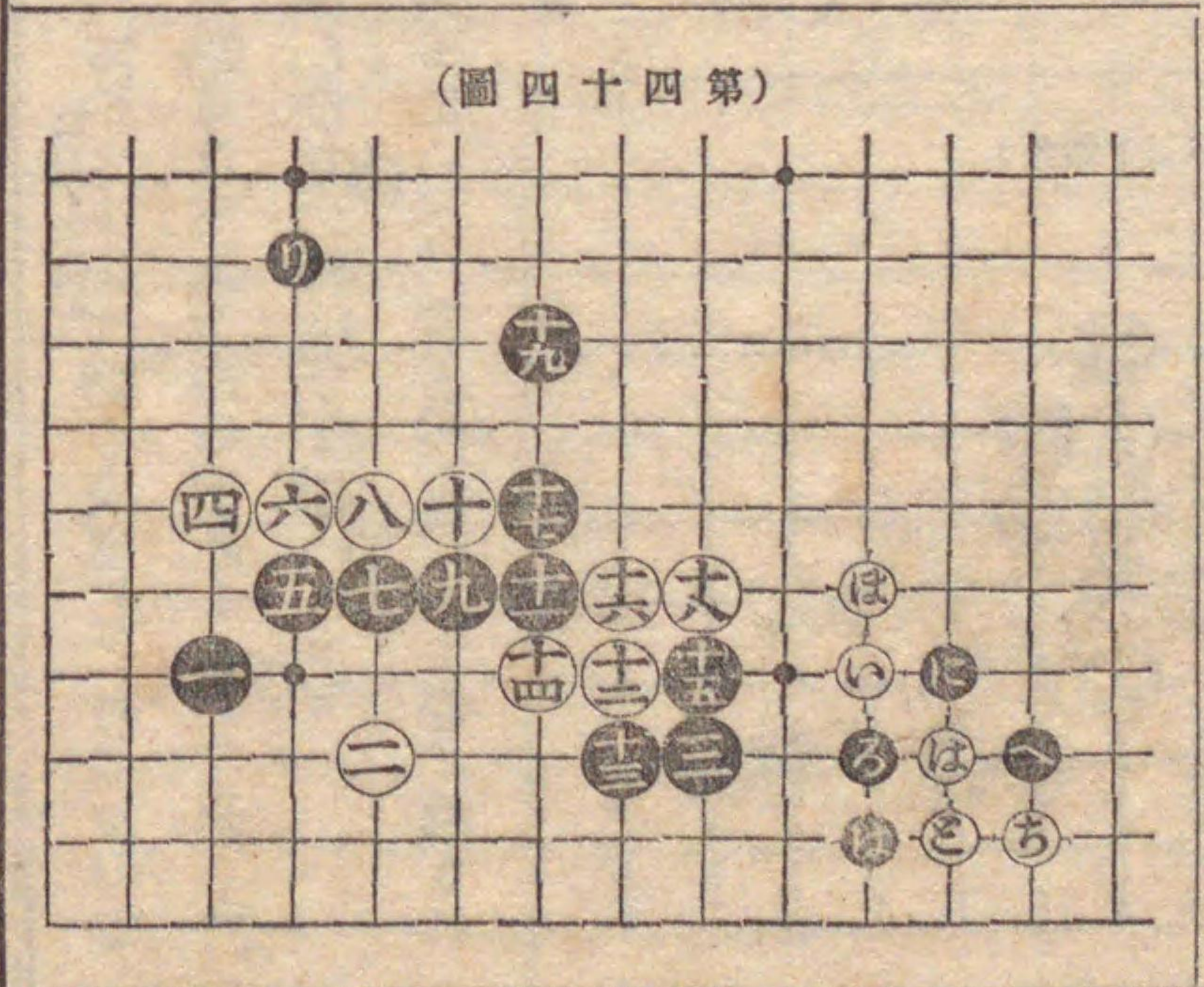
(石 定 先 五)



此應接法

○(第四十四圖) 黒十七の時、白は前圖の如く十八の手で黒十七の頭を緯ねず、本圖の様に十八と曲る事もある、其の時黒は十九と一間飛するがよい、次で白は④と斜走して三子の黒に迫るのが本理である、其時黒は⑤と頂けて打つ手と、⑥と斜走に外して打つ手とある、其は専ら右下隅布石の關係によるので、若も右下隅に黒の布石がある様な場合であれば、黒は⑦と頂けて手強く打つが、若も之に反して白の布石のある際は⑧の頂けは危険であるから、⑨と外して軽く凌いでおくのがよい、白⑩の時黒が⑪と頂けた後の應接は、白⑫と抑へ、黒⑬と截り、白⑭と立ち、黒⑮とアテ、白⑯と下り、黒⑰と押し、白⑱と曲る手順である。

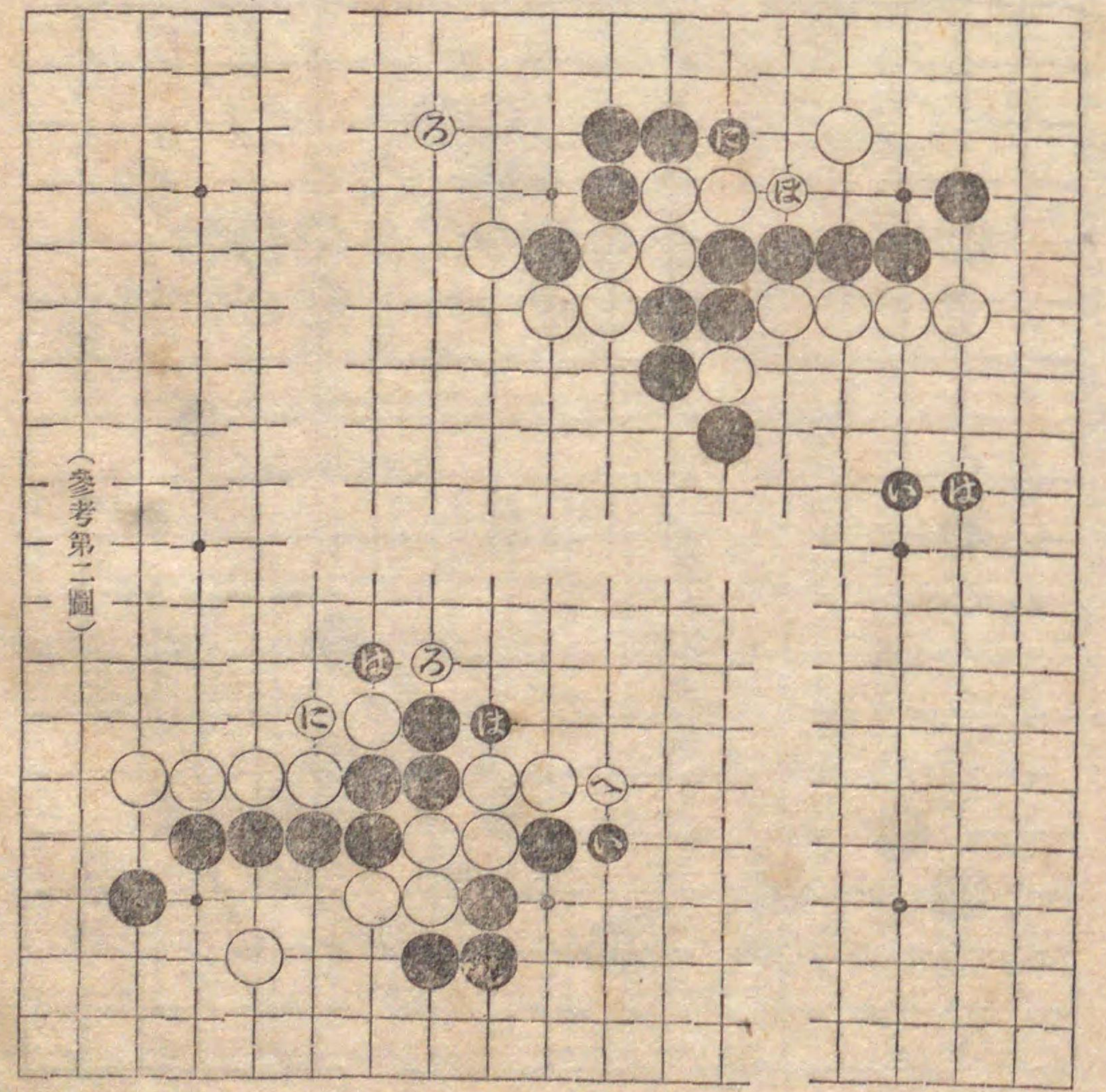
又白十八黒十九、白⑲の時黒は三子を捨て、左方の四子の白に⑳と迫る事もないとは言へぬ。  
 △(参考第一圖) 是は前第四十三圖第二十七手からの振替である、即黒が二十七と二間に拓いて白二十六の侵撃に備可き手を手抜して本圖の通り㉑と右方の白に迫つて来たならば白も亦轉じて㉒と彼が四子を包圍するがよい、次で黒は㉓と下つて此の攻撃手を確實にするのである。



(圖四十四第)

▲「註」 或る棋書に黒が十三と曲つて白に十四と行びさせた序に更に今一子㉑と利かして白に㉒と應じさせてある手順が載せてあるが、是は打つて終はぬ方がよい打たうと思へば何時でも打てるのである、例せば参考圖の様に振替つた結果から見ても、黒が圍中で活きやうといふのには㉑㉒の交換のない方が都合がよい。  
 △(参考第二圖) 黒が(前第四十三圖)の様に二十五と白一子に打撃を與へるがよい手であるが、其の二十五の手で若も本圖④の點へ行びる様な事があれば其(黒④)は悪手である、即圖の如き符號順に運び不利を招かねばならぬ。

(圖一第考參)



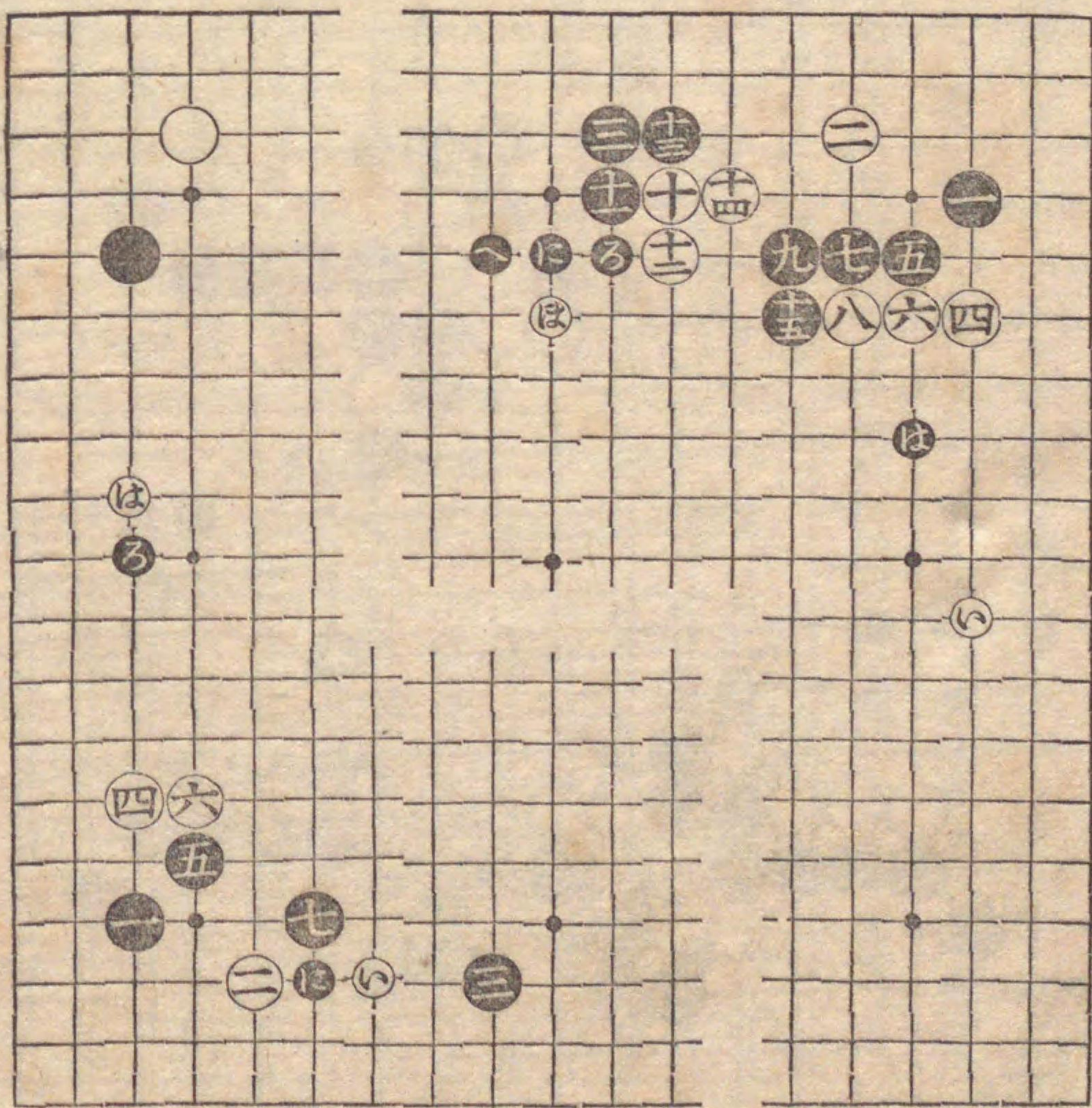
(參考第二圖)

五先定石



○(第四十五圖) 本圖は得失比較の爲茲に示したのであるが、四、六、八、と此く三子押して直に二の方面へ着手するよりは尙且第四十三圖の通りに十迄押してから着手する方がよい、即本圖は白稍不利の形である、白第十六の手で㊦と廣く拓くとすれば黒に㊧と押される手が頗る急である、サリトテ白が㊨の點に曲れば、黒に㊩と酷しく攻められる手もある、然しながら已に此かる形勢に立至つたとすれば、白は先づ十六の手で㊦の點に曲り黒に㊧と緯ね、白に㊨と緯返

(圖五十四第)



(第四十六圖)

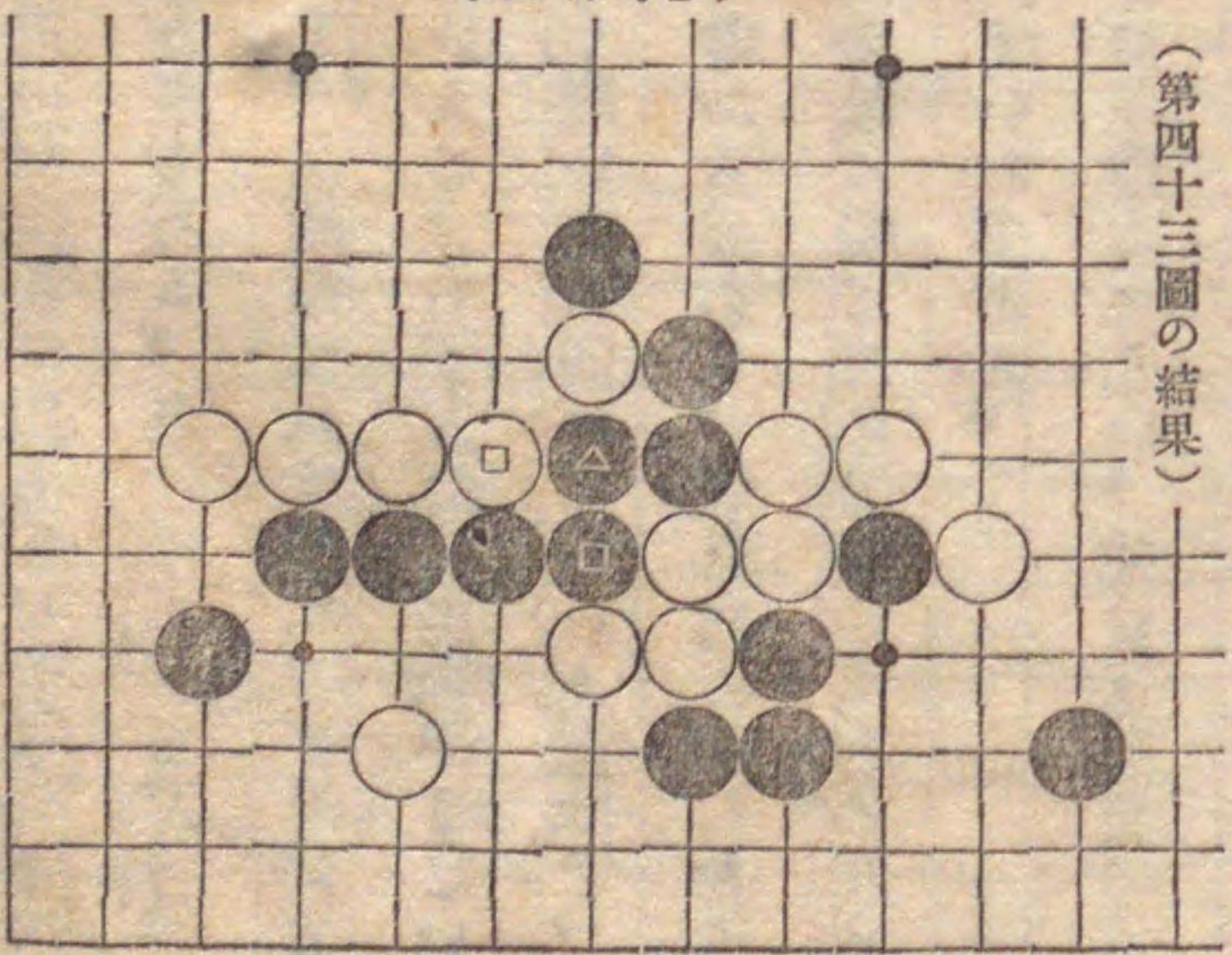
し、黒に㊦と曲る、次で白は左方の白を何とか處置するといふ位のものであらう。

○(第四十六圖) 白が六と押した時、黒は随つて行びず、白二の肩側に軽く七と打つのも好い手である若し此の際左上隅の布石が圖の如き場合であると假定すると白は八の手で㊨と打つが適當の着點である、其時黒は㊩と下つて二の二子を確實に擒ておくがよい若又白が黒七に應じて直ちに㊦と一間飛したならば黒は㊧と星下に四間拓して兼ねて四、六の黒に迫つておく可きである。

△「註」(參考第三圖) 前第四十五圖で説いた白が四、六、

八、十、と(第四十三圖の様に)四子押すのと第四十五圖の様に三子押すのとは四子押す方が白の利であると言うたが、之は本圖に示す様な極めて微細な理論を含んだ手で、棋家の所謂(手ワリの損得)と稱するものである即ち白が四子押して二の二子を逸出した結果に依つて見ると「黒が△印の處へ尖んだものを、白が□印の手で決めつけて黒に□印へ粘がしたと同じ理屈になつて居る」、之を第四十五圖の白三子の頭を直に曲つて抑へられてゐるのに比較すると確に四十三圖の方が利であるといふ道理になるのである。

(圖三第考參)



(第四十三圖の結果)

五)先定(石



○(第四十七圖) 白四と一間に夾返した時第三十九圖以下の通り黒一が尖んで出るのは普通の手であるが、場合によつては本圖以下に示す通り白四の頭へ五と頂げる事もある、之に頂引、と頂行、と白手抜、との三種がある、頂引とは本圖の様に黒が七と引くので、其時白は八と掛粘ぐ手と◎と堅く粘ぐ手とある、此の掛粘と堅粘とは何れだけの差があるかといふと、右下方面に出来やうといふ白の地が廣ければ白は八と掛粘にする、即ち八の一子を成る可く廣い方へ働かすといふ意味と、眼形の素を造つて廣い地を守る備へにじやうといふのとの二つの考からである、若し白の地にならうといふ方面が比較的窄ければ白は◎と堅固に粘ぐのがよい、次で黒は●と二の肩側から打つ手と●と一間する手とあるが、本來はモウ此の所は何とも打たぬ方がよいのである。

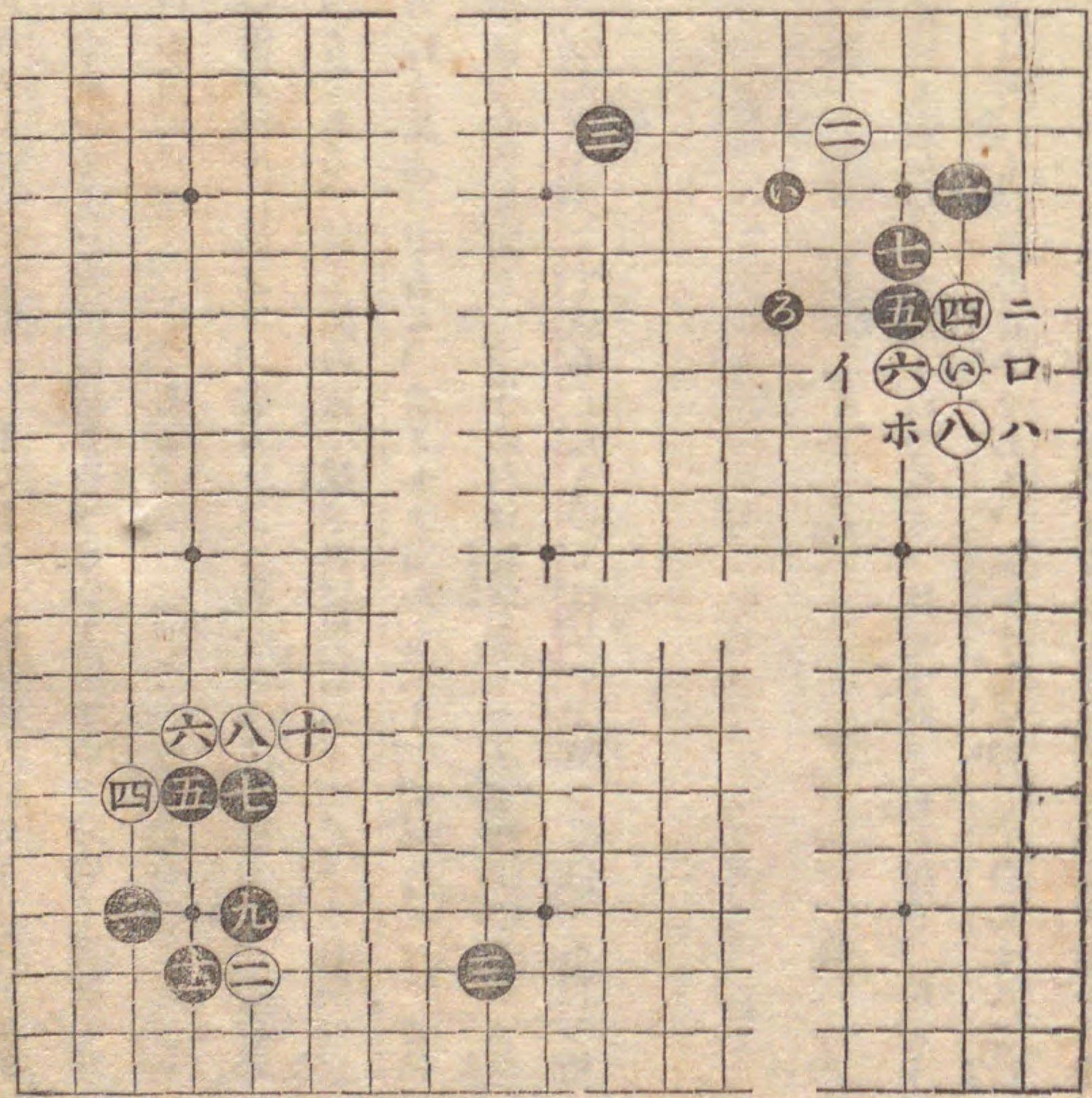
△「註」 打たすにおくのは時機を見るのである此の時機といふのが一番六ヶしい、茲は三間夾であつて弛んで居るから●と上から圍うた處が中々捕れる譯ではない、其で局勢の如何によつては隅から尖頂けて打つのを便とする場合もあらう、一向に局勢の推移によつて所有機會を利用するといふ事は布石法及實戰欄によりて研究するの外はない。

(又右下の模様によつては、白八と掛粘ぐ手で(イ)と行び黒に◎の點を截らして白は八と抑へ黒(ロ)と下り白(ハ)と抑へ、黒(ニ)と曲る打方もないとは言へぬが、然し是には(ホ)の截

味もあつて餘り感心した打方ではない、無論定石として數へておく値はない)

○(第四十八圖) 黒七が此く頂行、に出たのは上面に勢力を加へやうといふ策である、白が六、八、十、と何處迄も押すのは前の第三十九圖と同意である、黒は九の頂、十一の抑へによつて隅二の味を全く殺いで終つた、其の代り白十の一子が鋒を先きへ出して居るだけに黒の厚壯も幾分減じる譯である。

(圖七十四第)



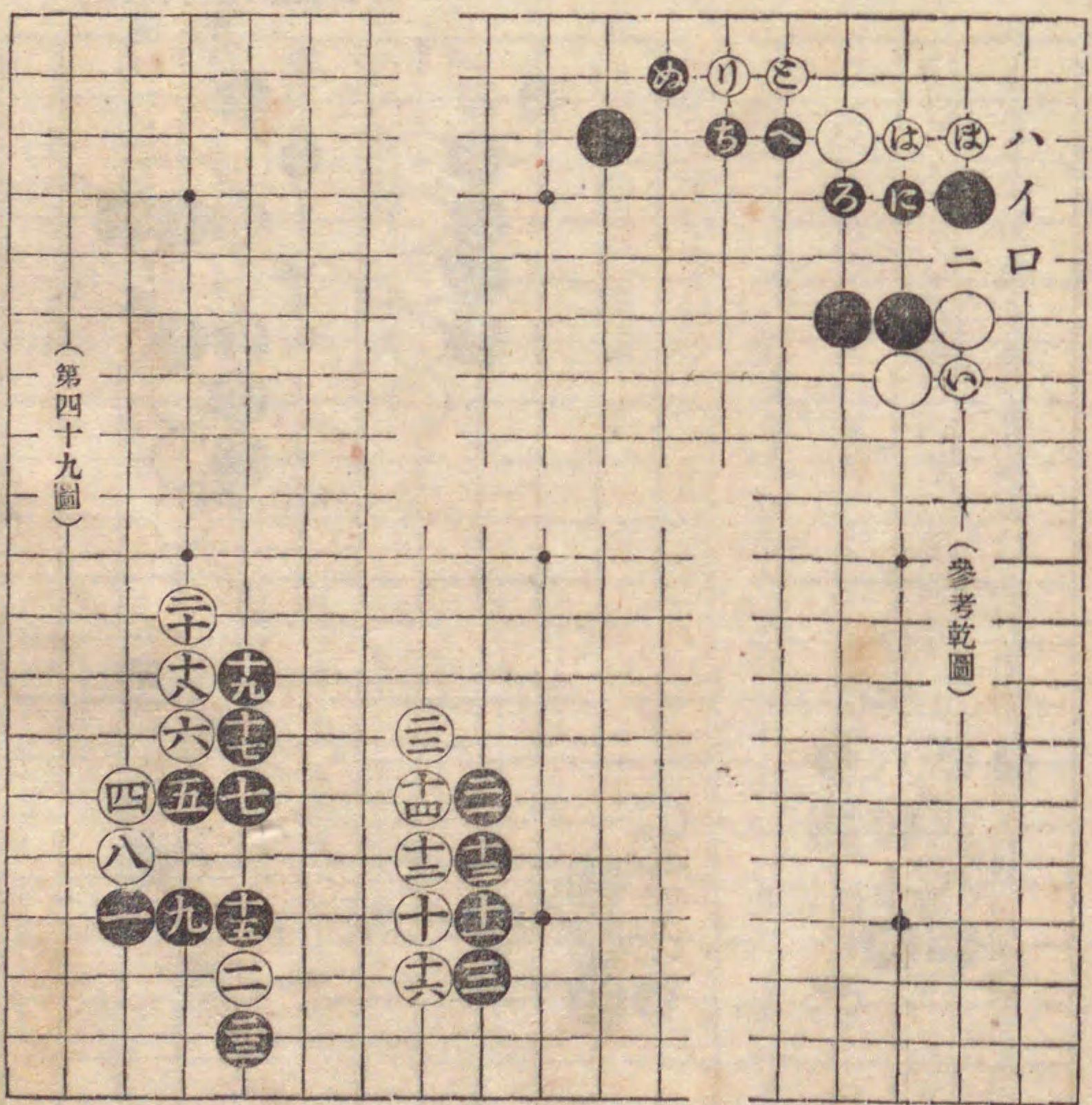
(第四十八圖)



△(参考乾圖) 之は黒頂行の後白が八の手で㊦と堅く粘いだ手である、勿論此の㊦の手は理屈がある、其は此の截を防ぎ之を堅固にしておいて隅を無事に活きやうといふ策なので即以下符號の順に㊤から㊦迄運んで隅白活となり白の目的は達したのである、然しながら今茲に之を参考圖に加へて定石に敷へないのは、白㊤の一着が餘りに姑息で、有るまじき着手であり、随つて隅の白活とは言ふものゝ何處迄も味が悪いからである、即ち此の處手扱すれば黒に(イ)と下られ隅は後手活で且つ其の影響は三子の白の方にも及ぶのである、サリトテ白から(イ)と綽ね(ハ)と粘いでは、黒の勢力が(ロ)(ニ)と加はつた結果同じく三子の白は裾明の「ダメツマリ」といふ拙い形になるのである、要するに白㊤の策戦は決して感心したものではない、随つて白大不利の結果に陥つたのである。

○(第四十九圖) 黒五、七と頂行をするに當つては四、六方面の左側に白地が出来る事は先決問題となつて居る随つて白は自己の地といふ事に顧慮する所はないから隅へ八と行出したので、此八の手は次で十と打て白二の方面を出やうといふ策を含んで居るのである、黒が十五と截を拒ぎ、白が十六と押へて左右の黒の連絡を妨げたのは何れも互角の着手である、黒が十七と押して白に十八と行さすのは普通は悪手として禁じられて居る手である、何故なれば打捨て、おいても白は何等か一着

の備をせねばならぬ處を十七と手順を與へて彼の缺點を補はしめ我はダメを走つたといふ道理になるから損である、然し今此の場合には前にも已に説いた通り白地の守備の出来てある所で強て白は十八、二十の着手を要せぬ所と假定した處であるから、黒は白のサマデ必要を感せぬ十八、二十の交換として十七、十九と勢力を加へ更に二十一と白を壓したのである、然る後二十三と打つて白二を夾んだ黒の着點は「テスデ」である。



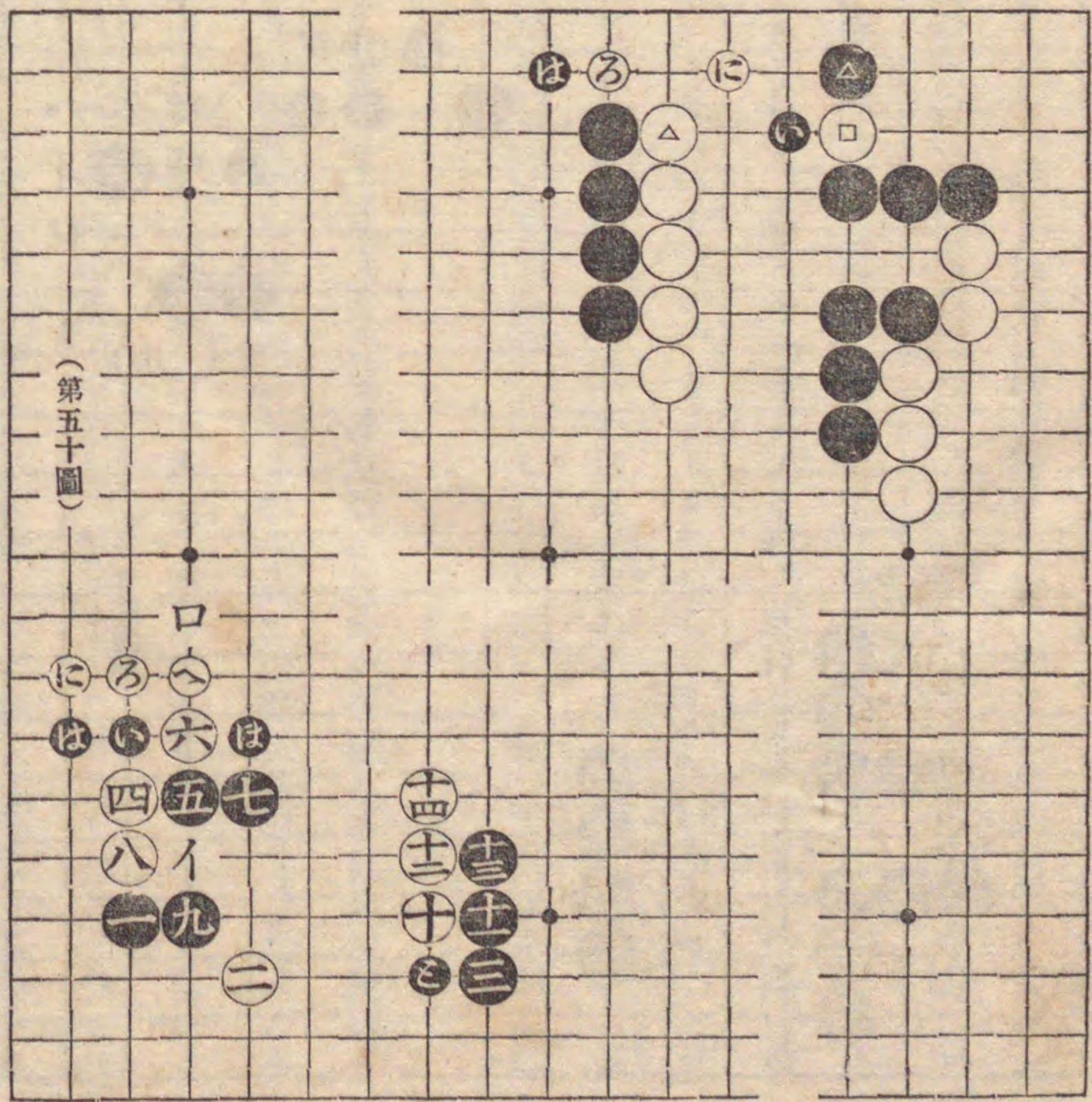
五)先定(石



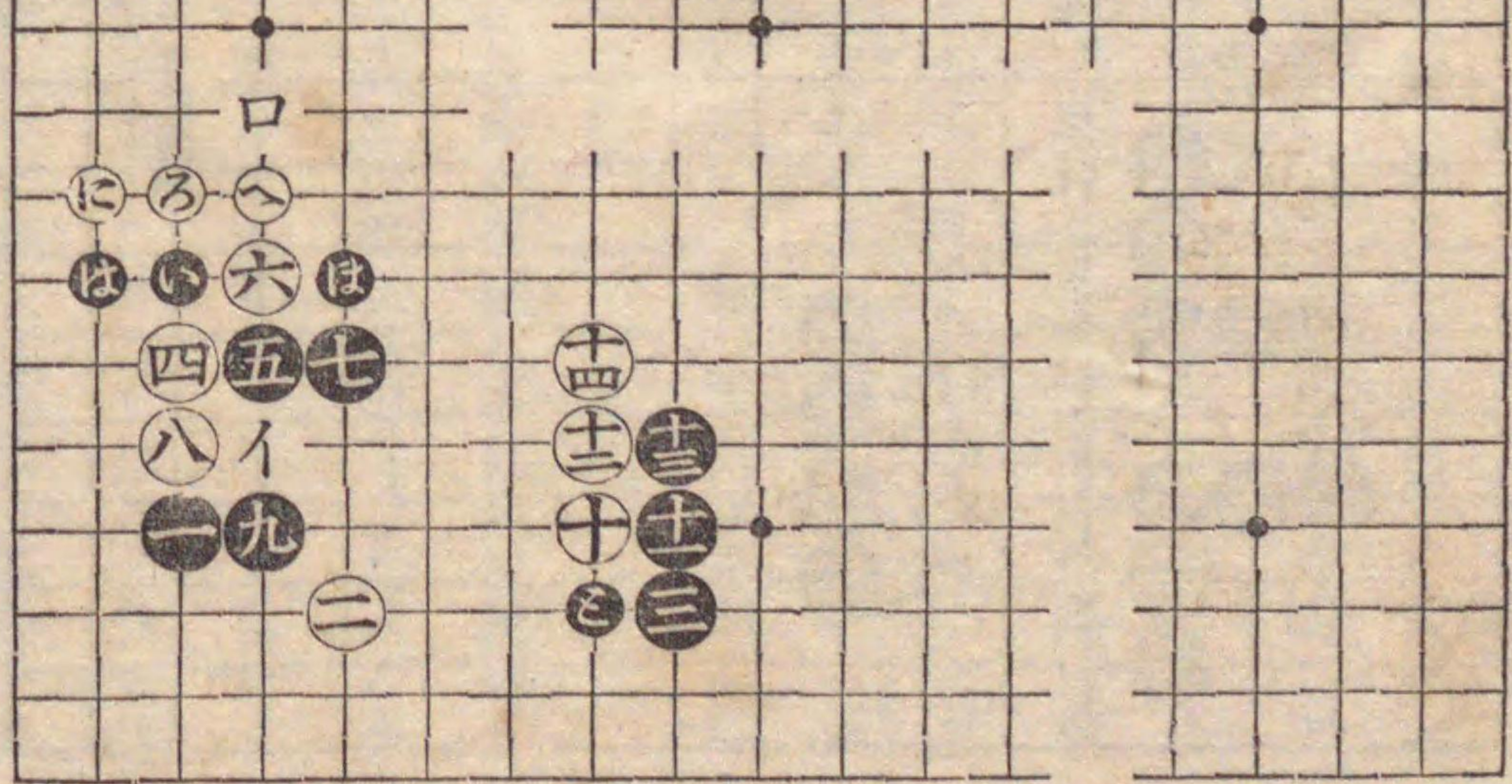
イ、出切  
防方法

○(第四十九圖の繼續圖) 前圖第二十三手即本圖の(△印黒)は何故着理であるか、白の△印が加はると此の隅の眼形は危くなる、即ち□印白が黒隅の眼形を破壊して逸出する惧がある、乃で黒は隅を防禦するため(△印黒)と打つたのであるが、此の手を以て●と上から縛ねた方が確實に(白一子)を擒にする事が出来て利益ではないかと考られるが、若し黒が(△印)へ夾む手で●と縛ると忽ち白に○の縛○の掛粘を利用されて其の影響は左方の黒に及ぶ事

(圖續繼の圖九十四第)

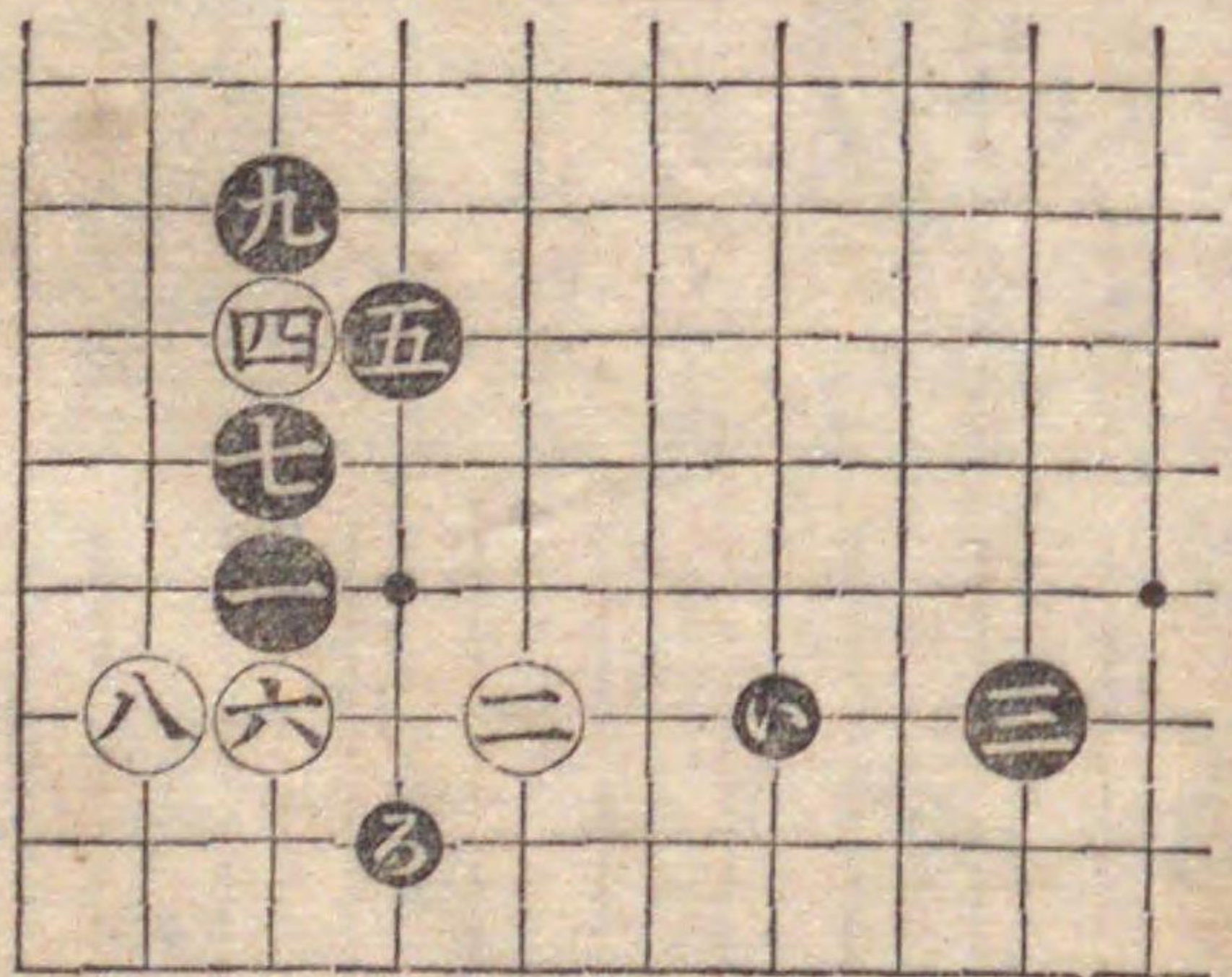


(第五十圖)



になる、此ういふ處は微細に注意を拂はねばならぬ。  
○(第五十圖) 前々圖黒が十七、十九と押すのは全く其の方面の白の地域の廣さ加減に關係する手である、何故なればあまり廣ければ、十七、十九と無造作に押して終ふのは惜しい本圖(ロ)の邊から酷しく攻る手が利くからである、然しあまり窄くしては又押しが利かぬのである、乃で着手の前によく其の廣狭を見て策を立てなくてはイケヌ、若も押しが利かぬ位窄ければ、黒は十五の手で●と截り、白○、黒●、白○、黒●、白○と手順をおうて(イ)の出截を拒いでおいて●と曲り三子の白の根據を淨かして之を攻める方がよいのである。  
○(第五十一圖) 本圖は白六が四の方を手抜して隅と振替つたのである本圖の様な結果になると、最初白が四と一間に夾返した策は全く破れて終うた譯になる、黒七の手で九の方から抑へる事も出来るが複雑になる恐があるから此く打つて終ふ方が極めて分り易い、後に黒が●と一間に詰ると●に置く理が出来から白は備へをせねばならぬ。

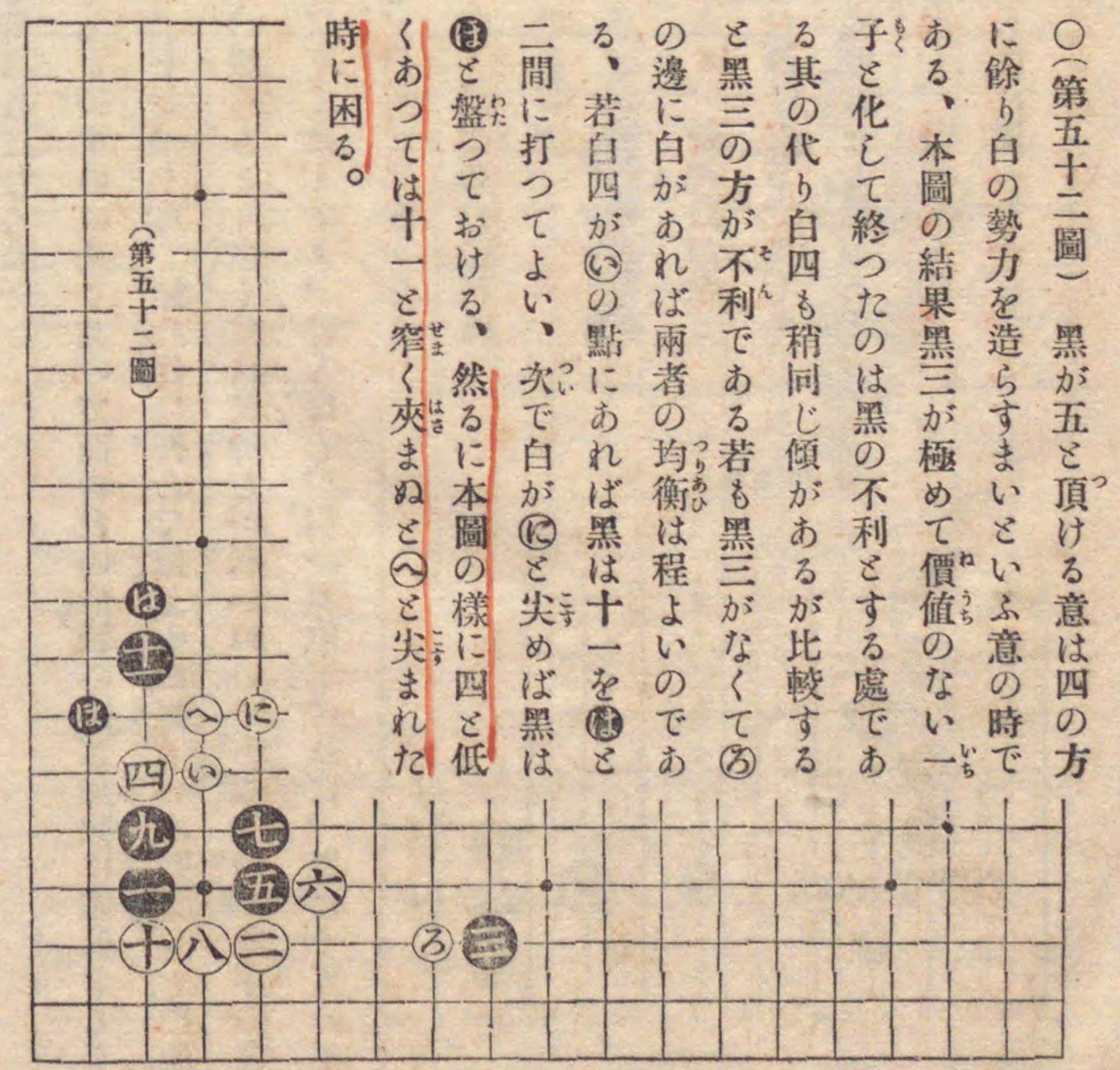
(圖一十五第)





△(一間夾返し)の結論)  
 要するに一間夾返しの手は其の夾返した方面に白地の廣いものが出来る見込のある場合の手であるから、黒が之に對しても注意を拂う可きは、其の廣サの度合といふ事にあるので、若其の白地が一着の拓き(備)を要する様な形の時は、黒は五の手で尖む可きである。

又、白は黒に應接した其の儘で白の地になる様な場合は、黒は五の手を四の頭へ頂けて打つがよい。



「二間夾返」

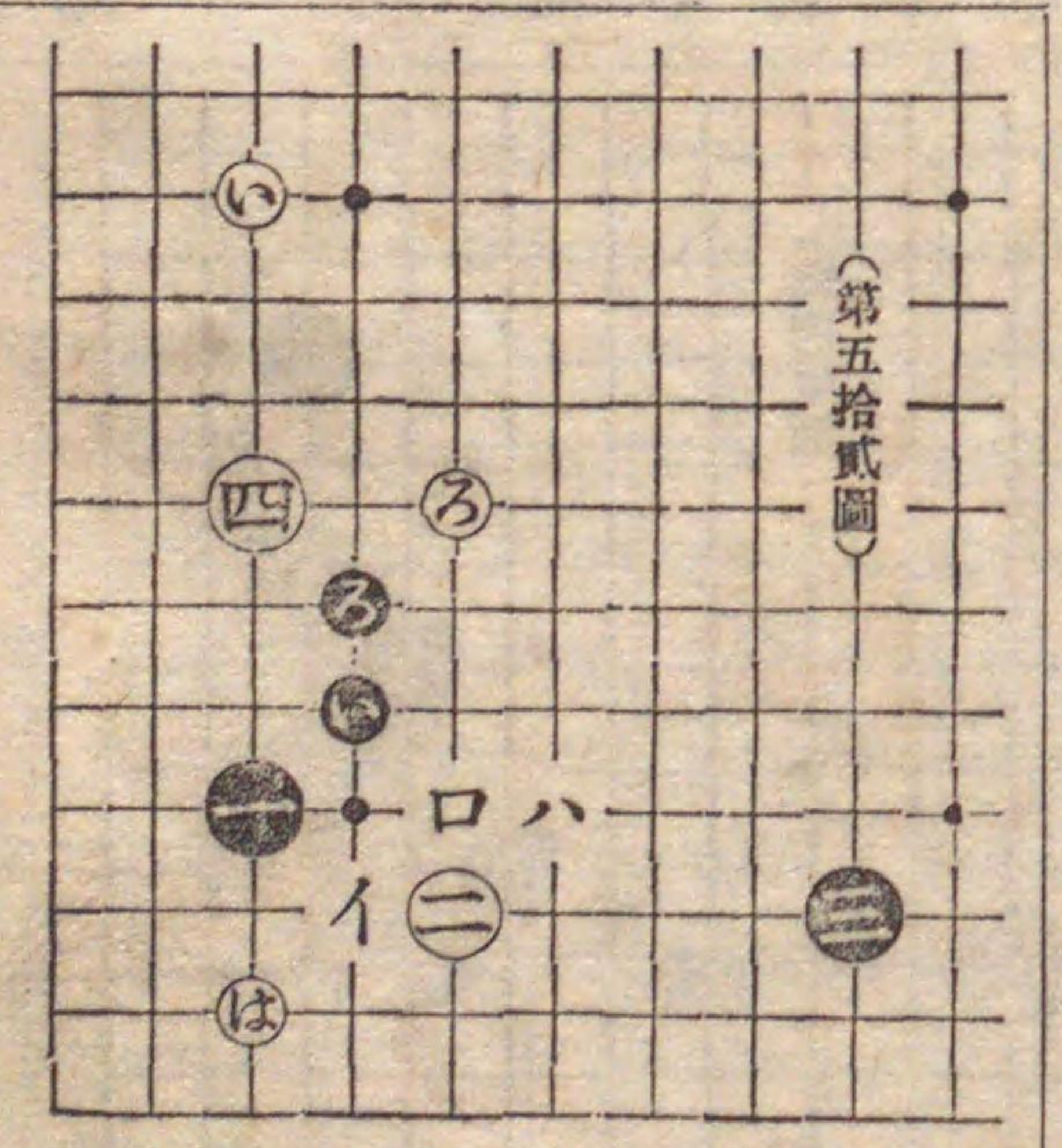
二間夾返ス  
主七日

○(第五拾貳圖) 黒三に對する白四を指して二間夾返しと稱するのである。

「註」 夾返すといふ主旨から言へは一間夾の時も二間夾の時も又此の三間夾の時も大抵共通の意味であるが、然し其の間に争はれぬ差點のある事を擧げると、一間夾の場合であれば區域が狭いから一旦捨てた二の一子に殘る味も少なく、又已に捨てた二を強て再び活動さうとするにも及ばぬ、といふ傾がある、然るに之が二間夾の場合であると、一間夾に比較して稍餘地もあるから隅に殘る味も随つて多い、更に之を三間夾即本圖の場合に就て見ると、如何に圍はれても白二の一子は黒の圈内に悠々として活きる事が出来る、之が三種の夾の上に於ける著しき差點である。

白に四と夾返された時黒の應手は(5)と斜走する事もあ  
 るが先づ(6)と尖むのが普通である、(ロ)と頂け或は(イ)と尖頂ける手は斷じて無し、

黒に(7)と尖まれた時白は(8)と二間に拓いて別に地歩を占めておくがよい、又場合によつては(9)と單關する手若くは(10)と隅へ走る手もある、然し(ハ)と尖は古風で面白くない。



白四夾返ニ對  
スル黒ノ應手

黒ハノ安ニ對  
スル白ノ應手



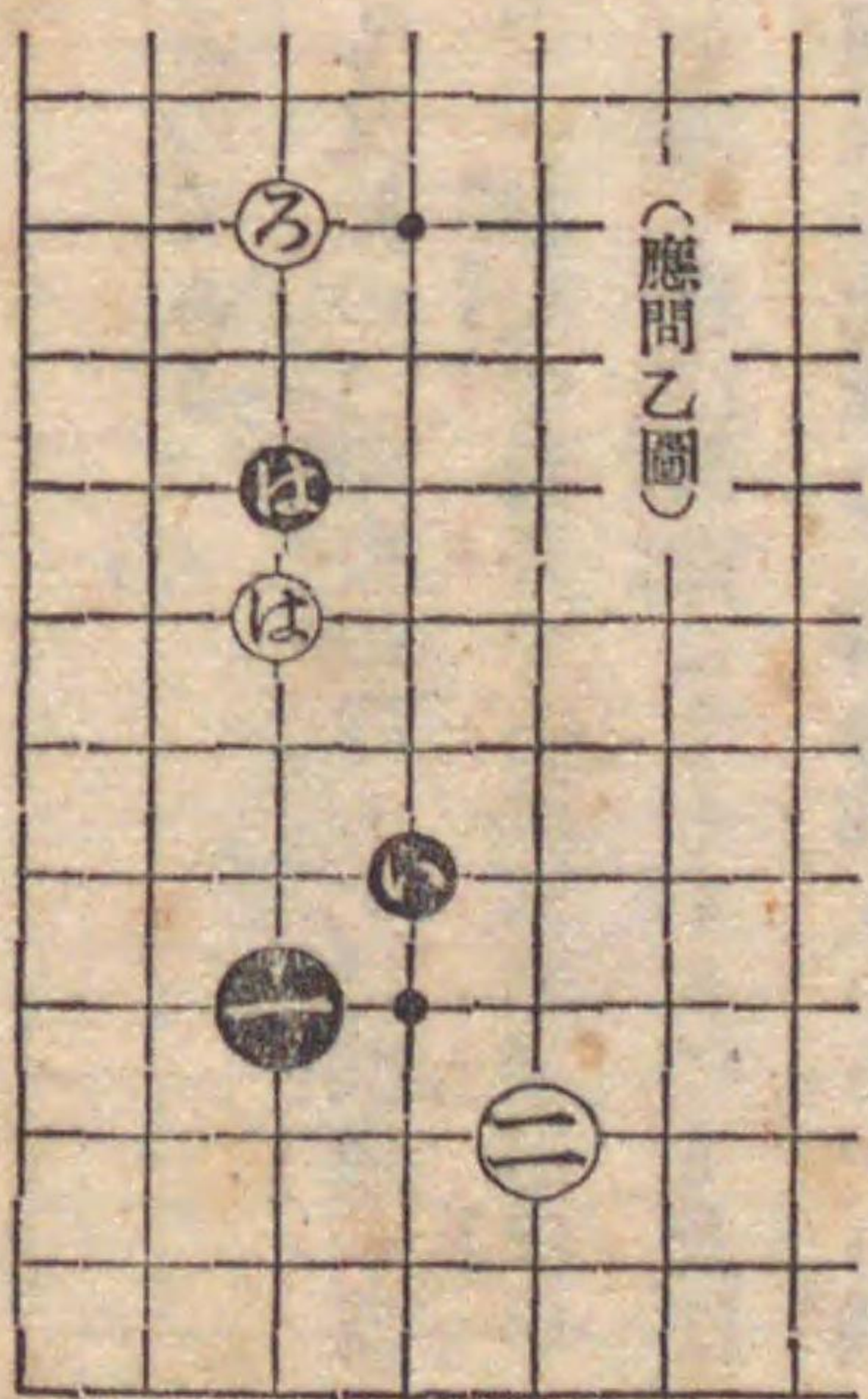
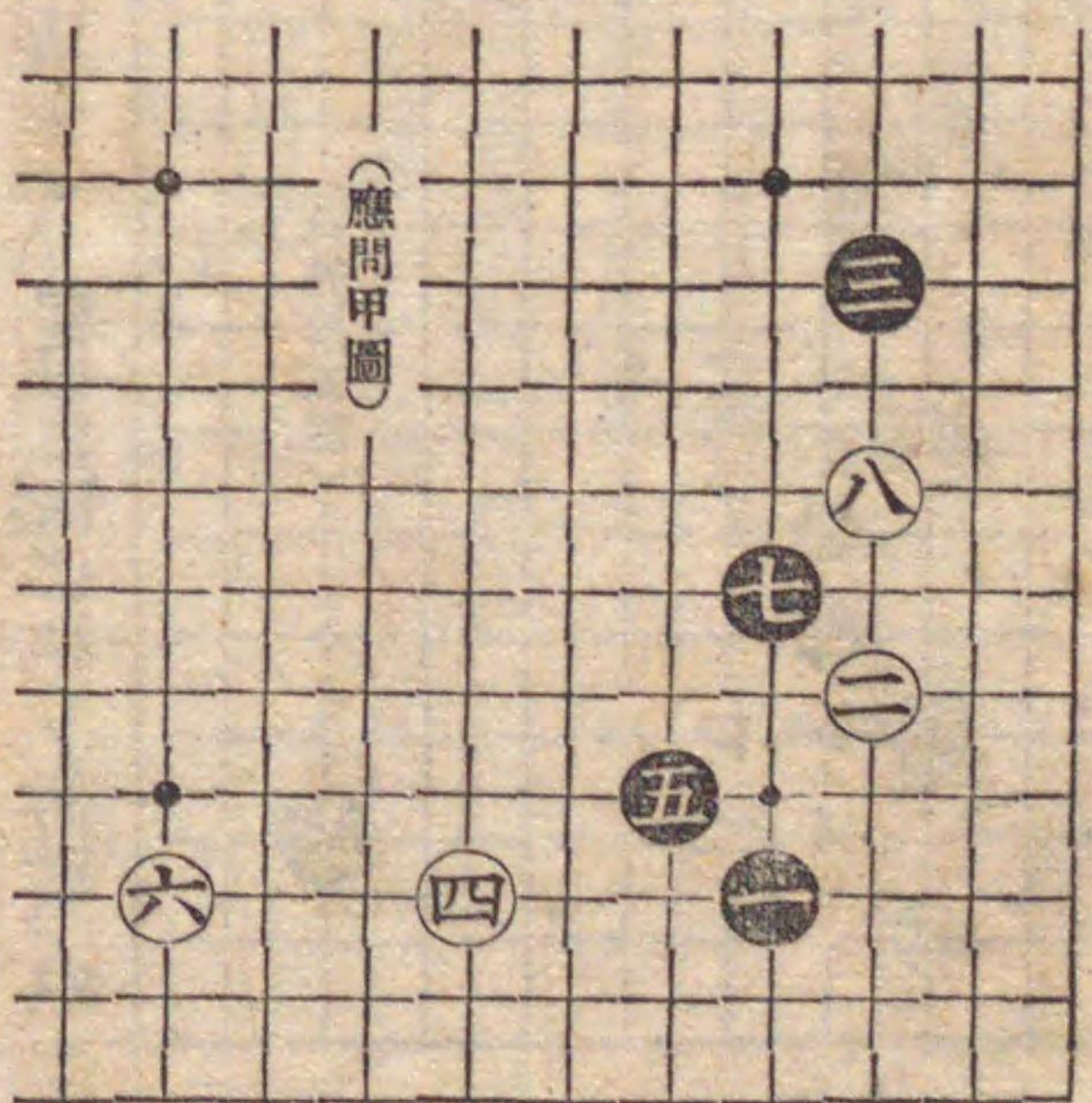
黒ノ立場ナシ  
夾返ヲ拒ク方  
法ナキヤ

夾返ヲ嫌フニモ  
及ハズ

黒七ノ手ノ意味  
方  
黒七以後ノ打

△(問) 「甲圖」の如き形になつて、黒の立場から言ふと、此の「夾返」をされた結果は、白に四、六と二間拓きをされ、一方では八、と圍中に活きられ、殆ど立ち場がない様に思ふ、此の夾返しを拒ぐの手段はなきものか。

▲(答) 既に三と夾んだ以上(敢て三ノミとは言はぬ、一間夾でも二間夾でも同様であるが)次に夾返すと否とは白の権利にあるから、今更之を拒ぐといふ事は出来ぬ、假りに「乙圖」の如く黒三の手で●と尖むとしても、白に③と星下に打たれては致し方がない、其の故は捨ておけば、次に④と來られてやはり二間夾返と同結果になるサリトテ之を防ぐため窄く●と應じるといふ卑屈な手にも出られない、又此くなるのが好ましからぬとて黒三の手を②の點へ二間拓するといふ様な事も出来ぬ(但し往昔はヨク打つた形ではあるが)要するに夾返しの手をサマテ嫌ふにも及ばぬのである、若も夾返される後の事を考へれば最初の夾を三間よりは二間にしておく方が白二の運動を窮屈にするだけよいかも知れぬ、といふ意味もある。

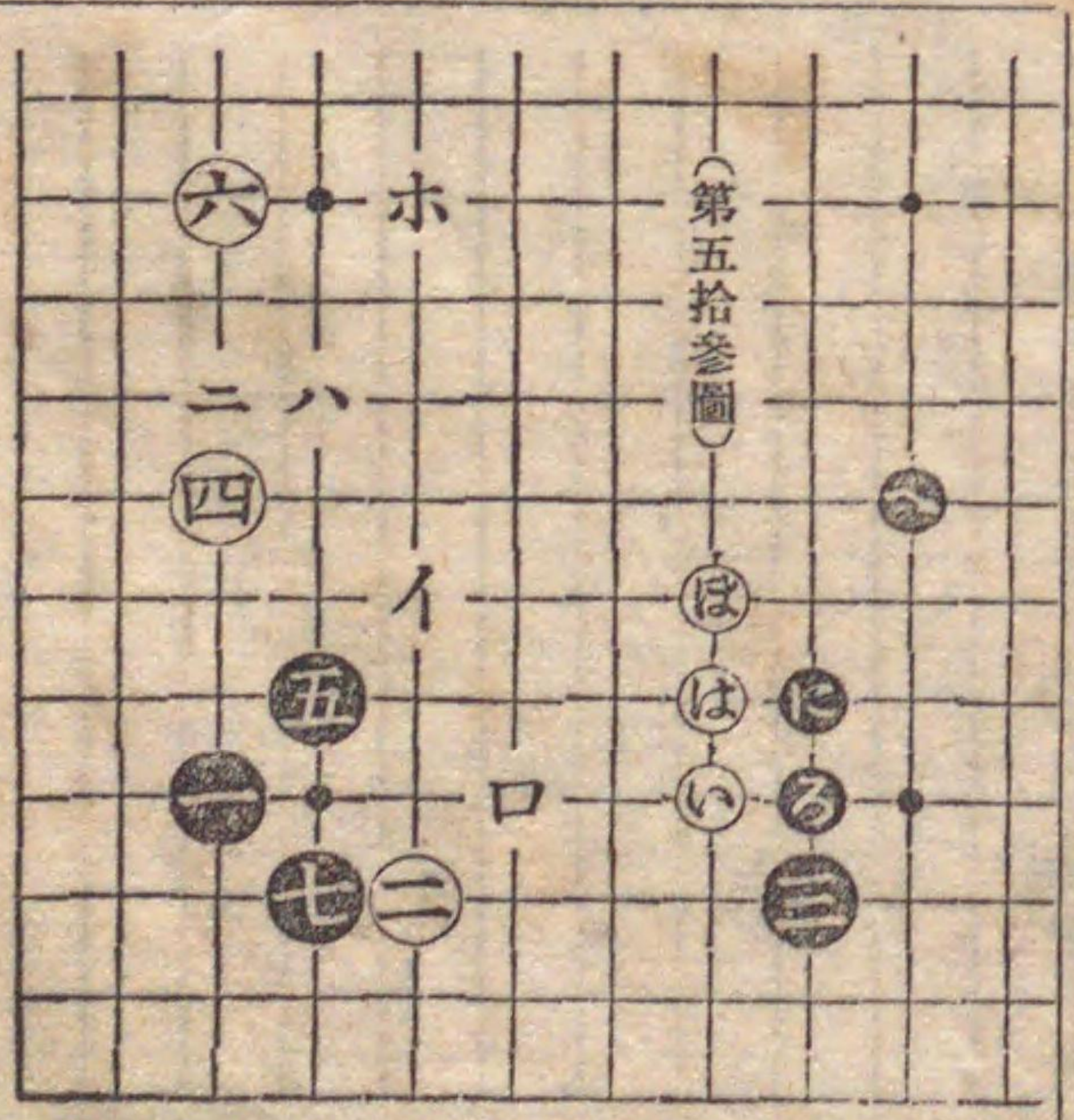


○(第五拾參圖) 以下白四の夾返に應じ、黒が五と尖み、白六と二間拓した以後の黒白の應接を詳示する事としやう。

黒が隅から行く手は、本圖に示す七の手より外はない。

「註」 此の七の手は先づ隅の實利を占め二の白を浮かして攻めやうといふ意である、即ち三間夾である故上面から包圍しても到底捕る事の出来ぬ手であるからなのである。

本圖は黒七の手で終である、唯此の後の運び方を強いて列擧すると、(勿論今直に打つ手ではないが)白からは(イ)と打つて黒に(ロ)と打たせる手と、又右の方三の肩から①と打ち黒②白③黒④となる手との二通りである、此の内初の(イ)は黒の(ロ)と交換して黒の地を確にする手で少からぬ損である然し左上側方面が手厚くなる、次の①②③の手段は二、三の間を散地とする手であるが、其の代り④と長壁を築かれるから、右下方面の布石關係を調べてからでなくては打てぬ、若白が來ずして黒から行く順になれば(イ)の點である即ち次で(ハ)と打ち、白に(ニ)と應じさせ(ホ)と煽る意である、但し(イ)と打てば此の黒の地は厚くなるが多少緩い傾がある。





黒七九ハ白ヲ  
重クスル手

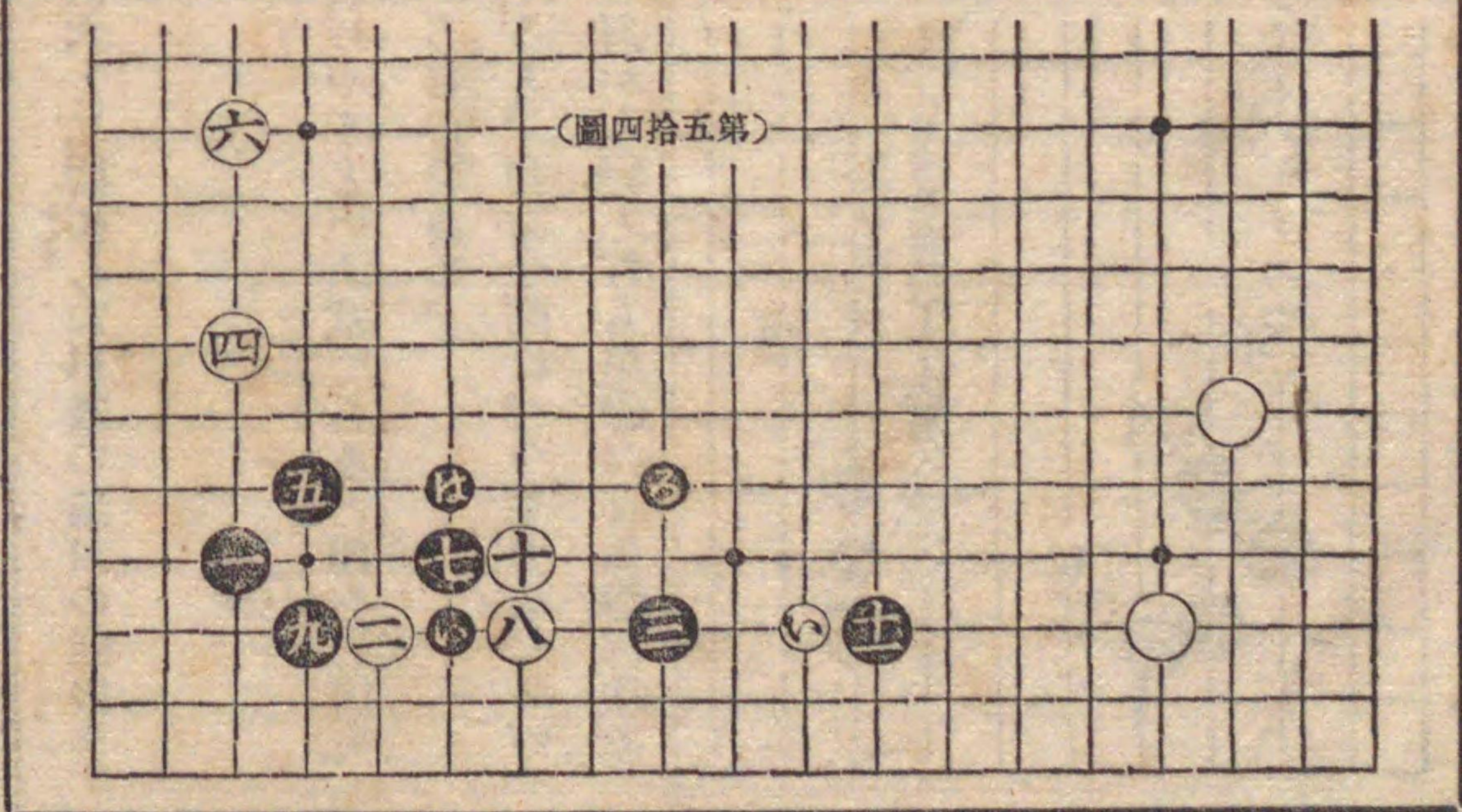
黒七ノ時白ハ  
白必ス打ツキ  
ナルヤ

白十一手ニ種

○(第五拾四圖) 黒七が前圖の様に單に隅から尖頂けず先づ一着七と上から掛けて白を八と飛ばしておいて、然る後九と隅から尖み頂ける意は、白の着手を重からしめやうとに外ならぬのである。

黒が七と掛けた時、白は必ず八と飛ばねばならぬか、といふと必ずしもさうではない、白の趣向によつては八と飛ぶ手を手抜して他に轉ずる事がないでもない、然し此の處を手抜して黒に●と捕りキラルルといふ事は少からぬ不利を蒙る所以であるから、先づ八と應じておくのが普通である。

黒に九と尖頂けられた時右下隅布石の關係によりては、白は必しも十と行びるとも決らぬ、或は十の手で○に夾返しを用ゐる事もある、本圖の如く白が十と行びた時黒は十一の手を●と一間に飛ぶ手と、●と行びる手と、ある此く十一と二間拓するのは、右下隅に白の大斜走締でもある場合で、若し黒の布石でもあれば黒は十一と二間に拓く必要はない。



黒イト末ハ  
白ロデアル

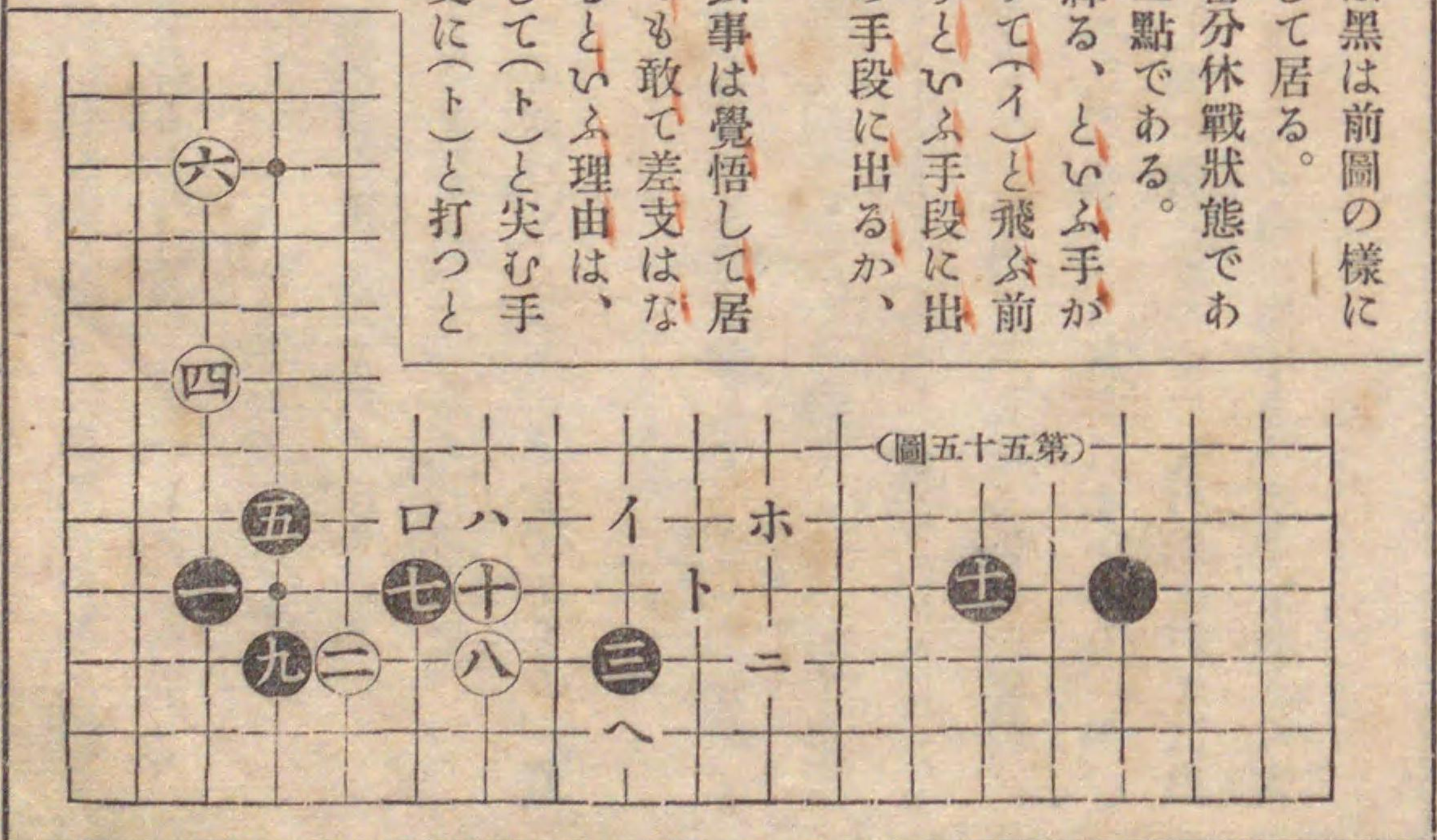
黒イト一間  
トビタル後白  
ニト打込マル  
ト一寸困スル  
理由

○(第五拾五圖) 圖の様に若し右下の星に置石のある場合は黒は前圖の様に十一と二間拓する手を以て此く高く一間飛でもするのに適して居る。

「註」此の處は黑白共に急に手出しをする必要もなく、當分休戦状態である、が若し後に黒から着手するとすれば(イ)か(ロ)かの二點である。

黒が(イ)と單關すれば、白は(ロ)と打つて、黒七の頭を縛る、といふ手が普通の應接である、乃で黒は此の(ロ)と縛られるのを嫌うて(イ)と飛ぶ前に(ロ)と行び、白に(ハ)とツいて來させた後(イ)と飛ばうといふ手段に出る事もある、然し白が必ず(ハ)と附いて行るか、或か他の手段に出るか、其は解らぬ。

兎に角黒が(イ)と飛んだ後は白に(ニ)と打込まれるといふ事は覺悟して居なければならぬ、(イ)の飛の前に白から(ニ)と打込まれても敢て差支はないが、一旦(イ)と飛んだ後(ニ)と打込まれるのは一寸困るといふ理由は、若し是が黒(イ)の飛のない前ならば、白(ニ)の打込に對して(ト)と尖む手があるが、一旦(イ)と打つた後では此の(イ)との姿勢上更に(ト)と打つといふことは如何にも氣の利かぬ姿勢重複の不利な手である、乃で黒(イ)の後白から(ニ)と打込めば黒は自然の姿勢として(ホ)と打たざるを得ぬ、すると白は(ハ)に頂けて悠然として盤る手が出る、即ち黒(イ)の飛は白(ニ)の打込を自然に誘致するといふ傾がある。



五先定石



黒一、白二、  
 三、導キ然ル  
 後、ハ、飛ハシ  
 トスルニアリ、白  
 ウテラカキニ  
 頂テナリ

○(第五拾六圖の甲) 本圖は前圖説明の繼續圖と見てよい、黒が單に●に飛べば白に一の點へ頭を縛ねられるがイヤな時に黒は此く一と行びるので、其の意中を忖ると白に◎と従いて行びさせて、然る後●と飛ばうといふ手である、乃で白は其の黒の考のウラを行つて二と頂けたのである、黒が三と縛ねた時、白が四の手を以つて◎の點に行ければ、黒は四の點を堅く粘々手である。

△問 白に四と截られるが面白くないと考へる時は三と縛る手で四と引いて居ても可いか。

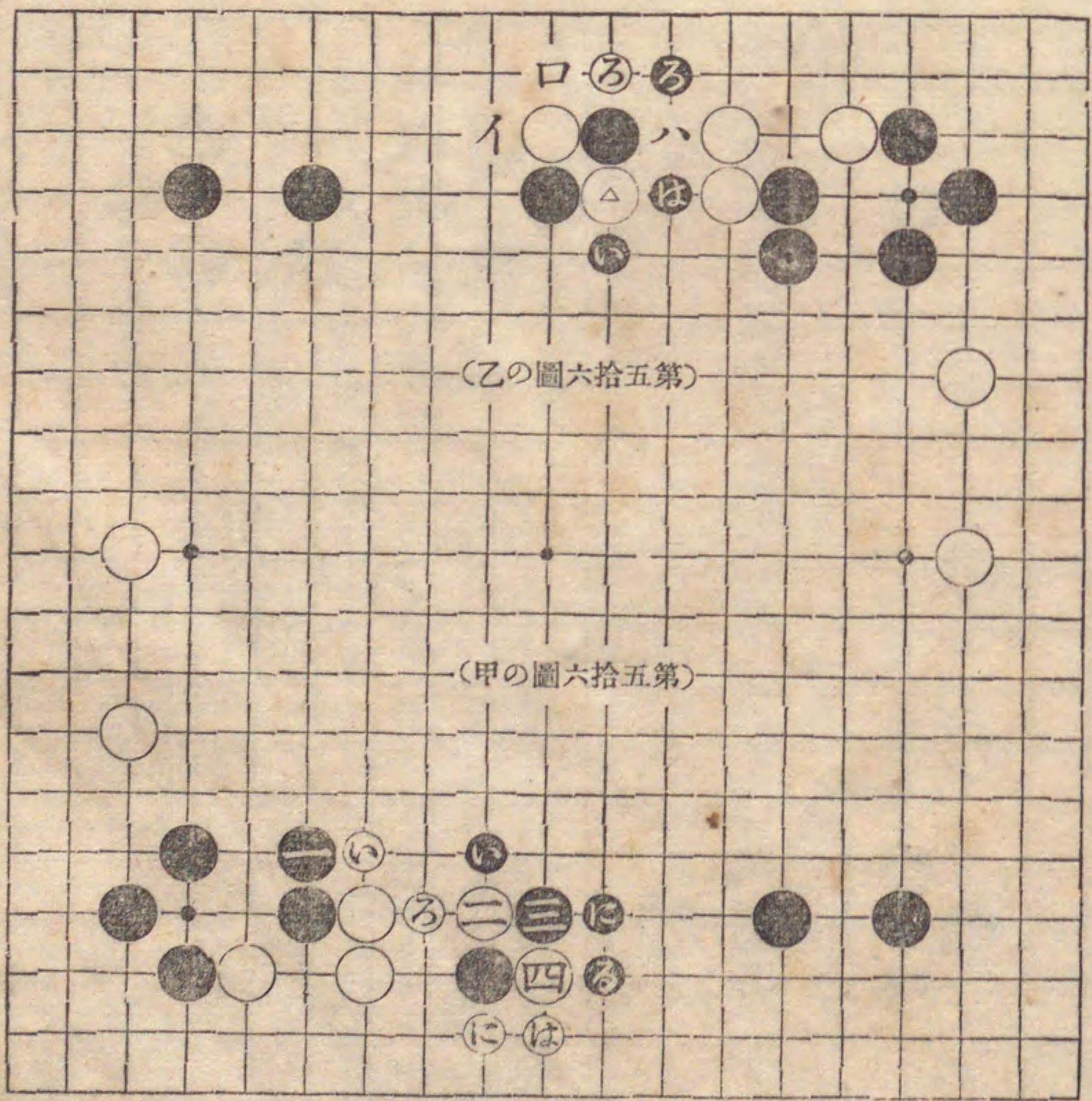
▲答 其は場合にもよるが、一方で一と立つた主意から考へても先づ三と縛るが本當であらう、且又四と截られて別段困るといふ事はあるまい。

△問 白に四と截られた時、黒は五の手を◎と上から打つ可きものか或は◎と下へ打つ可きか。

▲答 必此うと言ふ事は出来ぬ、何故なれば已に一方一と行びて居るからして◎と上から行くにも道理はある、又右下の黒締りの方から見ると、◎と下へ打つものにも理由はある、黒◎と打ち白が◎と應じるに極つて居れば黒は先づ◎とあて次で◎とアテ◎と下らせて、◎と上を堅く粘々白に◎と後手を引かす手になるが、然し白たるものがさうく黒の命令に服従しても居られまいから、黒が◎と打てば白は必ず何等か他に手段を講じるかも知れぬ、然し黒が◎と打たずに先づ◎と打てば白は必ず◎と下らずには居られぬ、其の代り次で黒が◎と打つても之に白が應ずるや否やは判らぬ大抵は手抜されるであらう。

△問 黒が上から◎と打つた後の相互の應接は略何んなものであらうか。

▲(乙圖)答 黒が◎とアテ白が◎と下からアテ、黒が◎と提つた時白の打方は三通ある、即白(ロ)と粘げば安全であるが黒も手を抜く、又白(ハ)とキメツケ黒が(イ)からアテ白が△印へ提つて來れば劫である、或は白(イ)と行び黒◎白(ハ)黒(ロ)となれば大劫であるから白も容易に(イ)の行は打てぬ。

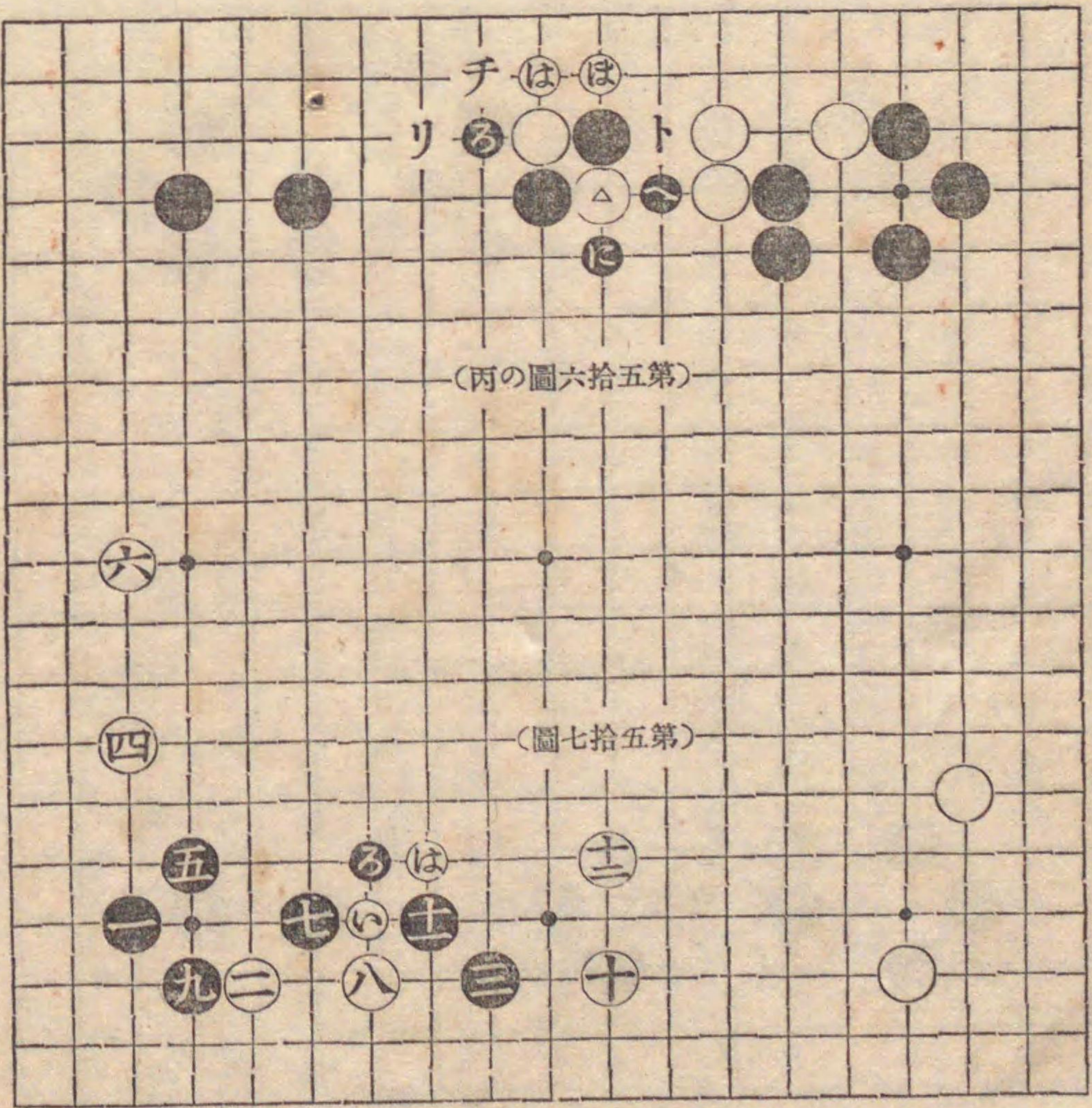


~~~~(石 定 先 互)~~~~



○「第五十六圖の丙」 又黒が  
と下をアテた時、白は⑬と下り  
次で上を⑭とアテた時白が⑮と  
下を掬ひ、黒が⑯と提つた後、  
白から(ト)と打てば黒手抜きで  
ある、然して後に白から(△印)  
を劫を提つて來た處が大問題で  
はない、若又黒⑰白⑱黒⑲白⑳  
黒㉑の後白が(チ)と來れば黒は  
(リ)と應じて居てよい、此くな  
れば白が㉒(チ)と掛粘をして黒  
に㉓とアテラレ⑳と粘いだとい  
ふ様な道理にもなるから黒決し  
て損ではなす。

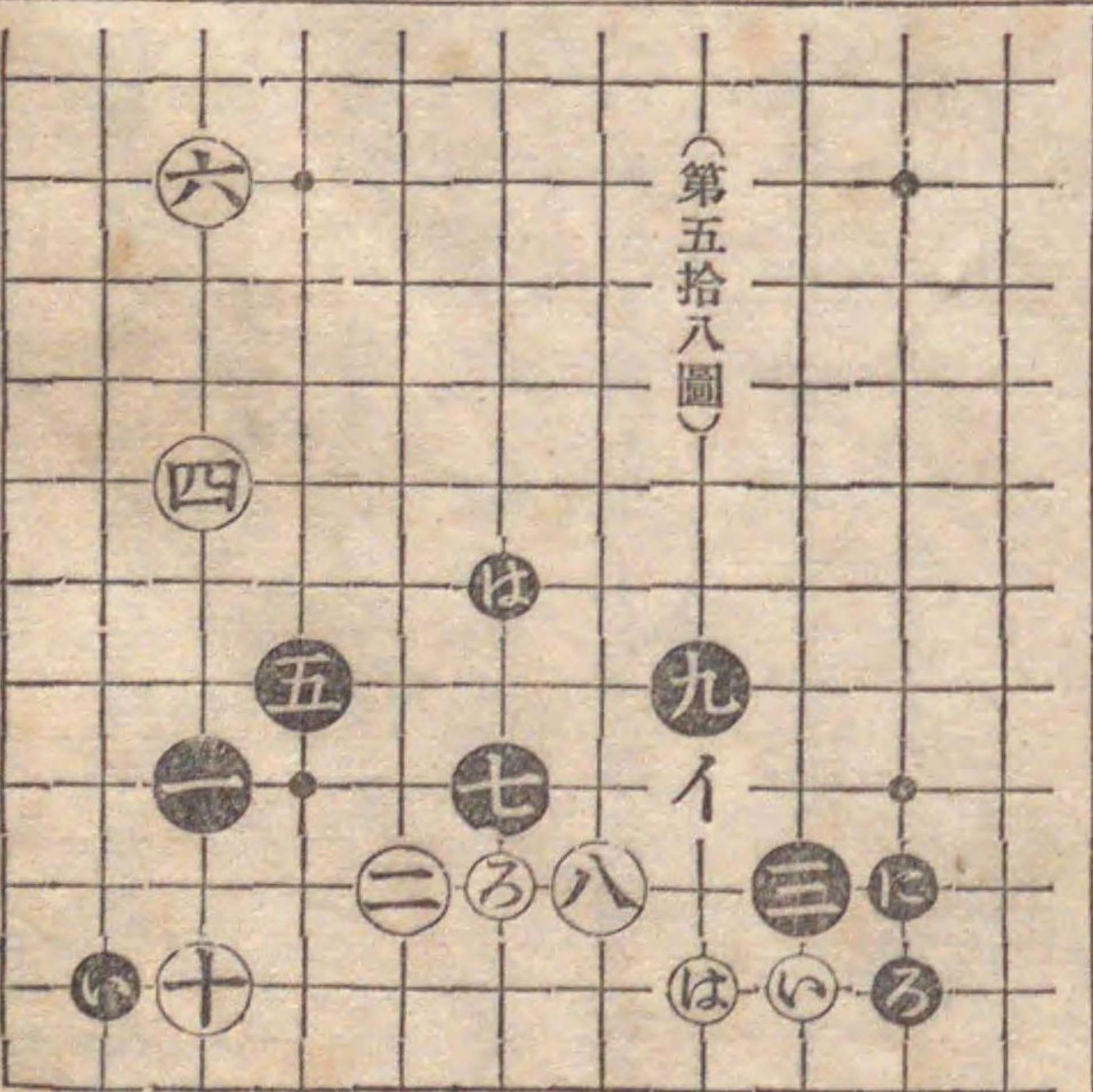
○(第五拾七圖) 黒が九と尖頂



五十六圖  
黒九ノ時白ハ  
直ニナト走ラ  
サレハ活ナシ  
○九ノ手ニ通  
白ノナト走シ  
黒ハ直ニ走  
ツキカ

けた時に、白は十の手を前圖の  
様に⑩の點へ行びずに右方から  
黒三を夾んで十と圖の如く打ち  
黒に十一と尖ませて十二と飛ぶ  
事もある、是は如何なる場合に  
行ふ手かと言へば、本圖に示す  
通り右下隅に大斜走の白の締で  
もあるやうな場合なので、此く  
二、八、の二子を捨て、も十、  
十二と右方の地域を圍ふといふ  
事は頗る雄大な勢を形成するに  
足るのである、尙且つ此の形に  
は後に到つて白が⑩と突出し、  
黒が⑪と押へた時⑫と截らうと  
いふ味を見て居るのである。

○(第五拾八圖) 前圖のやうに隅から尖頂せず上から圍ふ手は  
(イ)と尖む手と本圖の通り九と斜走に包む手との二通りある、  
九と圍はれた時白は必ず十と隅へ走らねば活はない、よし活路  
はありとしても非常な損失を招かねばならぬ。  
黒十一の手を白十の腹に頂けて此く⑩と打つのは右方自己の布  
石の關係上白⑩黒⑪白⑫黒⑬と交換を遂げて堅めて終ひたいと  
いふ手である。

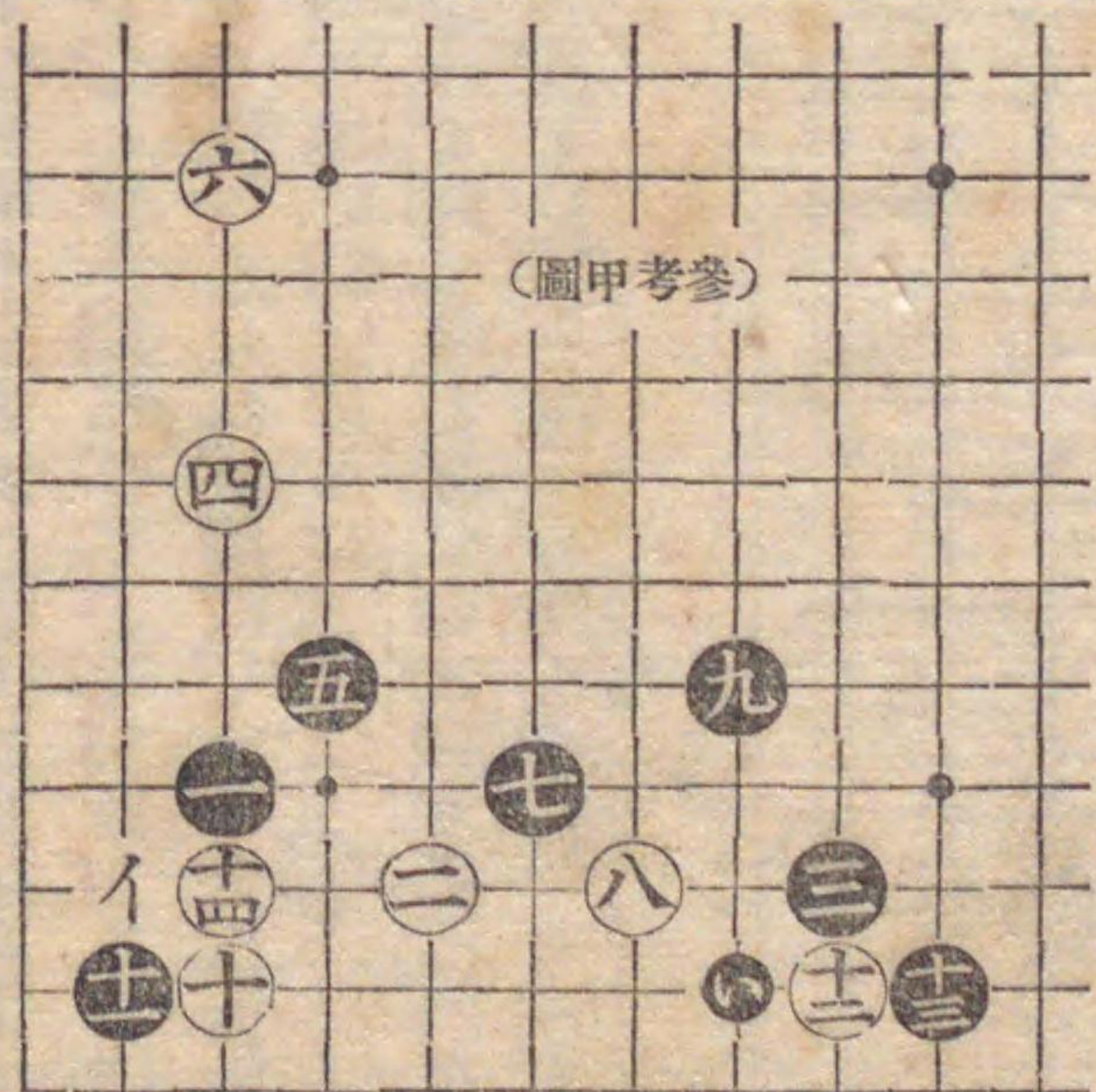


~~~~(石 定 先 互)~~~~



△「註」 從來此の定石の手順といふ事に於ては素人間の實戦を見るに或は右し或は左して殆んど一定して居らぬ、然して何れから何れへ行ても結果は同じ事であると言つて居るのを屢々見聞した事がある、ナルホド白の打つ手に黒が就いて廻つて居れば同じ事かも知れぬが、若しも黒に其の虚へ乗じられたならば、白たるもの窮しは爲まいか、即ち(参考甲圖)の通り、白が十と隅へ走り、黒亦之れに隨逐して十一と頂けた時白が十二と頂け次に又轉じて右へ十四と打つのは考へものである。其故は白十四の時黒が(イ)の點に應じて呉れ、ば問題はないが、若も黒十五の手で●と來て白十二の一子を捕る様な事があると白は餘義なく(イ)に曲つて居らねばならぬ、若も白の趣向が黒に十二の一子を先手で捕られても差支ないといふ様な場合ならば敢て悪くないかも知れぬが此の局部に就て言へば確に白の損害たる事は免れぬのである。

或は白は十三の一子を捕られても黒も亦十一を失うてゐるから互角ではないかとの説も起らうが、然し此の場合の一子づゝの交換は白のため決して小サイものではない、然し白が(イ)に曲るとすれば其は四、六を暗に援けては居る。

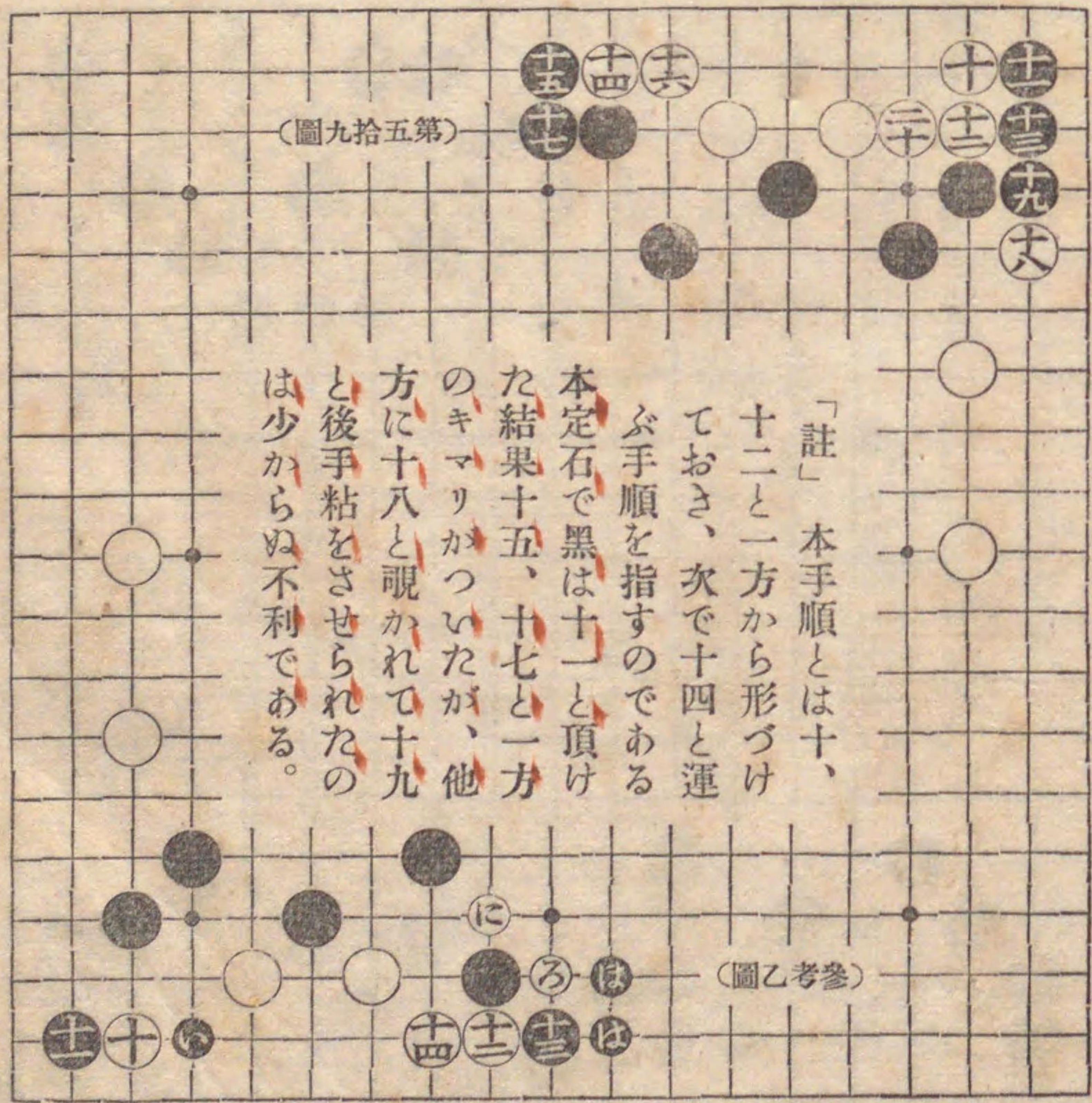


(圖甲参考)

本因坊ノ此  
定メ置ケラ  
可ナリトモ  
手順

(参考乙圖) 若又白十二黒十三の時此の一子を前圖の様に提られるのを不利と考へて、本圖の通り十四と引くと右下方面の布石關係によりては、黒は●の點を粘がず隅を●と夾み、白が●と截つた時黒●白●黒●といふ頂序にならぬとは言へぬ、乃で此の定石の手順として此の度本因坊師の教示を得た、最も紛れのない運び方は次圖の通りである。

○(第五拾九圖) 本定石は之を本手順として必らず他の打方はせぬと決めておくがよい。



(圖九拾五第)

(圖乙参考)

「註」 本手順とは十、十二と一方から形づけておき、次で十四と運ぶ手順を指すのである。本定石で黒は十一と頂けた結果十五、十七と一方のキマリがついたが、他方に十八と覗かれて十九と後手粘をさせられたのは少からぬ不利である。

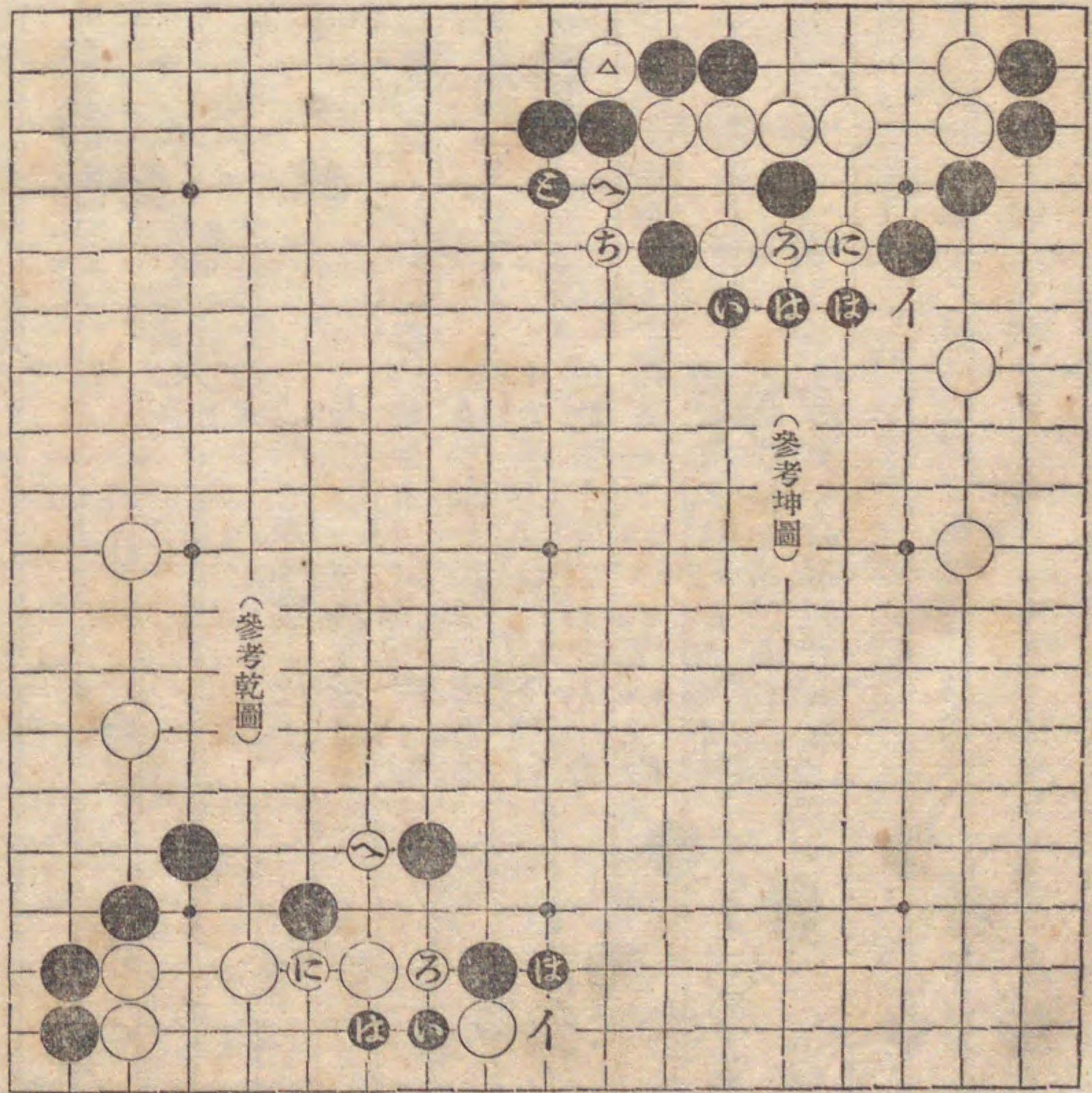
~~~~(石 定 先 互)~~~~



黒外ヲ抑ル  
ヲ変テハト  
待込ニタル時  
ノ應接

△(参考乾圖) 前第五拾九圖白十四の時、黒は十五の手で(本圖イの點)外から抑へるのを變じて、圖の如く△と縛込む事がある其の時白は○と截り、黒は○と行び、白は○と粘ぎ、黒が○と行びた時、白は○と頂越せばよいのである。

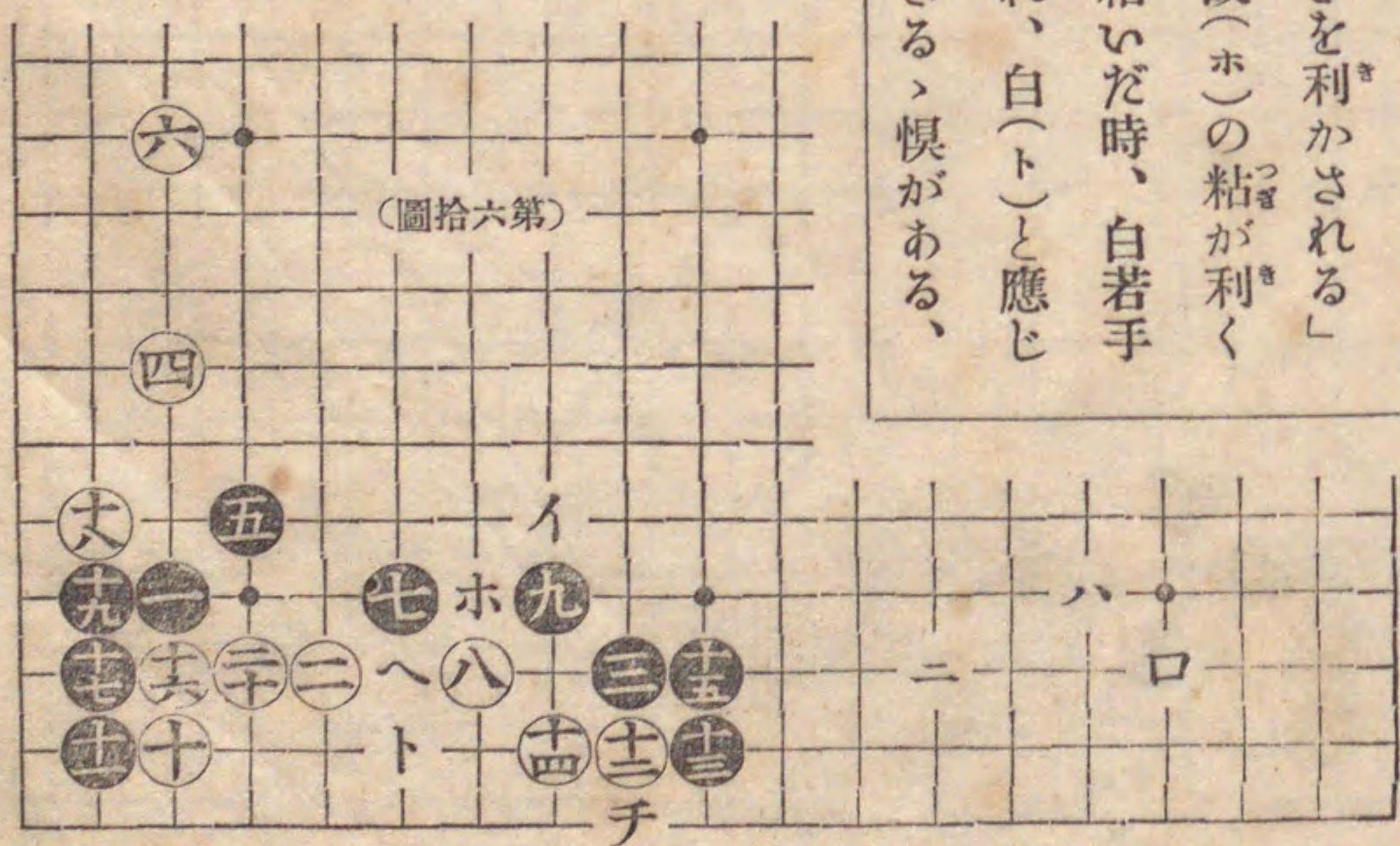
(参考坤圖) 前圖白△の後の應接を表はすと、黒○、白○、黒○、白○、黒○、白○、黒○、白○、黒○、白○となつて樂々と白に外へ出られ且つ(イ)と截られる事も残つて居るから、側邊で白が多少得た利益は、中邊で失うた不利益とは比較にならぬ。



即ち(乾圖)に於ける黒○の縛込は黒無理である乃ち打つ可らざる手と心得ておき、縛込まれた方からは其の應手を心得ておけばよい。

○(第六拾圖) 黒が九の手を前圖迄の様に(イ)の點へ斜走に圍はずして、本圖の通り九と尖んで打つた時は、白は十の手を本圖十六の點へ頂けて打つ手と、此く十と斜走して打つ手との二通りがある、十と斜走した後、黒白共に此く應接すれば、其の結果は、やはり前の斜走圍と大差はない事になる。

唯本圖の結果が今迄の斜走圍と異なる處は「何時でも黒に(ホ)の粘ぎを利かされる」といふの一點である、何故(ホ)の粘ぎが利くかと言へば、黒が(ホ)と粘いだ時、白若手抜すると忽ち(ヘ)と來られ、白(ト)と應じた時(チ)と縛られて切にさる、悞がある、尤も是は右下方面の布石關係にも由るので若(ロ)(ハ)の點に黒でもあれば切である又(ロ)(ニ)と白の拓でもあれば盤る事は盤れるが白の味は頗る悪い、黒(ホ)の後の双方の應接は次に圖解しやう。

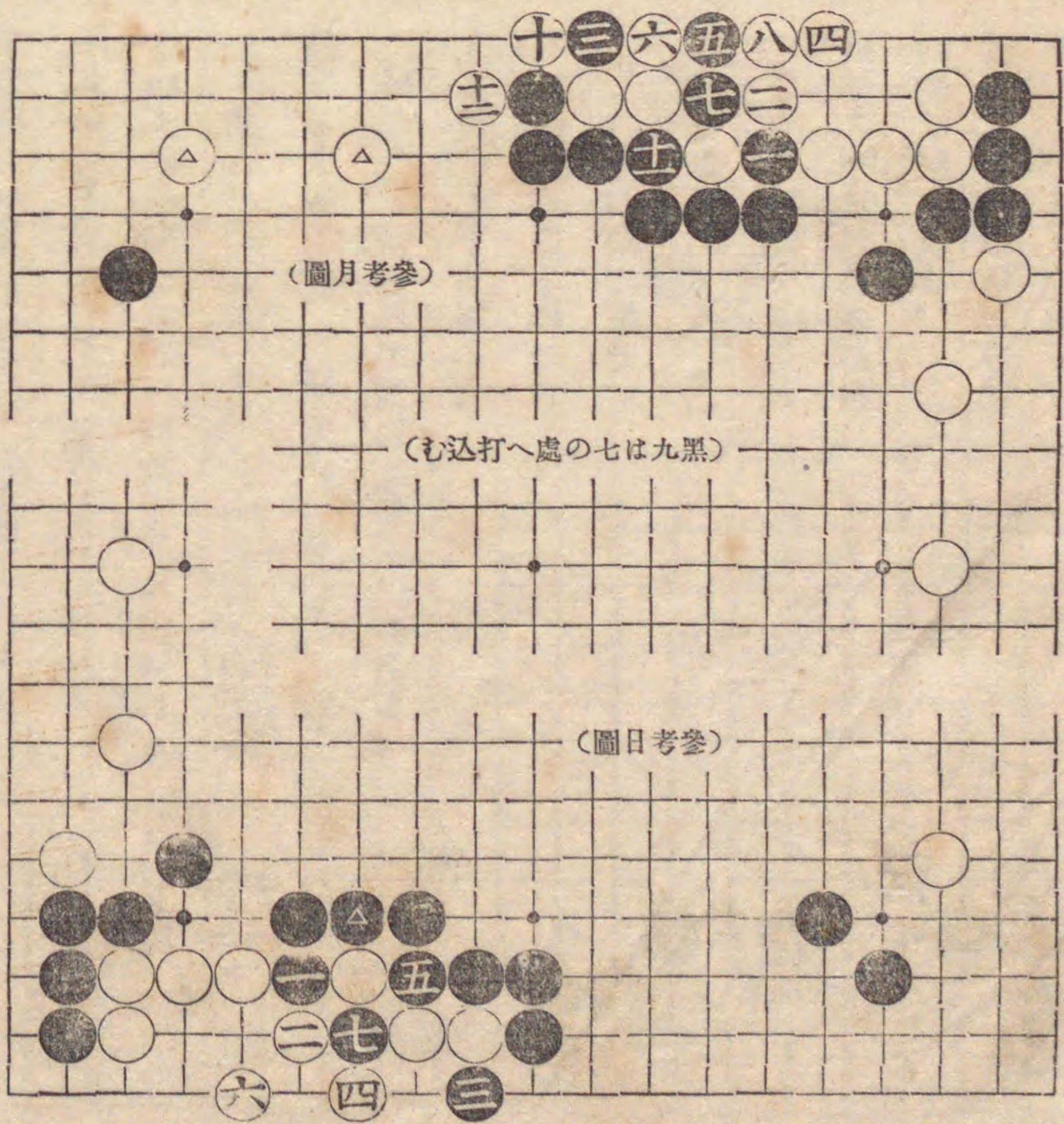


~~~~(石 定 先 互)~~~~



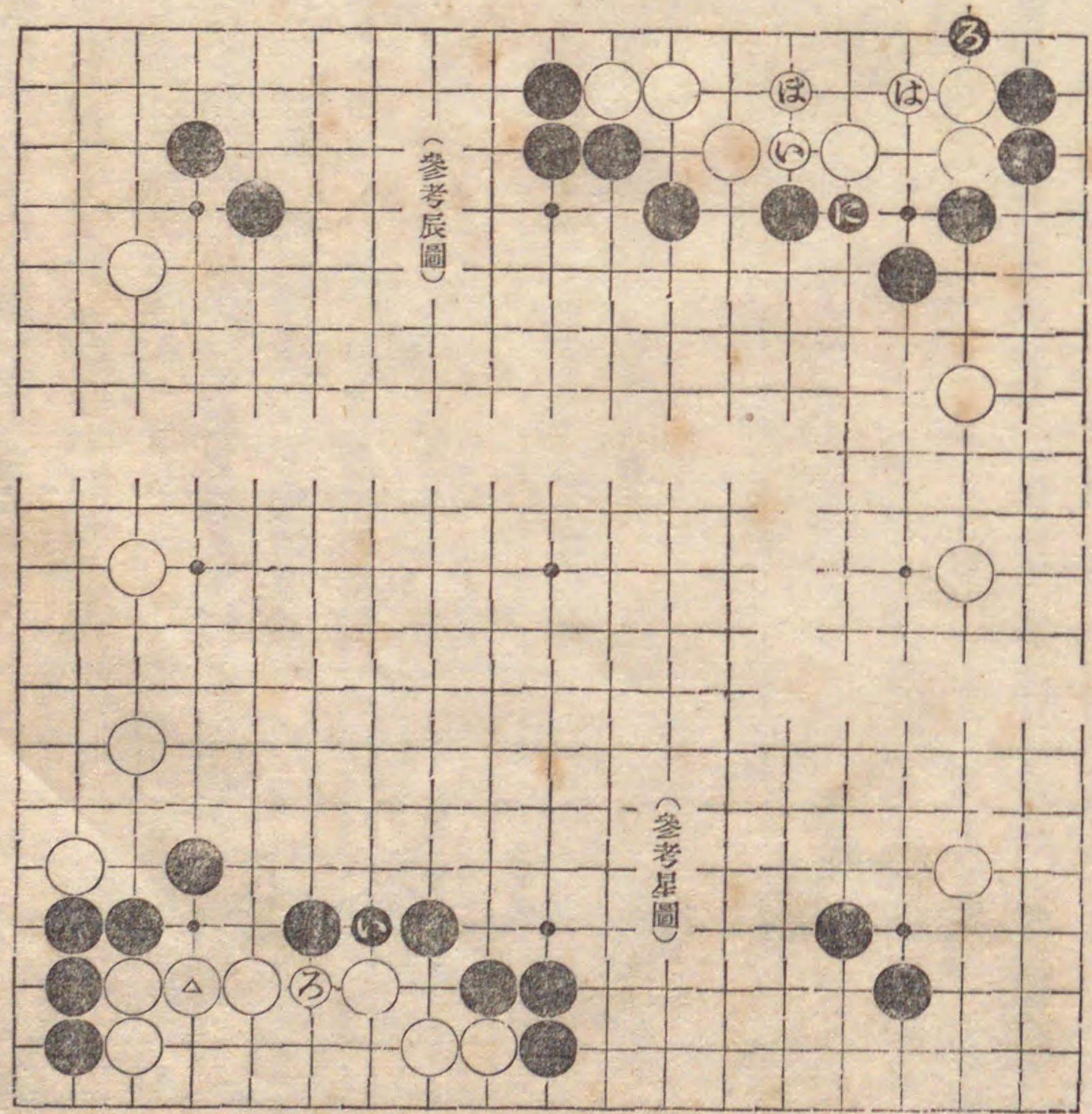
△(参考日圖) 黒が(△印)を粘  
いた時白手抜の結果として、黒  
一、白二、黒三となつた時、右  
下隅に此く堅固な黒の布石でも  
あれば、白は四と打ち黒五、白  
六、黒七、と劫に受けるより外  
爲かたはない。

△(参考月圖) 若も左上方面に  
(△印)の様な白の布石でもあれ  
ば、黒三の縛に對し白は四と打  
つて、以下數字の示す手順を履  
んで十二と一方へ盤る手にはな  
るが然し此の形勢を敵に利用さ  
れるといふ事は全局の模様によ  
りては決して面白くない。



△(参考星圖) 然らば結局如何  
すればよいか、といふと一方に  
黒の布石があつて盤りが成效せ  
ぬと思ふ時は黒●に應じて白も  
亦●と堅く粘いでおくより外に  
手はない、尤も最初(△印)へ粘  
ぐ手を以て此の●に備へておく  
手もないではないが、然し其後  
もやはり黒から收束されて退縮  
せねばならぬのは此の形に附隨  
した運命と見るの外ない。

△(参考辰圖) 即白が○と備へ  
ておいても、後に黒が●と來れ  
ば○と曲り、又黒に●と迫まら  
れて○と備へねばならぬ。





△(参考長圖) 黒から③と收束て来た時、白は④の點へ直に曲らず④と出、黒⑤の時更に⑥と出て、然る後⑦と打つてもよい、此くすれば前の(辰圖)で示した様に黒に⑧の點へキメつけられる事はない。  
 然し既に⑨⑩と突出す程ならば最初⑪と打つ手で⑫⑬の手順を履んで⑭とアテておきたい様な處である、がさうなると黒に⑮⑯(イ)と密閉された結果如何にも味のない事になるばかりでなく、茲に造らせた黒の堅壁は暗に左側二間拓の白の方へも、間接の影響を與ふる事になるから、考ふ可きである、

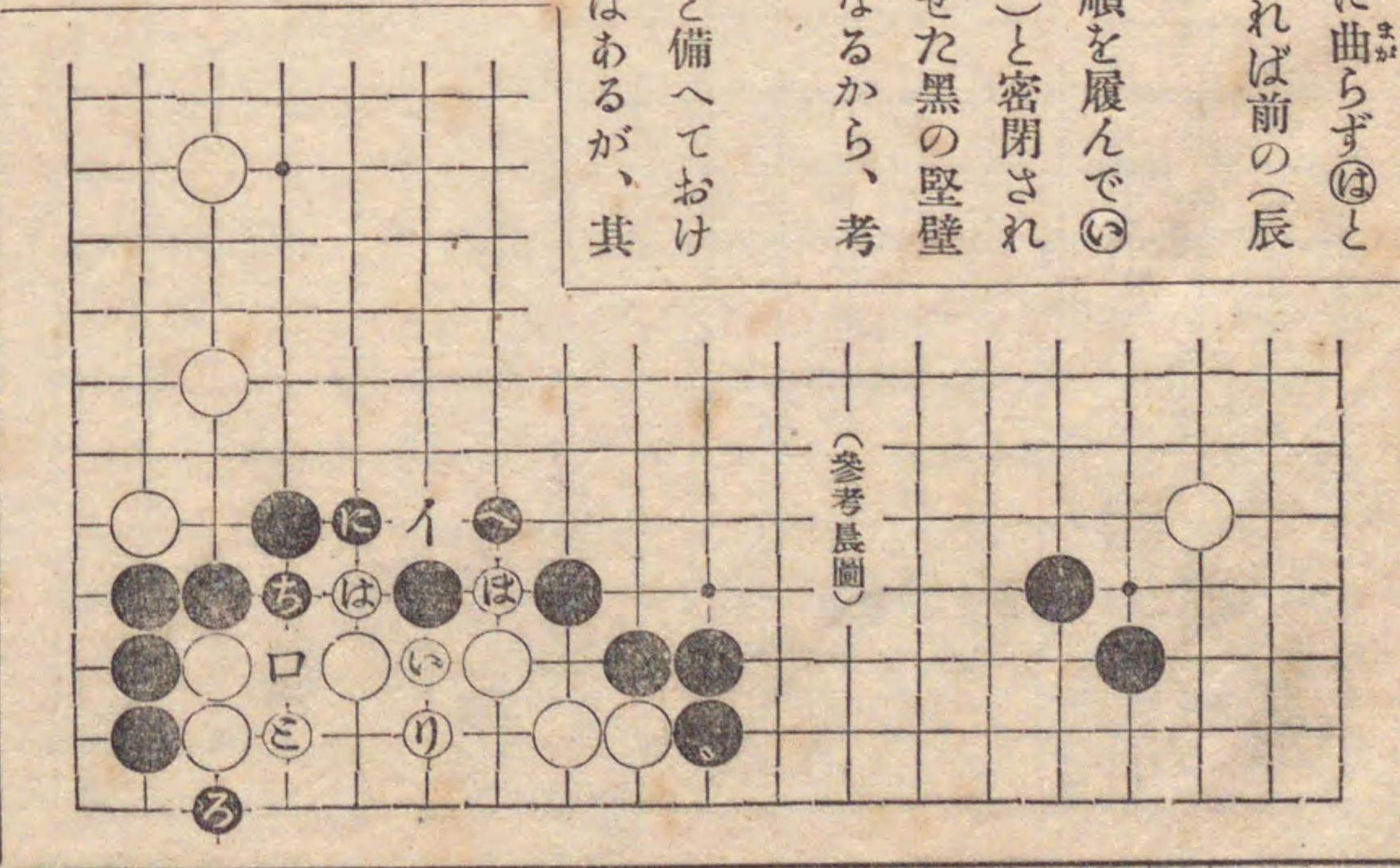
乃で最初に白が(ロ)の點へも打たず又⑰とも打たず單に⑱と備へておけば黒から何と打つて來ても痛痒を感じない至極安全な手ではあるが、其の代り緩いといふ非難はある。

▲問 黒⑲と縛る手で⑳と打たば如何。

○答 白に(ロ)と粘いで間に合はせられる。

▲問 本圖㉑の手で白は(イ)と打ち黒一子を提らば如何。

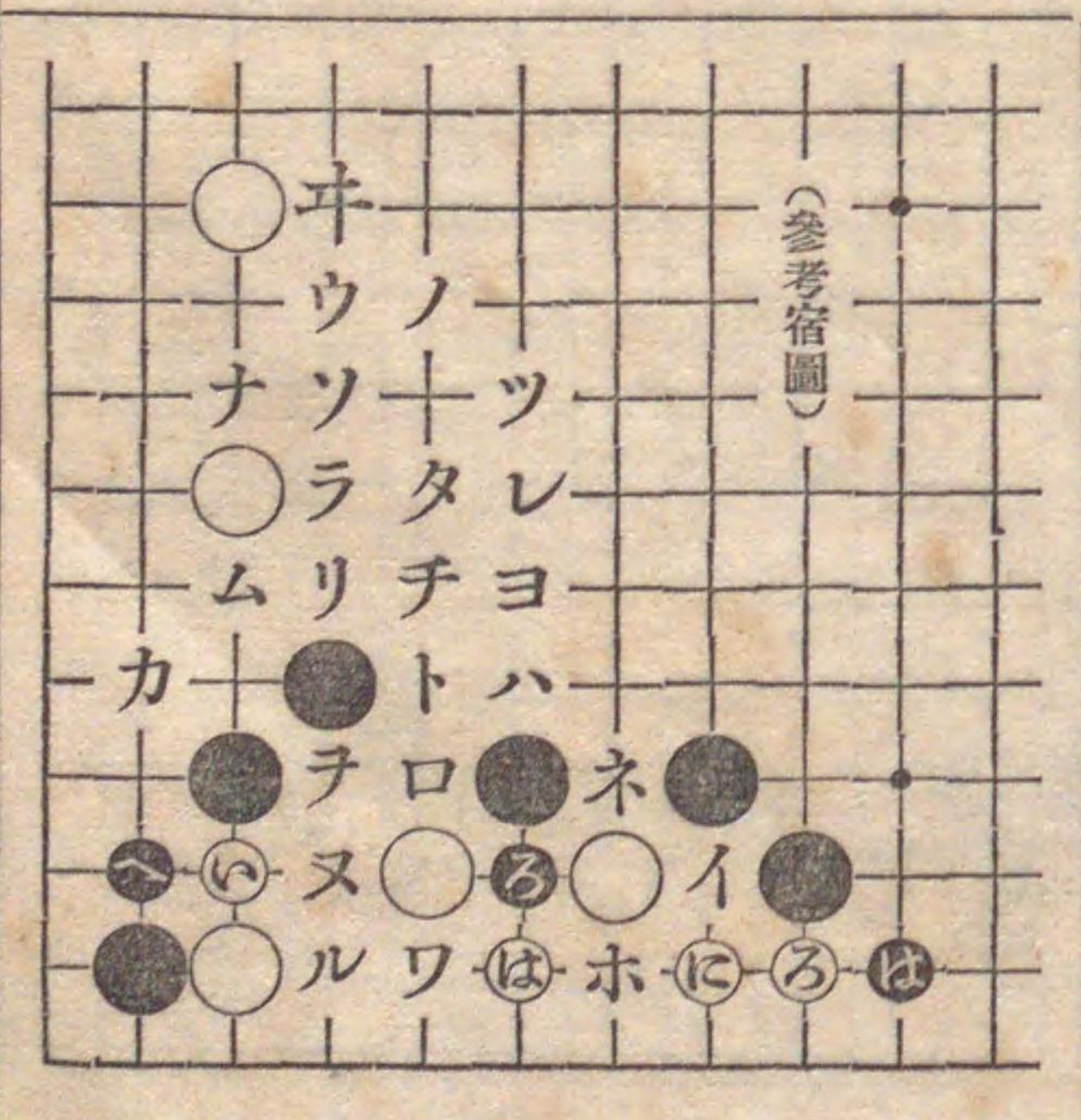
○答 急務でない、提らうと思へば何時でも提れるから大抵は味を残しておく手であらう。



前の(第五拾九圖)の場合即ち黒が斜走に圍うて居る時は、白は先づ隅へ十と走り續いて第十二の手で直に其の十の一子を行びる手順であつて其の理由は同頁の(参考甲乙兩圖)で詳解した通りである、然るに(第六拾圖)尖に圍うて居る場合は、一旦隅へ十と走つて黒に十一と頂けさせて更に轉して十二と右方へ頂け直に十四と引く手順となつて居る、外の圍ひの斜走と尖との差で、何故此の中の白の手順を變更せねばならぬかと言ふと、此の(第六拾圖)の場合で、若も白が(第五拾九圖)の時の様に直に隅を行びると黒から下に示す(参考宿圖)の様になると突出される患がある、即此の(宿圖)に示す黒白應接の變化と手順を記すと

白十二の手で①黒②白③黒④白⑤黒⑥となりて白不利である

其で此の尖の圍ひの場合はやはり第六拾圖の通り十二、十四と右の方を頂け引に打つがよい、又白十二の手で⑦黒⑧と來れば白は(イ)と打つが上策である、若し(イ)と打たず⑨と應じると黒⑩白⑪黒⑫ハ白⑬ホ黒⑭イ白⑮黒⑯白⑰黒⑱白⑲黒⑳白㉑黒㉒白㉓黒㉔白㉕黒㉖白㉗黒㉘白㉙黒㉚白㉛黒㉜白㉝黒㉞白㉟黒㊱白㊲黒㊳白㊴黒㊵白㊶黒㊷白㊸黒㊹白㊺黒㊻白㊼黒㊽白㊾黒㊿



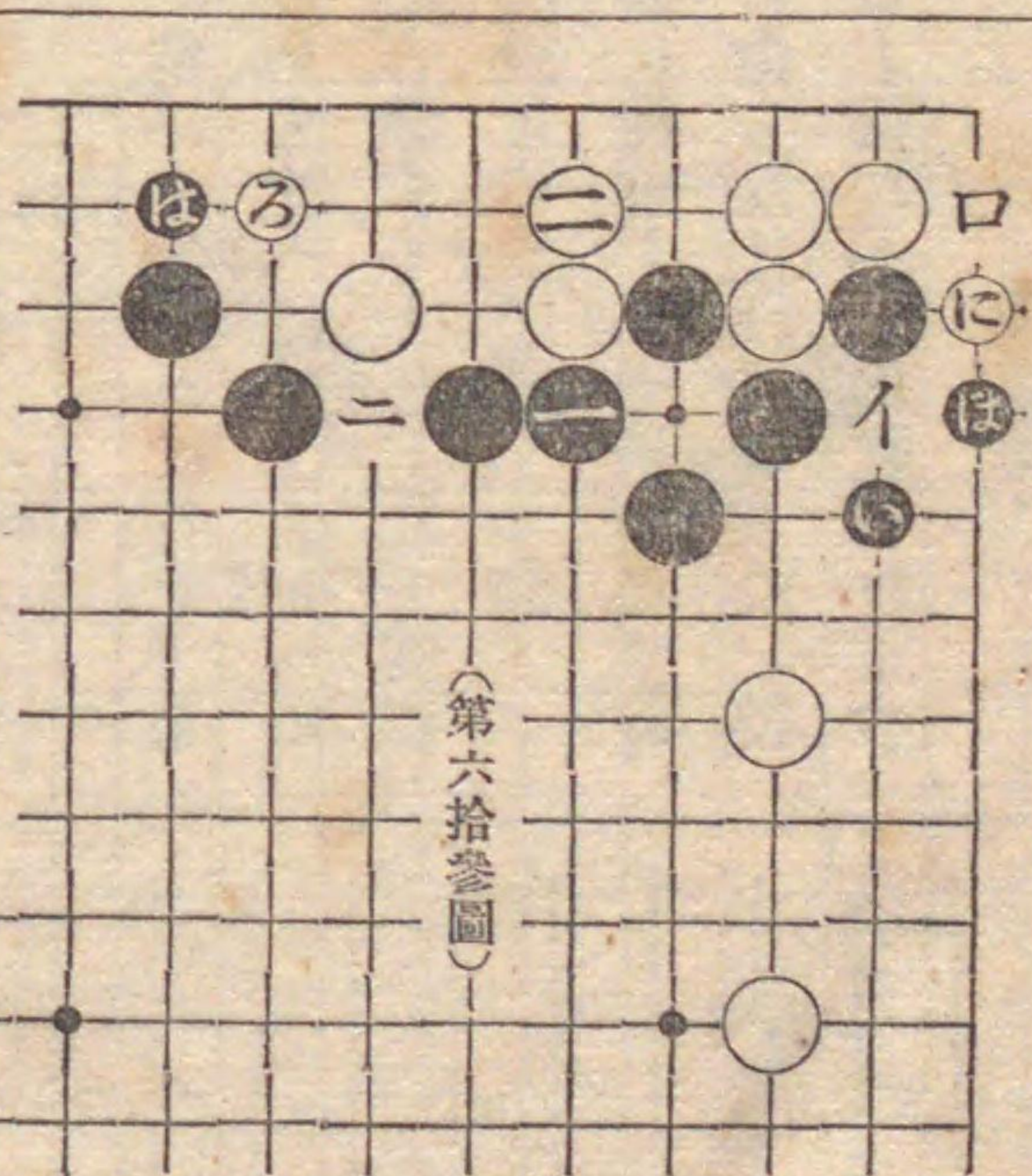
五)先定(石)







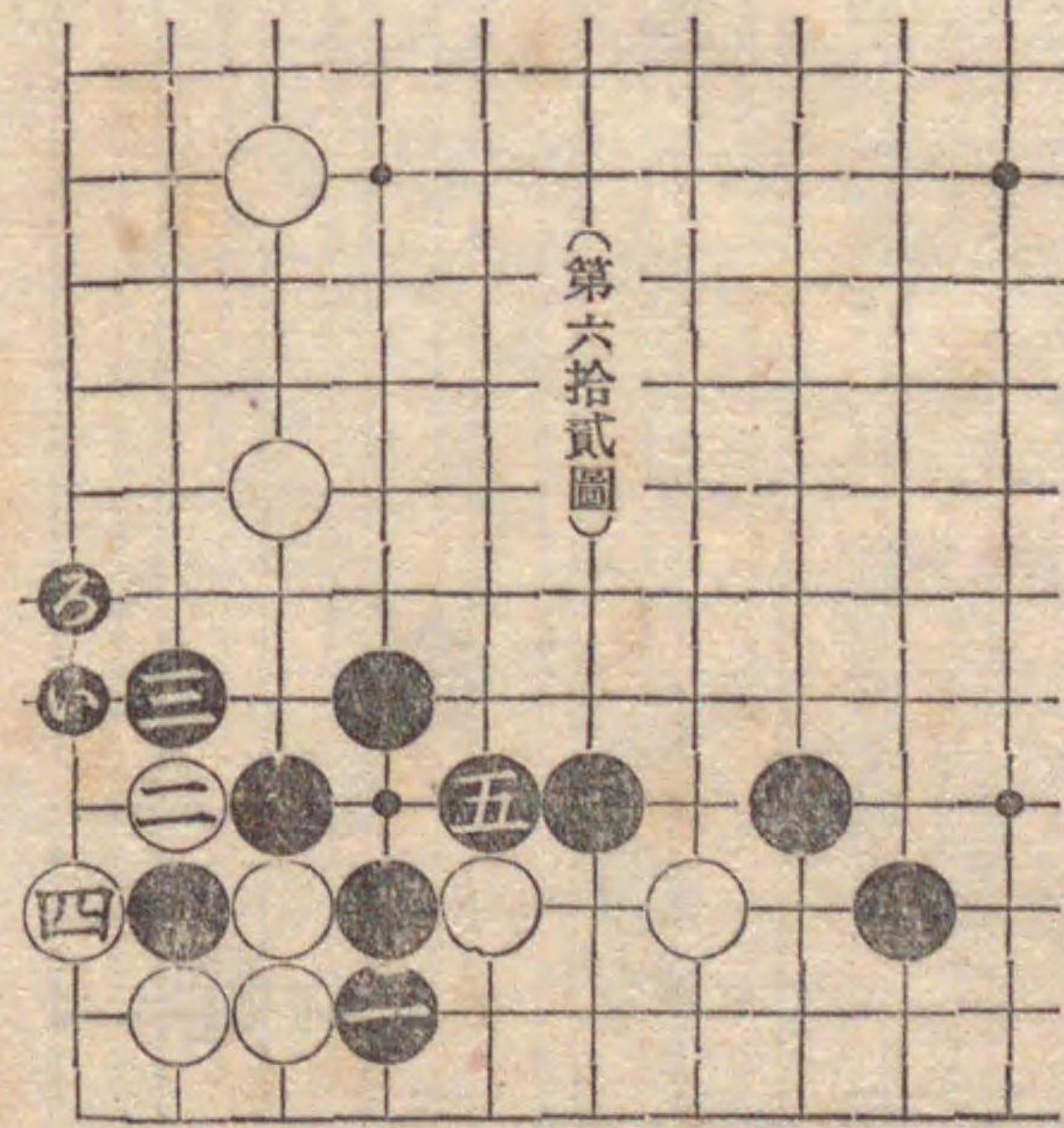
○(第六拾貳圖) 黒が一と押へた以上は白の二、四は殆んど命令手である、此く打てば黒は五と鎖して後手にはなるが、其の代り、二子の白を完全に生擒つて確かな地域を造つた上に、後に至つて●と下る手も利けば、●と尖む手も利いて居る。



る黒●は所謂働き手である、之を平凡に(イ)と粘ぎ白に(ロ)と下られては何の餘韻もなくなる、即●の掛粘によつて二子の白にも影響を與へつゝ隅に餘韻を残す處が面白。

△「註」隅の死活に關すると同時に左側二間拓の白に對して少からぬ影響を與へて居る即ち後手を引いただけの代償は得て居ると言はねばならぬ。

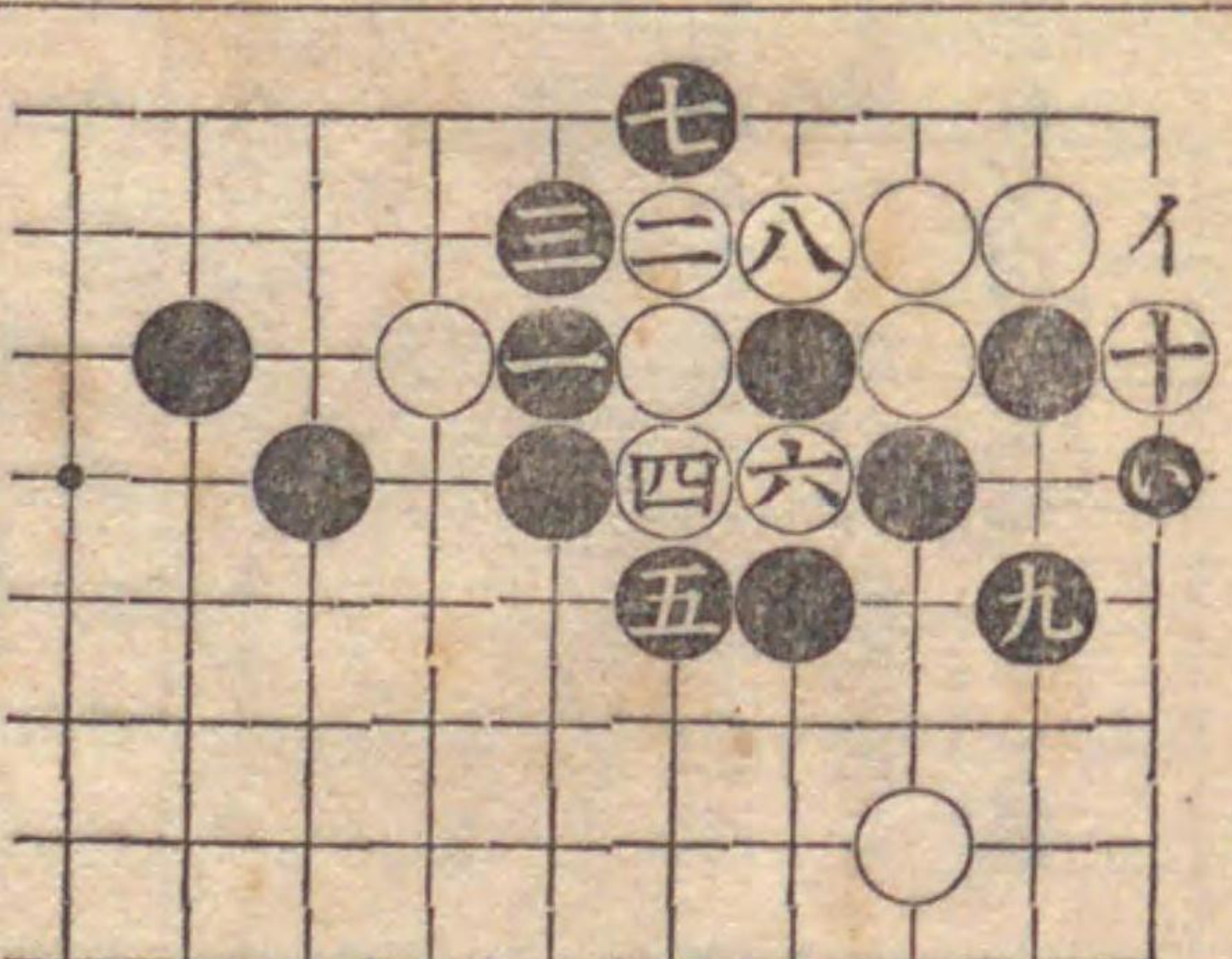
○(第六拾參圖) 黒が先手を取らうと思へば此く一と打ち白が二と下れた時手抜するので、黒白雙方共此の處は當分休戦状態である、後に至て黒は●と掛粘く手である即白●黒●白●となつて其處で又黒は手抜で●と抑へる味を見て居



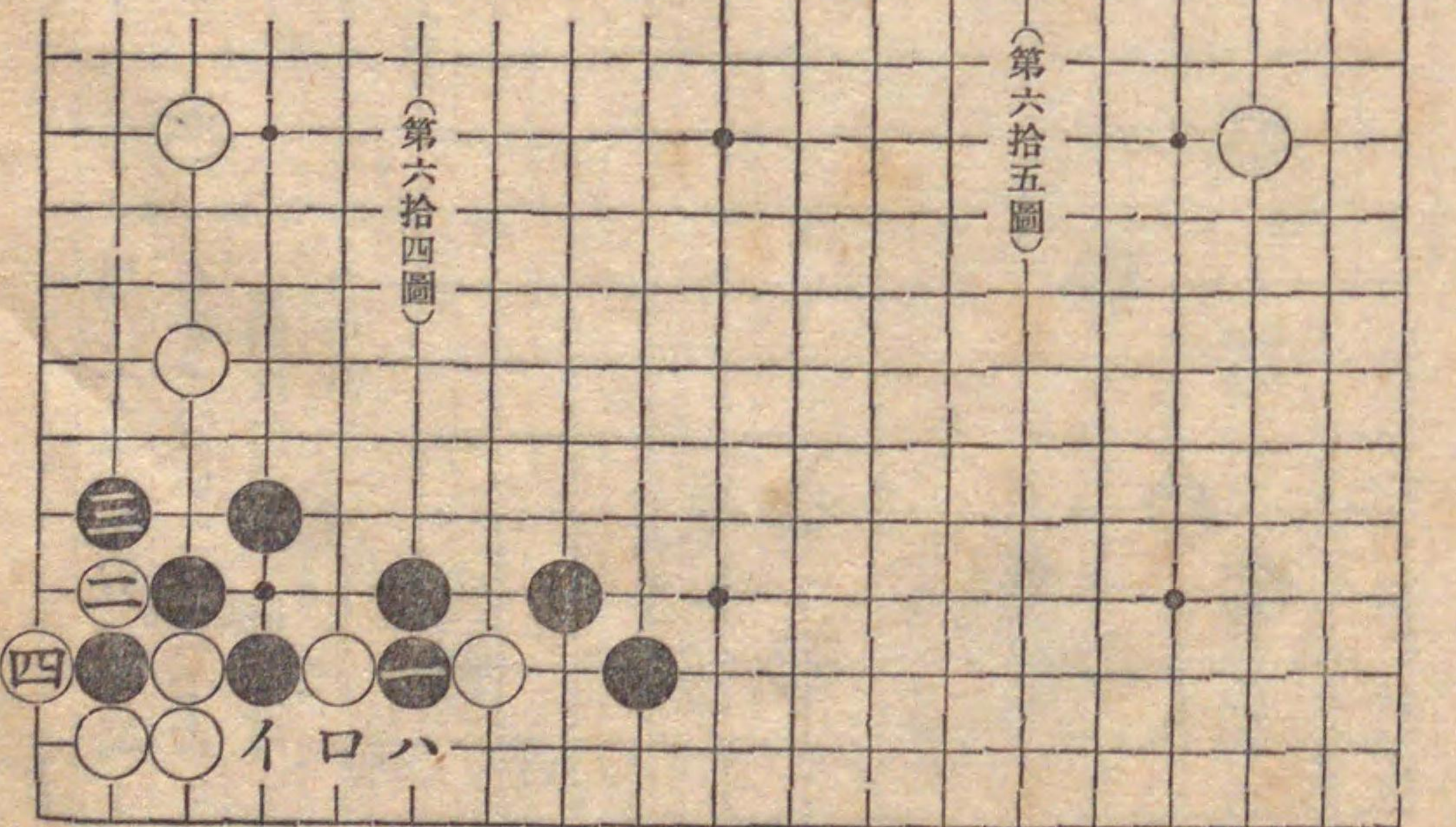
前(第六拾參圖)の黒白は先手と

は言ひながら餘り芳ばしい手ではない、何となれば白●黒●の交換の行はれた後は(ニ)と出截らるゝ味があるからである。

○(第六拾四圖) 乃で先手を取るには此く一と打つて白二子の間を突出しておくがよい、即白が(イ)と打つても(ロ)と打つても黒は(ハ)と下る手である

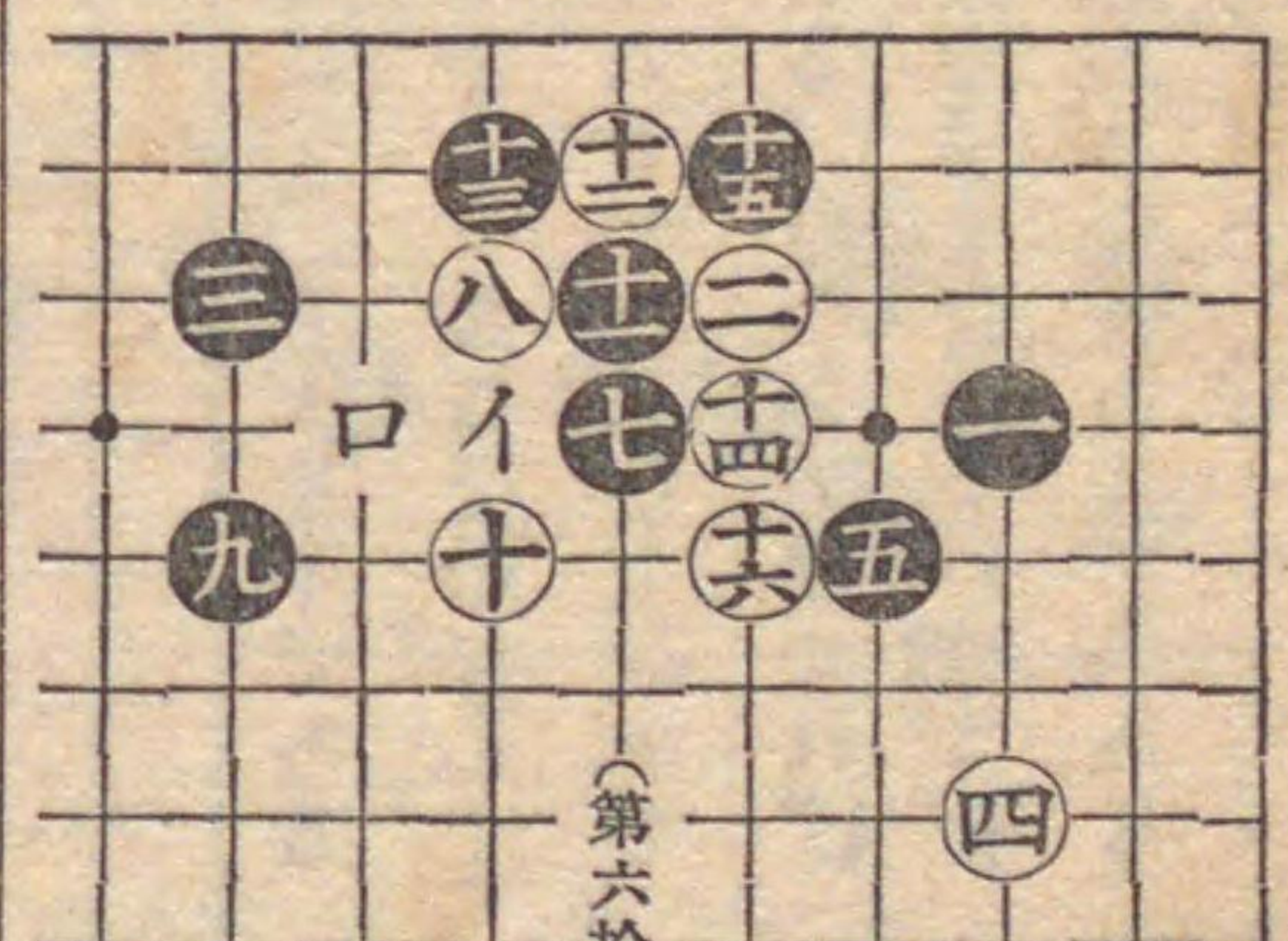


○(第六拾五圖) 白が二と下つてもやはり黒は三の押しである、白が四、六と來た時黒が七とアテを利かしておいて九と掛粘ぎ白が十と縛れば手抜である、白十を手抜すれば黒に(イ)と縛られて活がない、即黒の手は白に十と縛させ手抜しておいて、他日●と押へを利かさうといふ手である是は(第六十三圖)と同意味なのである。





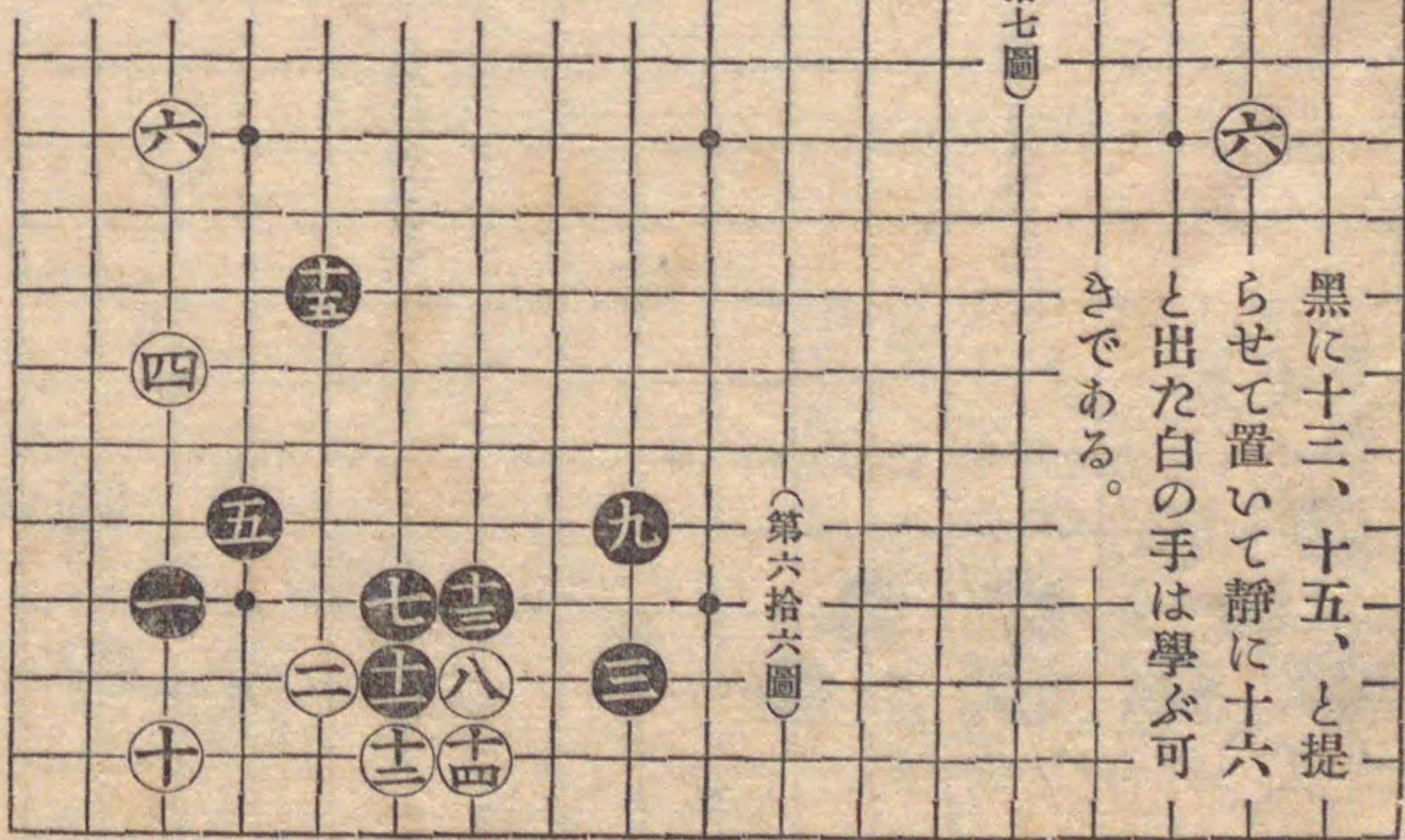
○(第六拾六圖) 黒が前諸圖の様に斜走若くは尖で圍うて見ても附近の布石の關係上餘り面白くないといふ様な場合に此く九と飛ぶ事がある、次で白が十と隅へ走れば、黒は十一と突出し十三と打ち白を低地に壓しておいて十五と高く臨み白四、六の勢力を削ると同時に中央に厚壯な地を造らうといふ策である、即本圖の様に黒から十一、十三と打たれては白の不利益はお話にならぬ。



(第六拾六圖)

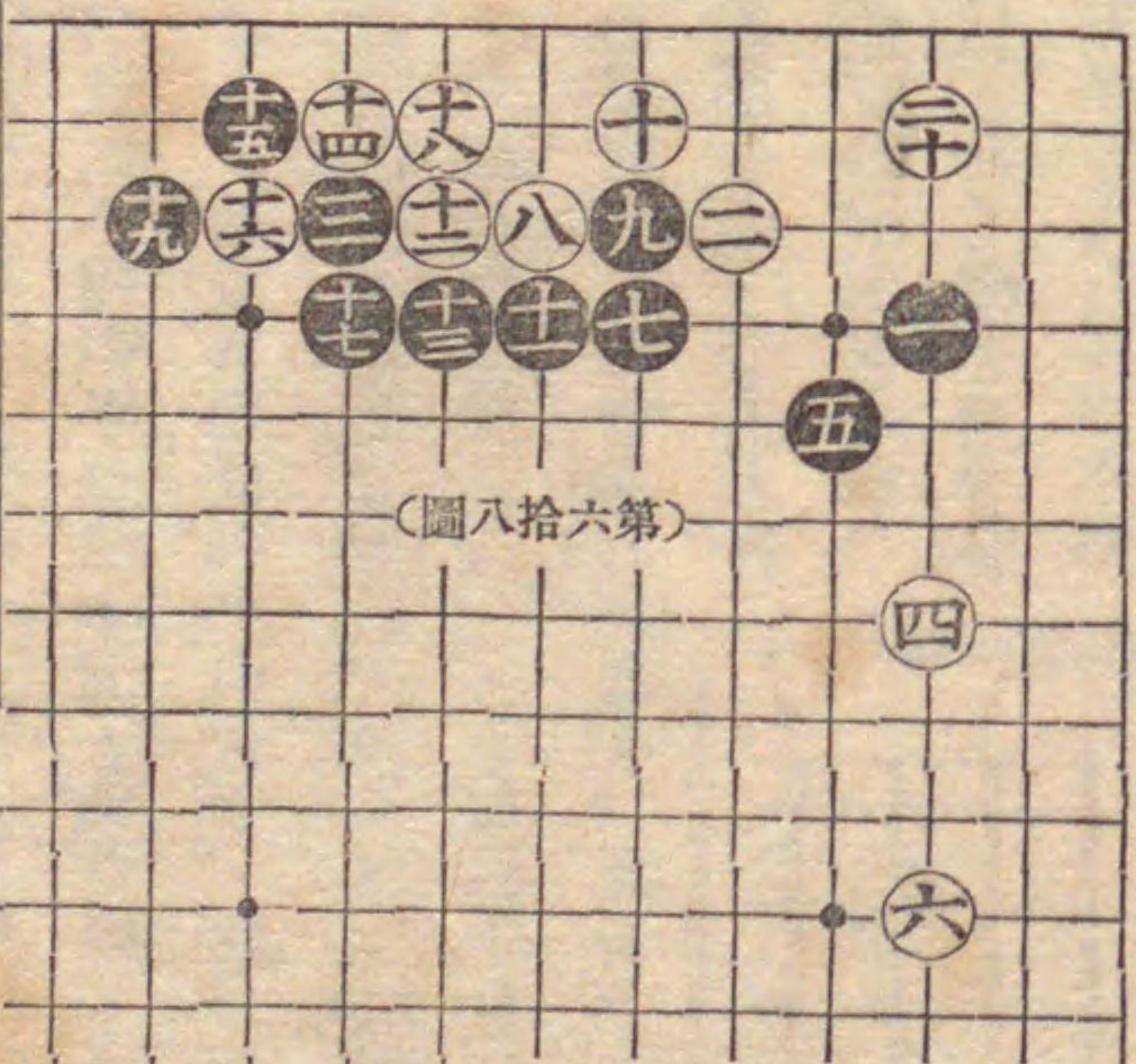
黒に十三、十五、と提らせて置いて靜に十六と出た白の手は學ぶ可きである。

○(第六拾七圖) 白十の手は前圖の様に上を塗らせまいといふ手で、前圖に於ける黒の趣向を破つた傾もある、即十の一手は黒に(イ)と打たして(ロ)と押へ十四から押し出さうといふ意である、黒の十一、十三は又白の策のウラを搔いた手である。



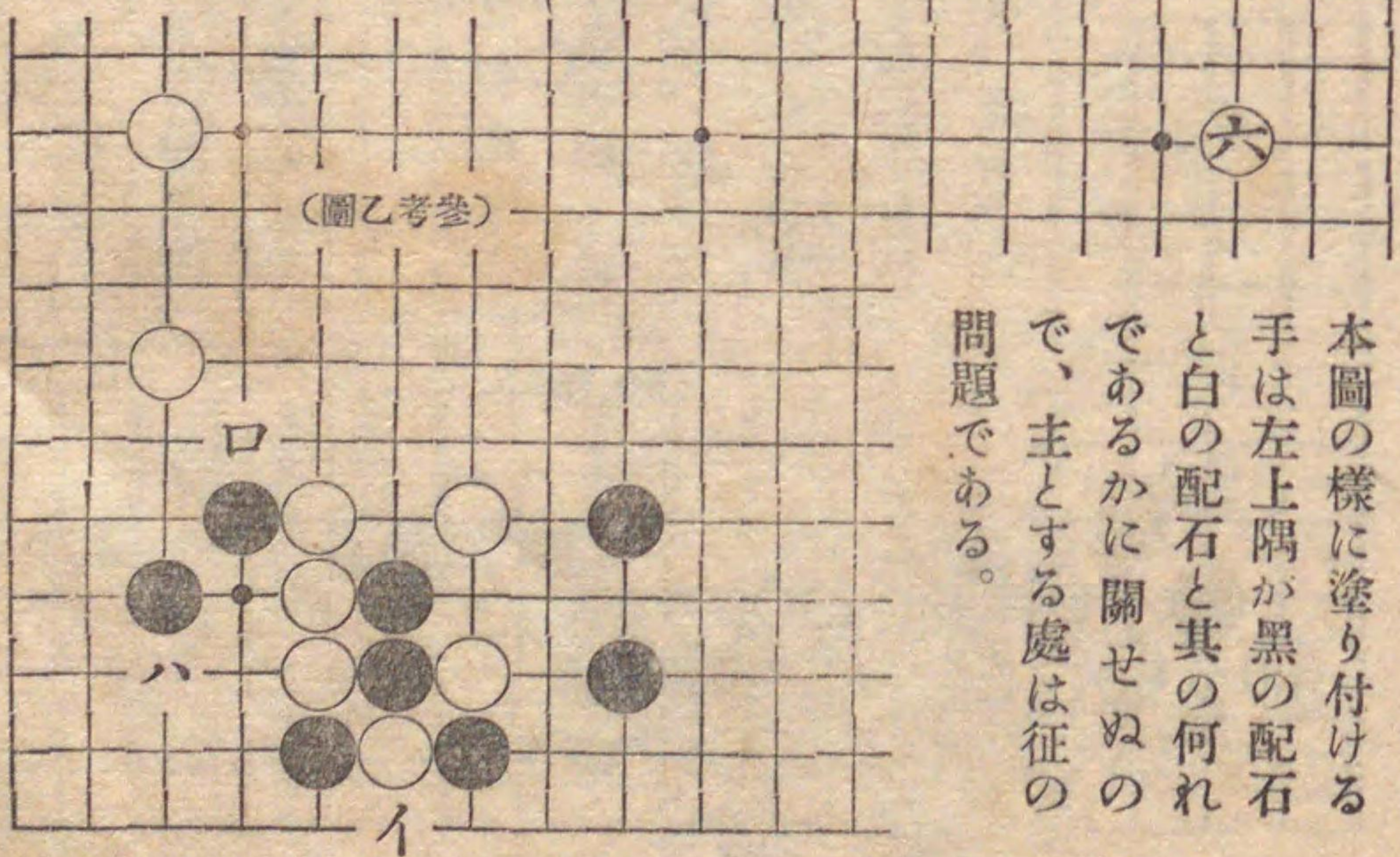
(第六拾七圖)

△(參考乙圖) 前圖の結果として黒が十七の手を何れに打つ可きかと言ふと、單に(イ)と一子を抜いておくのもよい、又(ロ)と行びて白を隔て、打つのもよい、或は(ハ)と隅を下つておくのも決して悪くはない。黒が(イ)と提れば白は無論(ロ)と黒の頭を抑へる手である、又黒が(イ)と提らず(ロ)と出れば白は(ハ)と頂けて隅を犯しておくがよい、若又黒單に隅へ(ハ)と下れば白は(ロ)と黒の出路を閉鎖しておく手である。



(圖八拾六第)

(圖乙考參)



本圖の様に塗り付ける手は左上隅が黒の配石と白の配石と其の何れであるかに關係せぬので、主とする處は征の問題である。

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~

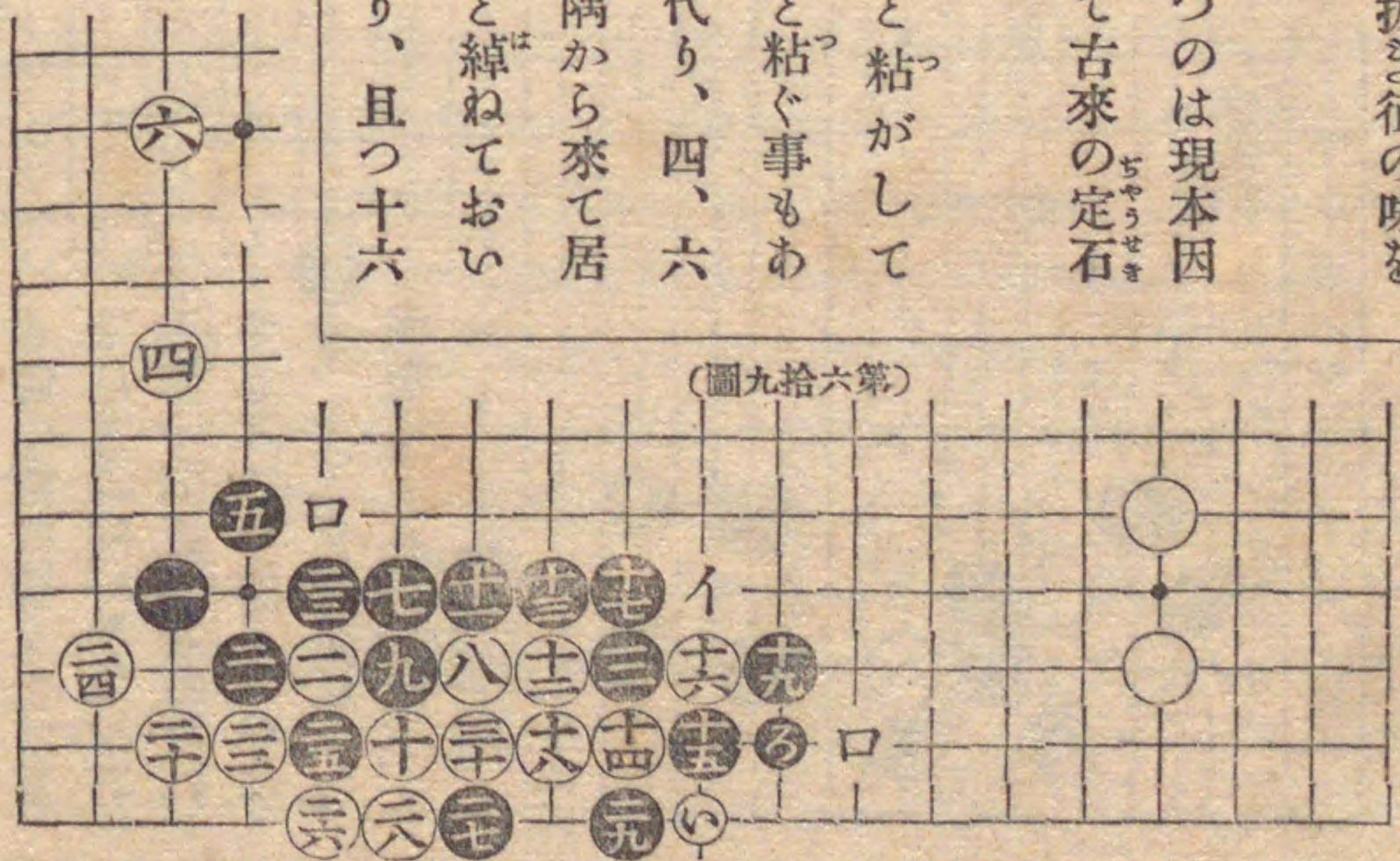
○(第六拾八圖) 本圖黒九以下は場合と言はんよりは寧ろ趣向の手である、即ち手際よく塗つける考であるから若も十六が征に提れぬ時は九の手からして考へねばならぬ。



○(第六拾九圖) 黒二十一の手で昔は(イ)と打つて白十六を抜き征の味を消して打つたものである。

「註」此の二十一を此く夾頂けて二途三途に働かす手に打つのは現本因坊研究の新手である、一々斷らぬが此ういふ新工夫によりて古來の定石や布石の面目を改めたものは幾らあるか分らぬ。

白二十二を二十三の點に出れば黒は二十二に下り白を二十五と粘がして(ロ)と抑へればよい、黒二十三の時白は二十四の手で二十五と粘ぐ事もあつた、二十五と粘げば黒から二十七、二十九と收束する手は利かぬ代り、四、六の白二子は依然として手薄い、が本圖の通り二十四と尖みが隅から來て居る限りは四、六の二子は安心である、黒二十七は單に二十九と縛ねておいてもよい、此の二十九の縛の利は、例せば右下に白の布石があり、且つ十六の一子が征を免れるといふ様な場合となつて、(イ)と行つた際、黒は(ロ)と掛粘いで眼形を造る事が出来るが、此の縛が利かぬと、黒(ロ)の時(イ)と縛られて(ロ)と粘ぎ眼形を破られるの悞がある。



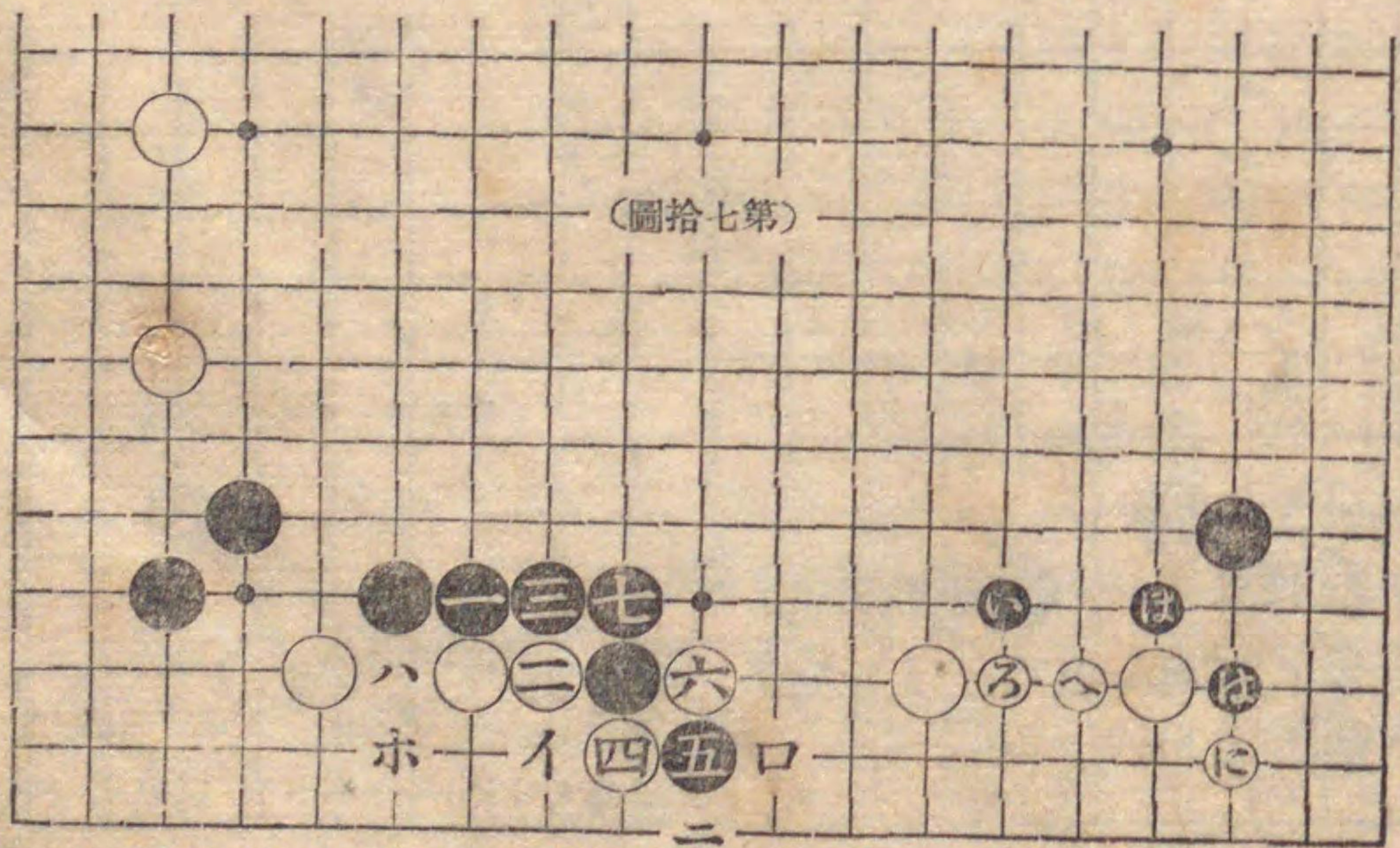
(圖九拾六第)

○(第七拾圖) 場合によつては黒は突出さずに單に本圖の様に一、二、と押し五、と二段に縛ねて打つ事がある、其は例せば圖に示す如き右下隅に白の布石のある場合、(必しも此ういふ形とは限らぬ低き位置堅固な形の白のある場合と假定しておけばよい。)

此ういふ場合は(ハ)の突出しは保留しておいて先づ一、三と打ち、白が提る必要を感じぬ處へ五の一子を運んで之を提れよと打つ手である、

白八の手順は(イ)と粘ぐ手と、(ロ)と提る手とある、白若し(ロ)と抱へれば其時黒は(ハ)と突出すがよい、次で白が(ニ)と提つても黒は尙手拔が出来る、即白に(ホ)の盤りはないのである。

白が(イ)と粘ぐ手の後の變化は次頁以下で詳述しやう  
「註」右下布石の形は目外黒に對する白二間拓であるから假に黒から(イ)と覗き、白(ロ)黒(ハ)白(ニ)と十分白を凝らした手順を示しておく。



(圖拾七第)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~

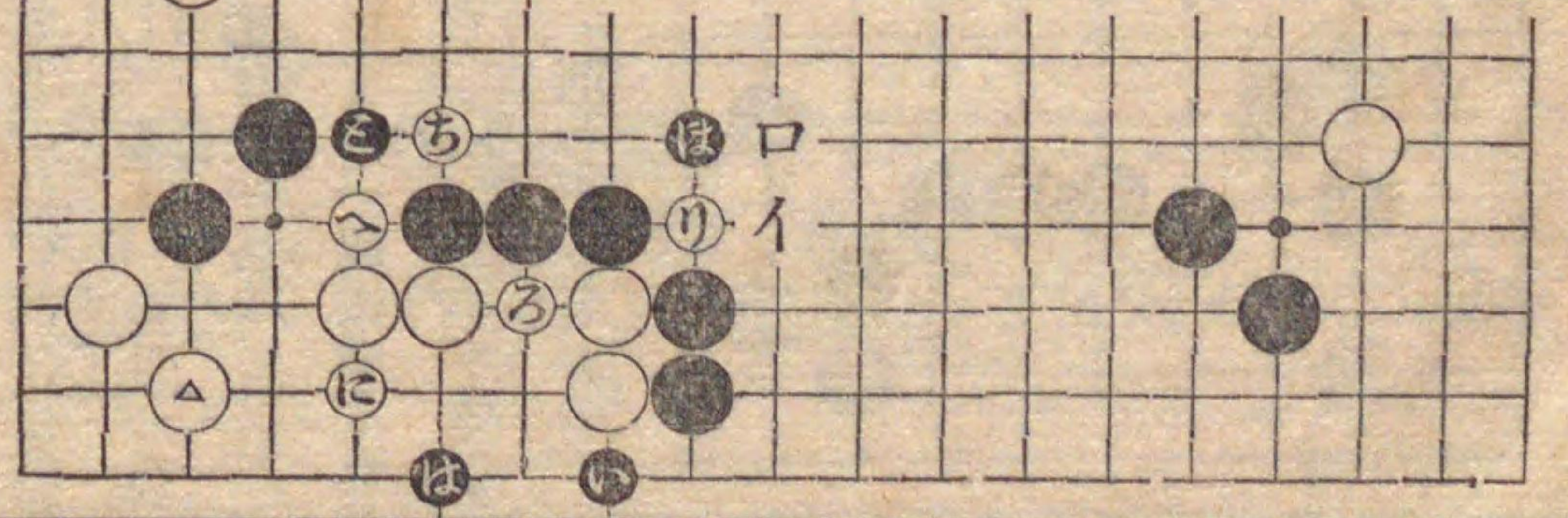
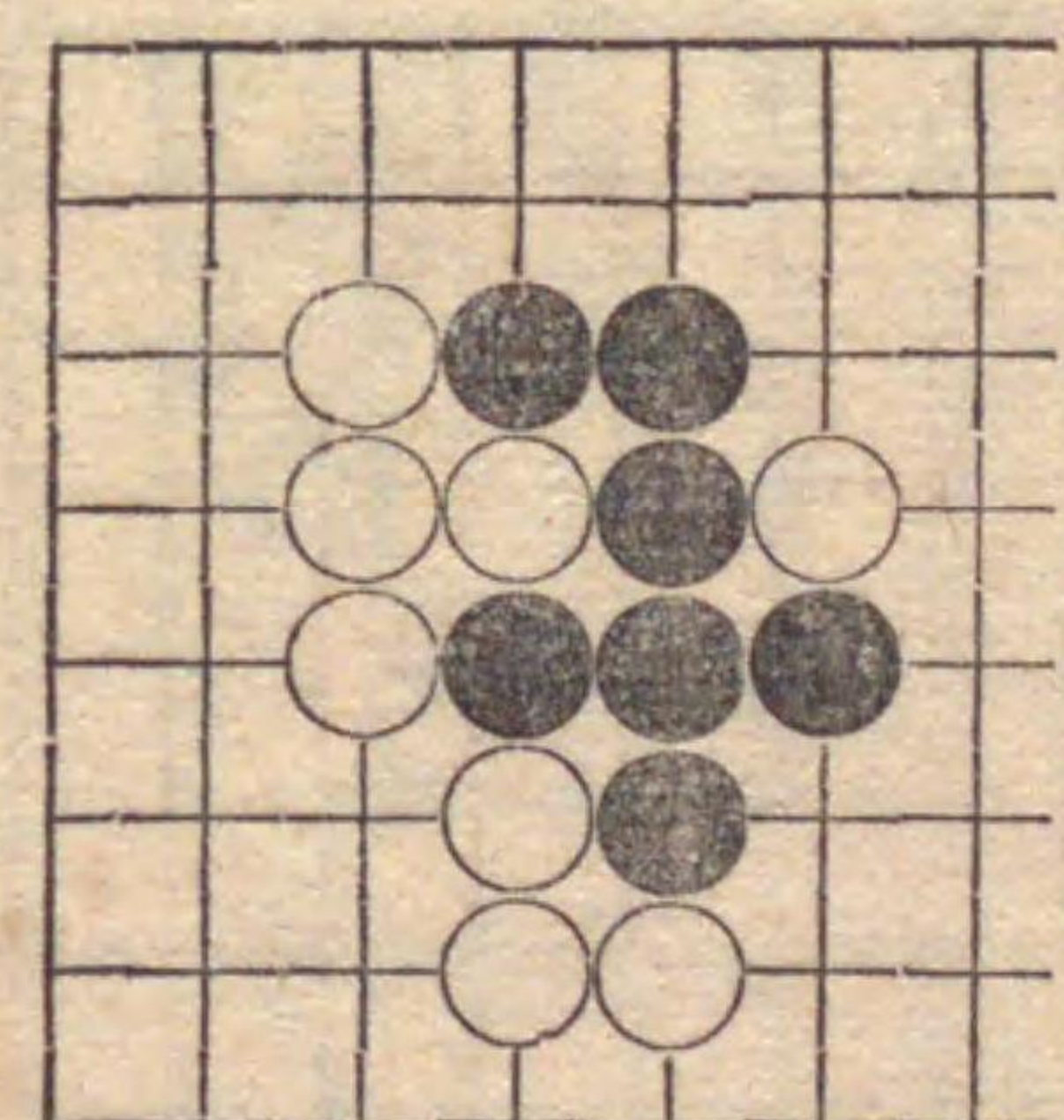




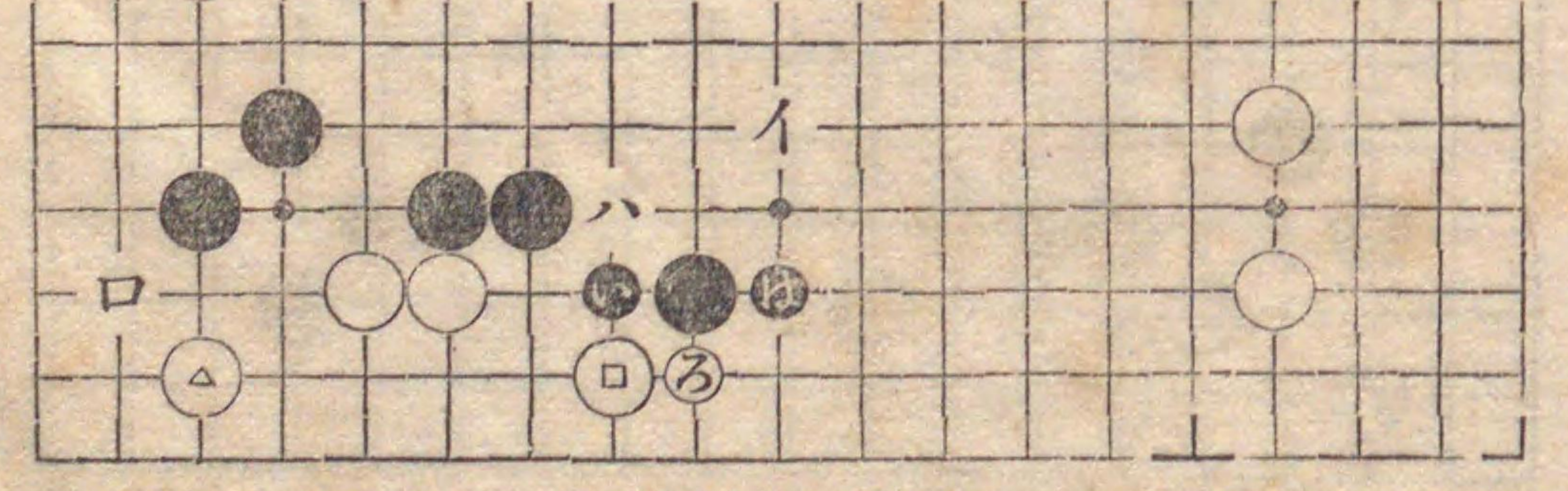
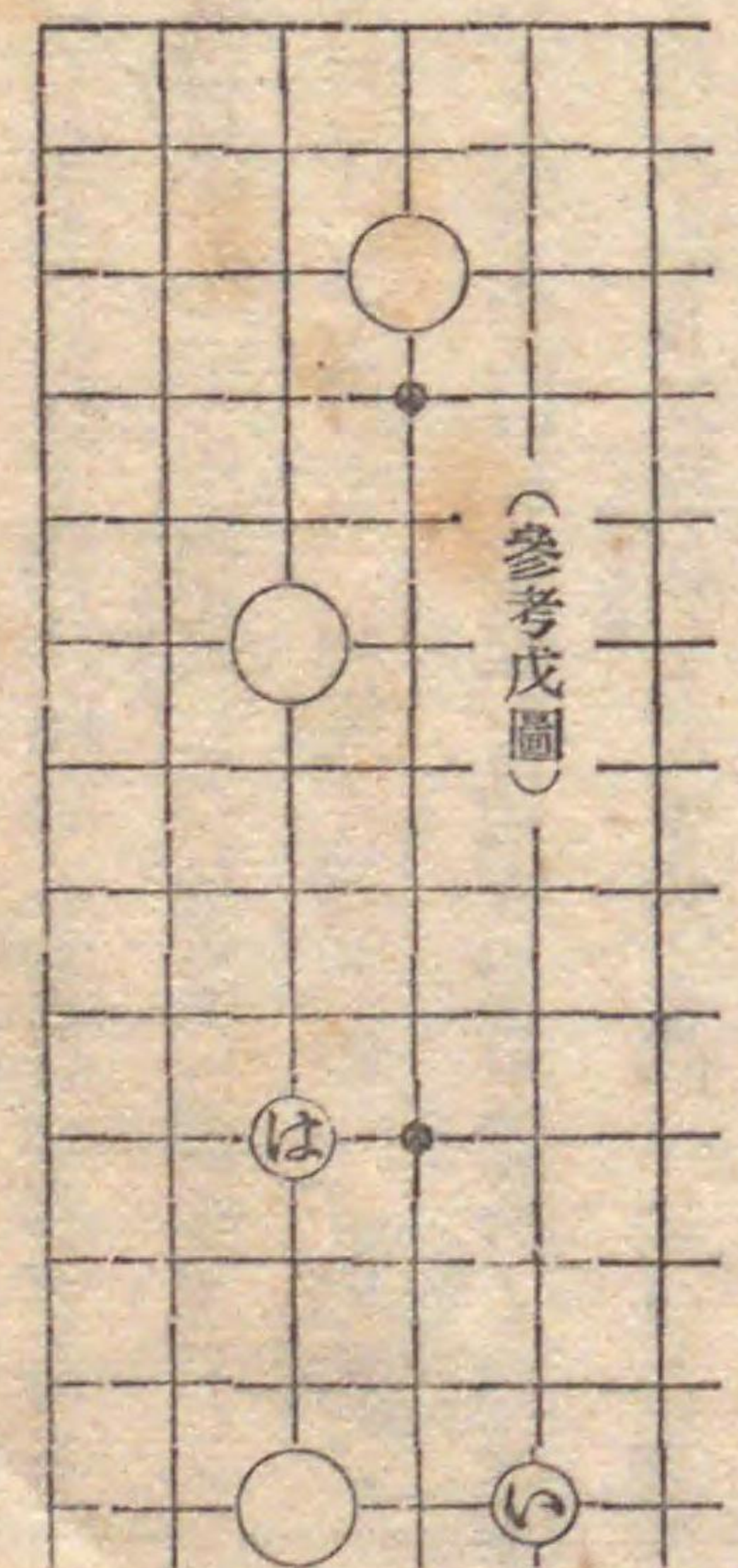


△(参考丁圖) 前圖黒が十五と斜走に(口印へ)掛粘ぐ手を以て(と)と緯ね白(と)粘ぎ、黒(と)、白(と)と運んでおいて(と)と掛粘ぐ事もある、是は右下隅に圖の如き黒の布石があつて相當の黒地が出来やうといふ見込のある場合の手である、が然し黒が(と)、(と)と打つて下に白地を四五目削つたのは一見得の様であるが、子細に觀察すると、此の(と)と掛粘ぐ手は、結局(イ印)へ覗かれる形であり如何しても削られる素因を持つて居るものであるから、決して好い手といふ事は出来ぬ、(口印)に掛粘ぐ可き理を何故(と)と掛粘いだかと言ふ(と)と散地がツマツた後であるから終に白から(と)と來られ(と)と抑へた時(と)及(と)に多少の缺點を残すのが氣味悪いから此(と)と掛粘いで其に備へた譯である。

△最初白が(と)に拓かず(△印)隅へ走つたのは左上に圖の如き堅固な形のある場合と見てもよい、即ち自分の勢力の堅固な方へ(と)と行くのはツマラヌからである。



△(参考戊圖) 黒が十一(本圖(と)の點)と抑へる手を以つて圖の通り(と)と打ち白(と)と這はして(と)と塗つて行く手がある、然し之は定石として存在す可き價値はない、何故なれば、例せば本圖の如き右下に白の布石があつて初白が十の手を(口印)へ走つて來た時(と)と押し、白(と)、黒(ハ)白(口)黒(イ)と始末をして見た處で、右下方に黒地が出来る譯でないといふ様な場合に、此(と)と打ち(と)と這はすのである、勿論這はされる白も面白くはないが這はせる黒は尙更實利のないツマラヌ手である、溯つて論じると白が最初(と)若くは(と)と打たず(△印)へ走つたのは、たとへ(と)、(と)方面を打たずとも大して黒に利益を占められる悞のない場合と認めて隅(△印)へ走つたものと推定せねばならぬ、して見ると益々黒(と)の手がツマラヌと言ふ事になる、以上の理由を綜合すると黒は初の三間夾からして考へなければならぬといふ道理になるから、此の黒が(と)と打つ手は定石ではなく或特殊の場合に稀に行はるゝ手と心得ねばならぬ。



~~~~~(石 定 先 互)~~~~~







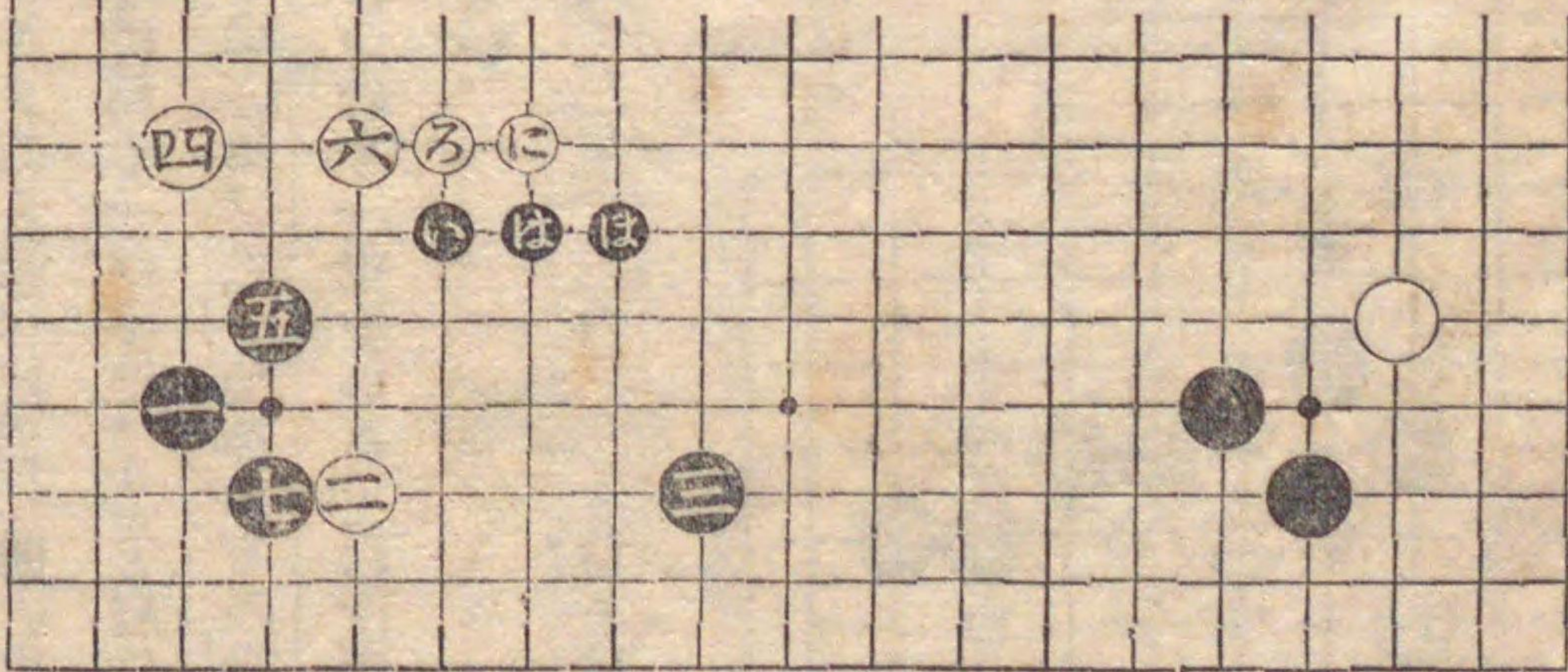




○(第七拾九圖) 黒が五と斜走に四の肩へ行くのは決して利益のある手ではない『やはり前來諸圖の通り(イ)と尖むが理想的手である』此く五と斜走するのは黒としては餘り感心せぬが若し黒白地を換へて居て白から打つたものとすれば、先づ策の一種として許す可き理由も無いではない。

本圖白十四となつた後、黒から●と縛れば、白は◎と走つて暗に◎の着點を覗ふがよい。

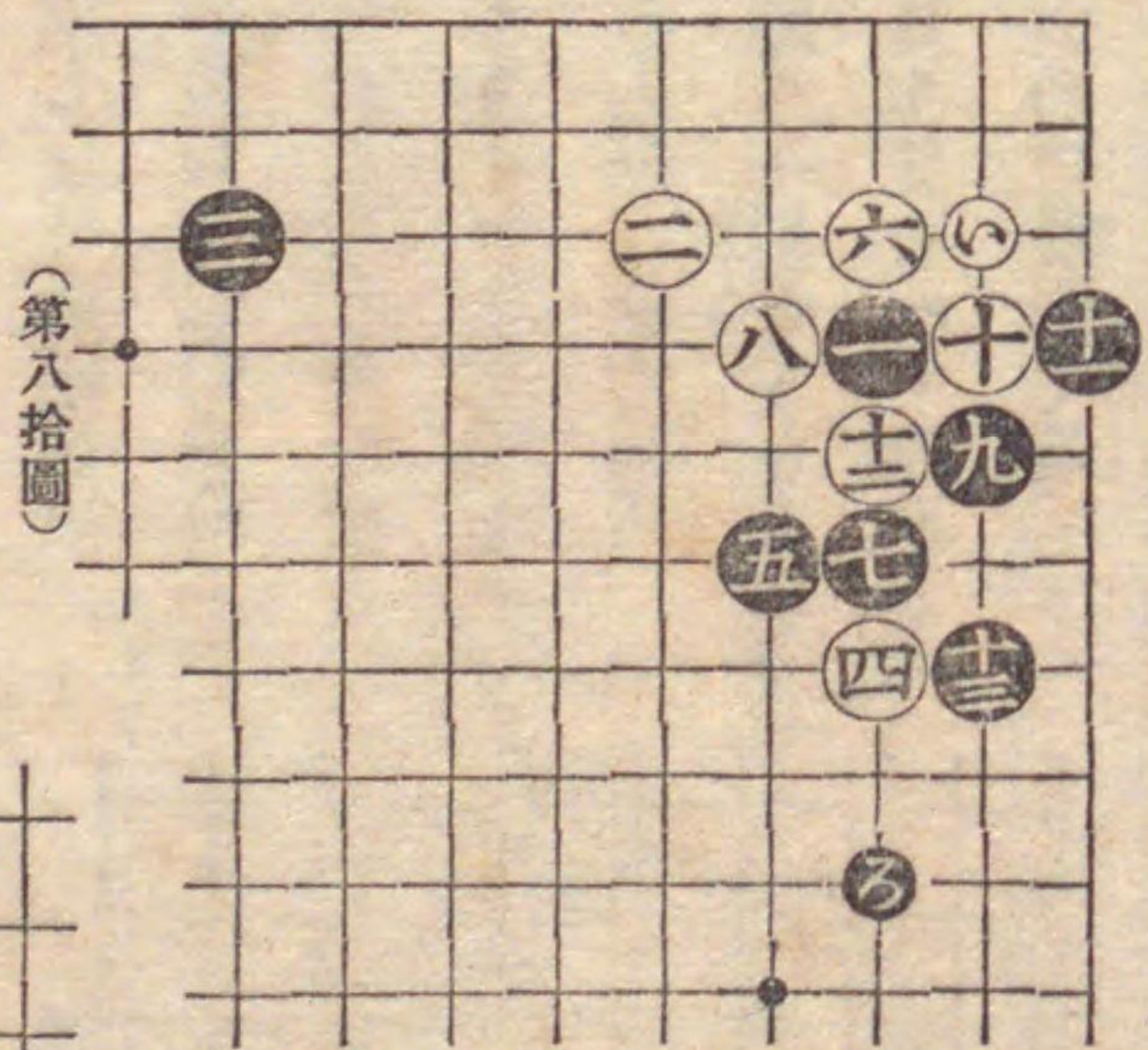
○(第七拾八圖) 白が六の手で此く一間に立つのは無論左上布石の關係によるのであるが、此の際黒は直ちに七と尖頂けて隅の活を確にしておくがよい、後に至つて黒から石を運ぶとすれば先づ●であらう、黒が◎と打ち白が◎と應ぜずば黒の打ち得である、が若し◎と押されると、爲めに白地が多く出来るか黒地が大きくなるか、此等の計量を明にした上でなくては●の手は容易に打てぬ。



(第七拾八圖)

尙黒が隅から白六をアテて●と縛ねて居るに對しては、白は後に◎と抑へる味の残つて居る事も考へておかねばならぬ。

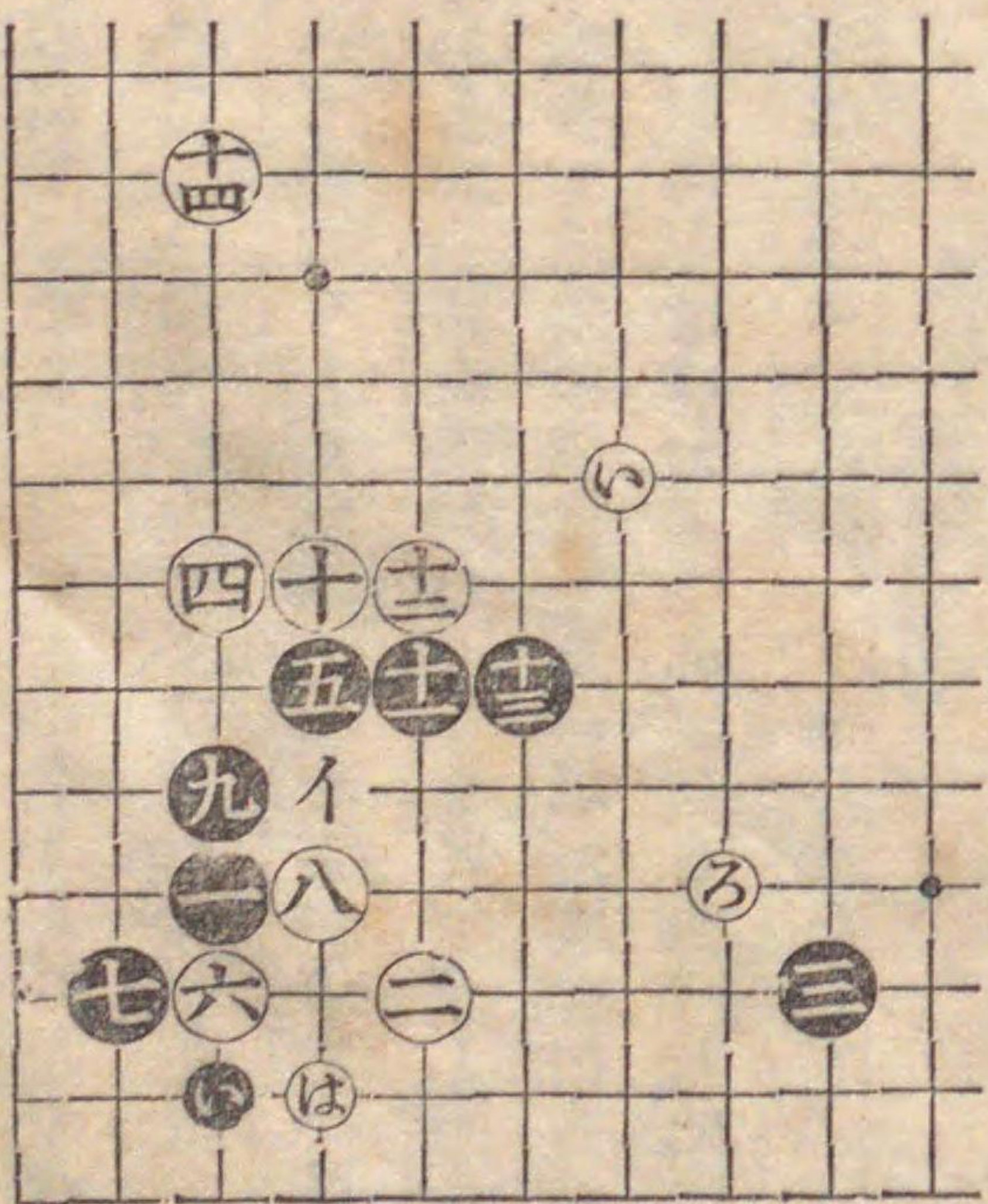
○(第八拾圖) 白が十二の手で提らずに◎と粘いだならば、黒は十二の手を以つて◎と一間に夾んでおくがよい、要するに以上二圖の手順と其の大體の意味は一間夾及二間夾の二間夾返しの時と大差はない、唯一間よりは二間二間よりは三間と三の子の隔だつて居るだけ黒の利益と認めておけばよいのである。



(第八拾圖)

二間夾定石第三百十五頁參考圖を参照せよ

(圖九拾七第)



一間夾定石

第六十三頁第五十五圖より第六十六圖を仔細に参照せよ

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~

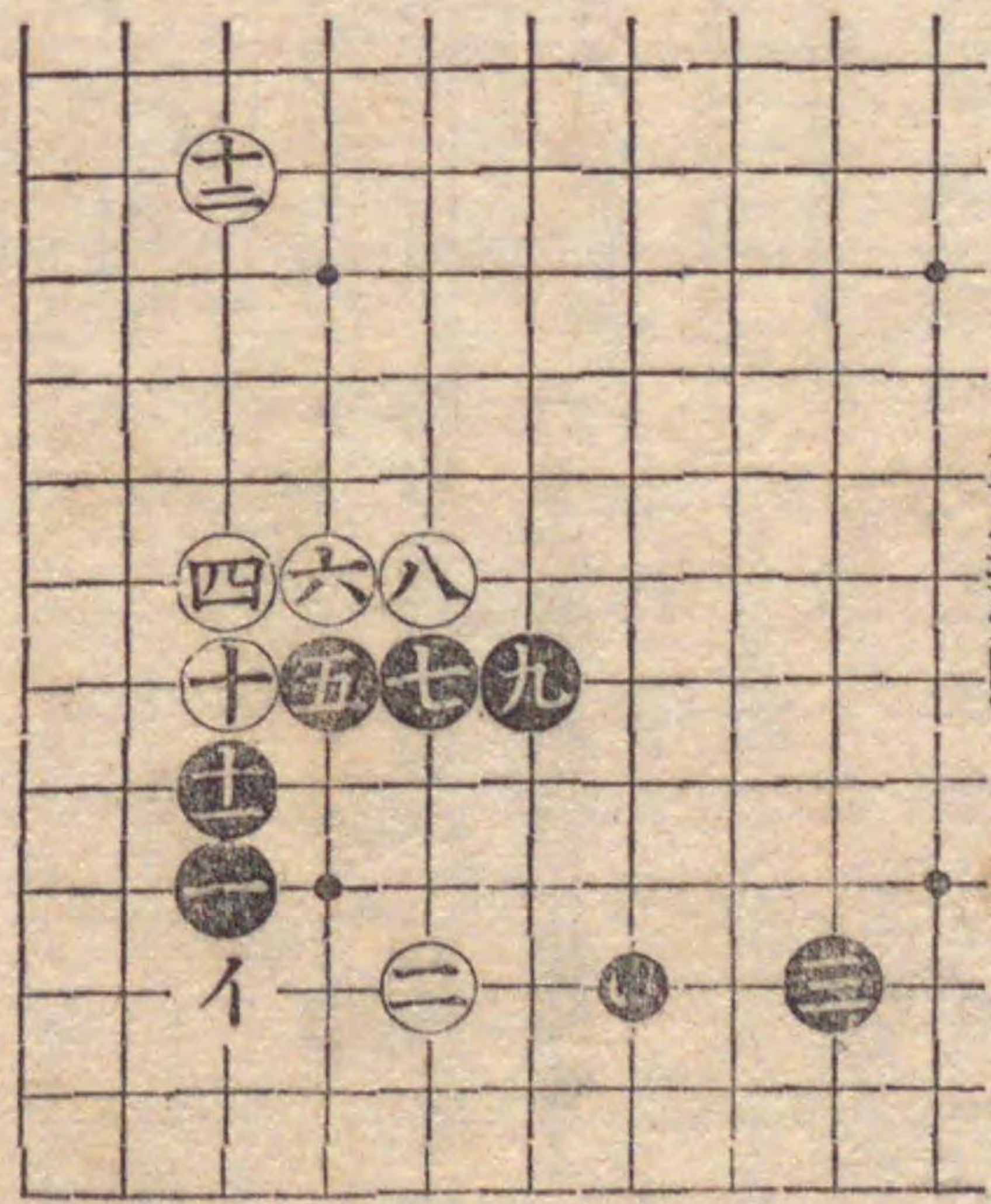


○(第八拾壹圖)

一間夾の二間夾返の定石では此の形の出来た時に、白は十の曲りを打たずに單に十二と拓いて居る、其は(此の十の點は大キイに違はないが)一間夾の場合では若し黒が手拔すれば(イ)と頂けて隅を打たう、ヨシ又黒が直に十の點へ抑へて來やうとも元來一間夾といふ窄い區域であるから二の一子を捨て、も惜しくはない、即ち右方から(一間夾黒の一子をば)三と夾んで打つてもよい、といふ意向である、然るに本圖二間夾の場合では黒の包容する區域が廣いから必ず十と曲つて先づ隅の黒に多少の缺點を造つておいて、十二と自ら地域を定めねばならぬ、若此の三間夾の場合で白が十と打たずに十二と拓いたならば必ずや黒は十の點に抑へて來るであらう、

「註」本圖の後黒は此の隅を如何始末したならば良い

かといふに、先づ●と一間に詰めておく位のものであらう、是を今假に手順を變へて言ふと黒が最初に三の手で●と一間夾にして居る場合に本圖十二迄の手順が運ばれたものとする、黒は今十三の手を何れへ打つかと言は、三の點へ一間飛するよりはモ少し氣の利いた手もありさうなものである、乃ち基く所は五の一手の佳くないのに基因する。



(第八拾壹圖)

○(第八拾貳圖)

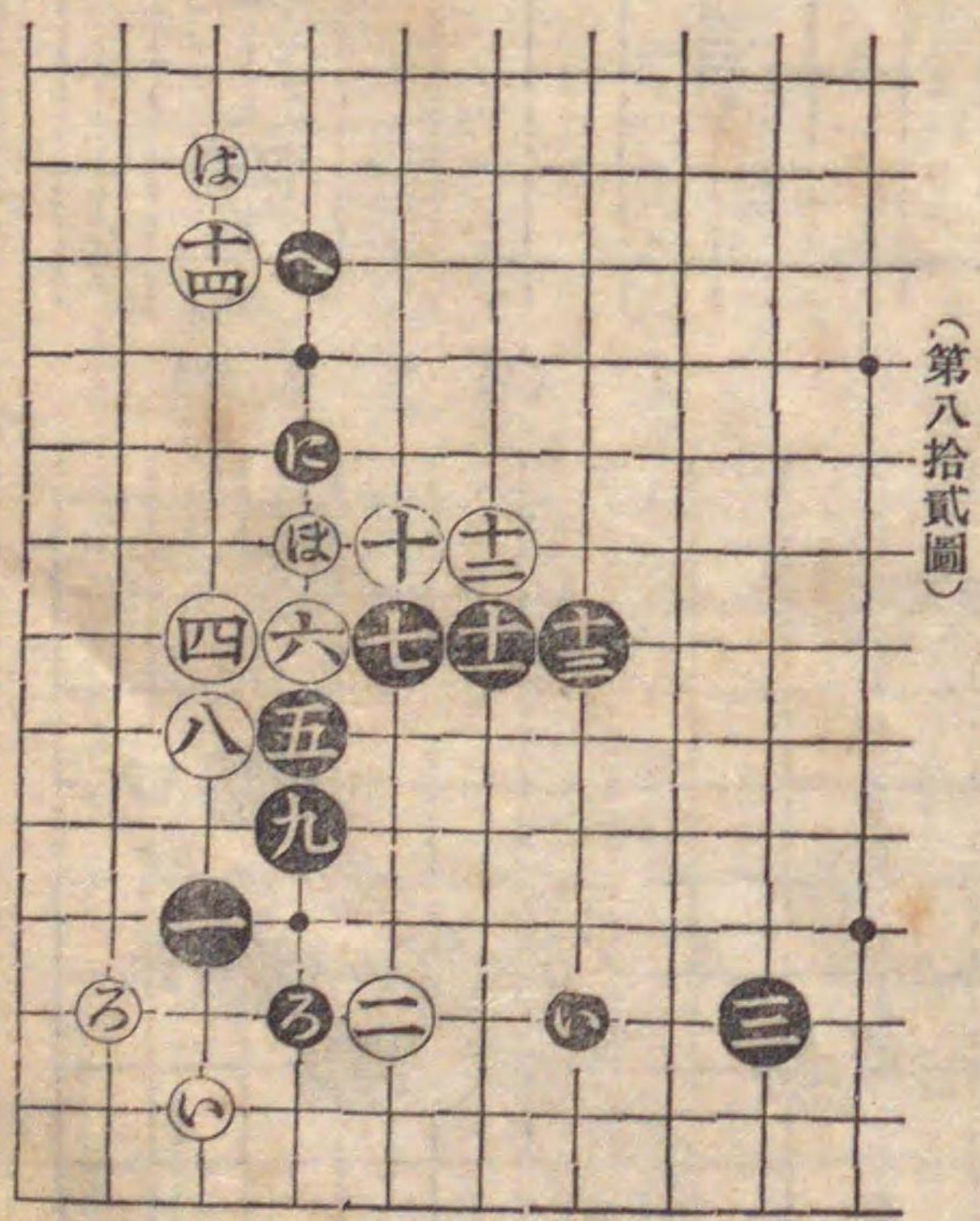
黒が白六の頭を七と縛ねて來た時、白は手拍子を以て八と曲り、黒をして九と極めて不利益な氣の利かぬ手をさすがよい、白若八の手で十と打たば、忽ち黒に八の點に抑へられて不利益を蒙らねばならぬ、次で十、十二と押し、黒を三子行びさせて十四と拓くは極めて要領を得た手である。

「註」本圖の後黒はやはり●と詰めておく可きであらう、黒に●と詰られた後でも白からは尙●の邊から打たれる理がある、若し●の詰がないとすると白に●と走られて容易に活さられる味がある、黒が●と詰めずに●と隅から尖頂けても、白から●と置かれる理があつて面白くない。

△問 白の勢力が四、六、十、十二と四子加はつた處であるから、更に一路躍進して白十四を●と四間拓に打たば如何、

▲答 白十四を●に打たば、黒より●と來られ、白●と粘いだ時、●と肩から來られて、折角造つた地域を蹂躪さるゝの患がある。

以上二圖共一間夾定石第六十三頁より第六十七頁迄及二間夾定石第三百三十五頁参照



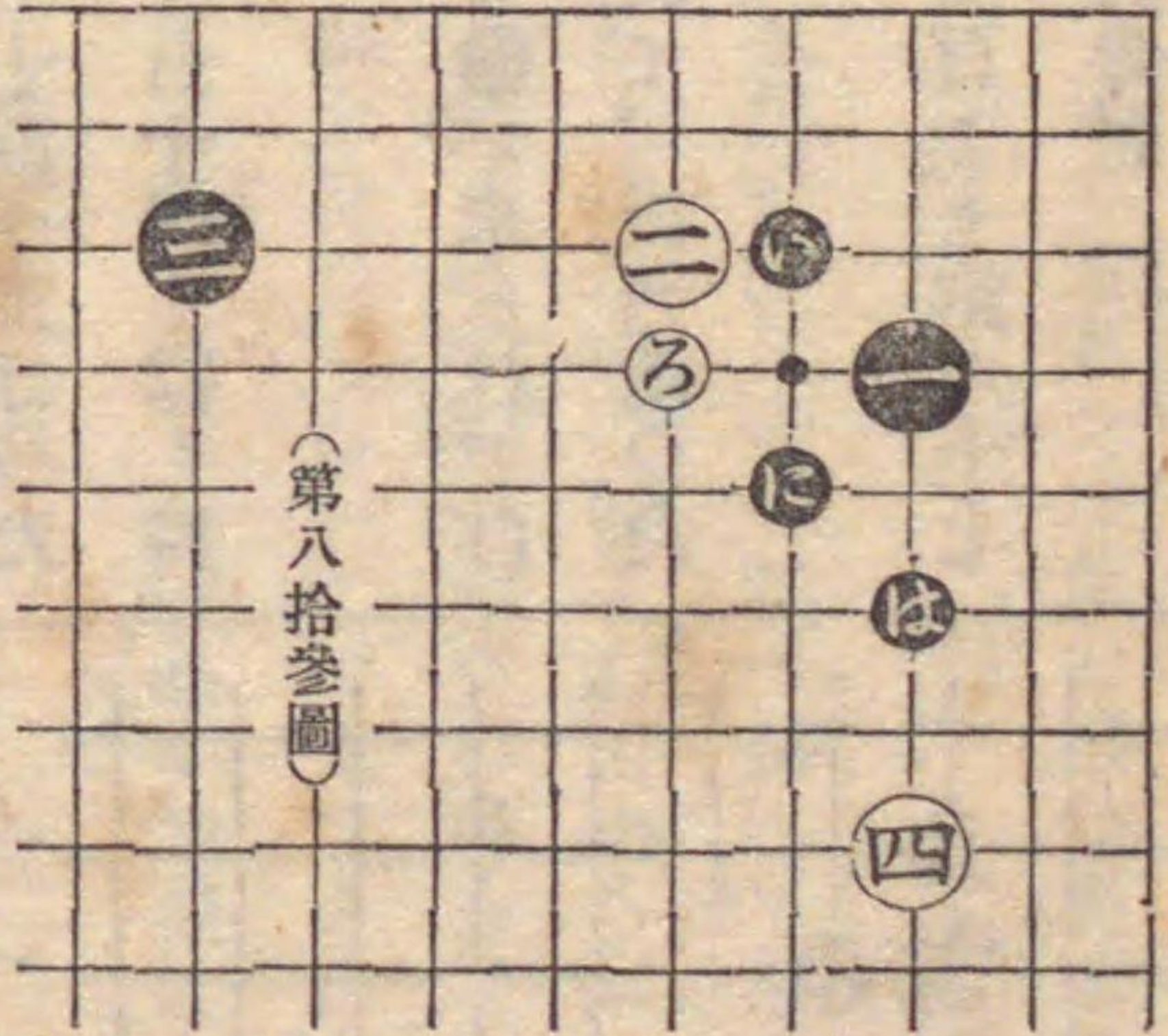
(第八拾貳圖)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



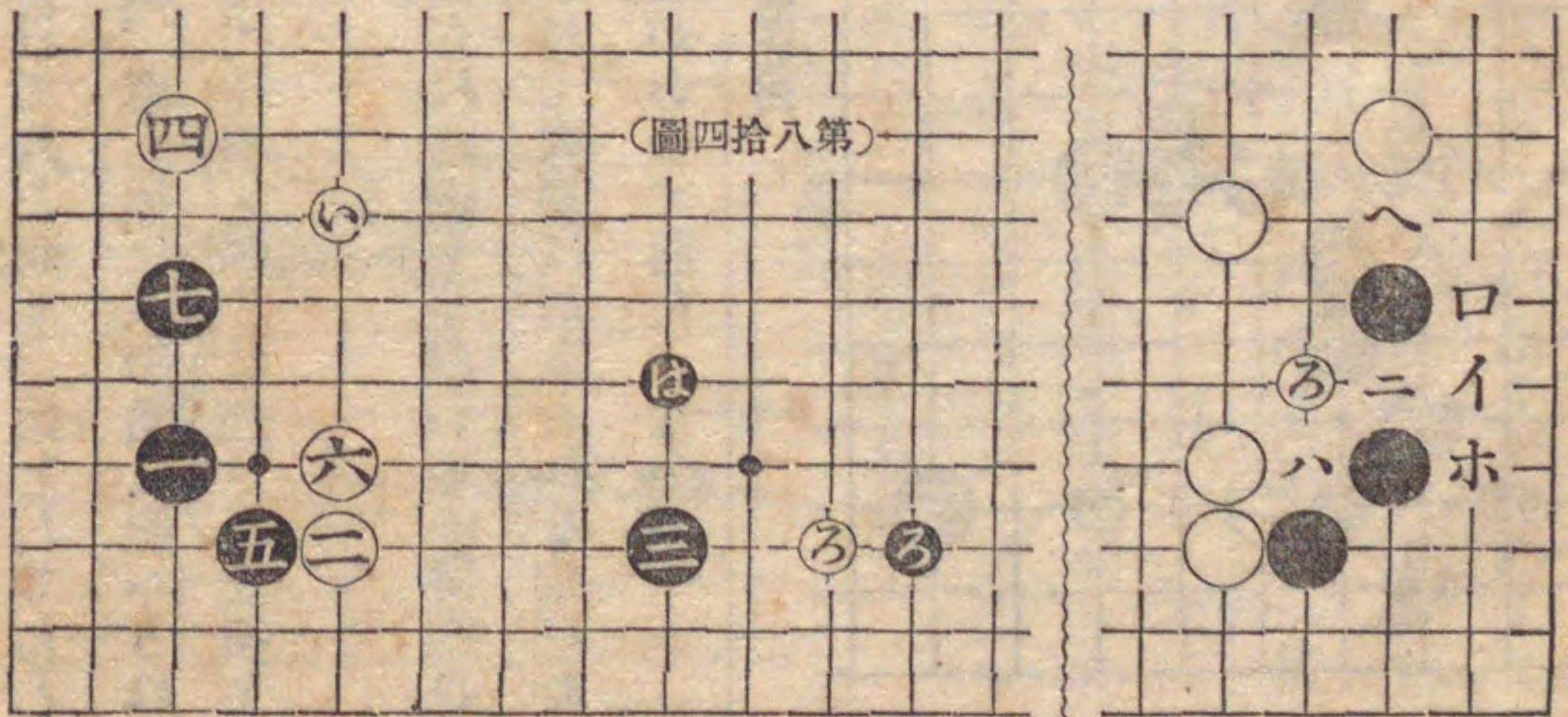
「三間夾返」

○(第八拾參圖) 白が此く三間に夾返した時は黒五の手を尖頂け白が立つた時と一間するか、又黒、白の次黒と尖むか、或は初からの點へ頂けて打つか、の三通りである。



(圖天考參)

○(第八拾四圖) 黒七で此の定石は終である、次で白は第八でと圍ふ手と、と黒三を攻る手とある、白がに來れば黒はと二間に拓く、白がと夾めば黒はと飛ぶかの點に斜走するか。  
 △(參考天圖) 前圖の結果白にと圍はれたならば黒は出路はない、何故なれば白からとの窺きが利いてをるからである、然しこの窺きを打つて終つては味がない、此の儘おけば後に至つて附近の白が堅固になれば白は(イ)と置き黒(ロ)と截されば(ハ)と打つ



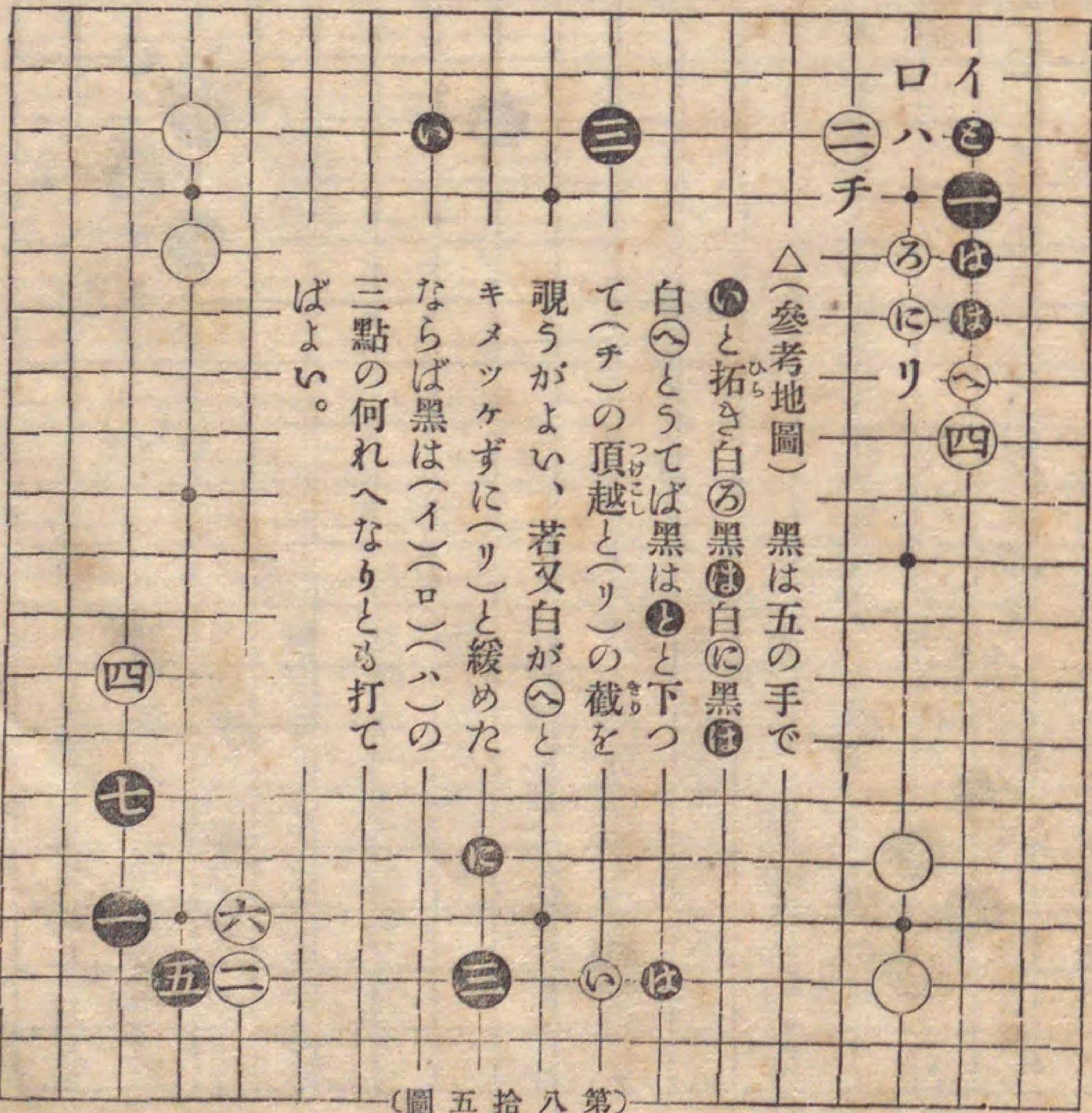
(圖四拾八第)

或は白(イ)の時黒(ニ)と粘げば、白(ロ)と盤り、黒(ホ)と抑へ、白は(ハ)とキメツケる事も出来る。

○(第八拾五圖) 白がの點に圍ふと右下隅に本圖の様な布石があれば黒は必ずと拓く、其では折角の白地が出来ぬから白は先にだつてと詰めねばならぬ、其時黒がと一間して呉ればよいが、若し黒にと跳出されると四の一子は薄弱を感じる、乃て若も黒が白の詰を嫌ふならば初め五と尖頂ける手での點に二間招するがよ。

(參考地圖參看)

(圖地考參)



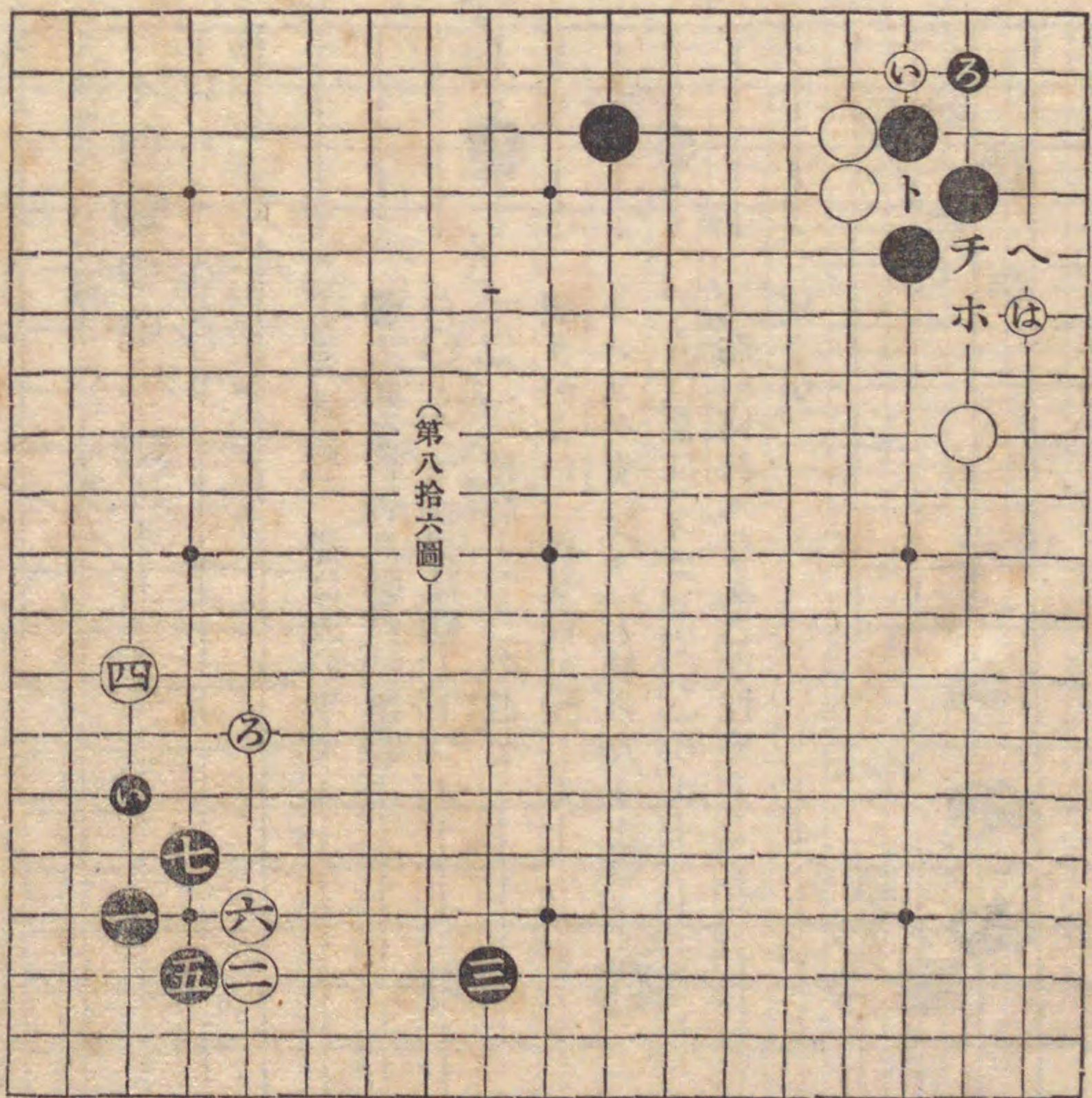
(圖五拾八第)

~~~~~(石定先五)~~~~~



○(第八拾六圖) 黒が本圖の様に七と尖こひ意は、前圖の様に●と打つ結果は◎と打たれて四の白と二、六の白とを容易に連絡せしめ外部を閉塞されるのを嫌うたので、即ち白を隔て、打たうといふ主意である、本定石は是の手を止りとする。

△(参考人圖) 前圖の後時機を見て白は◎と縛はね黒◎と抑へた時(ト)(チ)の截きりを見て◎と打つ手がある『其時黒(ホ)なれば白(へ)、又黒(へ)なれば白(ホ)となる理まがあるから黒は警戒せねばならぬ。

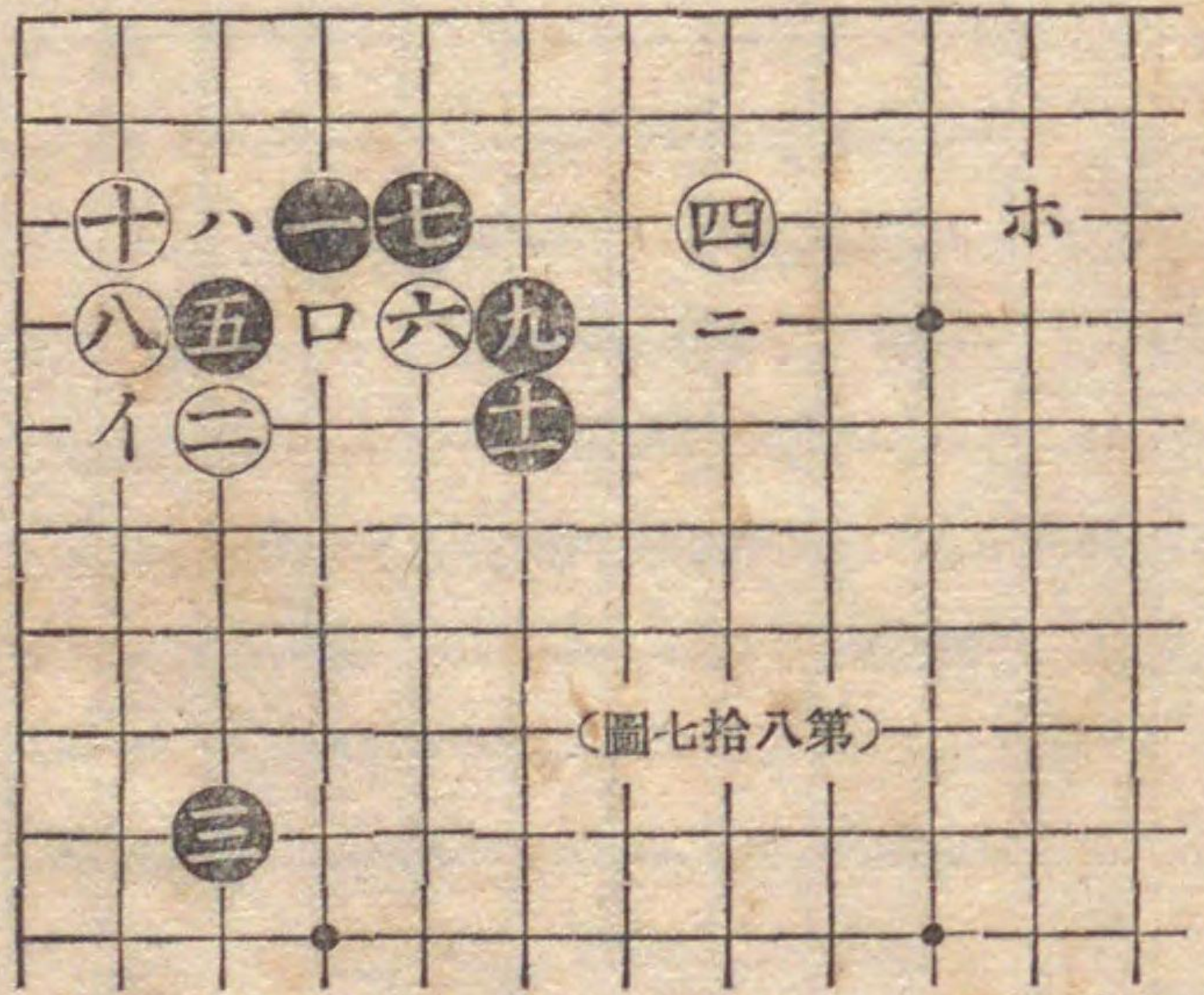


(参考人圖)

(第八拾六圖)

○(第八拾七圖) 白六が前圖迄の様に單に立つといふ事は黒の命令に服して居る様な趣もある乃て本圖は次で黒が尖こまうといふ點に打つて些いか機先を制したといふ意がある、  
黒七が此く之に應じて隨ついて行ひた時は、白は八の手を本圖の通り隅へ縛はて打つといふ事は最も急務である。  
△「註」何故なれば白が若し黒七の手に附ついて九の點へ行ひれば、黒に(イ)と下から縛はねられて彼に實利を占められる上に、三の一子も極めて安全になり、白が利を計る處がなくなるからである。

白に八と縛はられた時は、黒は必ず九と縛はねるが要着である。  
△「註」若し黒九の手で白八に應じて十の點に抑おさへたならば、忽ち(ロ)とアテられ、黒(ハ)と粘ねいだ時九の點へ行いひられて少なからぬ不利を醸かさねばならぬ。



(第八拾七圖)

已に九と黒に縛はられた以上は、白は十と行いひて隅に於ける黒の根據を奪つて、自ら地盤を堅めるの準備をせねばならぬ。  
黒が十一と行いひた手迄を普通定石としておくが、本來此の十一の手は場合によりて、或は(ニ)と頂うげ若くは(ホ)と夾はむなど種々打方もあらう、



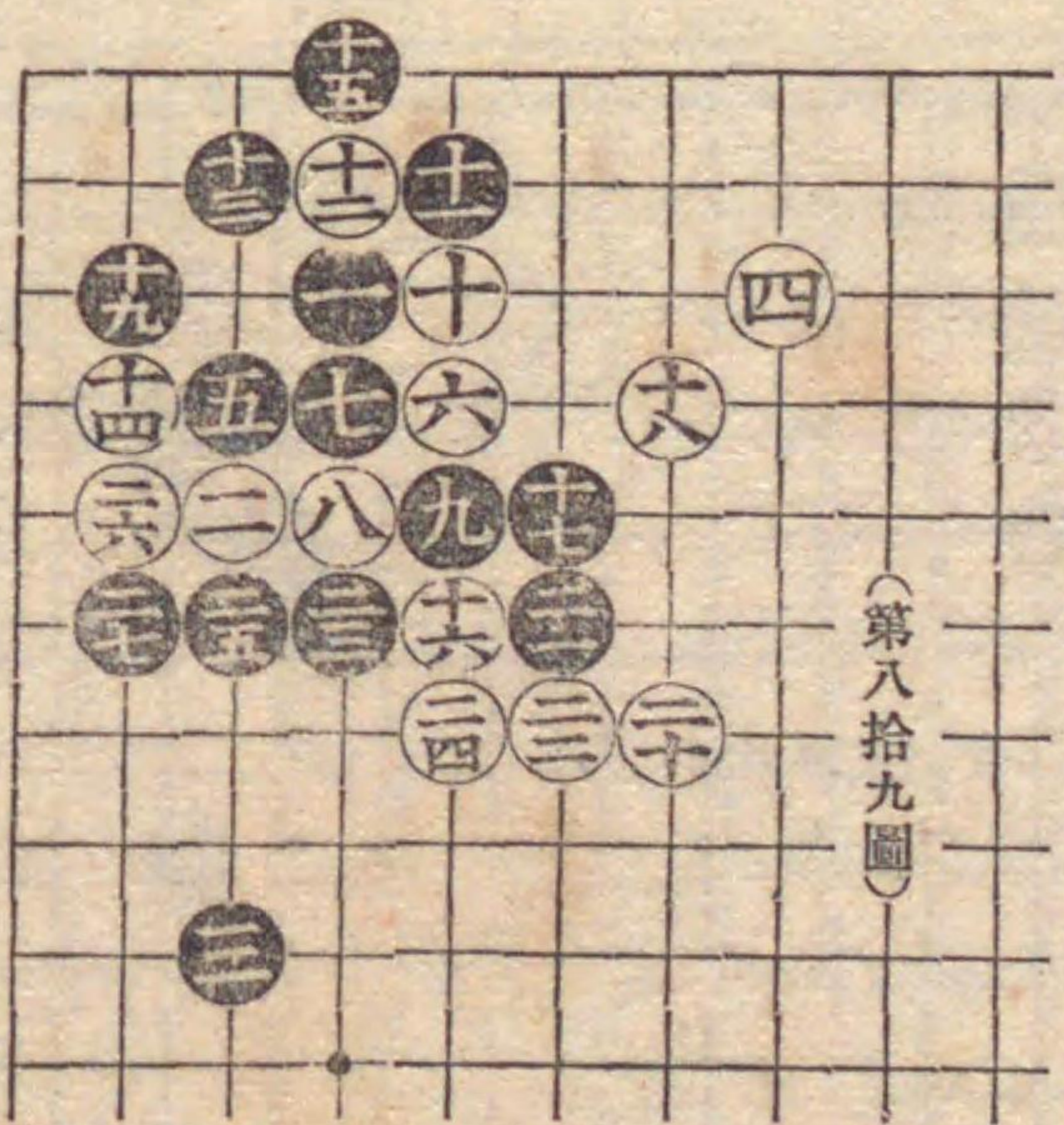




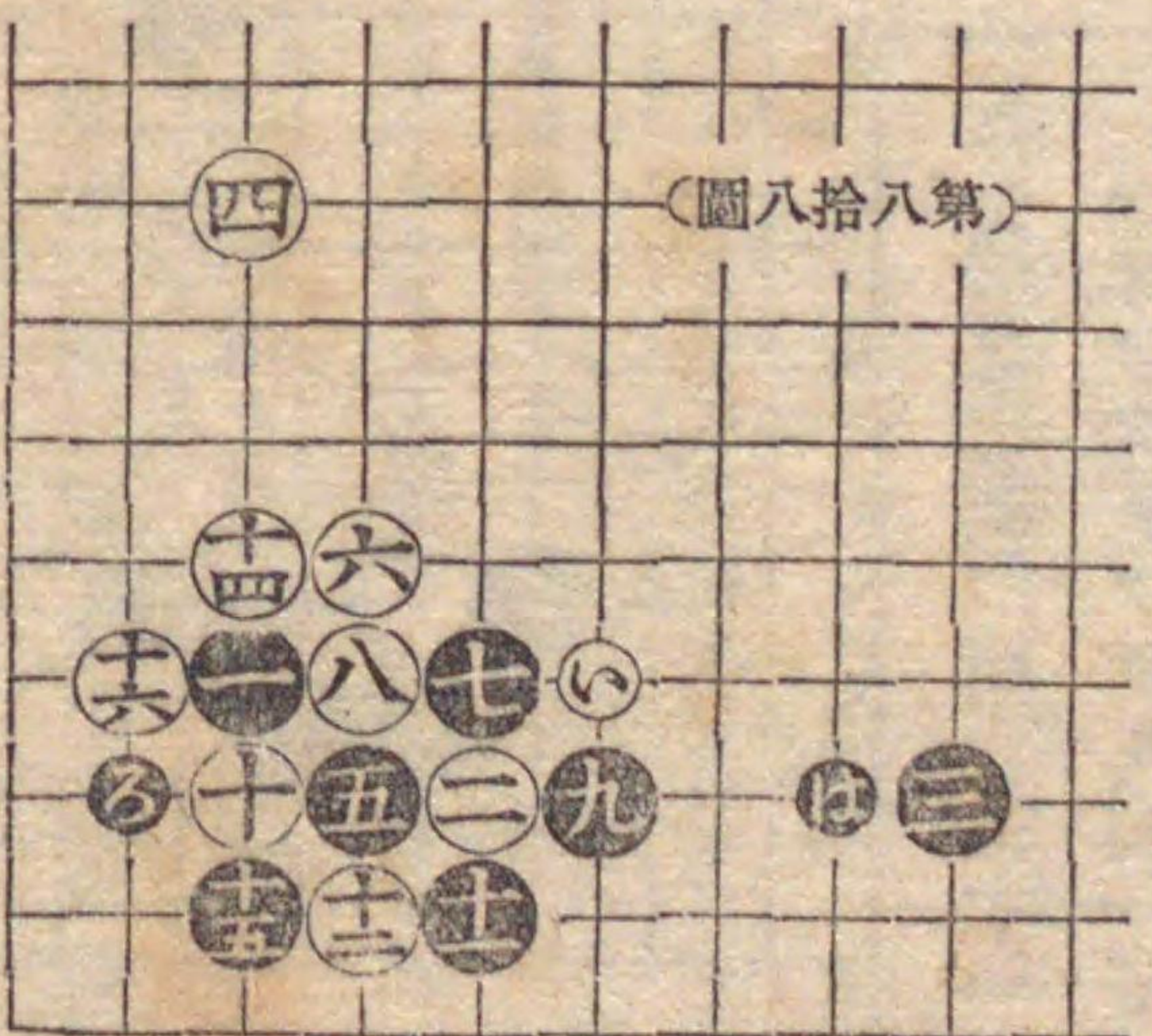
○(第八拾八圖) 黒七の縛出しは振替る手段である、白に入と截られた時(後に㊦から截られて)黒七が征に提られる患のない場合は、黒は九の手を十の點に粘いてよい、乃て溯つて言ふと白が六と行く前に、若し黒に七と縛出され白八黒十と粘がれた結果如何といふ事を十分考へた上でなくては、容易に手は下せぬ、黒十三の手を以つて㊦から縛ねて劫にする手段もあるが要するに其は時機の問題である、本來は此の結果黒の不利である、然し黒三の一子が㊦の二間にあるよりは一路廣いだけハタライで居る、又互先の局では面白くないが、二子若くは三子の明隅で此の形が出来たと見れば黒決して損てはない。

○(第八拾九圖) 本圖は已に布石二子第六十三、四頁に同型が現れて居るから説明は省略しておく、

要するに局面全體の形勢如何といふ事が此の結果の黒白の利害を打算する主要點である、即ち黒が七と打ち九と截る手の時に局勢を十分觀測しておく必要がある。



(第八拾九圖)



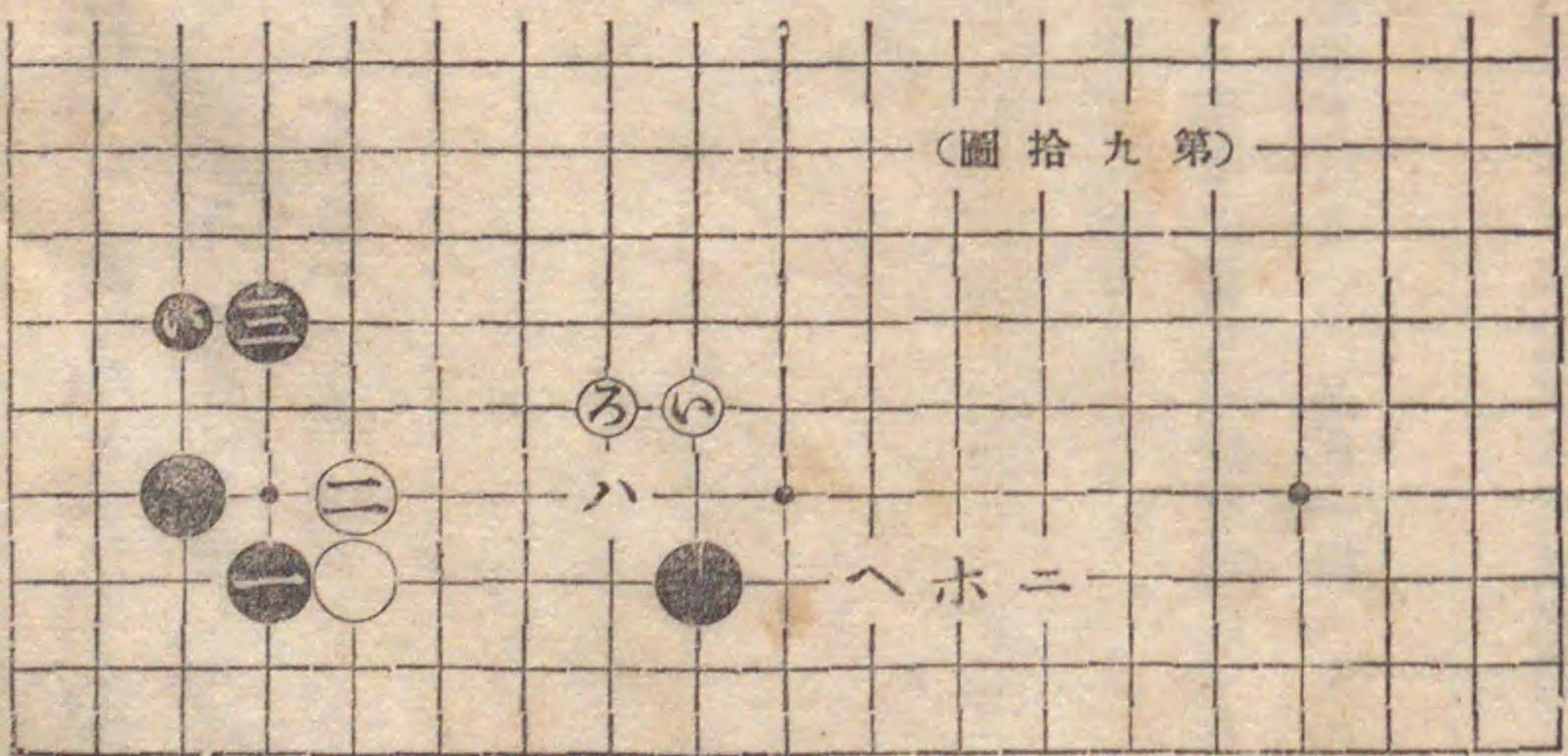
(圖八拾八第)

(黒十三は二の點を粘く)

『手拔の部』

○(第九拾圖) 手拔とは圖の如く白が黒のために三間夾の状態に陥りながら、一手を閑却して居る時を指すので、以下示す處に「此際黒は此の白を如何攻む可きか、及其後の黒白相互の應接如何」といふのが本定石の主旨である、黒からの攻め方は圖の通り一と隅から尖頂けるより外に打方はないと心得ておけばよい、何故なれば一方の夾が三間といふ餘地のある處であるから、若し白に隅へ走られると彼をして易々と活きさせる事になる、乃て黒は此く一と尖頂けて白をして隅に活動せしめぬ様、其の根據を奪ひ、中原へ追出して之を攻め立てやうといふ主意である。

白二は手拔せぬとも限らぬが先づ此く立つのが常である。黒三は場合によつては㊦と一間する事もある、が然し其は止むを得ぬ時に自ら守る手で、決して白を攻る所以でないから、此の場合には必ず此く三と斜走するが好い。白は四の手を如何打つが良いかといふに、㊦と冠に打つのと、㊦と斜走に打つのが普通の手であつて、其の場合によつては(バ)と肩から行く手、若くは右下隅の布石關係から(ニ)(ホ)(ハ)と詰めて打つ様な手もある。









○(第九十三圖) 白四に應じて、黒が此く五と斜走に應じるのは隣隅に黒の布石がある場合、若くは白の布石があるとしても、其の白の布石状態が黒五の裾を覗ふに不適當な形に出来て居る時、多くは此く五と應じるのである、即ち黒が五と斜走に應じるに適應する左上隅の黒の布石状態を列挙すると、

●と星に子のある場合、

●、●と一間高締に締つてある場合、

●、(ハ)の小斜走締のある時、

●、(ホ)の高締、然し是は黒に取つて餘り十分過ぎる形である。

白○の掛に對して黒が●、●の尖をして居る時、

白○の掛に對し黒●●の斜走のある場合、

又白○●(ロ)黒●●(ハ)の交換ある場合などである、

又白の布石のある場合を想像すると、

白が●(ハ)の點に低く締つて居る時、

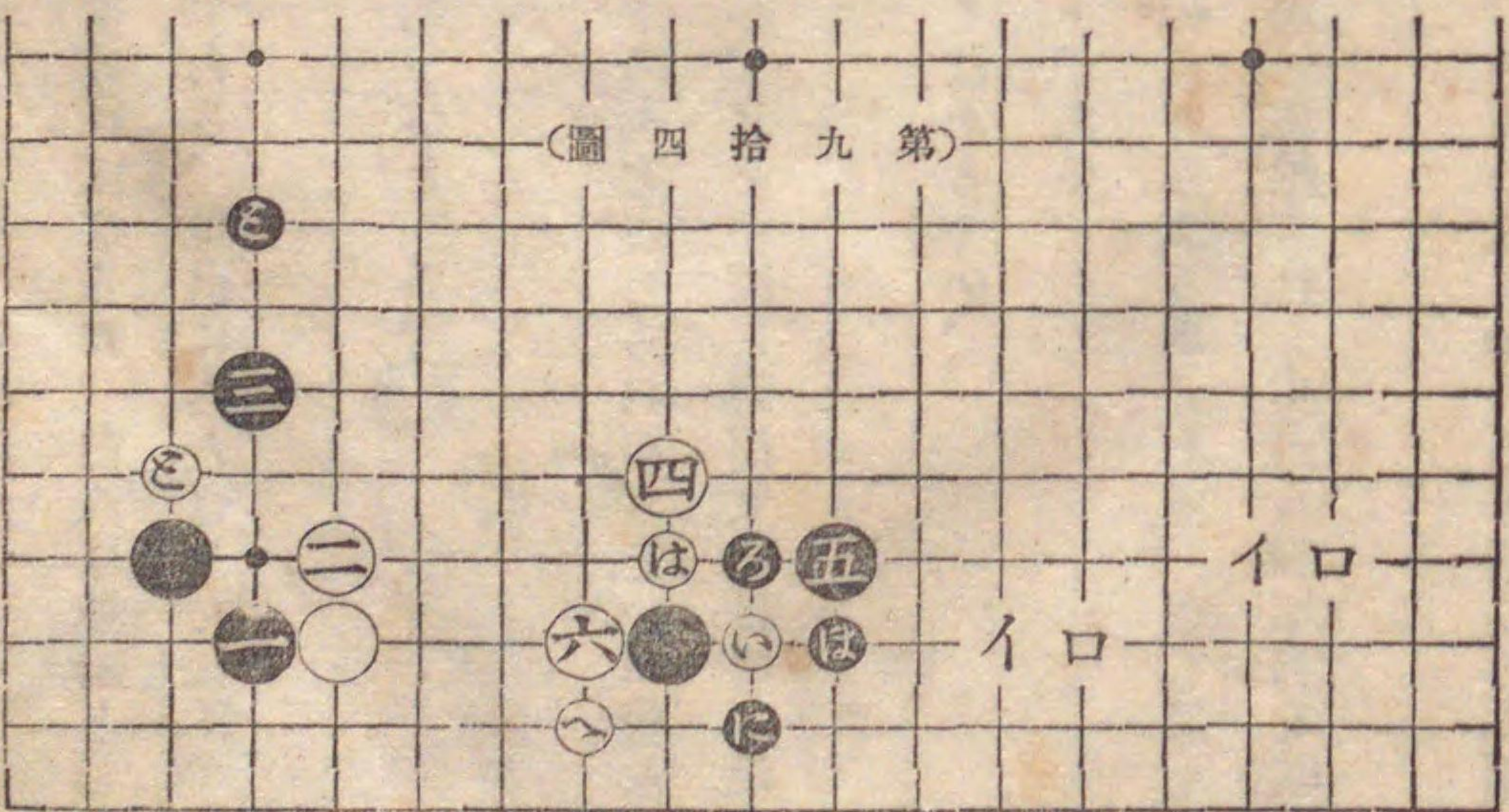
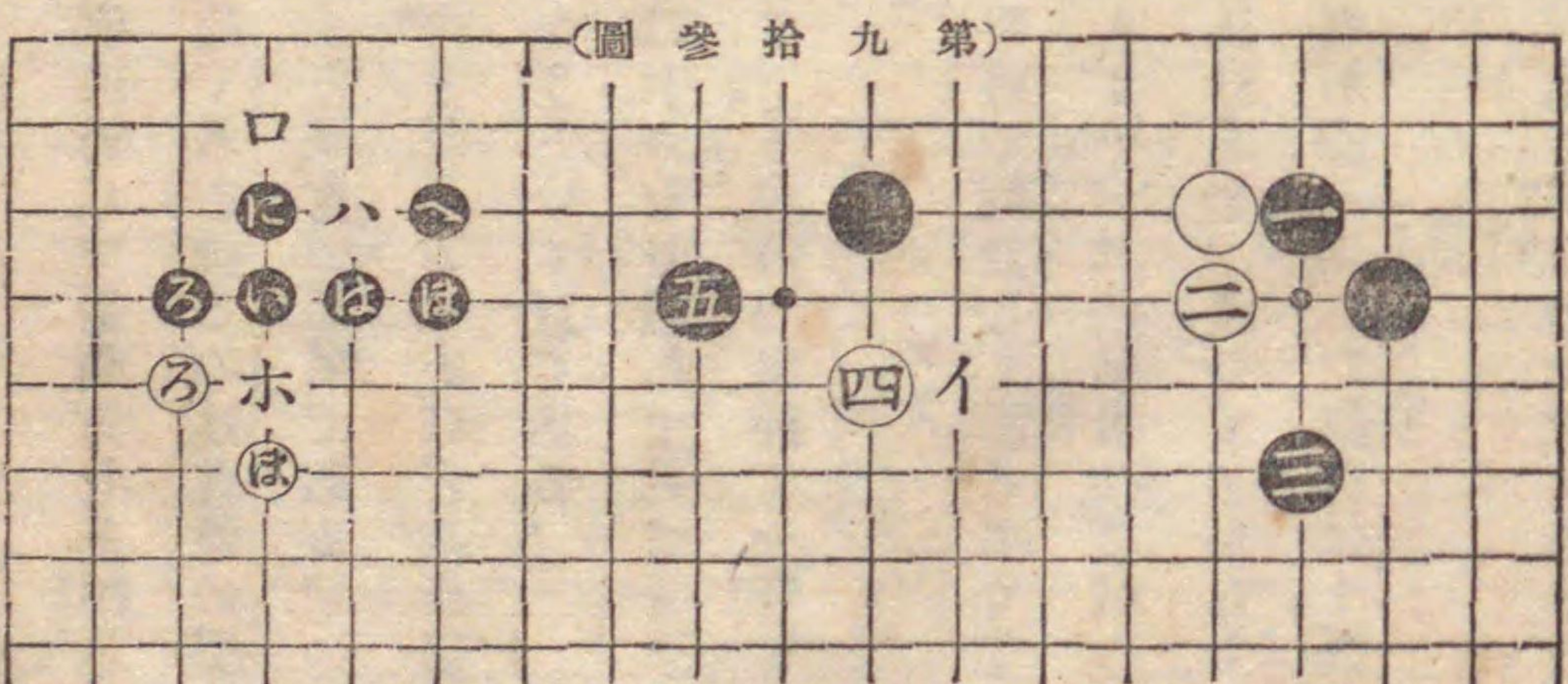
白が●(ハ)の點に目外に一子ある時、

白が●(ハ)の點に大斜締をしてをる時、

などである、又前に列舉した黒の布石のある場合で、●、(ハ)と低く堅固に締つてある時は、後顧の憂がないから、黒は五と控へる手で、直ちに(イ)と頂けて烈しく戰を挑む事も出来る。

要するに隣隅の我が布石が手堅かければ、黒は五と控へて打つてもよし又進んで(イ)と頂けて戦うてもよし、其の堅固の度合が甚だしければ、斜走に控へるより頂けて戦ふのが寧ろ可いのである。

○(第九十四圖) 黒五の時白は●と頂けるか、六と頂けるか、手抜するかの三途である。  
 白六の頂は手拔せぬとも限らぬ其の理由は六と頂ければ治る事は治るが餘り結果が面白くないから白の策戦としては且く手抜しておく事もあらう、  
 白六の手で●と頂けて打つのは右下隅に(イ)(イ)の白があるか、或は(ロ)(ロ)の白があるかとする時で、白●、黒●、白●、黒●、白六、黒●、白●となるが普通の手順である。  
 △「註」茲に記す●以下の手順が運んで、白の勢力が四、●、六、●と加はれば、例の●の頂越の手が出来る故、黒は之に備へて●と飛ぶは言ふ迄もない處である。



(石 定 先 互)



○(第九十五圖)

黒が五と斜走に應じた以上は白六の頂に對して是非共七と縛込まなければならぬ、白八は趣向として二十二とキメツケル手もあるが、此く八と截るのは普通の應接である、自己に八と截つた後は、白十六、黒十七迄の相互の着手は殆んど確定の手順である、

白十八に至つて此の手で十九の點に押す打ち方もあれど其は後に記す事とする、  
黒二十一は白を封鎖して大勢を制しやうといふ意である、

故に外部布石の關係から見ても、若し二十一を封鎖して見てもサホドの利を占められぬ、といふ様な場合は此の二十一の手で二十六の點に下り、白の根據に一撃を加へ、之を中原に逸出せしめて、黒は實利を占めるの策もあらう、

又單に二十一の手で二十七と打つて形勢を觀望して居る手もないではあるまい、  
黒二十三は或は二十四の點を粘いてもよい、其の結果は次圖の通りである、

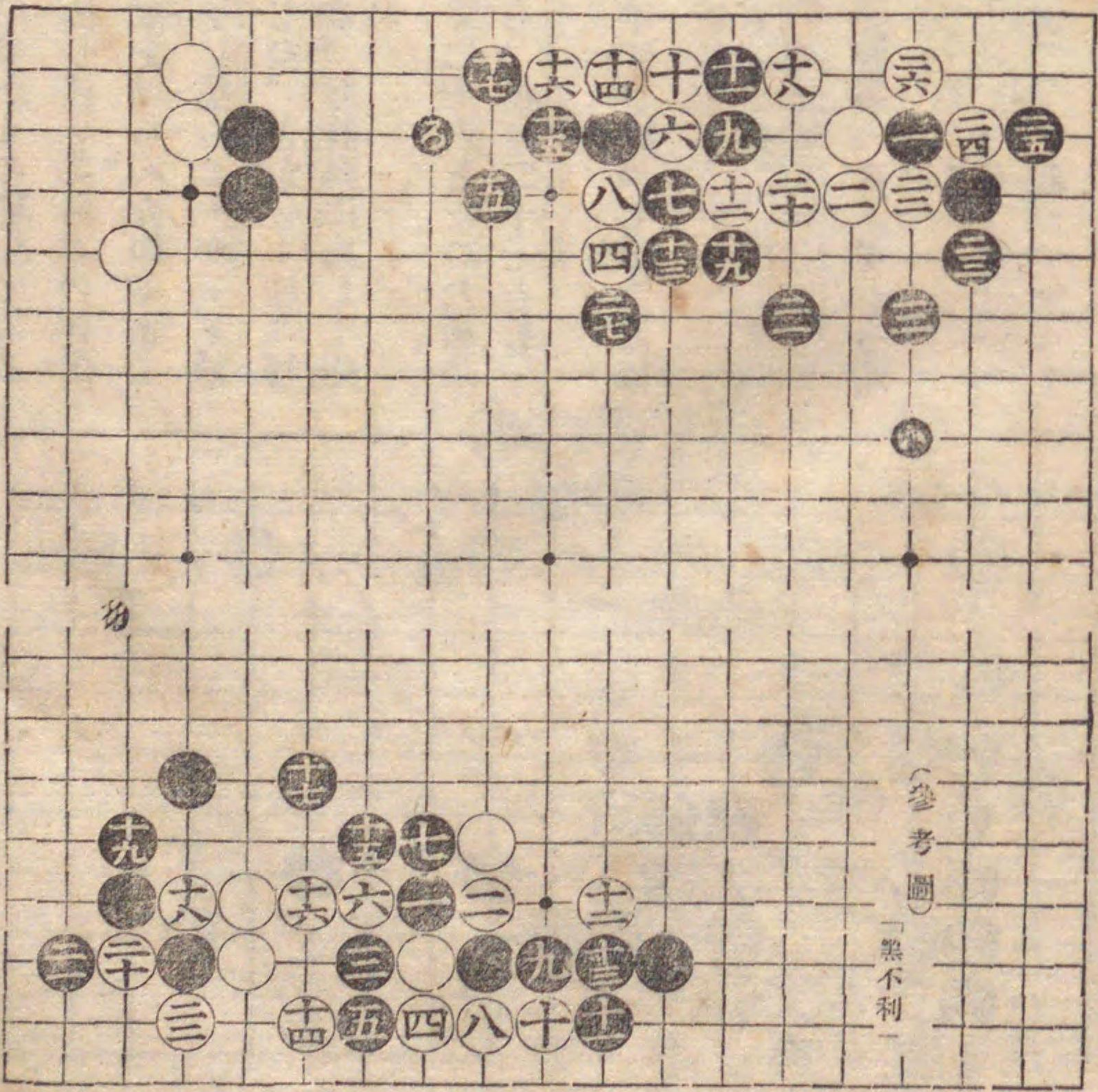
茲に注意す可きは、最初黒が七と縛込む手を、誤つて下から十と縛ぬ可らざる事である、若し黒七の手を十に縛ねると、白七に引き、黒が●と備へた際白に十五の點へ頂越されて少からぬ不利を醸さなければならぬ

△「註」 溯つて言ふと黒五の一子が此く斜走の位置にあるのと、前圖の様に●の二間拓である場

は結言  
池橋

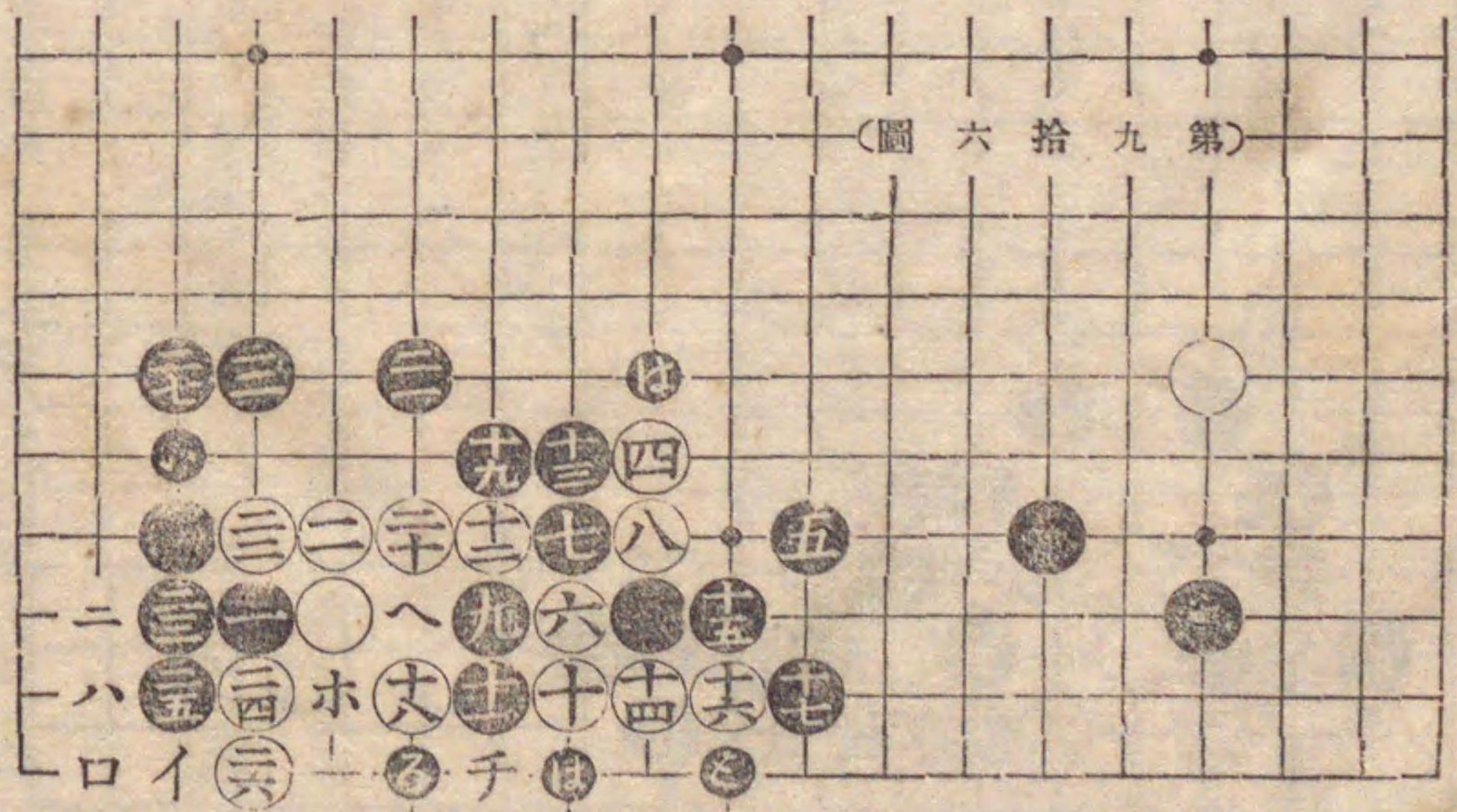
合とを混同してはならぬ、  
便ち●の二間拓の場合に、  
白六に對して本圖の如く七と  
縛込まば、以下本圖に記す數  
字の手順通りに運んで黒十七  
迄の結果となつた際、本圖五  
とあるべき掛粘が●の掛粘に  
なつて居るため白から(參考  
圖十二の手の通り)覗きを一  
着利かされ、爲に二十七と縛  
ねて二子の白を捕獲するとい  
ふ手は絶対にない事となる。  
一言にして言ふと、黒二間拓の  
場合は下から縛る事、黒斜走の  
場合は上から縛出す事である。

(圖五拾九第)



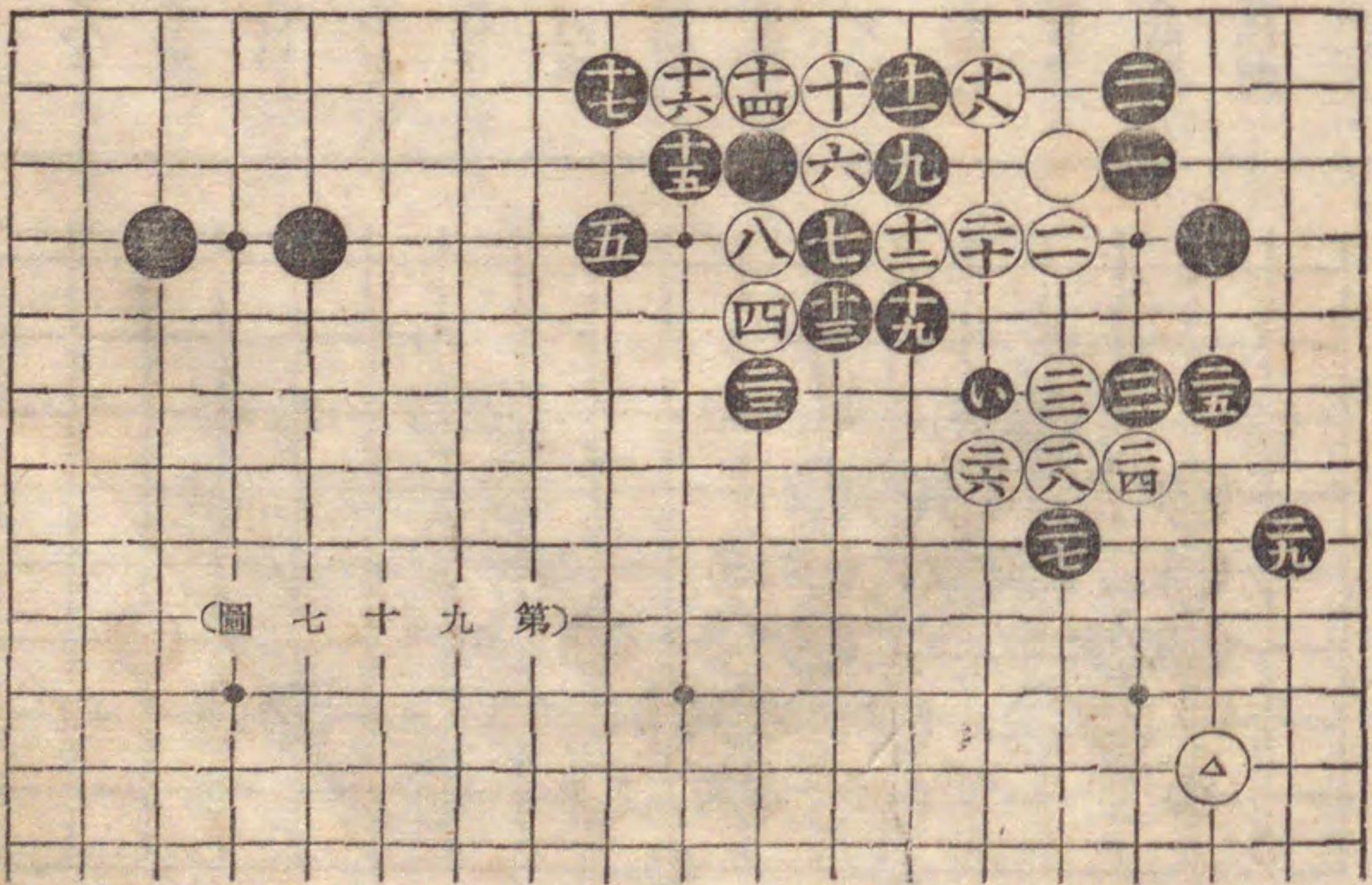


○(第九十六圖) 本圖は前圖黑第二十三手からの變化である前圖は二十三の手を●と引いて白に隅の一子を與へ其の代償として四、八、の二子の頭を●と縛ね之を捕らへたのであるが、若し外部の形勢が、四、八、の二子を捕へてもサホド効果がないとか或は二子を捕る必要を感じぬ、とかいふ様な場合は、本圖の通り二十三と粘ぐ手もある、即前圖に比して此の一隅に於ての黒は確に利益である、  
但し白が二十四と縛ね、茲に眼を保つて二十六と下つた結果白から●の點へ縛出される手があるから、黒は二十七と打つてあかねばならぬ。  
「註」 茲て注意す可きは、白二十六の手で、誤つて(イ)と縛粘をなす可らざる事である、  
若し白二十六の手で(イ)と縛ねたならば、黒(ロ)白二十六の時、黒●と縛ねる、既に一旦(イ)と縛ねた以上此の三子を捨てる譯に行かぬ(捨てる程ならば初のハネツギから間違つて居る)  
乃て白(ホ)黒●、白(ヘ)黒●、白(チ)へ二子提起黒十一へ一子とり返し恰ど點である、次て白が(ハ)と截つて來ても黒に(ニ)と抑へられて仕方がない。



(圖六拾九第)

○(第九十七圖) 黒は二十一の手で前圖の如く●と外部を包圍する手段を變更して、本圖の如く隅へ二十一と下り、白の根據を奪うて之を二十二と中原に逐出し然る後二十三と白二子の頭を縛る手も場合によつての一策である、之は如何なる局勢に應用す可き手段かといふに、例せば(△印白)の方面に白の布石がある場合の如きは、ヨシ黒が●と封鎖して見ても一向に其の効果がない、然る場合には二十一と先づ自ら確實の利益を占め、次て二十三と白二子に大打撃を與へる方が餘程勝つて居る。  
▲(變化)或は本圖の如く△印邊に白の布石のある場合黒は●と封鎖する手と、二十一と隅へ下る手とを保留して、二十一の手で單に二十三の點へ縛ねてあく手段もある即其は白が二十二と頂ければ、二十四へ行ひて實利を占めやうの意である。



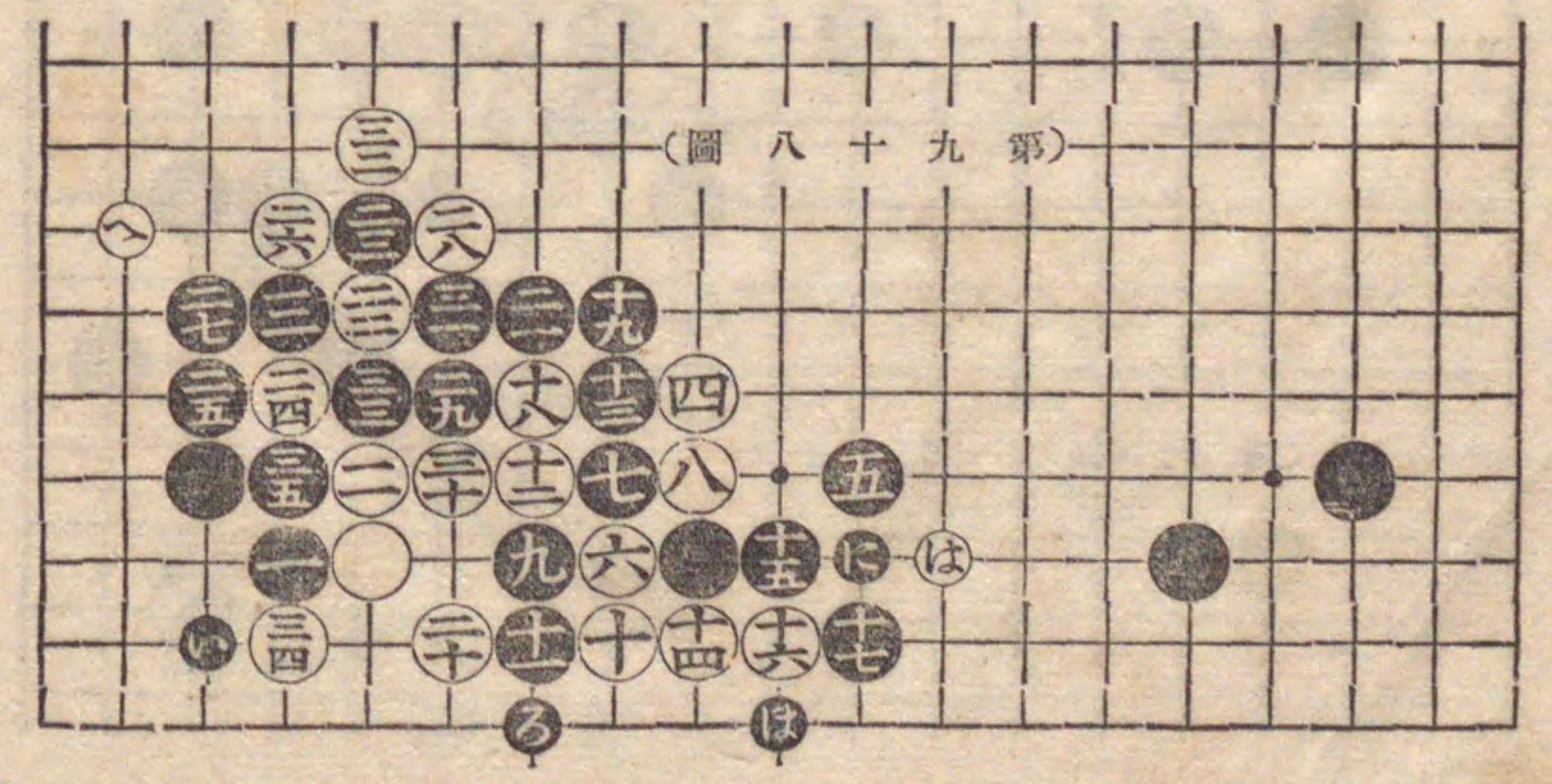
(圖七十九第)

(前圖黒二十一の手より變化)



○(第九十八圖) 白十八の手を前圖の様に二十の點に頂けると黒に十八の點へ壓せられるから、其を嫌つて本圖は此く十八と押したのである、が然し其の影響として四、八の二子が全く孤弱に陥るから本來此の十八と押出す手は面白くないのである、此く三十三、三十五と打抜かれ内外の黒は一帶になつて終つて白は先手活の形であるが、後に黒から●に抑へを利かされる、又中原方面の二十二以下四子の白は黒の鐵壁に附着して、何等の活動さへない事になつて居るから、此くなつてはやはり黒の大優勢たる事無論である。

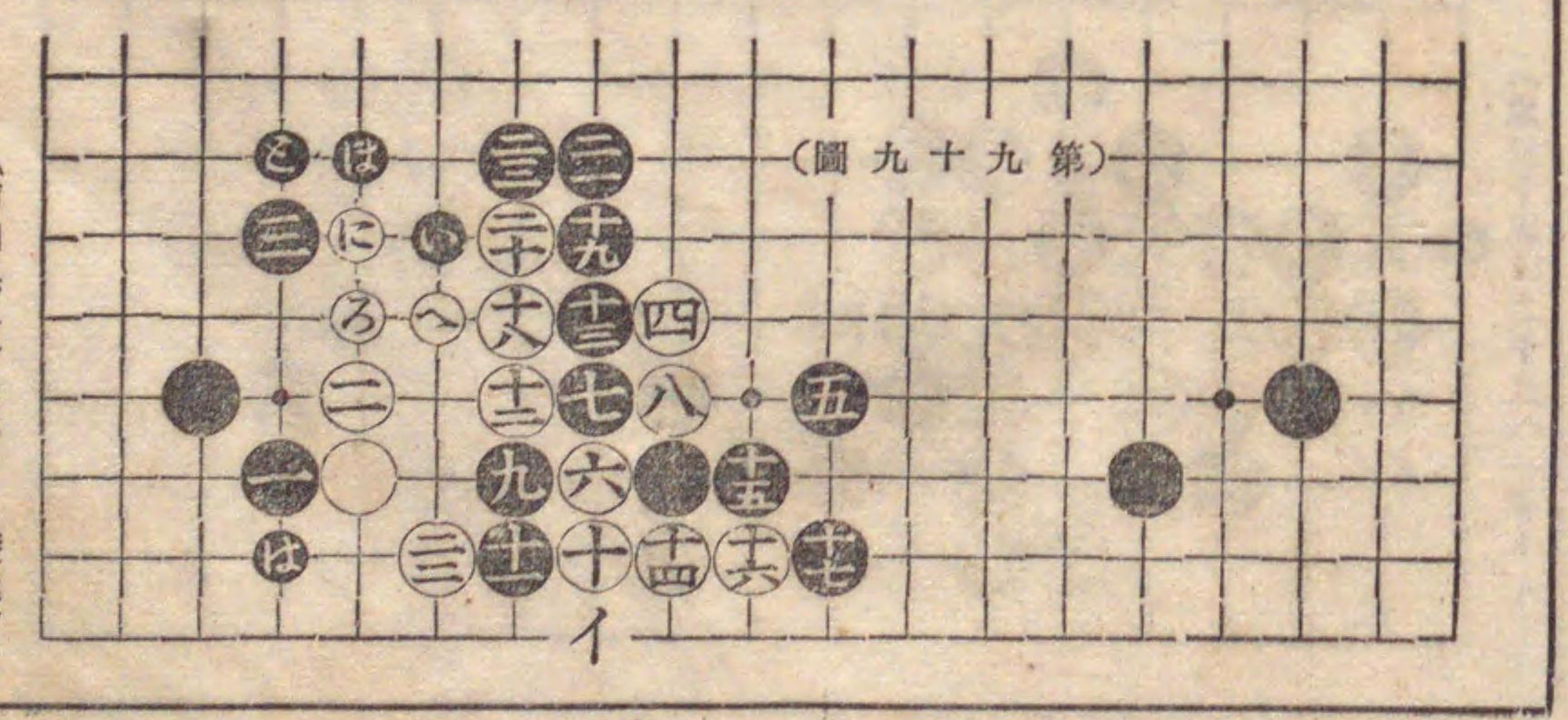
△(變化) 白二十四の時、黒が二十五の手を三十一からアテると、白二十五、黒三十三と打抜き、白三十五に粘ぎ、黒●に下り、白●に覗きを一着與へ、黒●と粘ぎ、白三十と粘ぎ、黒●と緯ね、白●に斜走する、此くなつて白●の走りは前圖に比して働いてをるが●と取りキラレて六子の白が生擒れた白の損害は莫大である。



○(第九十九圖) 白が前圖の様に十八と押すさへ益々黒を強固にして四、八の二子を犬死せしむる結果となるに、本圖の如く更に二十と押し黒をして二十一と立たしむるは彌々外部の黒を強盛ならしむる所以である、が然し此の白二十の一着には多少の意味を含んでをる、其は次て手抜して他の要處に轉戦しやうといふ手である。

「注意」白二十の時黒は七以下三子を征に提らるゝ惧のないときは(イ)と緯て四子の白を捕る、其て白二十の手は征の善惡を見定めた上でなくては容易に打てぬ、即白が此く二十と押すのは黒二十の一の手を手抜の出來ぬ時である。

乃ち二十二と夾み、黒が二十三と頭を封じた時、白は手抜して他に先鞭を著けるのである、次て此の處の黑白相互の應接は、黒●と緯込み、白●と並び黒が●と下つて根據を侵して來た時、白は●と突出し、黒が●と抑へた時に●とアテて、黒に●と手を引かした上此處で亦手抜するのである、便ち白二十の押しは二手々抜しやうといふ意を含んだ手である。





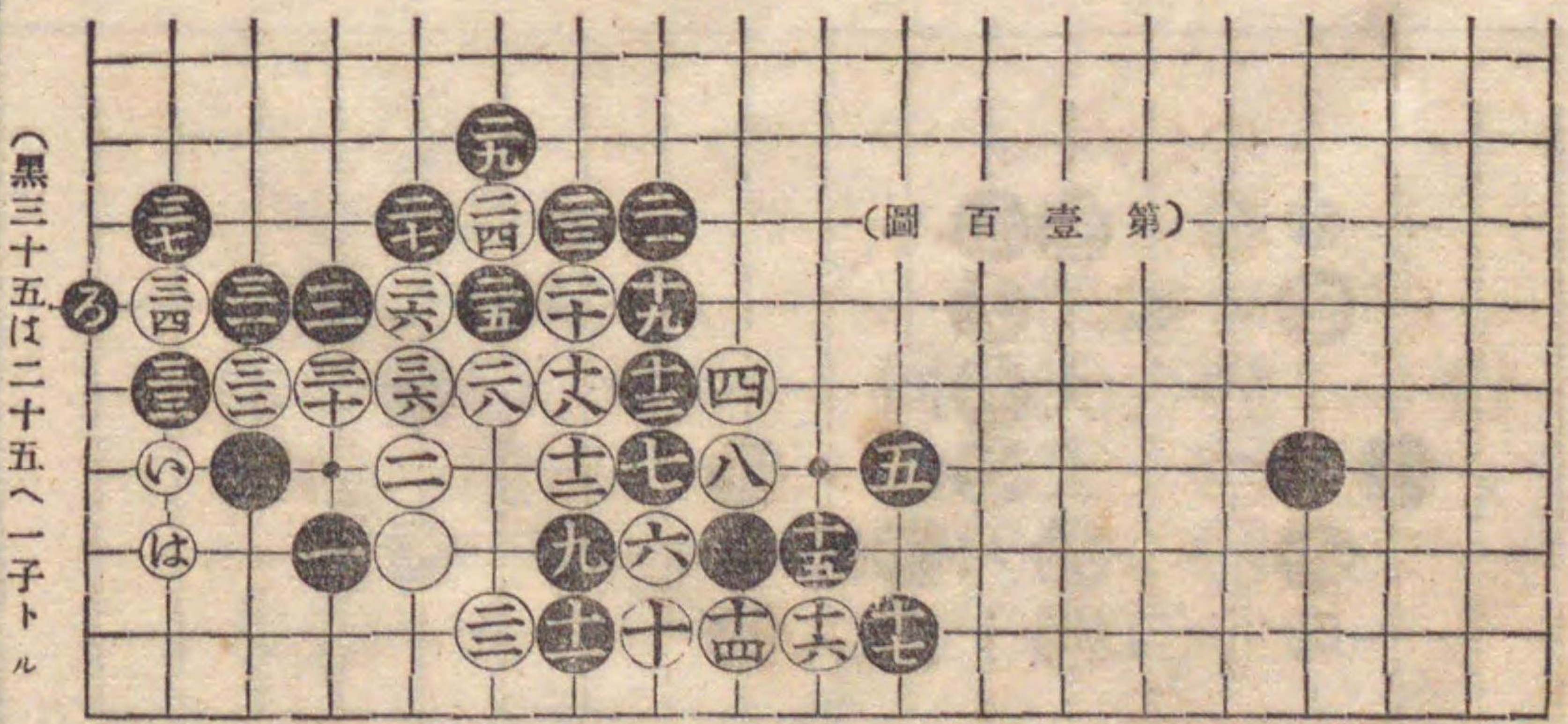
○(第壹百圖)

白二十の押は二十四の手を手抜する手であるが、然し白の策戦次第で本圖の如く二十四と緯出して打つ手もある。

「註」此は場合の手では無く策戦の手である、何故なれば二十四の手を前圖の様に手抜した結果と本圖の結果と比して、白サマデ優勢を加へたといふ事は出来ぬからである、即此ゝる場合は必ず此く二十四と緯出して打たねばならぬといふ様なさういふ場合は断じてないからである。

白が二十四と緯出せば、黒は二十五と緯込んで、白二十六の時に二十七とアテ、白に二十八と提らせておいて、二十九と封鎖するが良い、

次で白は三十四の手で㊦と截る手もあるが其は次圖の様な結果になる、本圖の場合には後に白から㊦と截られ黒が㊧と提つた時㊨と打たれ隅の黒を擒にせられる手にはなるが、此く外部を十分に閉鎖されてはやはり白の不利言ふばかりもない。



(黒三十五は二十五へ一子トル)

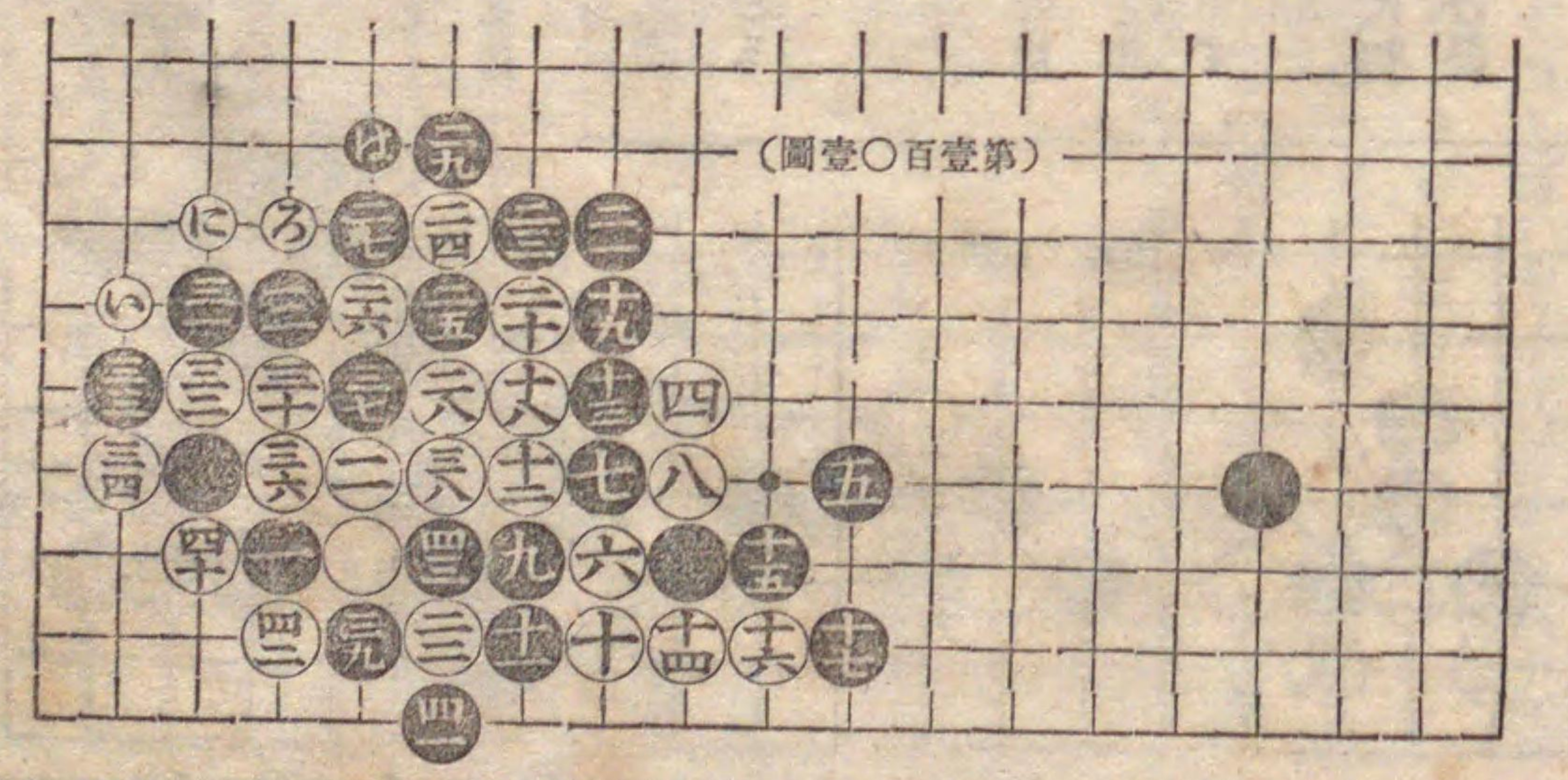
○(第壹百〇壹圖)

白が此く三十四と隅から截らば、黒は三十五の手で二十五の點へ(白一子を提り、白三十六と粘ぎ黒又三十七と提り、白三十八の粘の時三十九とアテ、白四十と黒一子を抜き、黒四十一、白四十二、黒四十三と打つが最良の方策である、

さすれば、一方六以下の白四子は全然黒の掌中に歸する事となり、且つ白は一隅に密閉されて外部を包圍した黒の勢力は強大無比の結果となるのである、

若し黒が三十九とアテる手を以つて四十の點を粘がば、本圖の結果に比して稍白に利を與へる事になる、乃ち黒四十、白、黒三十九、白二十六、黒四十一、白二十四、黒四十三、白、黒、白となつて側面一角を黒は破られる事になる。

其故黒は飽迄も三十九とアテ、隅二子を捨て、打つ考へが良いのである。



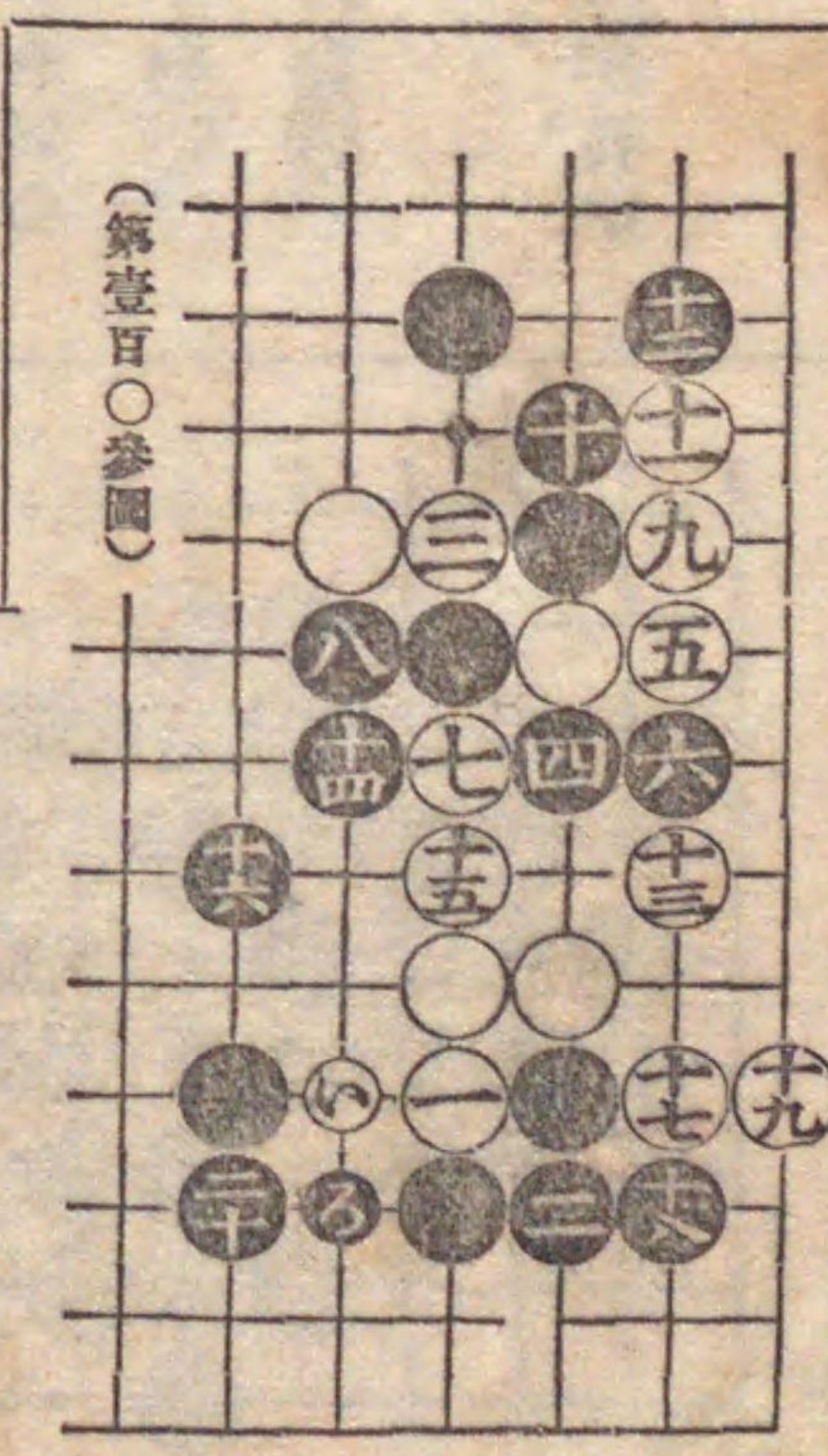
(石 定 先 互)



○(第壹百〇貳圖)

前圖白第八の手から變化

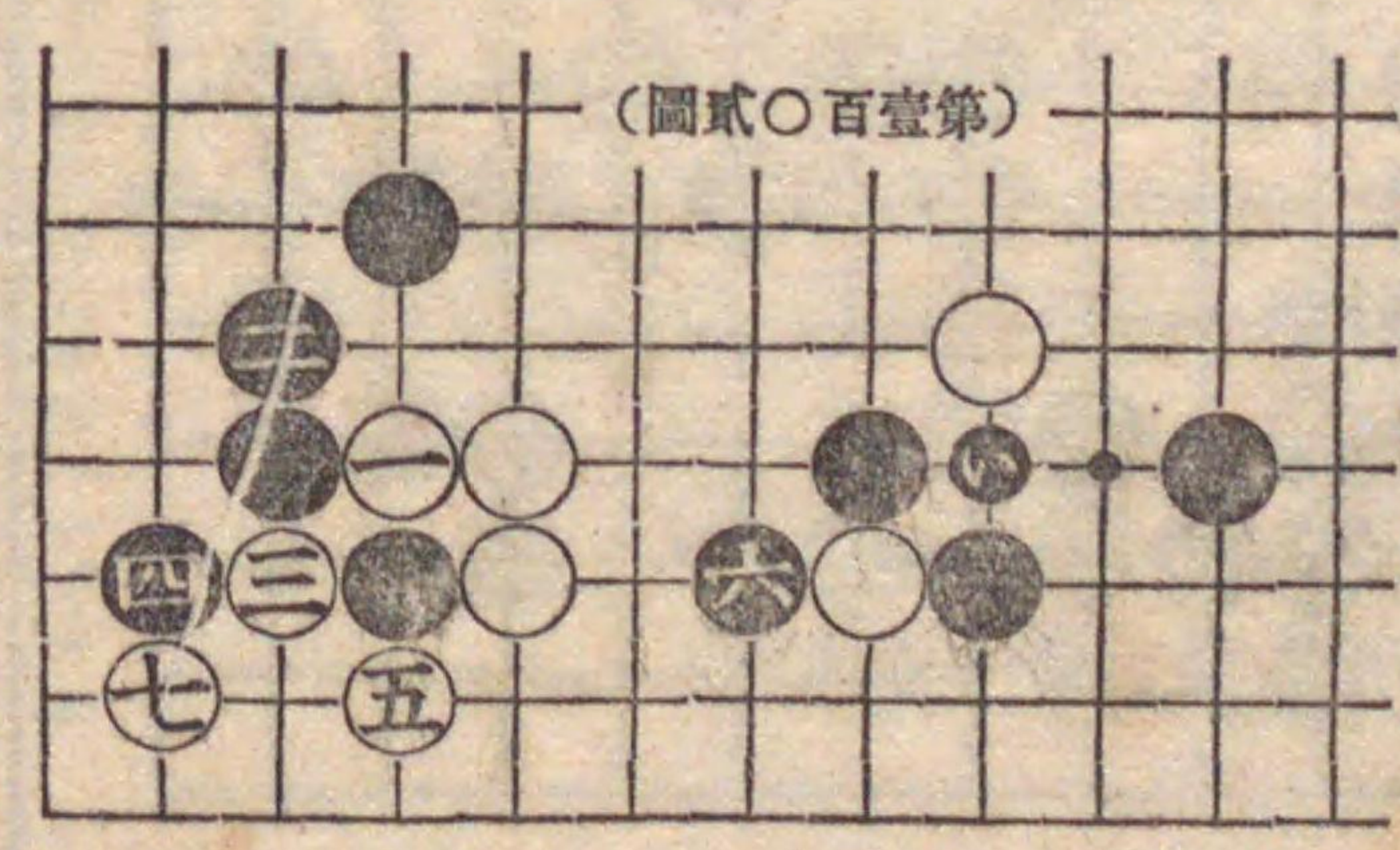
白は此く隅へ向つて一とキメツケテ来る事もある其際  
黒の應手は、本圖の様に二と上へ引くか、或は三の  
點を堅く粘ぐかの二通りである、若黒が二と引けば圖  
の如く振替りとなつて互角の形であるか、要するに此  
の振替りの利害得失を言はうとするならば、白に一、  
三、五、七と隅へ根據を造られた爲に左側の黒の蒙る  
損害と、一方では黒が六と白一子を擒にした爲に黒の得た利益との比較  
研究如何といふ事に歸着するのである。尙黒六の手で●と堅く粘ぐのも  
味のよい手である。



(第壹百〇參圖)

○(第壹百〇參圖)

黒が二の手で此く隅を堅く粘げば、白は三の手で  
●と打つ手と、本圖の様に三と截る手とある、此く三と截れば、前の第  
『九拾六圖』と同一結果に歸するのであるが、彼の第九拾六圖と本圖と相  
違する點は、第九拾六圖の場合にあつては白が二十二の手で本圖に示す  
一の點へ行て居るのであるから黒は二十三の手で、本圖に示す二の點を  
粘がうとも或は本圖●の點へ引かうとも自由で、あるが、本圖は既に初  
に二と粘いて終つた後故、撰擇の權利を失うて居る事になる、其だけ黒  
は白に制せられたといふ道理にもなる。

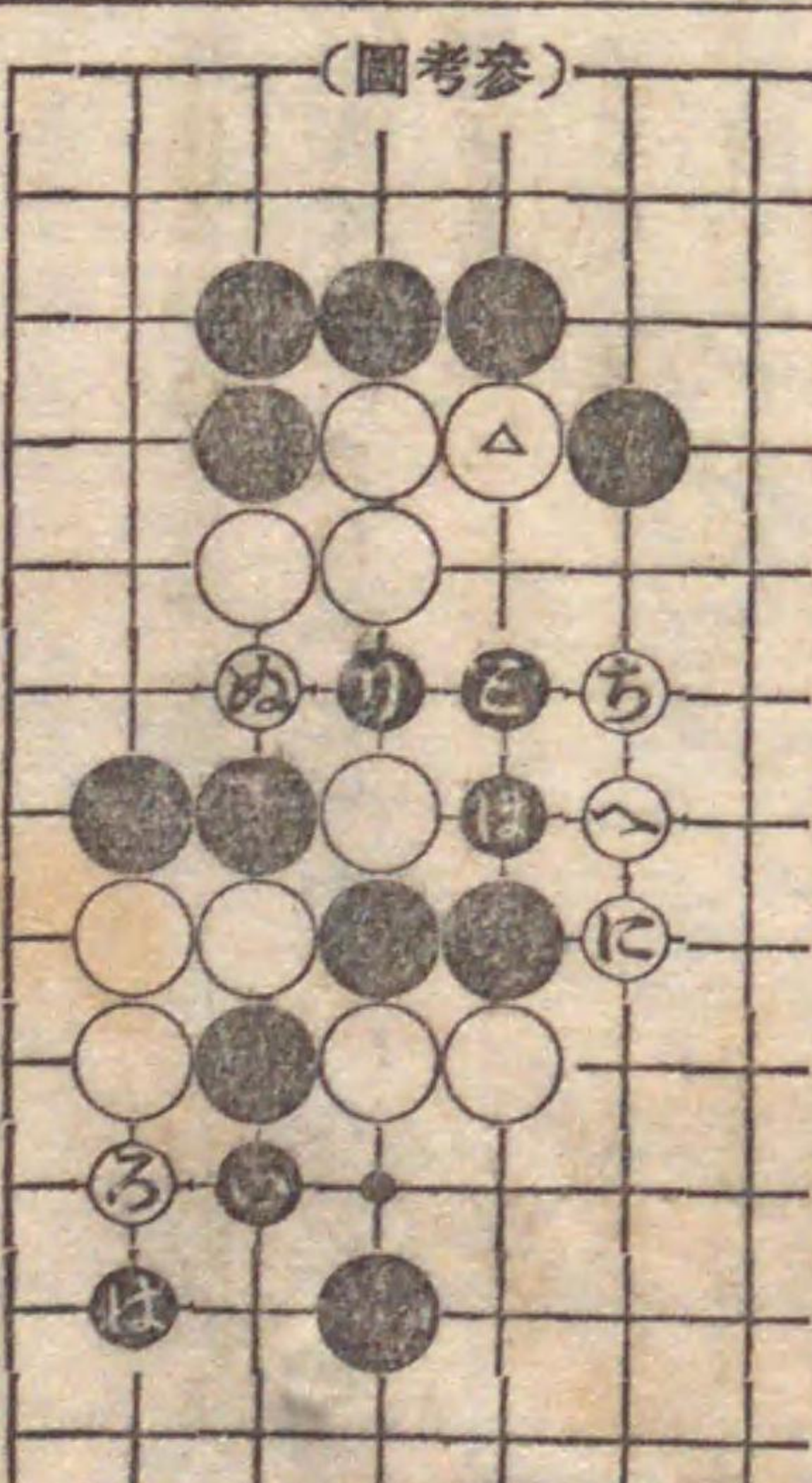


(圖貳〇百壹第)

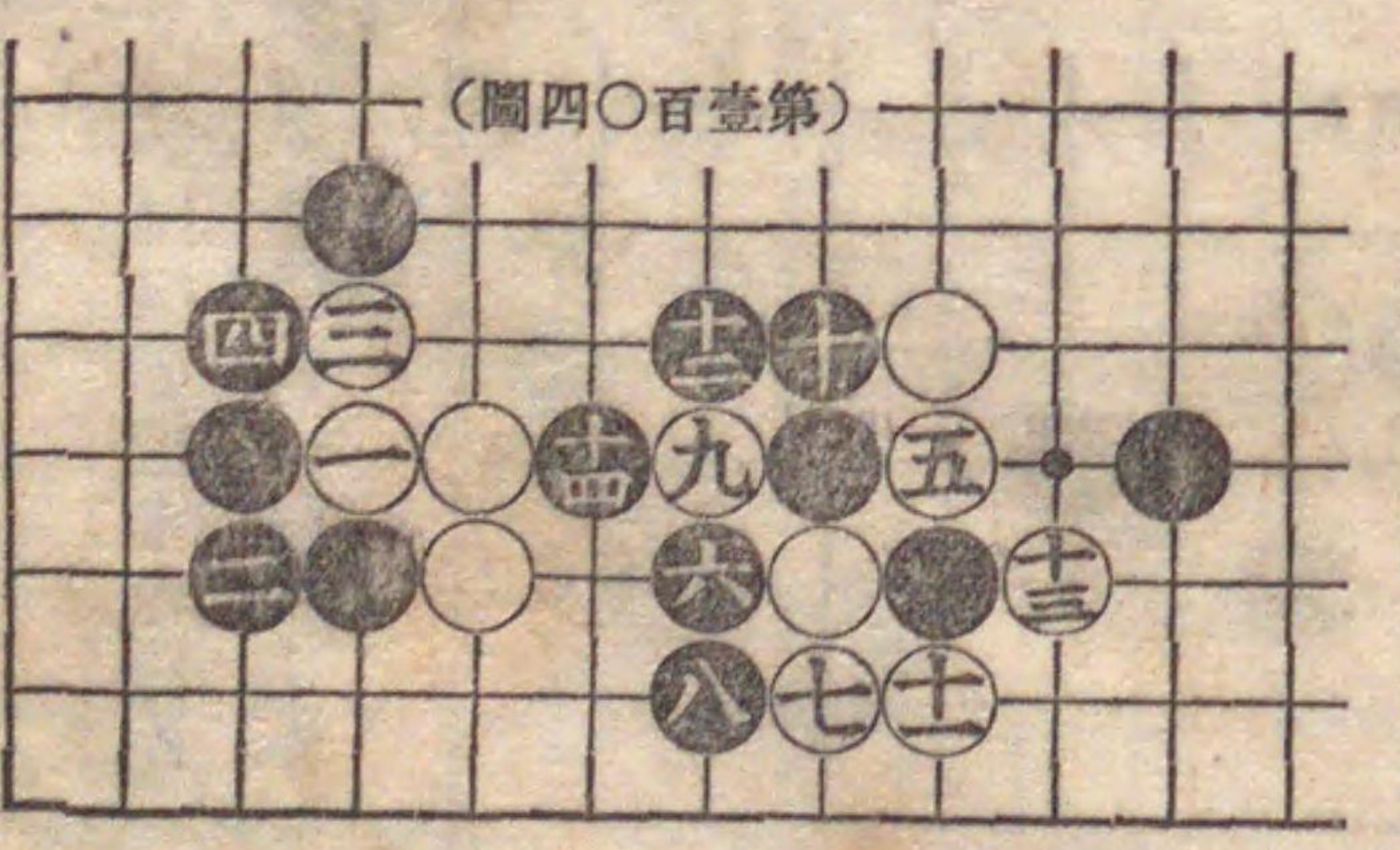
○(第壹百〇四圖)

白若し本圖の如く三と曲つて來たならば黒は必ず四と應じなければならぬ、已  
に白の手が三と來た以上は、次で白十一の時黒は十二と打つて振替るより打方はない、  
此く振替つた結果から見て單に此の一局部に就て言へば、ハハリ黒の優勢たる事無論であるが、附近  
の形勢如何によりては、其得失を輕々に斷言する事は出來ぬ、黒から言へば左方て五子の白を捕獲  
した利益と右方て一子失うた損失との比較如何、又白から言へば右方て黒一子を得た利益と左方て  
五子を失うた損失との比較如何といふ事に歸するのである、  
要するに白が一、三と打つた限りは此の振替りは避ける事は出來ぬ、此  
の一及三と打つと打たぬは白の權利であつて若し本圖の様に振替るが白  
自ら不利益と見たならば白は單に五の點を截つて居ればよいので、して  
見ると白が三と打つのは『第九十六圖』の様になるよりは本圖の結果の方  
が白に便利であると思つた場合の手と言ふ事が出来る、然し何れにしても  
黒が不利益を蒙る惧はない。

▲(參考圖) 前圖白十一の時黒  
が十二の手で振替りを打たずに  
一子を本圖の様に行出すと、忽  
ち△印一子を利用して●●●  
と壓せられ、黒は全滅の非運を  
見なければならぬ。



(圖考參)



(圖四〇百壹第)



「手披中の披」

○(第壹百〇五圖) 白△印の冠に應じて、黒亦△印へ斜走したるに關はらず、白が再び手披する様な事があれば、黒は此の白を如何攻めたならば良いかといふに、●と下から單關する手と、●と上から掛ける手と、●と頂ける手と三通りある。

●は白の根據を衝いて之を浮かす手である。

●は白を攻ると同時に●の頂越を防ぐ手である。

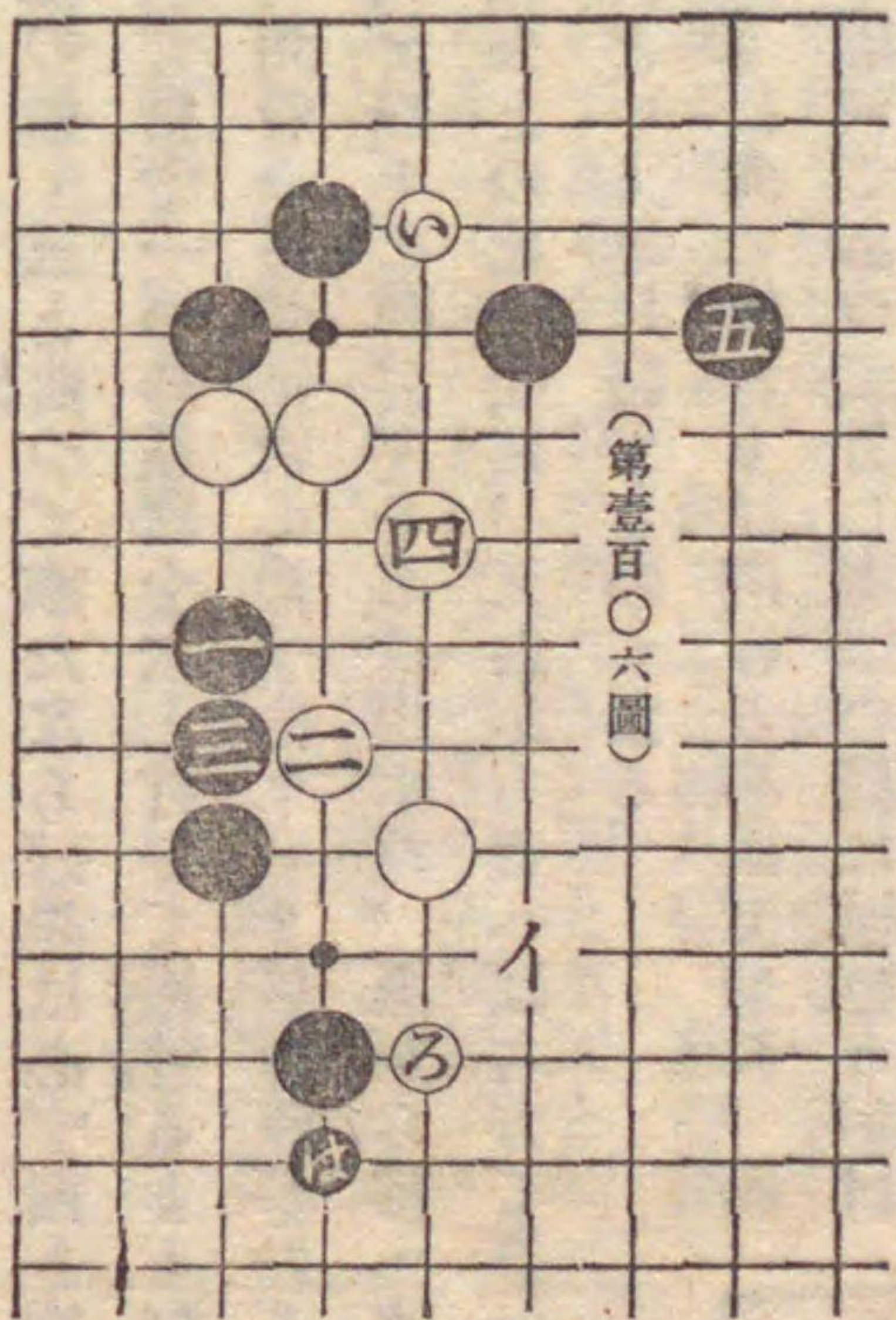
●は白を兩斷して攻める手段である。

○(第壹百〇六圖) 黒が此く一と打ち、白が二と覗いて來れば三と堅固に粘ぎ、白が四と手を引いた時、黒は五と單關して●の頂越を防ぐと同時に地域を擴めるがよい、此の形には後に白から●と頂けて來れば黒は●と行びて地が益々確定する、若又白が手を抜けば(イ)と煽つて攻めるといふ急な手も出来るのである。

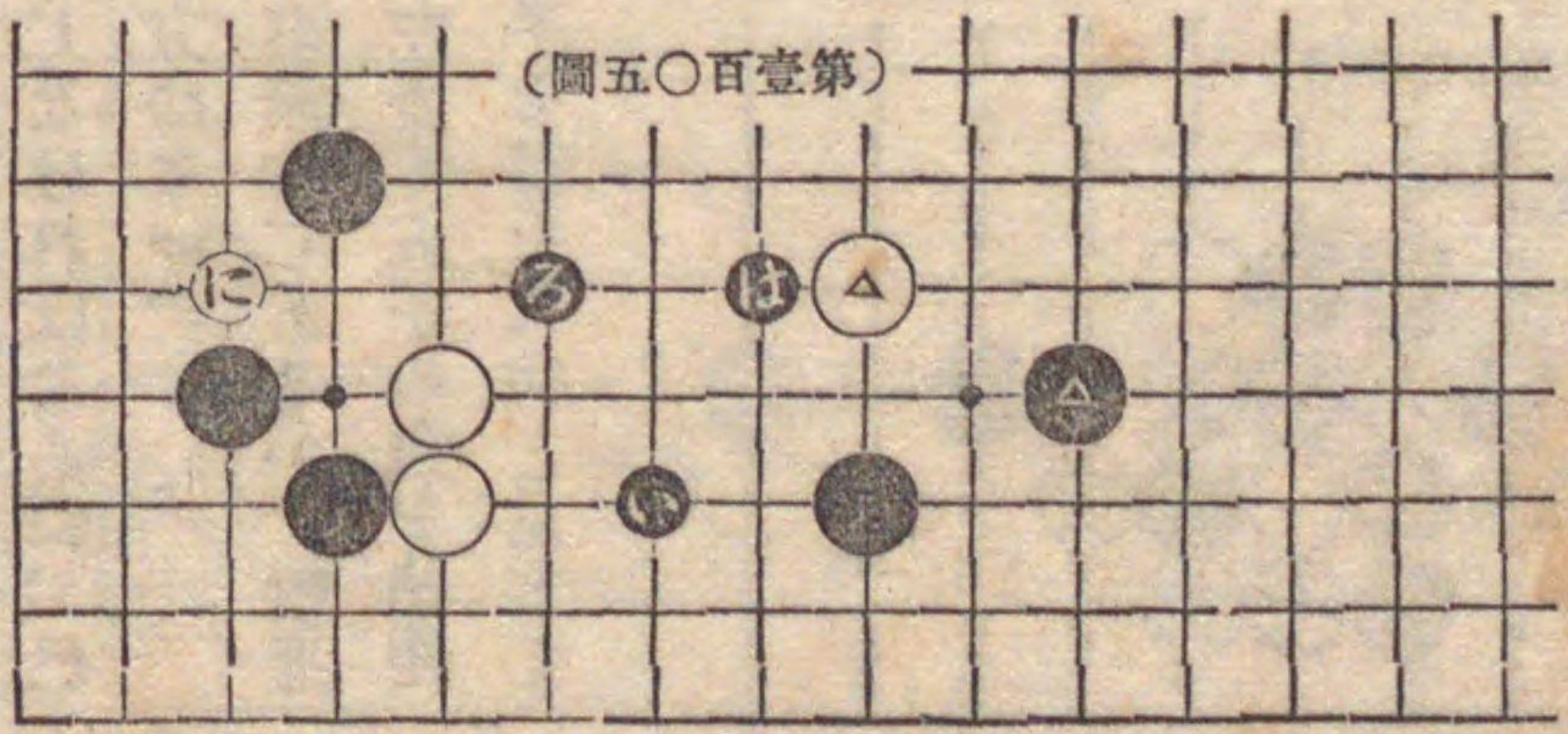
○(第壹百〇七圖の甲) 黒が一と上から臨んだ時は、白は二と圖の如く飛ぶか、或は●と尖むかの二途である、黒三の頂も巧妙な手である、即此の一手で白の根據を奪うて了つて、白をして四の粘を餘義なくせしめ、次で五と飛んで我地を擁護して居る處が最も良い。

▲(同上の乙) 或は三と上から押して、白を四と引かして五と急に攻め立てるのも一策である。

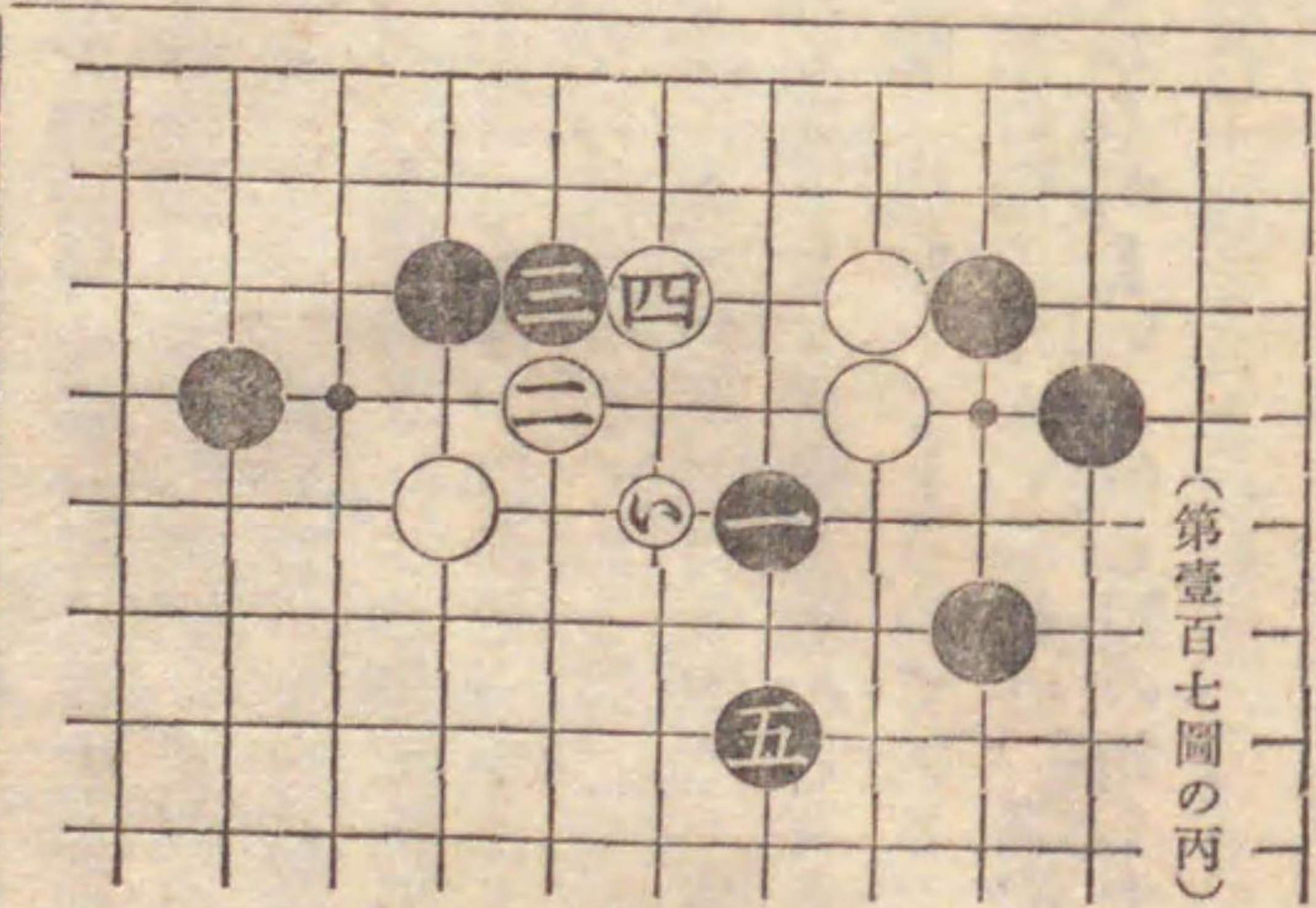
▲(同上の丙) 若し白が二と尖んで來れば、三と下から擲ひ白が四と押へた時、五と自己の缺點を整へて白をして餘義なく●と粘がしめる手などは所謂本理と稱す可き手である。



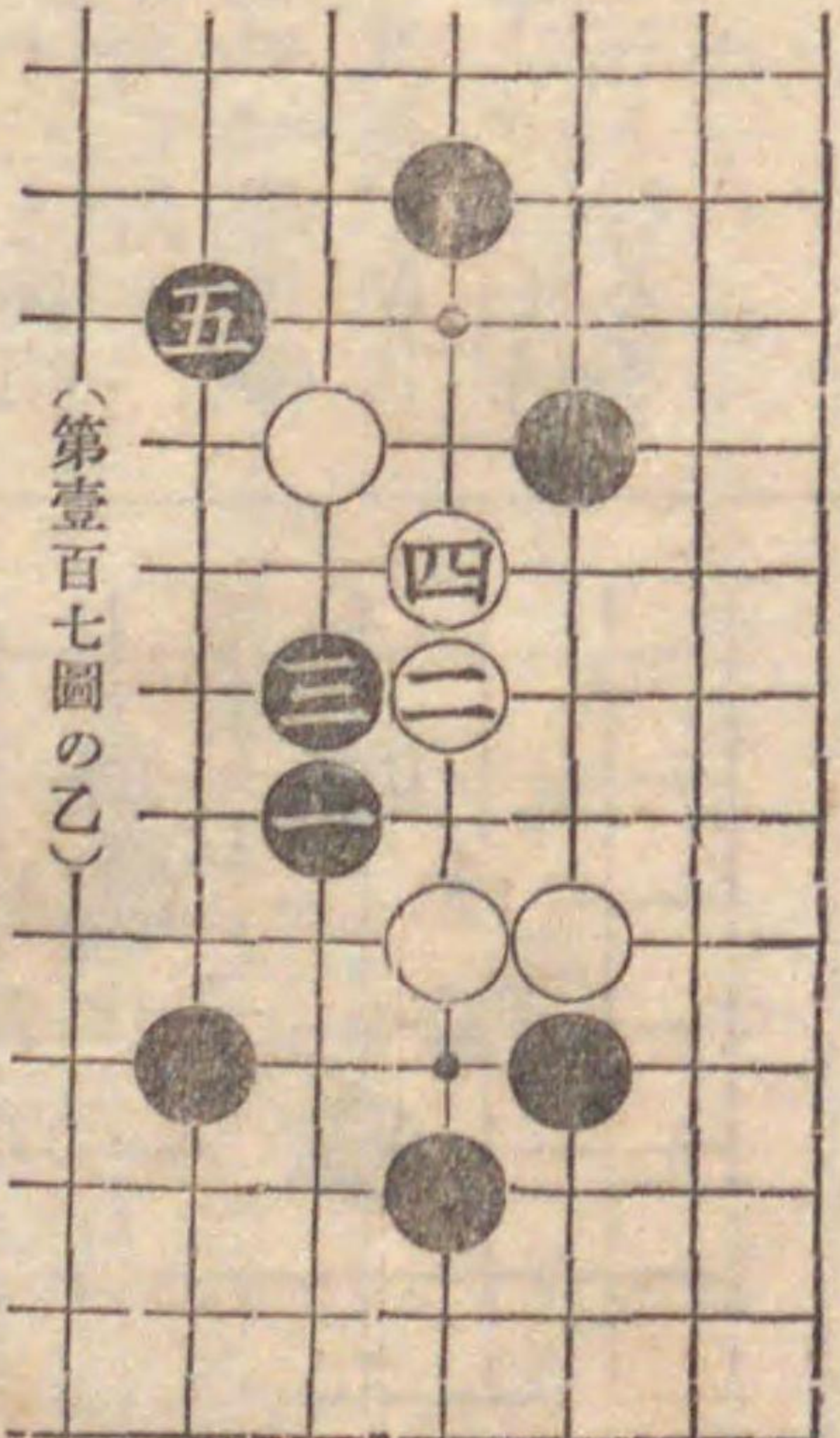
(第壹百〇六圖)



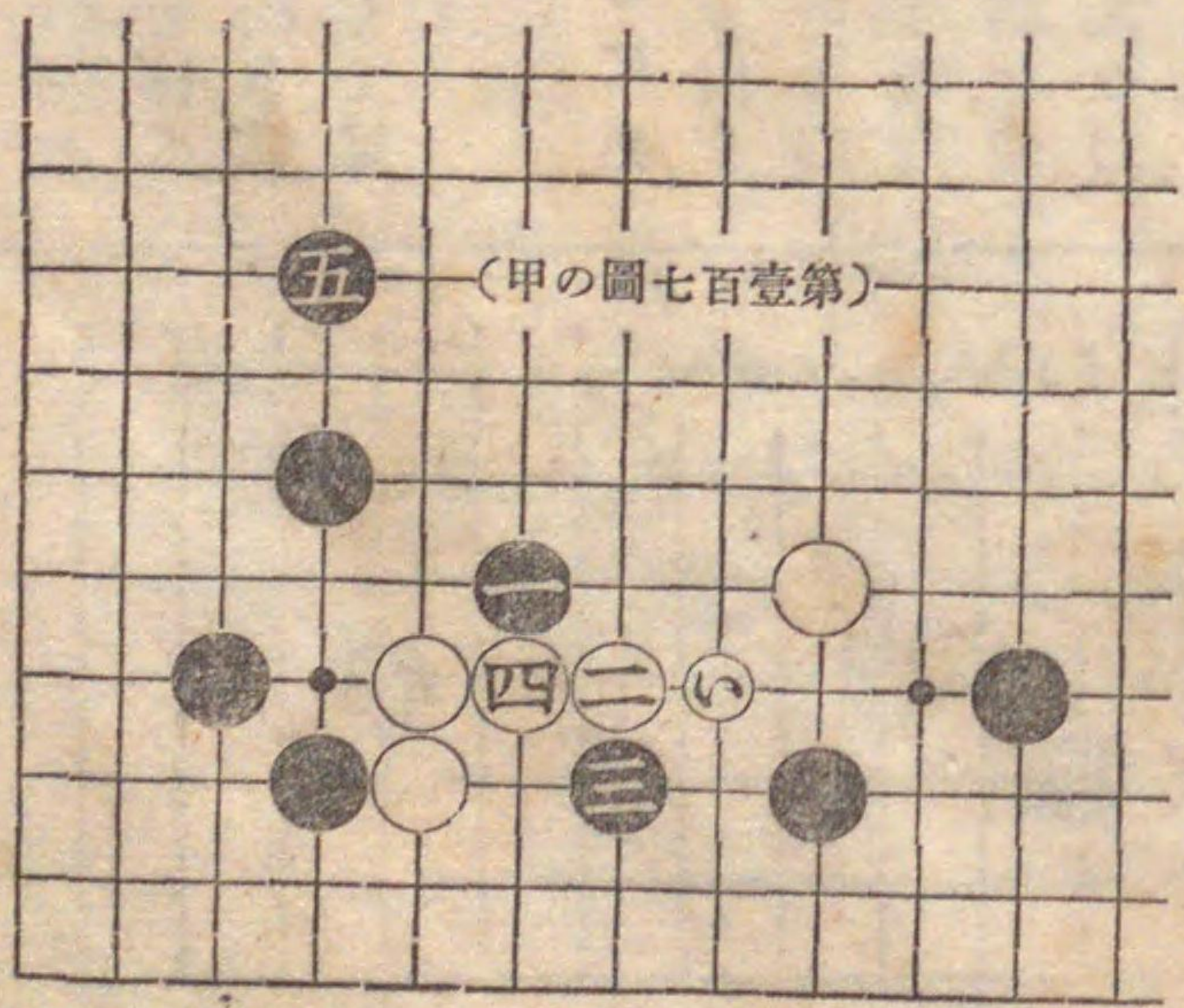
(圖五〇百壹第)



(第壹百〇七圖の丙)



(第壹百〇七圖の乙)



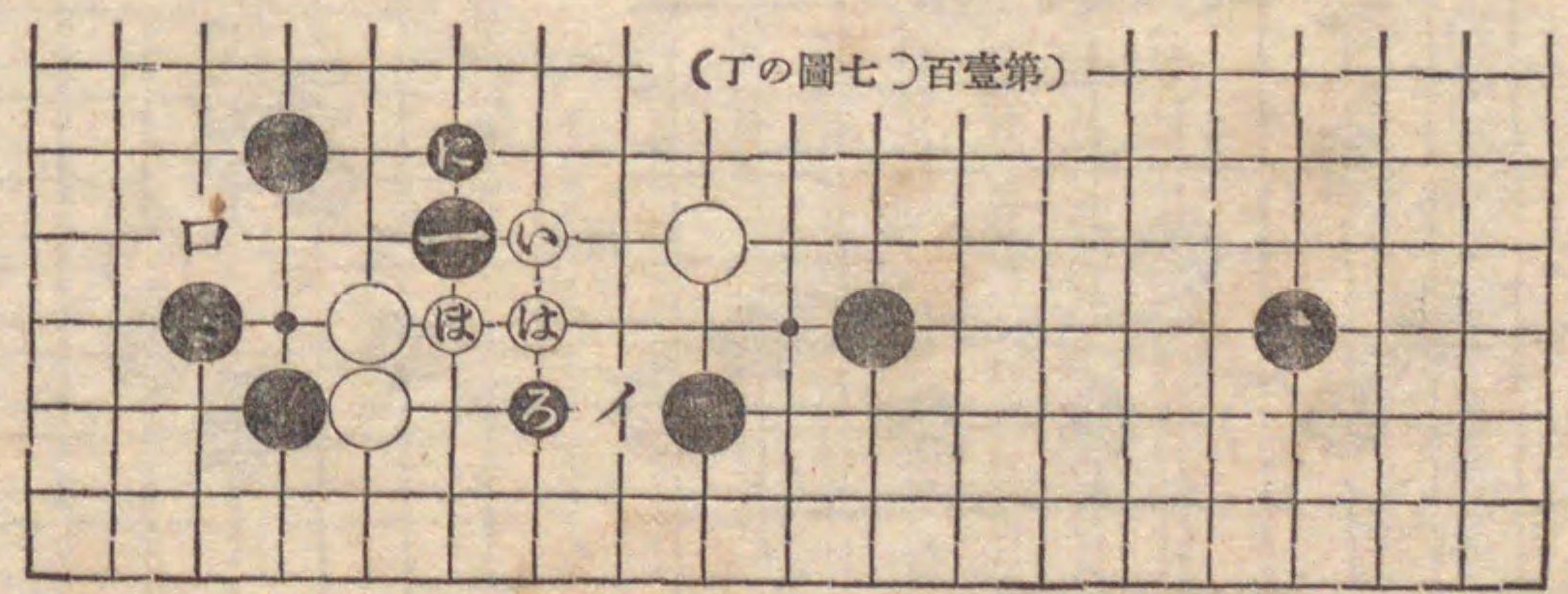
(甲の圖七百壹第)



▲(第百〇七圖の丁) 餘り感心した手ではないが黒一に對して白が㊦と頂ける理もある、是は黒に㊧の點へ行ひ出させ(イ)と頂けて二子を捨て、打たうといふ趣向である、乃て黒は㊨と根據を犯し、白が㊩と衝き當つて來た時㊪と立つて白を㊫と粘がしめるといふ手になる、此くては(ロ)の頂越の味も消滅して白の不利たる論の無い處である。

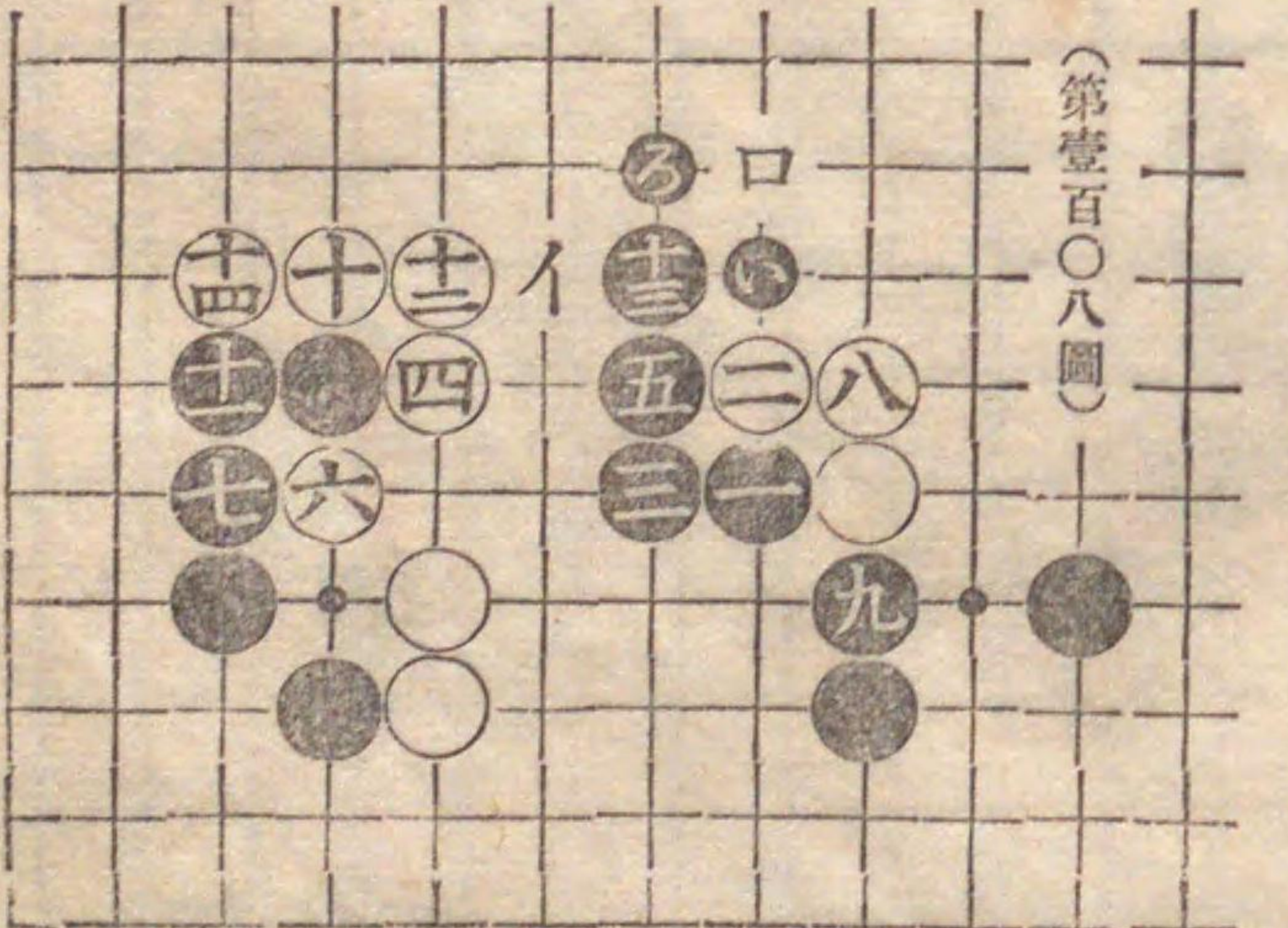
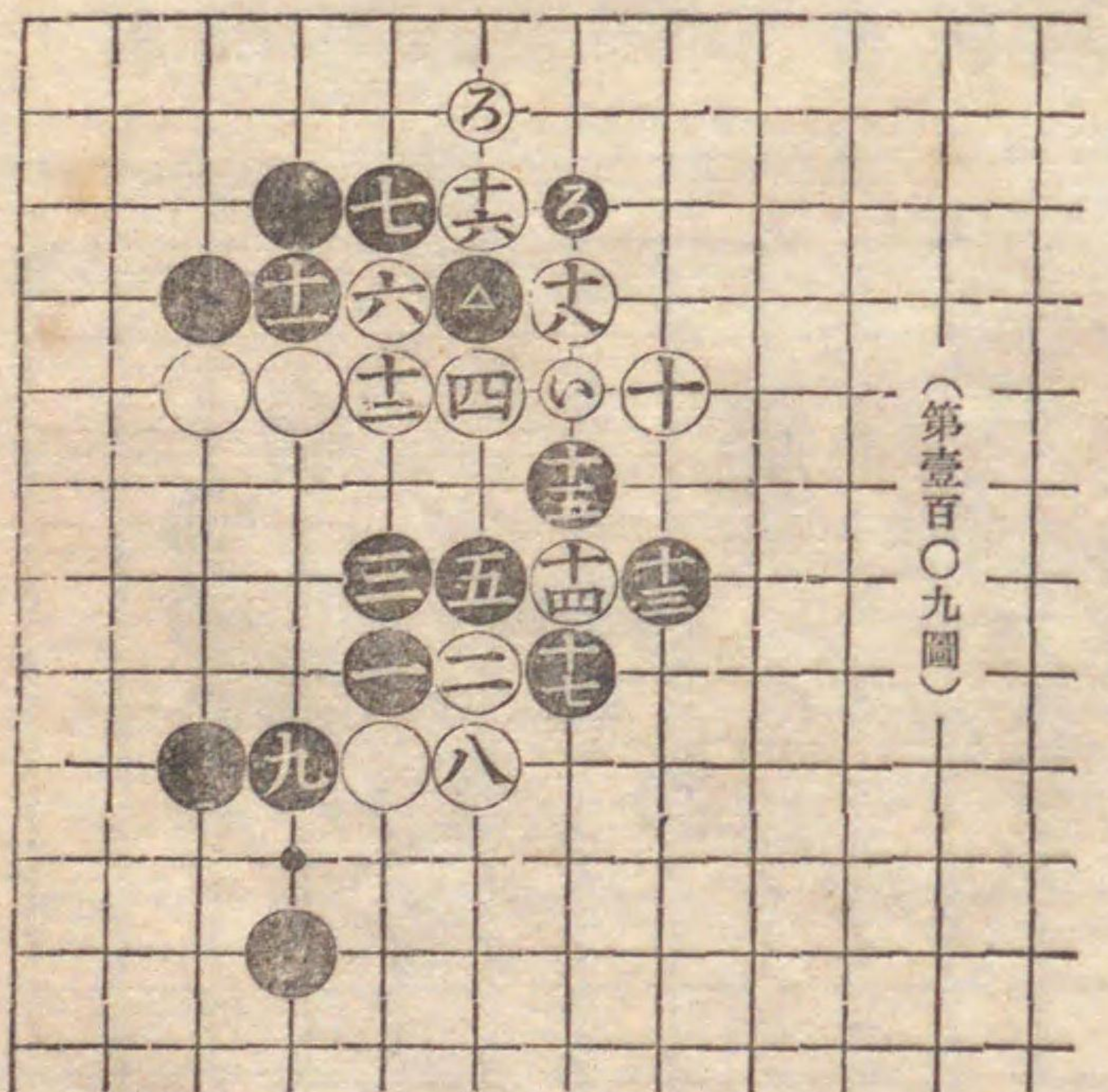
○(第壹百〇八圖) 本圖の如く黒が一と頂ける意は白を兩斷するにある、白が二と縛るは黒を三と行ひさせて四と頂ける手を自然に造り出す趣向である、白に四と頂けられた時普通の場合黒は必ず十の點へ行るのであるが、本圖は飽迄も一と頂けた初の主旨を貫徹して白を兩斷するため五と曲つたのである、白六は先づ黒の缺點を衝いて白自身の缺點を補うたのである、白八は九の點に衝き當らうといふ準備である、黒九は白八の意を妨げて茲に先鞭を着けたのである、白が先づ十二と堅固に粘いて次で十四と黒を一隅に閉鎖したのは良い手であるが、黒が十三と突出して三子の白を孤弱ならしめ中原に占め得た勢力も極めて強大である。

「註」此の黒十三の手は㊬と縛てもよし、又㊭と飛んでもよい、即黒㊮と縛ね、白が十四と抑へた時㊯と掛粘いてをるのである、又黒が初に㊰と縛ねず㊱と飛び、白が十三の點に冲んで來れば、黒㊲とアテ白を(イ)に粘がして(ロ)と粘いておくがよい、但し圖の如く十三と行る手は黒先手である。



○(第壹百〇九圖) 本圖は前圖白十の手からの變化である、白十、黒十三の飛は共に「行ひ」をハタラカした手である、黒十一のアテは後に白が十六と截つて來る手を豫想して、其の際△印一子を捨てやうと覺悟した手である、

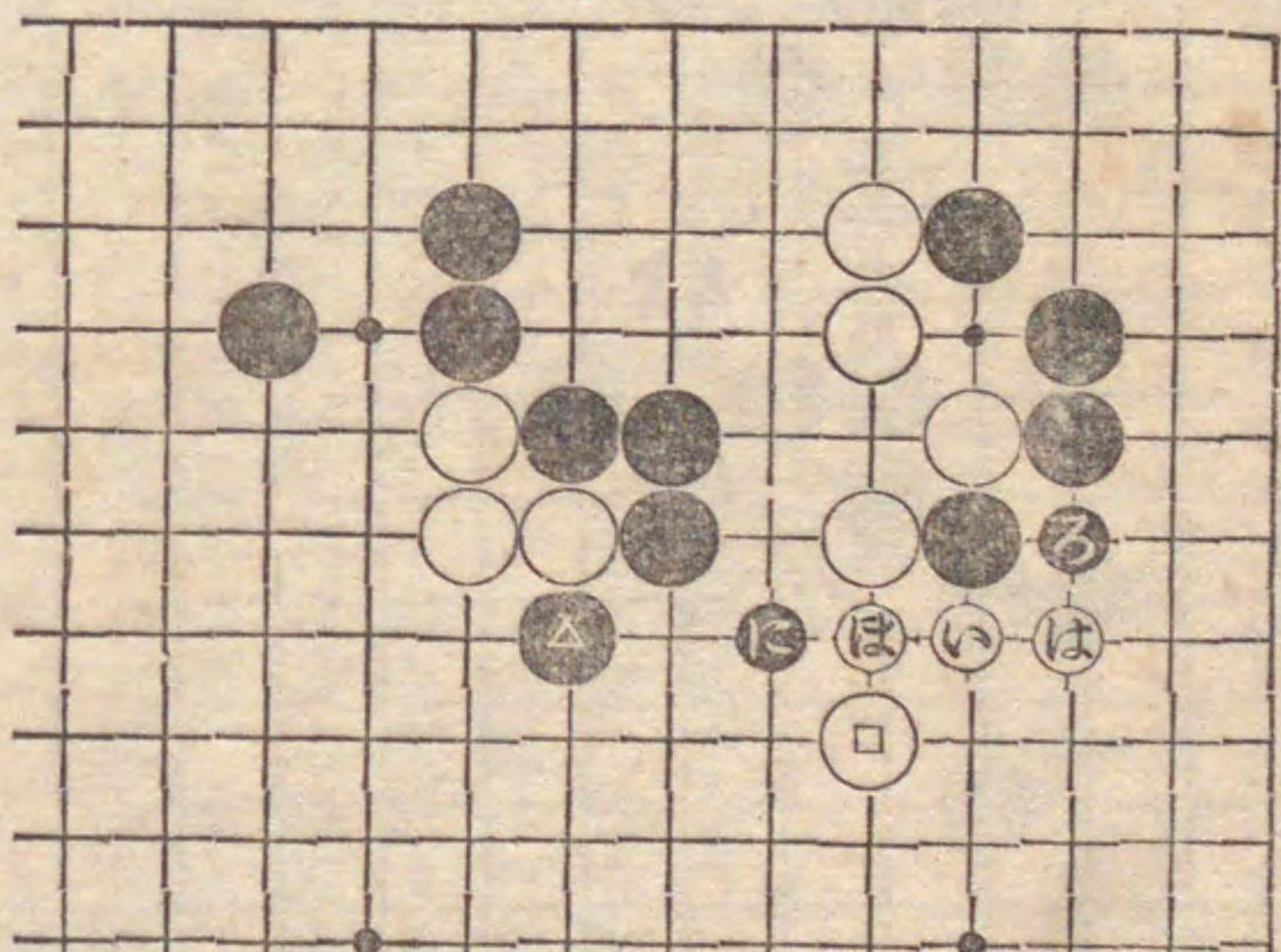
白が十四と縛込んでゐて十六と截つた手は頗る巧妙である、何故なれば黒が十七の手で十八の點に行ひれば白は㊳と粘ぐ其時黒が十七へ提れば白に㊴と打たれて大不利を蒙る、若又黒十七へ提らず㊵へ曲らば白に十七の點へ粘がれて兩斷される結果になるからである、要するに本圖の結果黒十七の打拔の利益と、白十八の打拔の利益と、何れが大なるやといふ事は、局勢全體に及ぼす双方の影響から打算しなければ解らぬ。



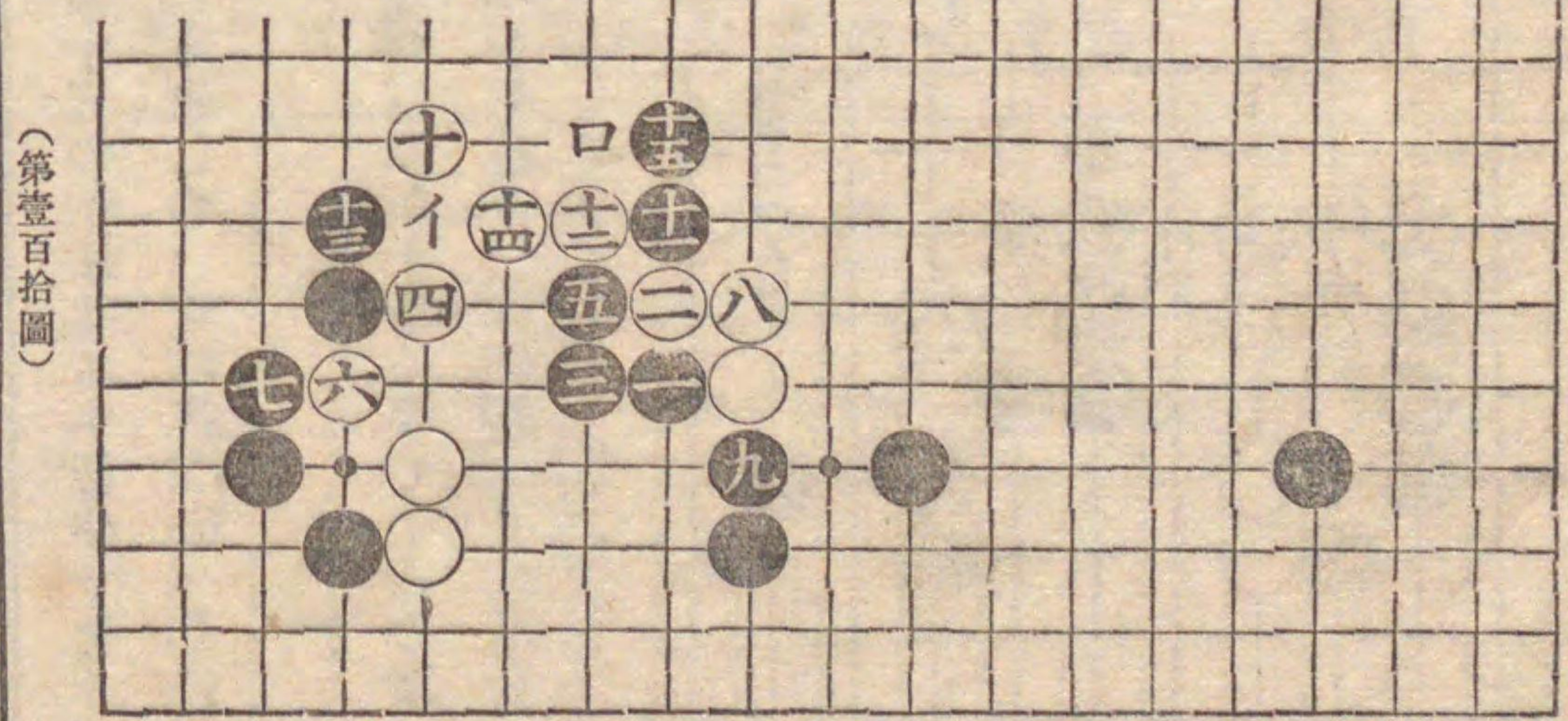


(参考甲圖)

○(第壹百拾圖)  
 前圖黒十一の手からの變化である、黒は前圖の様に單に、一間飛する手を以つて此く十一と緯ね、白に十二と截らして、十三と行るのは頗る巧妙な手である此の黒十一は白が十三の點に黒を攻撃するのを牽制した手である、何故なれば黒十一の時白が十三の點へ打つと『甲圖』の様な結果になつて不利を蒙る。



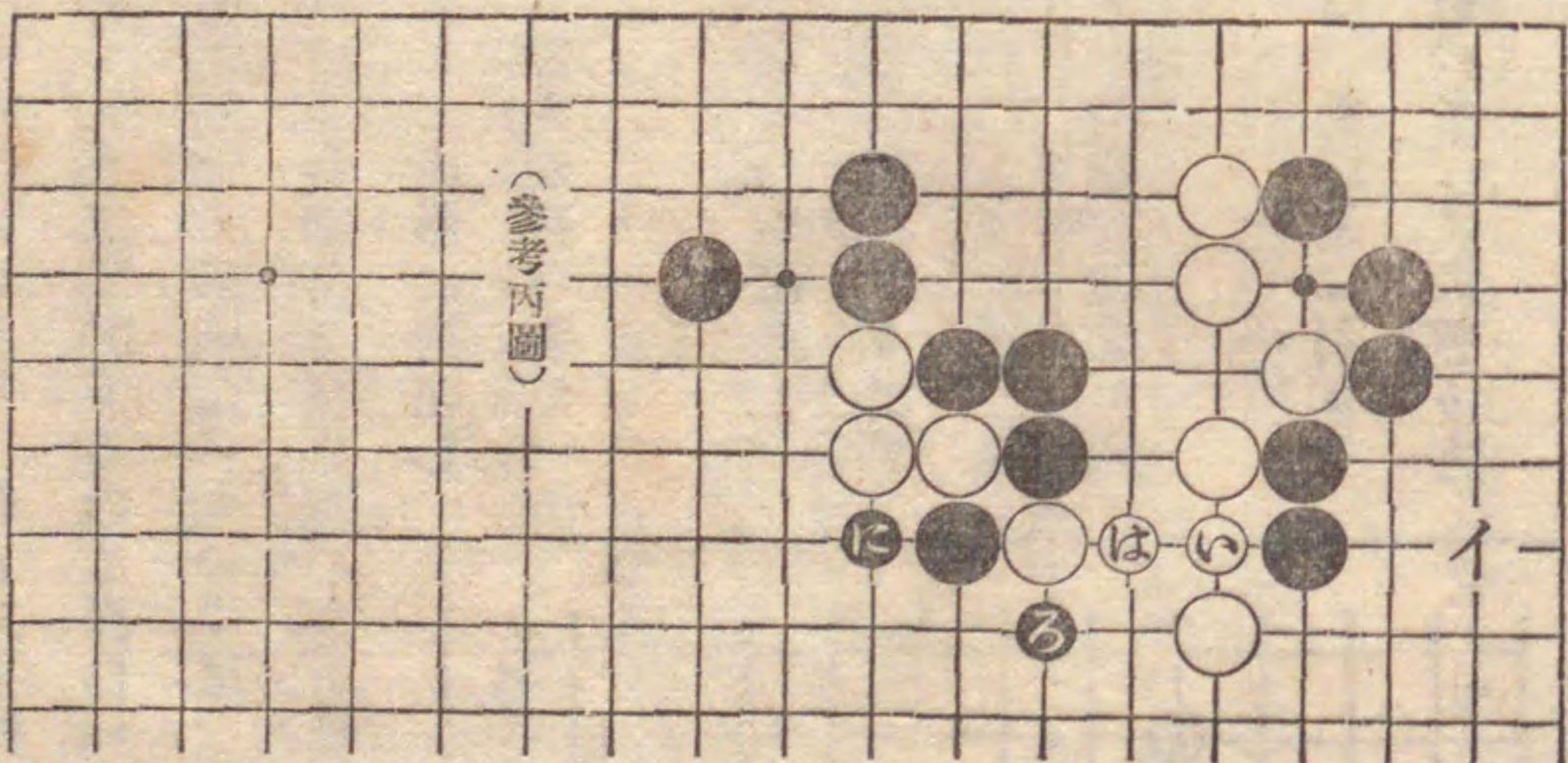
▲(参考甲圖) 白十二の手で、黒、白が一旦とアテた以上は其の主旨を貫いてと抑へるのは無論の手である、其の時黒にと視かれて粘り結果になつては、黒の△印一子の緯は非常にはタライて居るが白印一子は冗着に歸した事になる。



(第壹百拾圖)

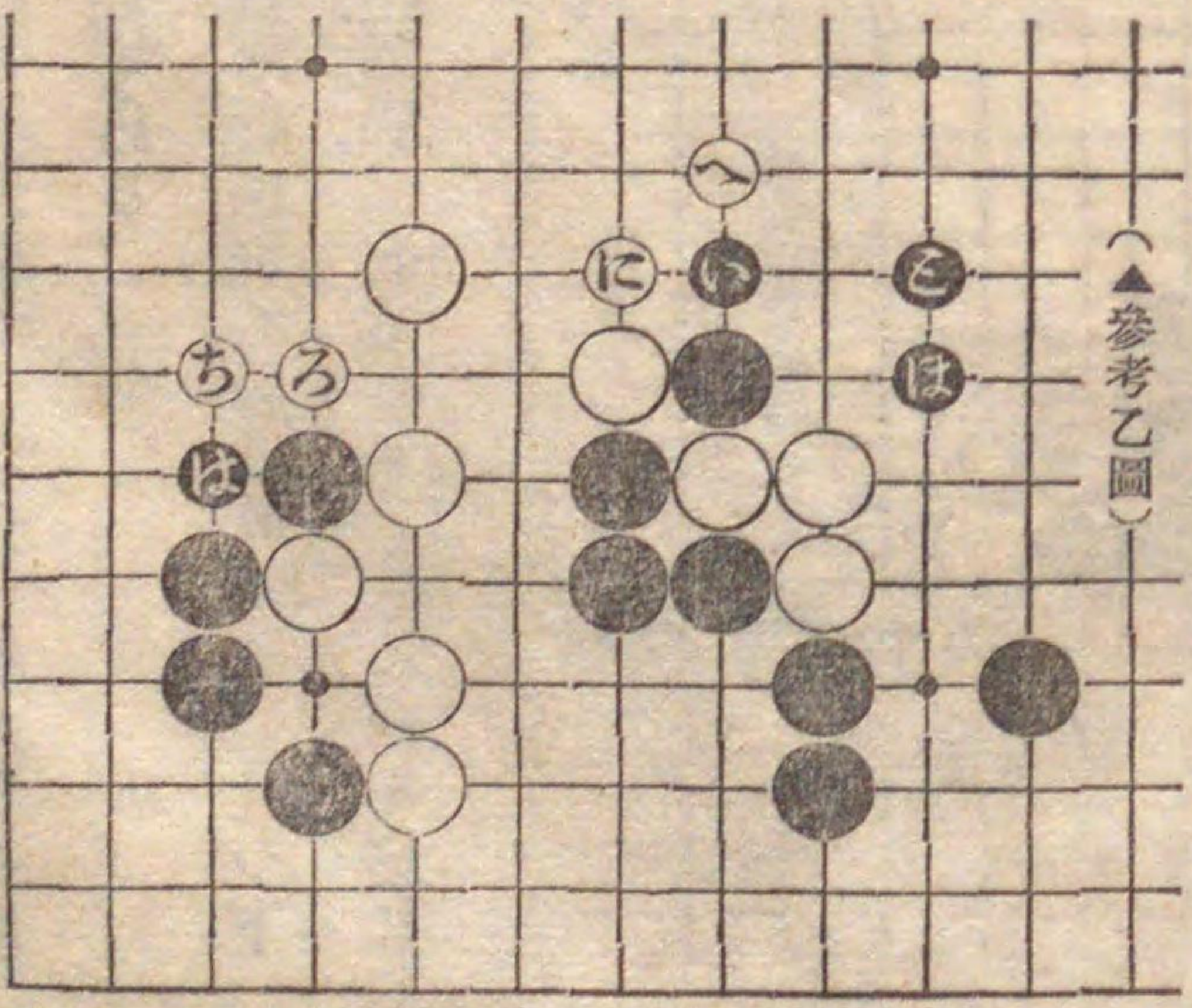
其故白は十二と截つた、黒十三の行は急務である、何故なれば此の手を以つて十五の點へ先つ行るとすると忽ち『乙圖』の様な不利に陥るからである。

▲(参考乙圖) 即ち黒十三の手で、白、黒、白、黒、白、黒と並んだ時白に打たれ、白をして大勢力を外部に張らしむる事になる。乃て黒は十三と行びて白(イ)の缺點を視ひ、白を(イ)に粘がして(ロ)とアテやうといふ意、白十四は黒十三の策を外した手である、何故なれば、若し此の手で(イ)と粘げば『丙圖』の如き不結果に陥るからである。



(参考丙圖)

▲(参考丙圖) 白十四の手で黒、白はと愚劣な粘を餘義なくせしめられる、最も此の形は後に白から(イ)と打つて黒を攻める手理はあるが、其よりはと打たれた損失の方が夥しいのである。



(参考乙圖)

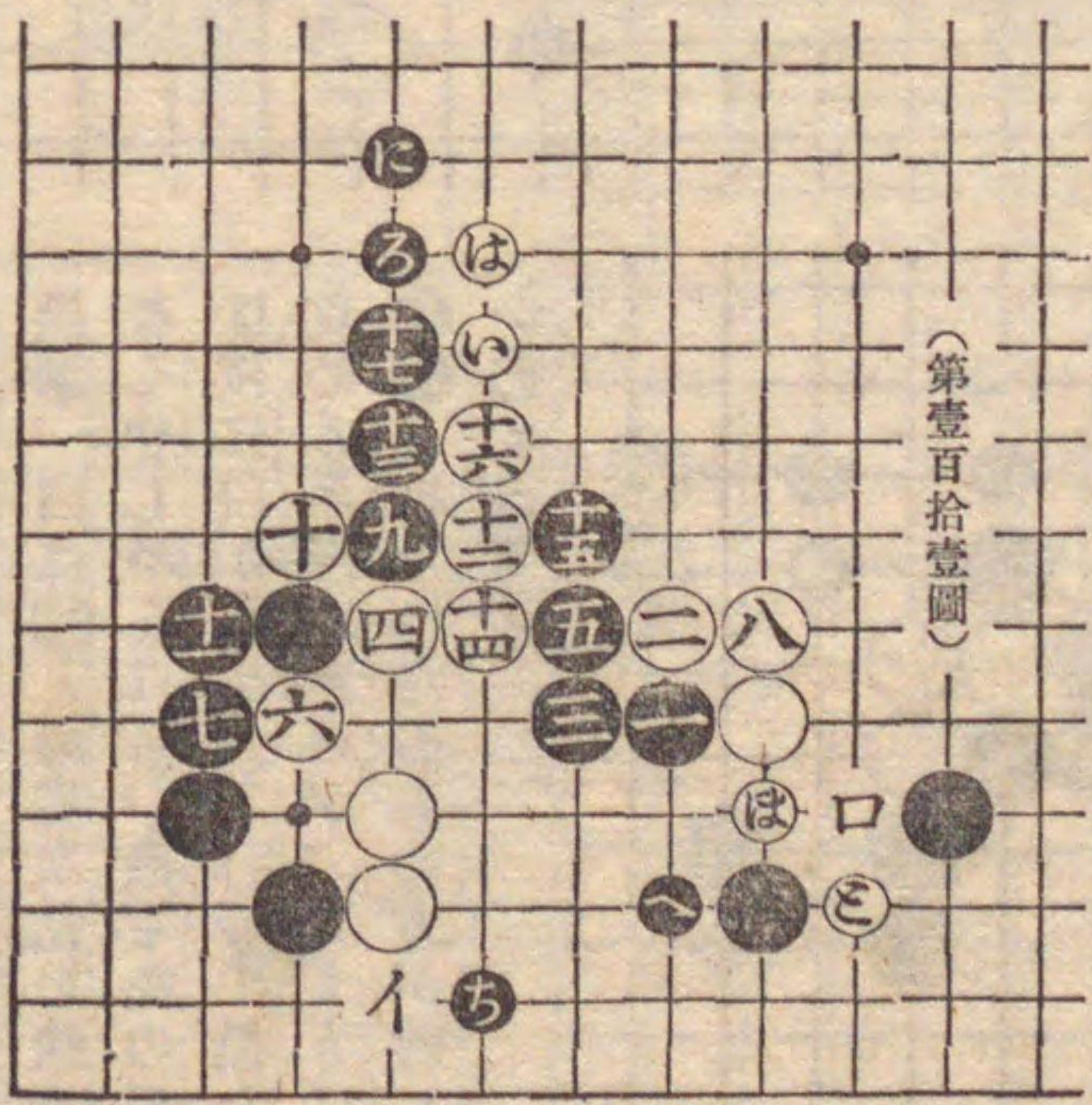
~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



○(第壹百拾壹圖) 前圖黒九の手からの變化である、若し左上隅の布石關係で、左側に絶大なる地域を造らうといふ様な場合には、此く九と二段縛するの面白い手である。

△「註」 白が八と粘いだ時③の點に衝き當る前圖迄の九の手は、従來行はれて居る通形で、且つ下側を鞏固にする主意から見れば良い手には違ひないが、然し棋は活物であるから、機に臨み變に應じて手段を講じねばならぬ、決して或形に拘泥してはならぬ、本圖九の手の如きも古人未發の手で、秀哉師新工夫の一着である。

本圖黒十五の出は最も要點である、即ち白を兩斷し、一方白十六の押を誘致して十七の行を自然に造り出す手である、本圖の後白若④、⑤、と押して來れば、黒は⑥、⑦、と鐵壁を加へて、益々九と縛ねた初志を完成する事になる、又下側に向つて白が⑧と衝き來らば、黒は⑨に引き、白が⑩と縛ねて來た時、黒は⑪と打つて(イ)の盤りと(ロ)の截とを見合つて居るが良い。



(第壹百拾壹圖)

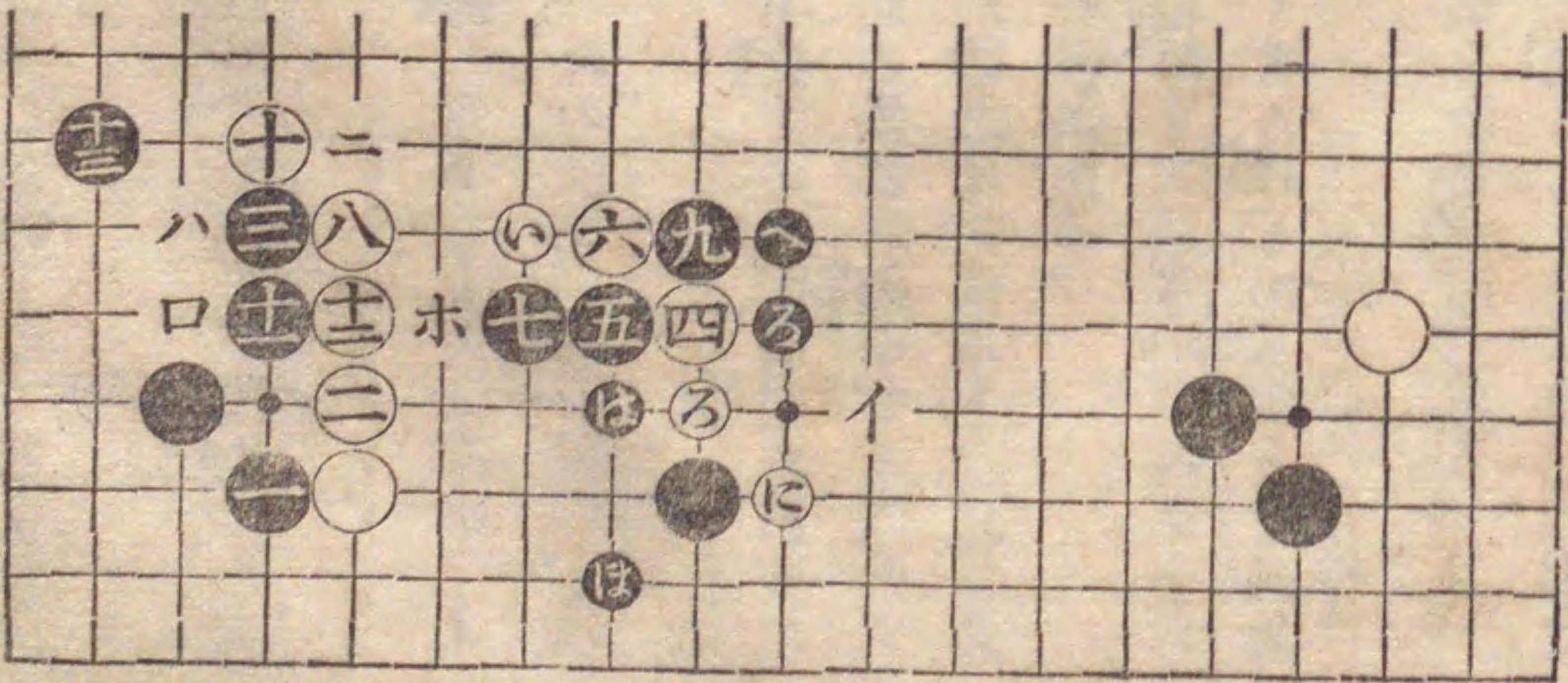
○(第壹百拾貳圖) 右下隅に若し堅固な布石があれば前圖の様に(イ)

の點へ斜走に控へるは多少緩漫の嫌があるから、本圖の如く直に五と頂けて激しく戦ふがよい。

白六は此く上から縛るの外はない、之は(前圖迄の白二の手と同じく)黒を七と行びさせて八と頂ける手を調子よく運ばうといふ手である、黒九の截も論のない手である、若し(イ)に黒があれば此の(イ)と九とは重複するが、本圖では是非之を截らねばならぬ、

白若し十の手で⑫と抑へて來たならば黒は⑬と白四を抱へておく、白十の手で今迄の通りに十一の點から膨み、黒(ロ)白十、黒(ハ)白(ニ)と打てば隅の黒を堅固無比なものにして終ふのみならず、黒に(ホ)と覗かれる惧がある、「前圖迄の様に黒が⑭の點に曲つて居る際は(ホ)の覗きは黒愚形になる」

本圖の後白若し十四の手で⑮と衝き當つて來れば黒は⑯と沿ひ、白⑰の縛の時⑱と掛粘が妙手である、次て白の打方は種々あらうが、萬一(イ)とでも掛粘をして來れば黒は(ニ)の截と(ロ)の行とを見て⑲の點へ押し出す手もある。



(第壹百拾貳圖)



○(第壹百拾參圖) 白が四の手を前圖迄の様に⑤と冠しても面白くないと感じた時、此く四と斜走に打つ事もある、

其時黒は如何打つかといふと、●と尖ひか、●と二間拓するか、が普通の手であつて、稀に(イ)と上から掛ける手も無いとは限らぬ、

黒が●と尖む手の適應する隣隅の布石状態は前圖の如く(ロ)と斜走に控へる手と大差はない、又黒が●と二間拓するのは如何なる場合かといふと、是亦前圖迄の二間拓の時の隣隅の布石状態と略同様と心得ておけばよい。

○(第壹百拾四圖) 黒に五と尖まれた時、白は別に打方もないから先づ手抜するのが普通である、然し次で黒に●の點から煽られるのは誠に急な手であるから、或は白は此の黒●の煽を拒ぐために(イ)と斜走しておく手もある、然し白が(イ)と打つた後でも、黒の勢力が●邊に加はると、更に黒から●と頂越れる手があるから、白は之に備へて(ホ)と衝き當つておく必要がある。

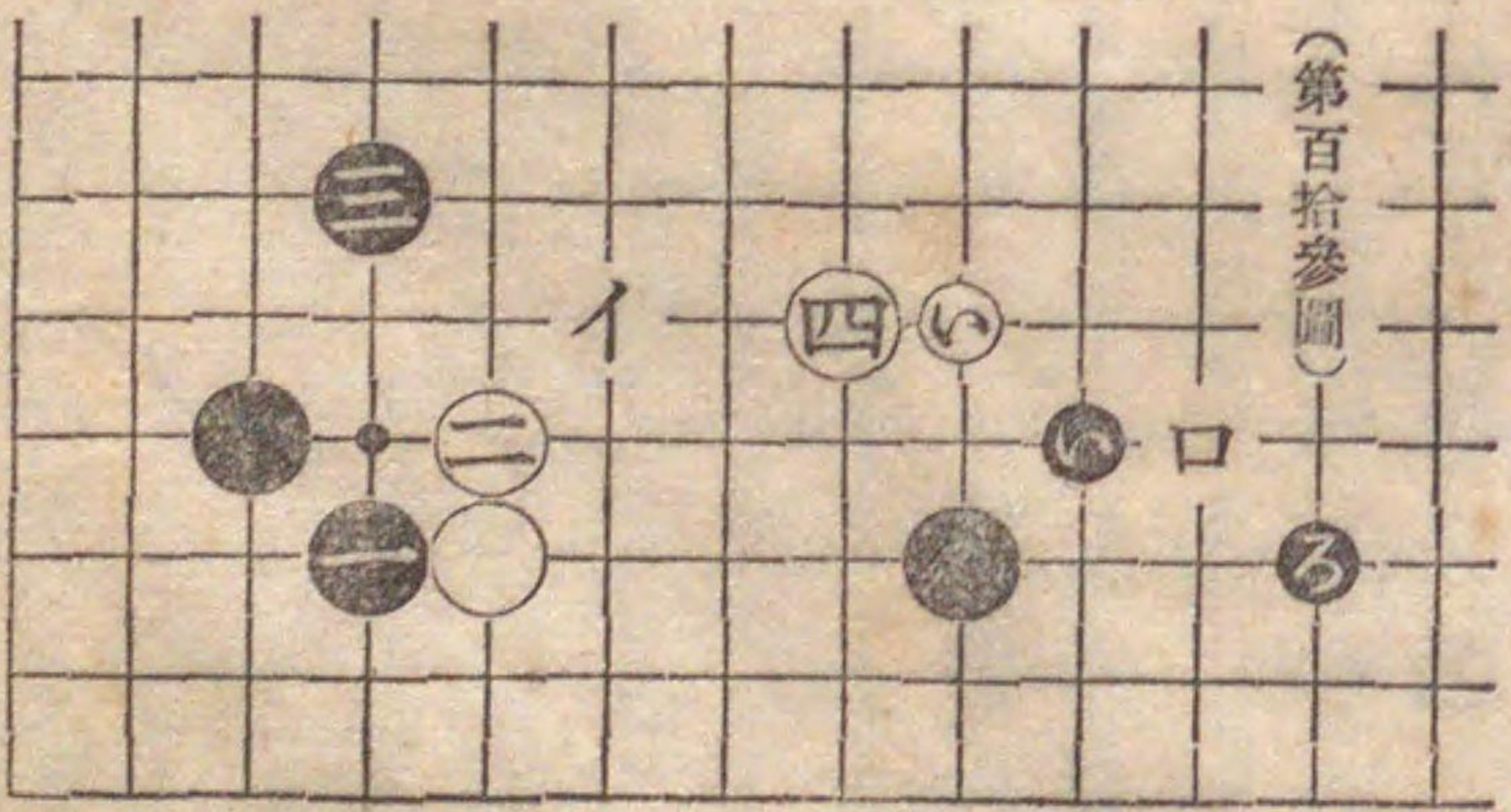
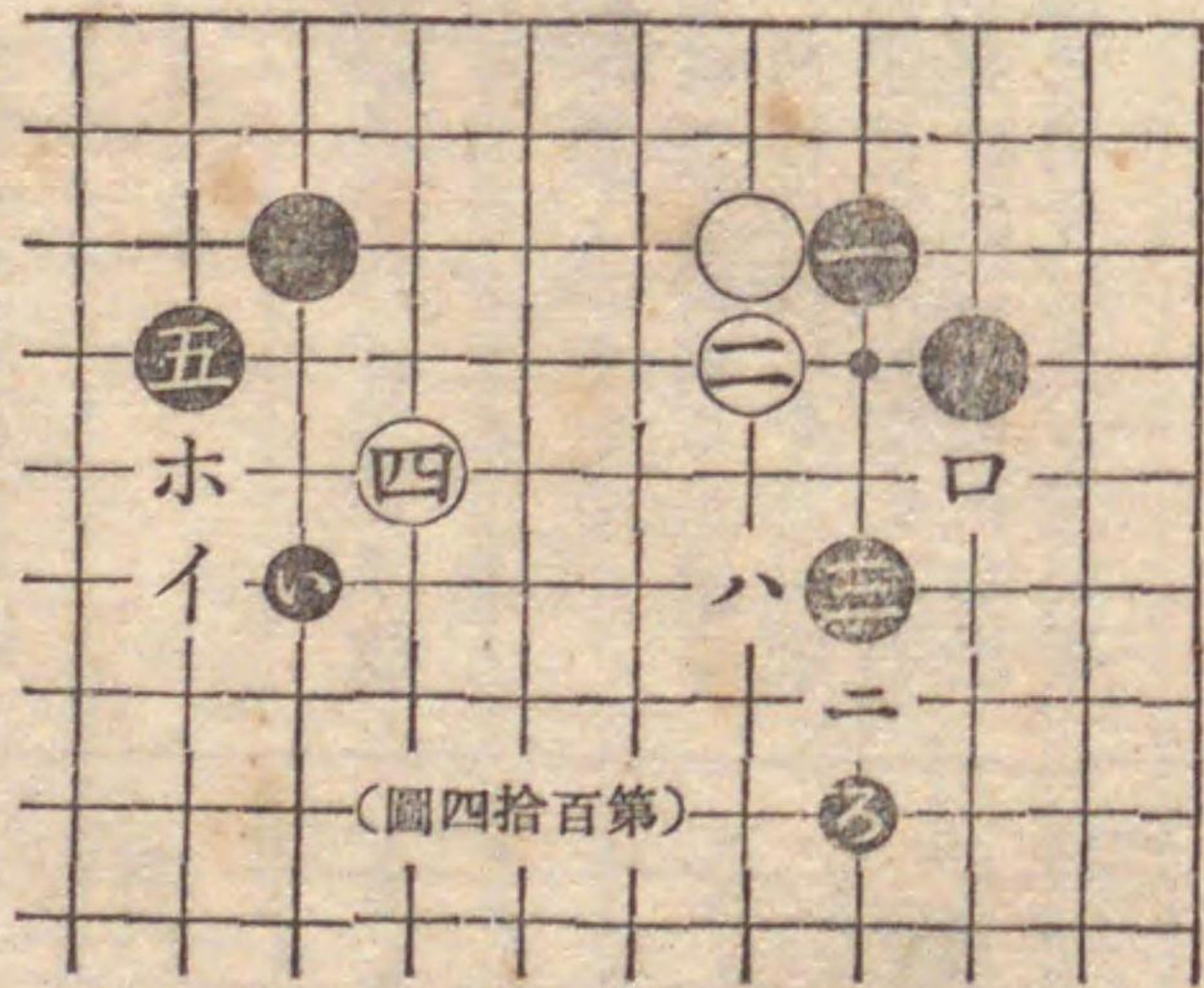
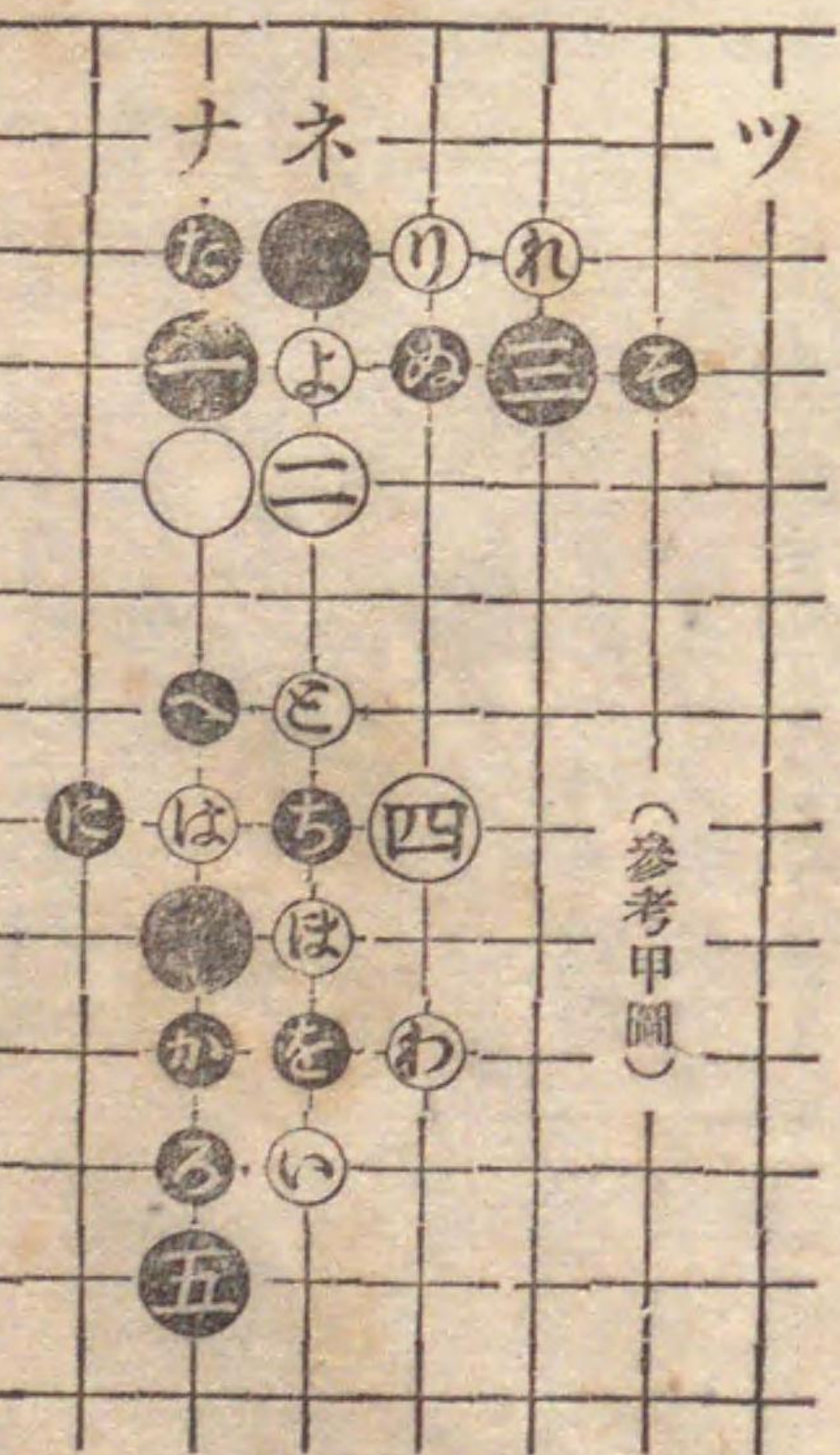
△「註」 黒五の尖みの堅固なるに比して白四は孤弱であるから、(ロ)と頂越す力はない、其から白が若も(ハ)と頂ければ、黒に(ニ)と行かれて(ロ)と頂越す味を全然なくする譯であるから、萬止むを得ざるの外は、白は(ハ)と頂けぬ様にせなければならぬ。

▲(參考甲圖) 以下二圖は定石ではない、只此ういふ打方もあるといふ事を示した迄である、黒が此く五と二間拓した時、白が⑤と迫るのは此の二間の低い形を更らに凝らして茲に自己の形を

リノ頂越打方

黒を、次白、手ニ二種アリ

整へると同時に一方①と頂越を打たうといふ考である、即白の策は白①黒②白③黒④となれば白は⑤の點に引いて自ら治らうか若くは⑥へ引く手で①と頂越さうかといふ二つの打方を見てをるのである、然るに黒が●と尋常に應ぜずに●と逆襲して來たのは白の策の半を破つた手である



▲參考甲圖の白⑤の手は⑥の處へ黒●を提つて劫とする。

(附錄十番棋第五局第卅六頁參看)



ろく手頂越ヲ  
防ク手順次  
頁ニアリ

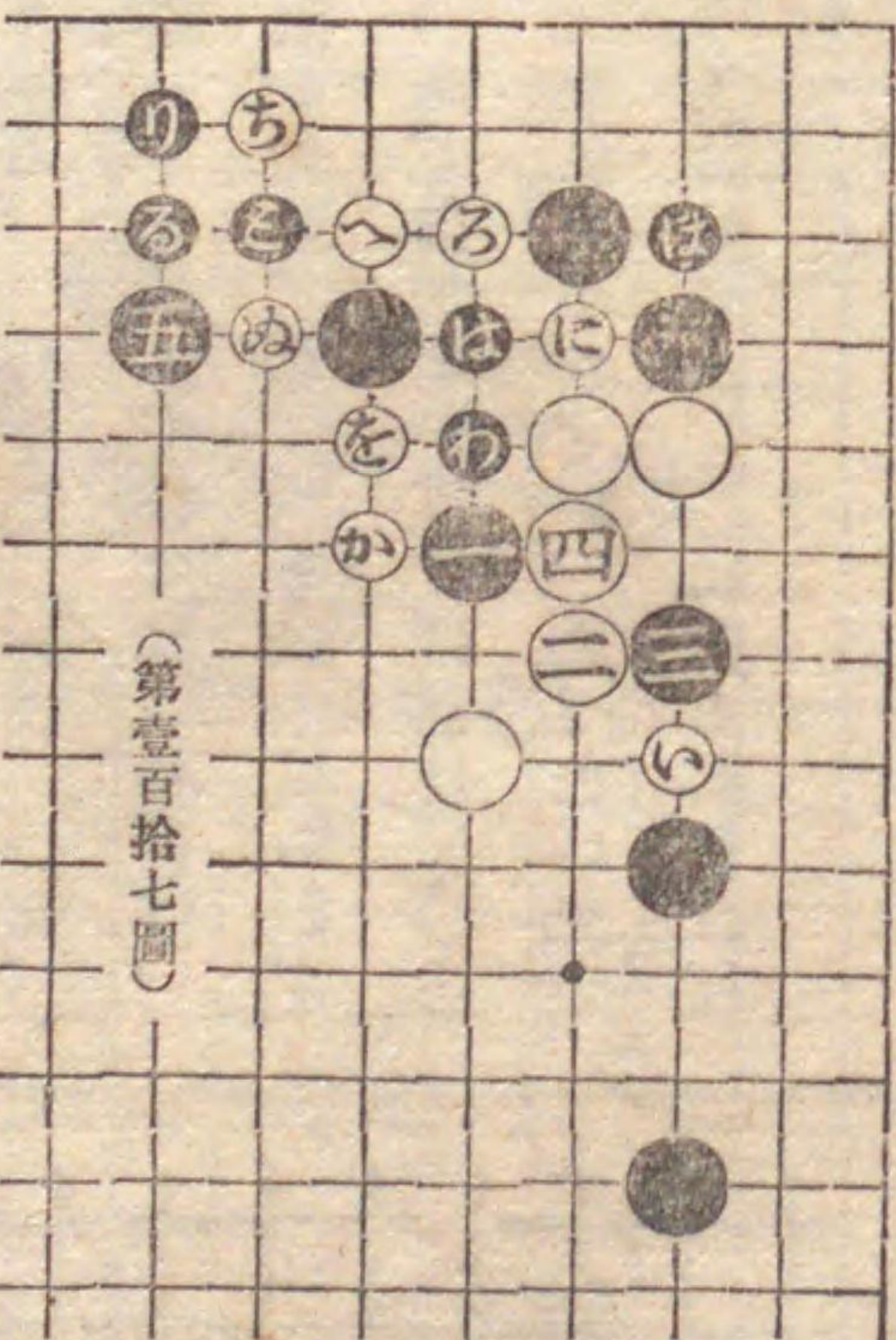
▲(参考乙圖) 前圖白◎からの變化である、此くなれば右の黒二子と左白二子とのフリカハリである、本圖白◎と粘く手を以つて(イ)と行ひれば、黒(ロ)白(ハ)黒(ニ)白(ホ)黒(ヘ)白(ト)と後手を引き、左方の黒を宏壯ならしむる不利がある、又黒は◎と尖んで此の二子を提りキルがよい手である、此の手で(ロ)と立つと、白に(チ)と打たれ黒(リ)の時白に(ヌ)と出られる味がある、又後に黒に◎と曲られると(ヨ)と盤られる手が出るから、白は◎と拒いておかねばならぬ、又白は右下に△印の如き布石があれば、黒◎の次の手で◎と包圍しておく手なども良い姿勢である。

「再度の手拔」

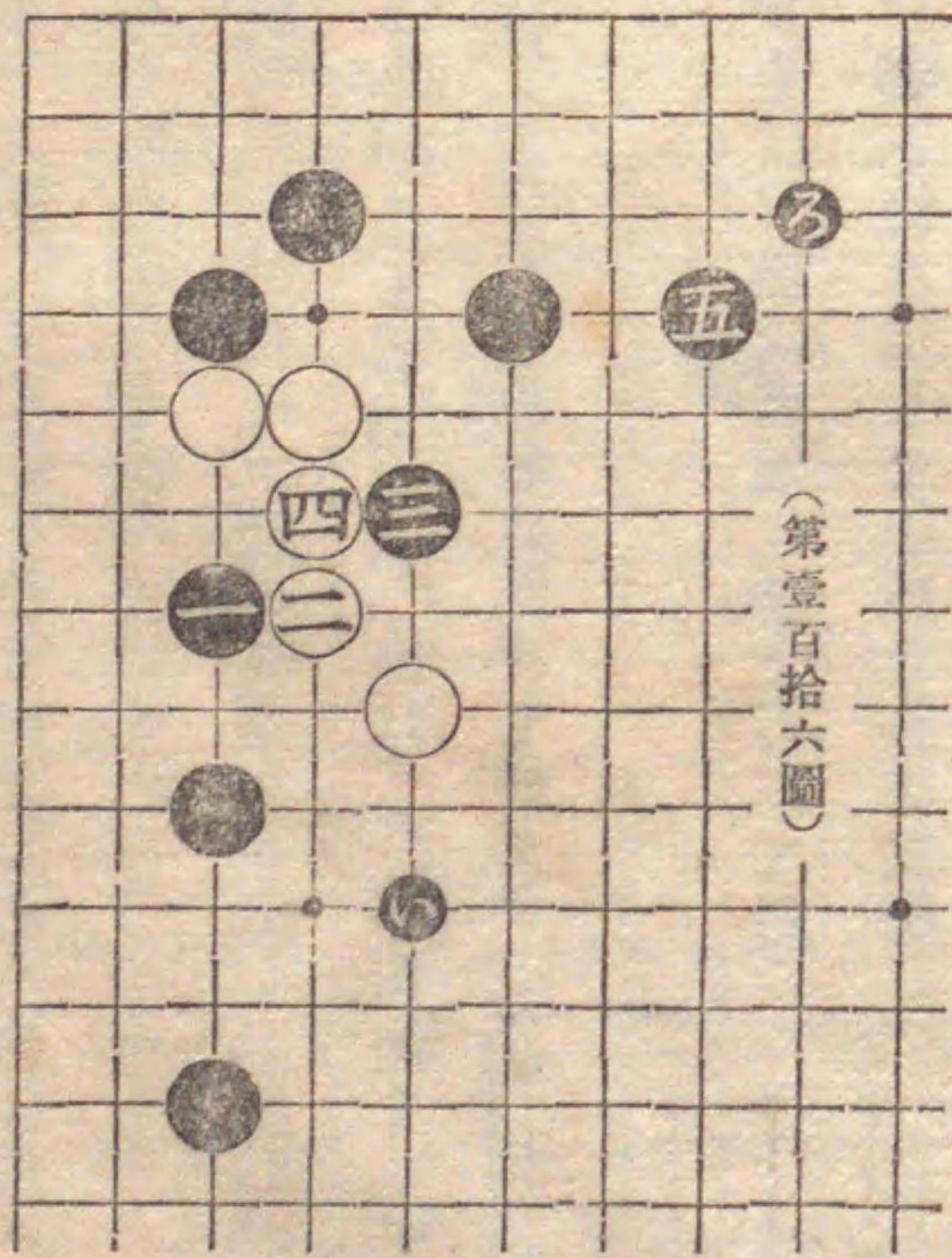
○(第壹百拾五圖) 黒五と二間拓の時、白手抜すれば黒亦手抜して時機を觀て居るがよい、が若も此の白を攻るとならば◎と根據に迫るか、◎と上から臨んで◎の頂越を拒ぐかである。  
○(第壹百拾六圖) 黒下から一と迫れば白は二と尖るか或は單に三の點に尖むかである、白が此く二と頂ければ必ず三と覗いて四と粘がして五と飛ぶがよい、黒五の手は隣隅の敵の布石關係によりて◎と低く打つ事もある其の意味は既に各所に詳述した通りである、若し白が二の手を三の點に尖まば黒は三の手で五と飛ぶのである。

注意ノ点

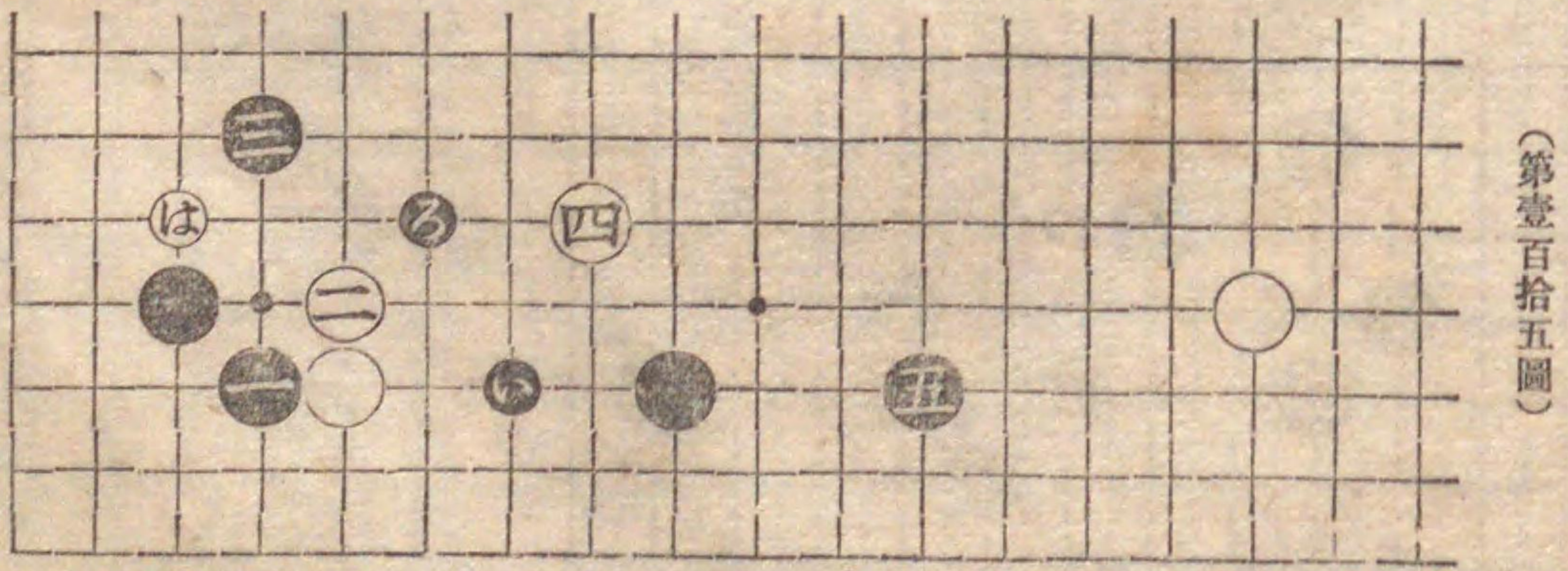
(第壹百拾七圖) 黒が一と上から臨めば、白は二と飛ぶか或は◎と頂けるかである、白二の飛の時黒若し三と下から頂け白四、黒五、となれば前圖と同結果である、茲て注意す可きは黒三の頂けてある、五に飛んで◎の頂越を拒ぐ考ならば三と頂けて四と粘がすもよいが、若し五の一手を手抜するつもりならば三の頂けを打つてはならぬ。  
其故は黒一、白二、黒三、白四の後黒手抜して白に◎と頂越されると黒◎、白◎、黒◎、白◎の時黒は◎と二段綽が出来ぬ、若◎と行くと白◎、黒◎、白◎、黒◎、白◎と提られて終ふ、乃て黒三が打つてなければ白四もないから其の時は◎と二段綽が利く故白は◎に頂越は出来ぬのである。



(第壹百拾七圖)



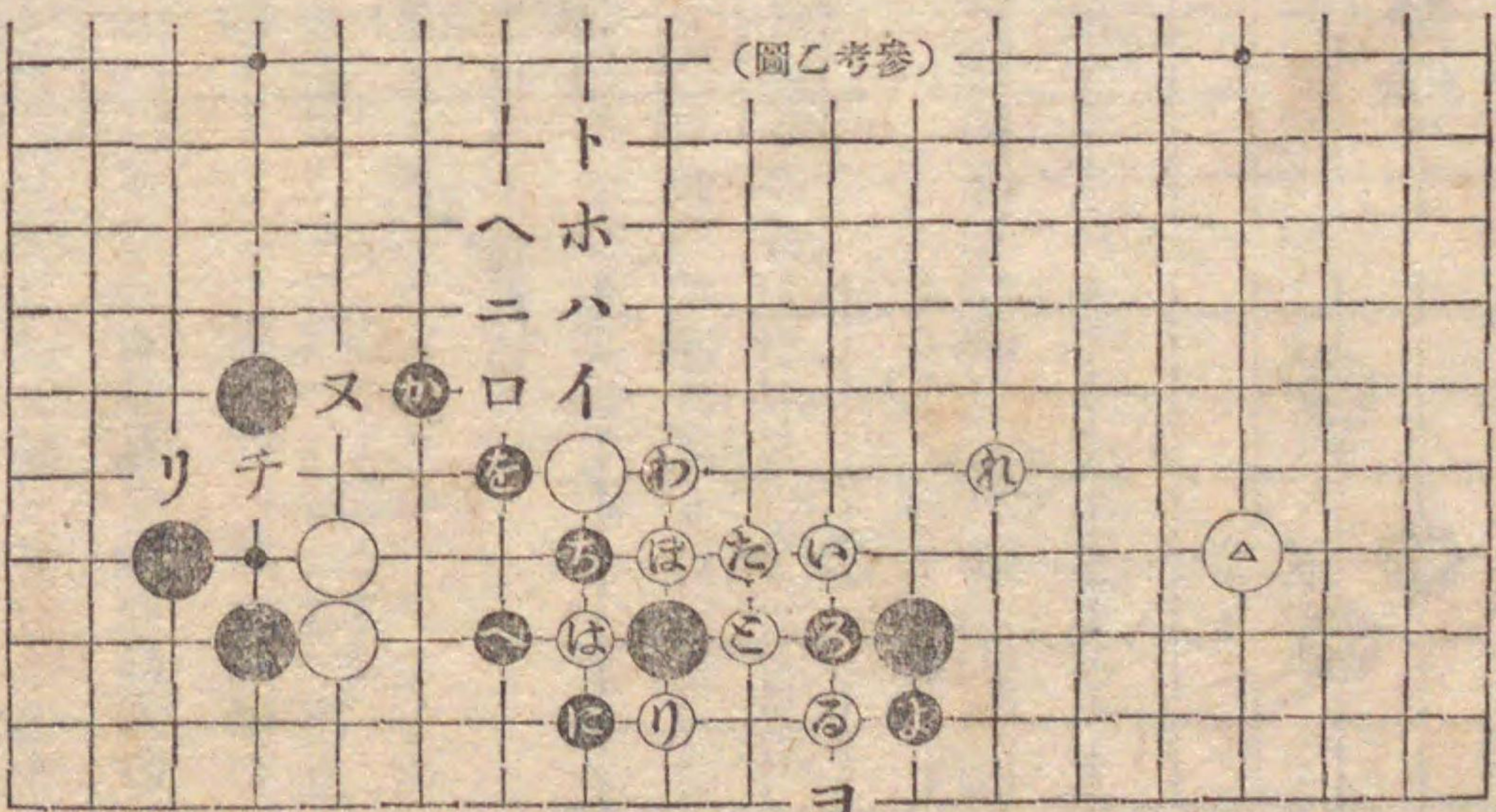
(第壹百拾六圖)



(第壹百拾五圖)

~~~~~(石 定 先 五)~~~~~

(圖乙考參)



▲黒◎は◎の點粘ぐ

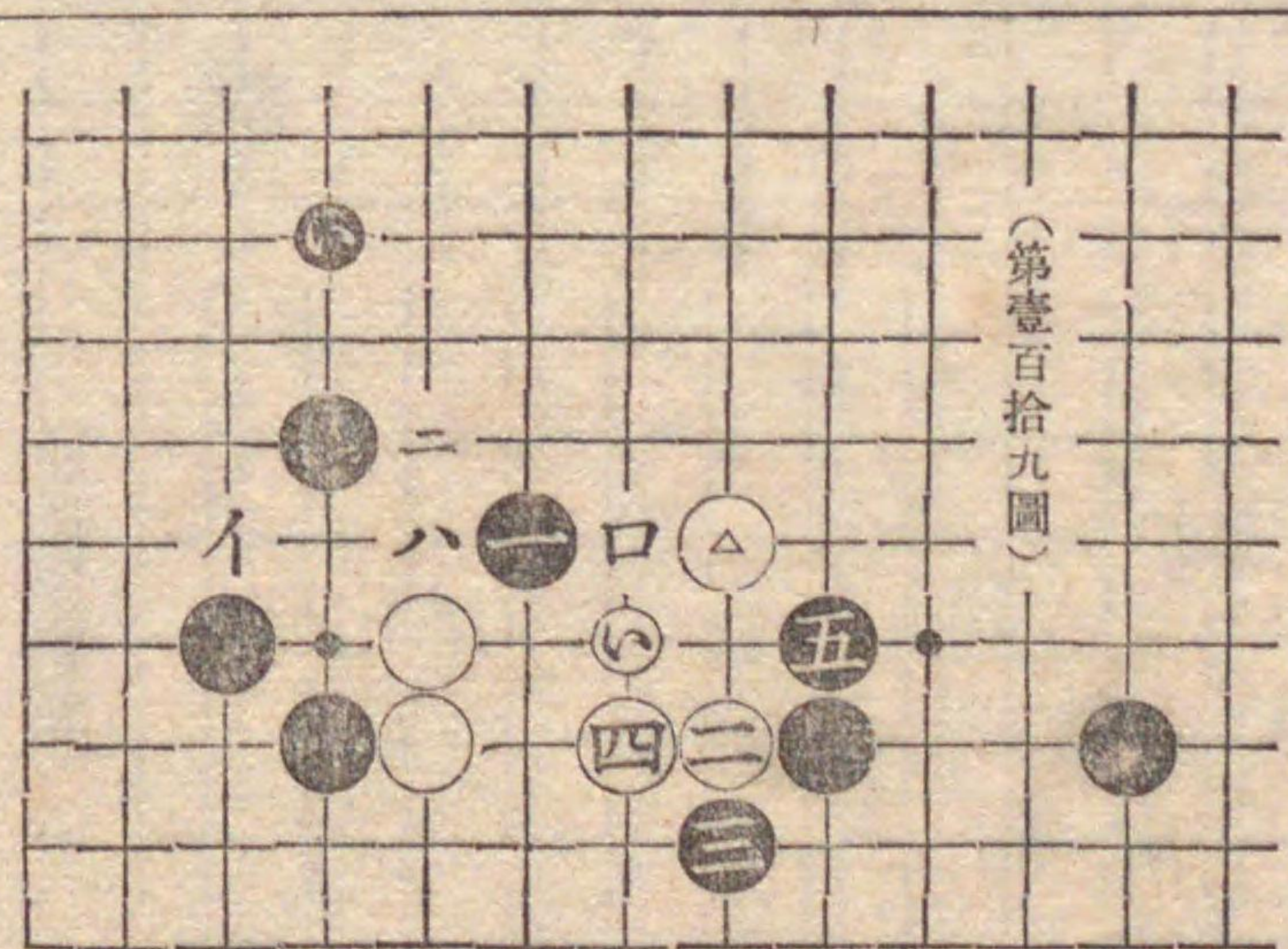


○(第壹百拾九圖) 前圖の如く黒一に對して白⑥と打てば初に打つた△印一子が極めてハタラキのない手に歸着する、乃て二と頂けて黒の應手を試みたのである、  
 黒三と緯ね五と立つた手は白を凝らすと同時に下側の我地を手堅くしたのである、  
 黒五に應じて白は(ロ)と双關するか、(ハ)と突出するか、或は(ニ)と頂越すかである、若し白六の手で(ロ)と双關すれば黒に⑦と飛ばれて(イ)の頂越は消えて終ふ。

▲(参考天圖)

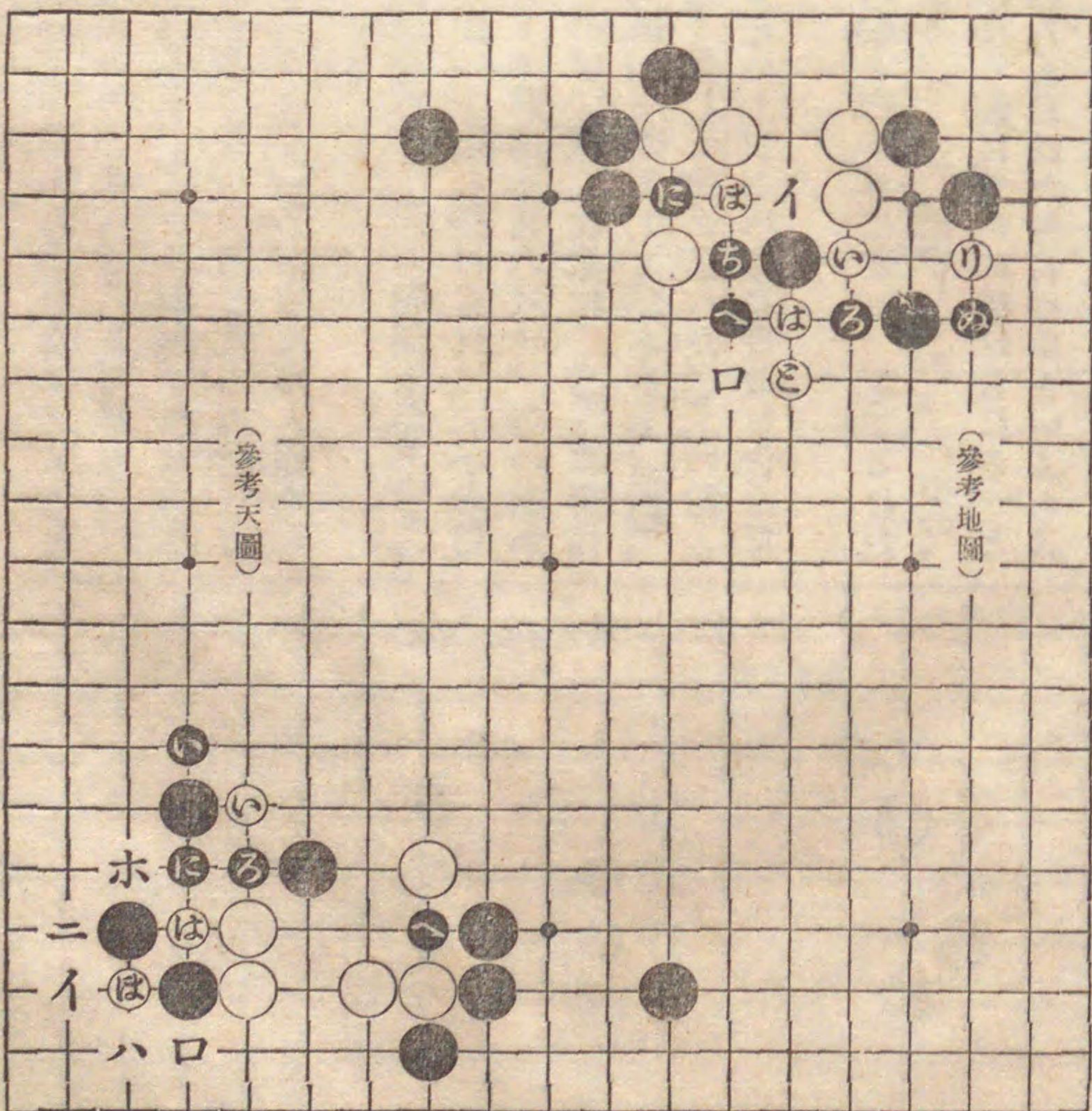
白若六の手で⑥と頂越して來たならば、黒は普通に⑦と行びて居て十分である、が然し⑧と截り、⑨と衝き出して中原を全部我勢力範圍に歸せしめやうといふ策もある、

即ち白⑥、黒⑦、白⑧此の時黒が隅一子を惜んで⑨の點に粘れば、白に⑩の點を截られ白の術中に陥るから、黒は隅を眼中におかずして⑪と粘き⑫と打つのである、次で白が手を抜けば黒は(イ)と緯ね、白(ロ)の時(ハ)とアテ、切にするがよい、其て白は先づ(ニ)とアテ黒が(ホ)に粘いた時(イ)に粘るか(ロ)に提るか孰れにしても後手は免かれぬのである。



(第壹百拾九圖)

▲(参考地圖) 白若し前々圖六の手で此く⑥と突き出して來たならば、黒⑦と抑へ、白が⑧と截つた時、黒は⑨と突出すがよい、其の時白が⑩と抑へると、黒に⑪と打たれ、  
 白が⑫と行れば黒に⑬と截斷されて終ふ、乃て白は黒⑭に應じて⑮の點を截らねばならぬ、さすれば黒に⑯の點へ一子打抜かれて大不利である。  
 若又黒⑰の時、白が⑱とアテれば、黒は外から⑲とアテ白が(イ)と提つた時黒は(ロ)の點へのびて大優勢である、次で白が⑳と來ても、黒は已に大利益を占めた後であるから㉑と夾んであげばよ。



(参考天圖)

(参考地圖)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~

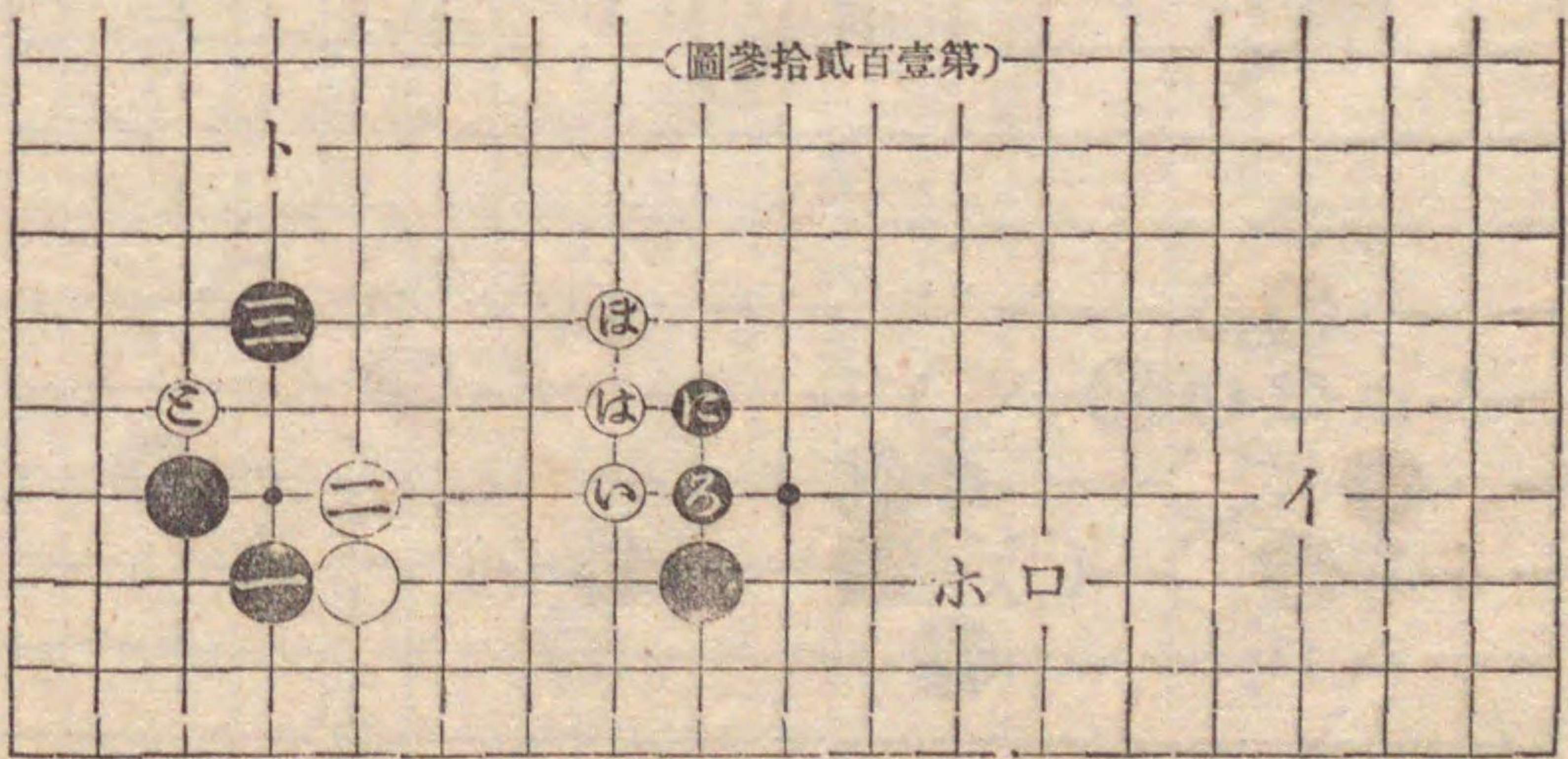


○(第壹百貳拾參圖)

又極めて稀に白が黒の肩に向つて㉔と打つ事がある、其は黒に㉔と  
 應じさせ、白㉔、黒㉕、白㉖、と運び、次で黒が(ロ)と三間に拓け  
 ば、白は㉗と頂越さう、又黒(ロ)と拓かず(ト)と一間飛すれば白は  
 (ロ)と詰めやうといふ二途を見てをる手である、乃て此の白㉔と打  
 つ前提として少くとも左上隅星に(イ)の白が一子あるものと假定し  
 ておかねばならぬ、

乃て白㉔の眞意を解剖すると右下隅白布石(イ)との關係上黒を(ロ)  
 と夾みたい然し單に夾めば黒に㉘の點へ大斜に掛けられて二子の白  
 は頗る苦痛を感じる事になる、サリトテ前述諸圖の様に、㉙の點か  
 ら冠するか若くは㉚の點から斜走すれば、直ちに黒に(ホ)と二間拓  
 されて終ふ、左ういふ場合に黒の二間拓を牽制して㉛と打ち、黒㉜、  
 白㉝、黒㉞、白㉟の手順を自然に造り出して前に述べた(ロ)の詰と  
 ㊀の頂越との二途を見合はしてをるといふ頗る巧妙な策戦を含んだ  
 手である。

△「註」 白に㉔と來られては黒は㉕と押す外はない、要するに白  
 ㉔は㉗の頂越を覗つてをる手である、又上に説明してあつた中の、  
 「白が單に(ロ)から詰めると黒に㉘の點に大斜に掛けられる」と  
 あつたが、若し黒に此く掛けられたら白は如何打つかといふと其  
 は次圖の様な事になる。



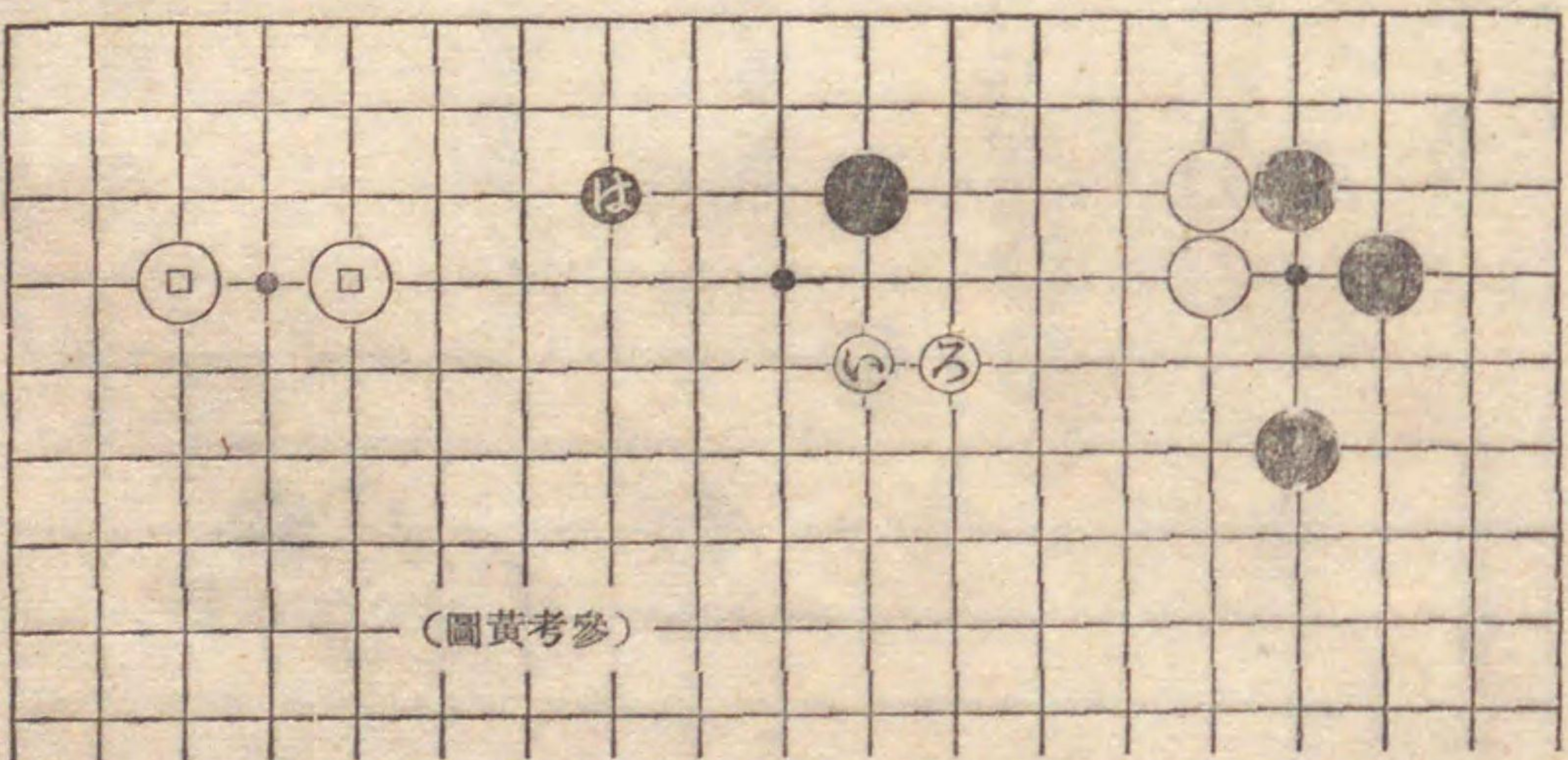
〈圖參拾貳百壹第〉

▲(參考玄圖) 白の詰め場所は

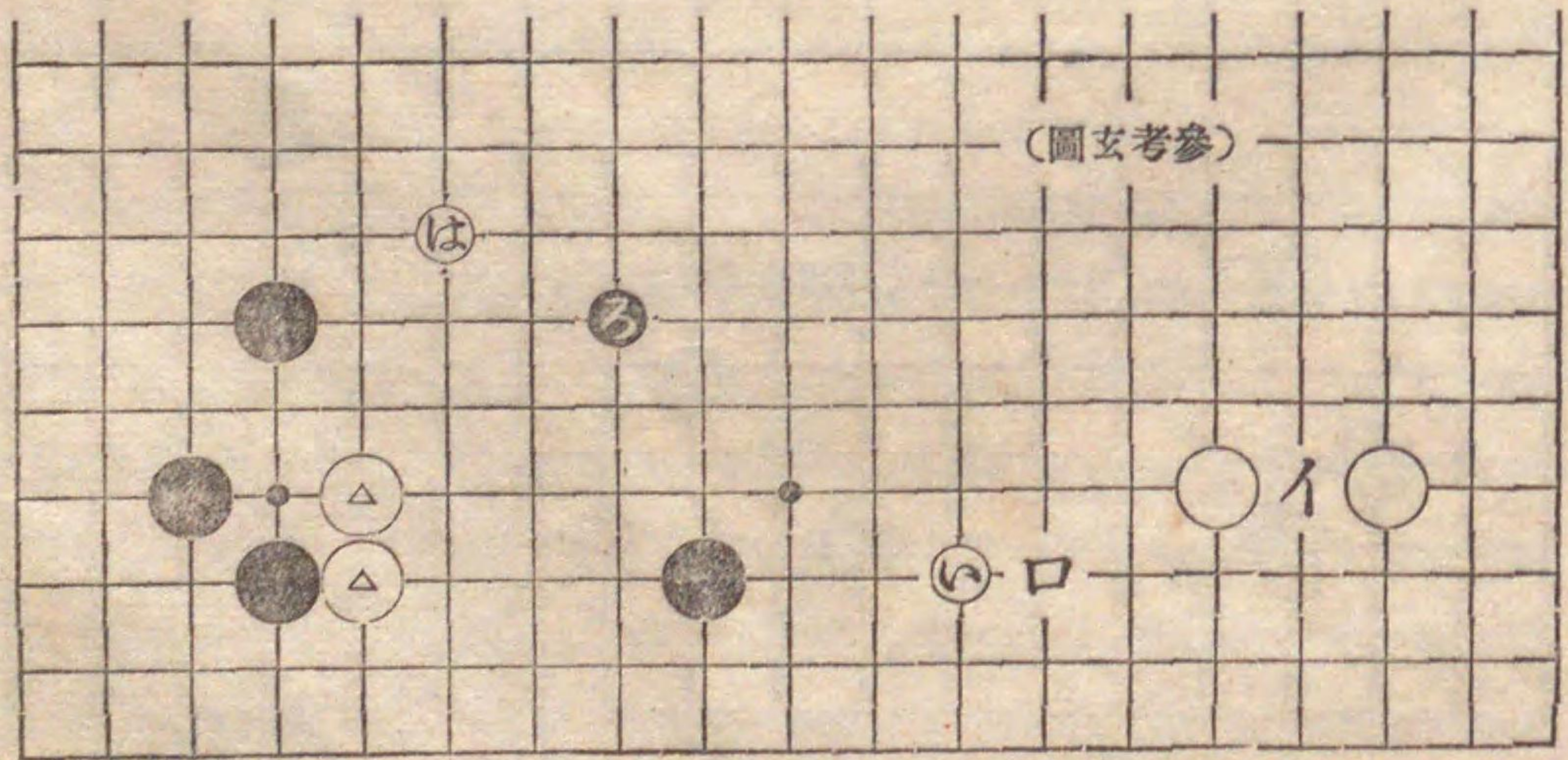
隣隅星に白が(イ)とあれば(ロ)  
 から詰める、又圖の如く一間高  
 締があれば㉔と二間に詰るがよ  
 い、白㉔の詰に應じて黒が㉕と  
 壓して來ると△印二子の白は頗  
 る究屈を感じねばならぬ、即ち  
 黒㉖に應じて白は㉗と飛ぶより  
 外にしかたはない。

▲(參考黃圖) 又白が單に㉔若  
 くは㉕から打てば黒に㉖と拓か  
 れて折角一間締して居る□印二  
 子の裾を覗はれッマラヌ結果に  
 なる。

乃て白は此の黒のハタラキを制  
 限するため第百廿三圖の如く肩  
 から打つのであるが、然し其は  
 白の策といふのみで、敢て良い  
 手といふ譯でない。



(圖黃考參)



(圖玄考參)

~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



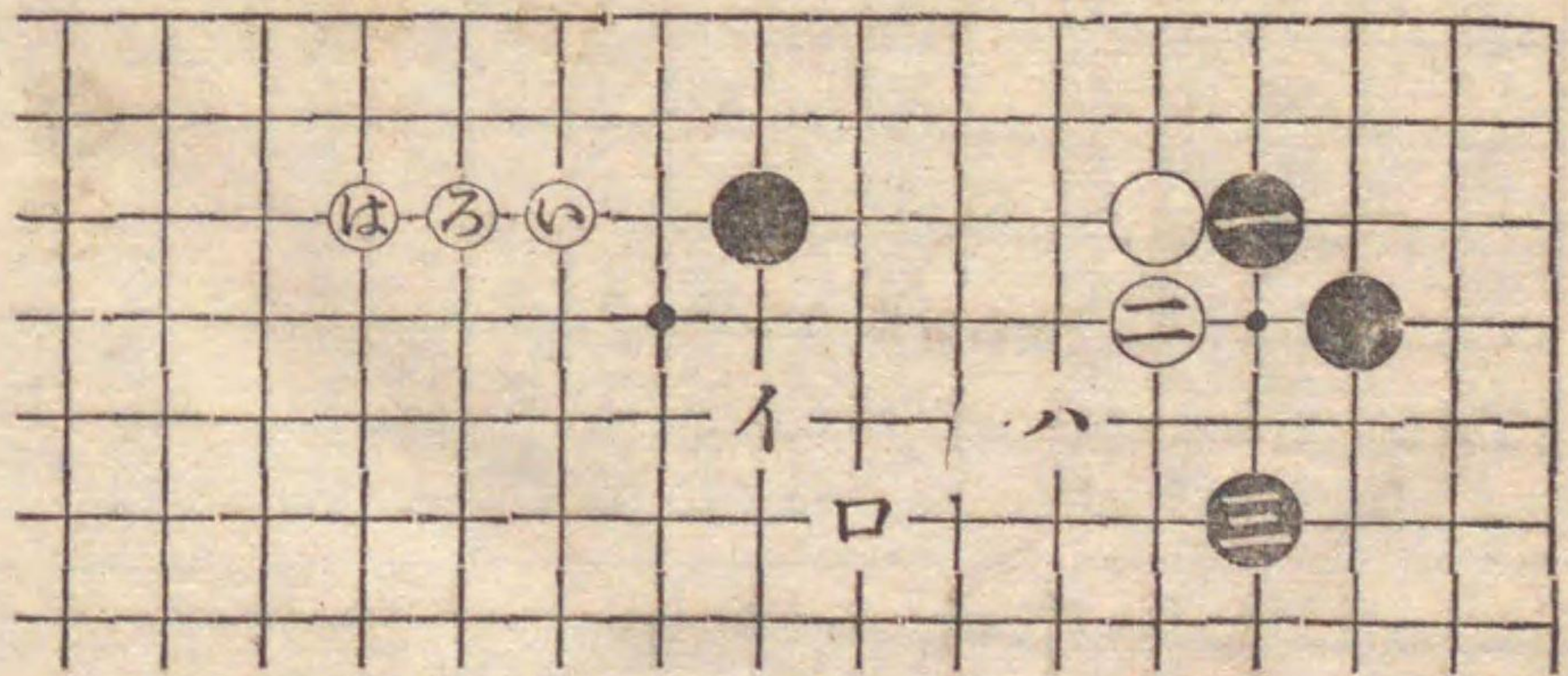
○(第百貳拾四圖) 隣隅に於ける我布石の關係次第て白四の手を④の一間、⑤の二間、若くは⑥と三間に詰める事もある、其の布石状態の一例を言ふと、

▲白が(イ)(イ)と一間高締にてもある場合は、④と二間に詰るのもよい。

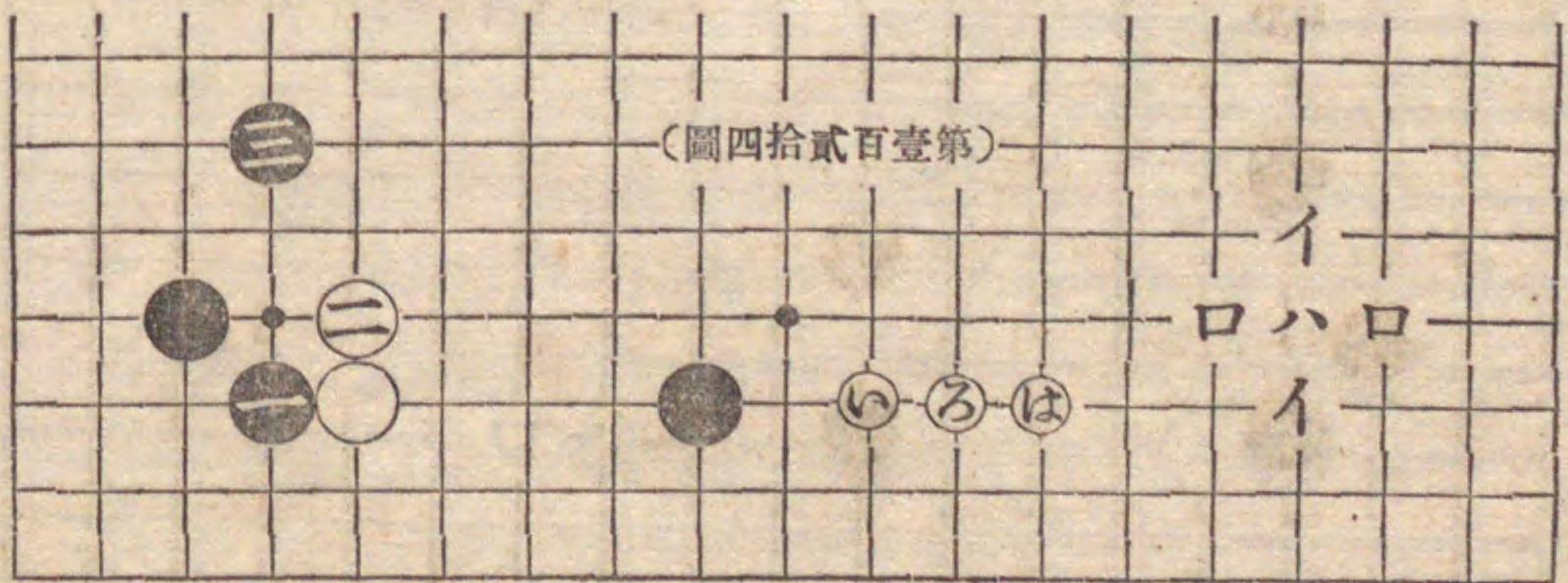
▲白が又(ロ)(ロ)と一間高締にしてある際ならば⑤と二間に詰めてもよい。

▲又白(ハ)と星にてもある際なれば白は④と三間に詰るのもよい手である。

(第百貳拾五圖) 白に④、⑤若くは⑥から攻られた際、黒の應手は如何といふと、(イ)と一間に飛ぶか、(ロ)と大斜走に圍ふか、或は(ハ)と上から掛けるかの三途である。



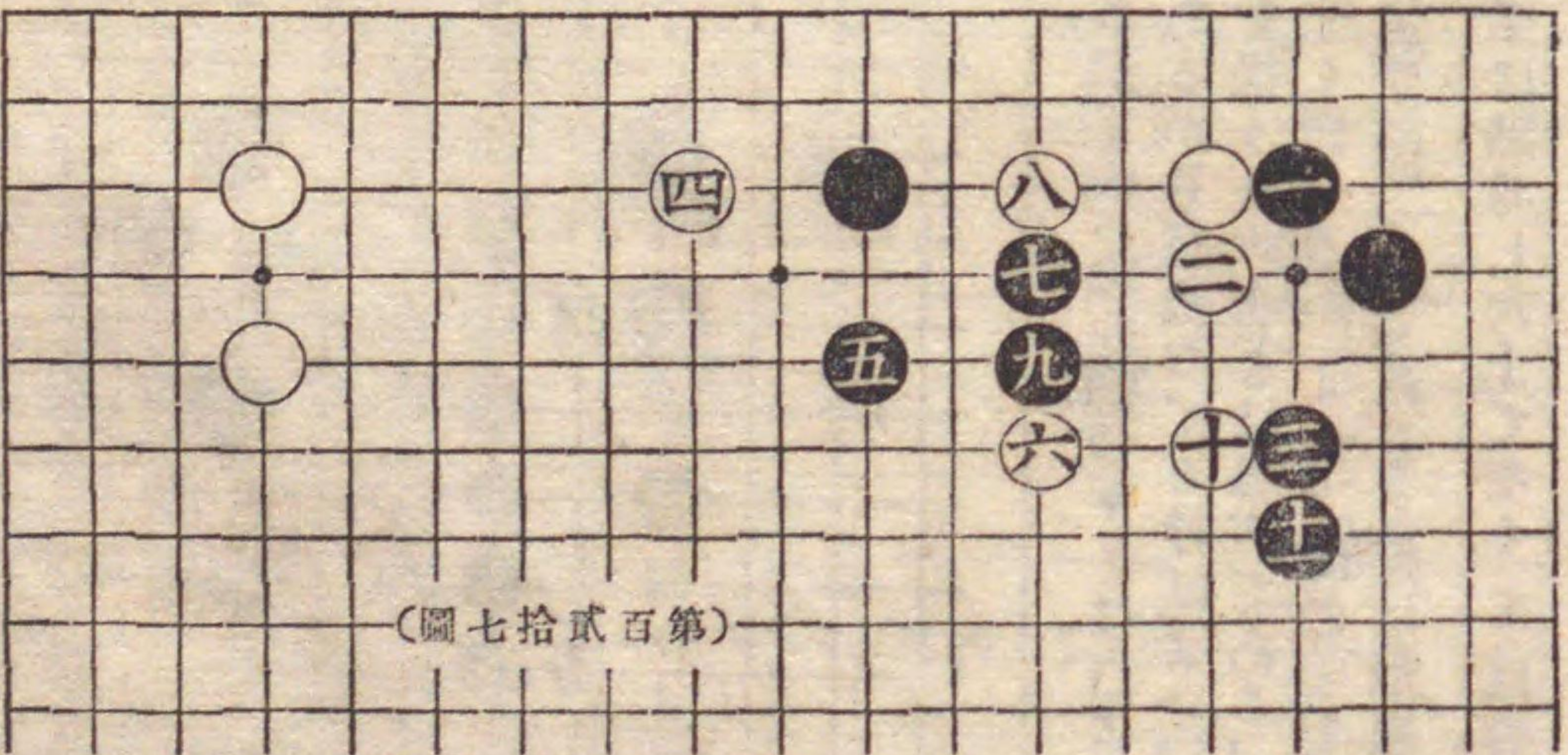
(第百貳拾五圖)



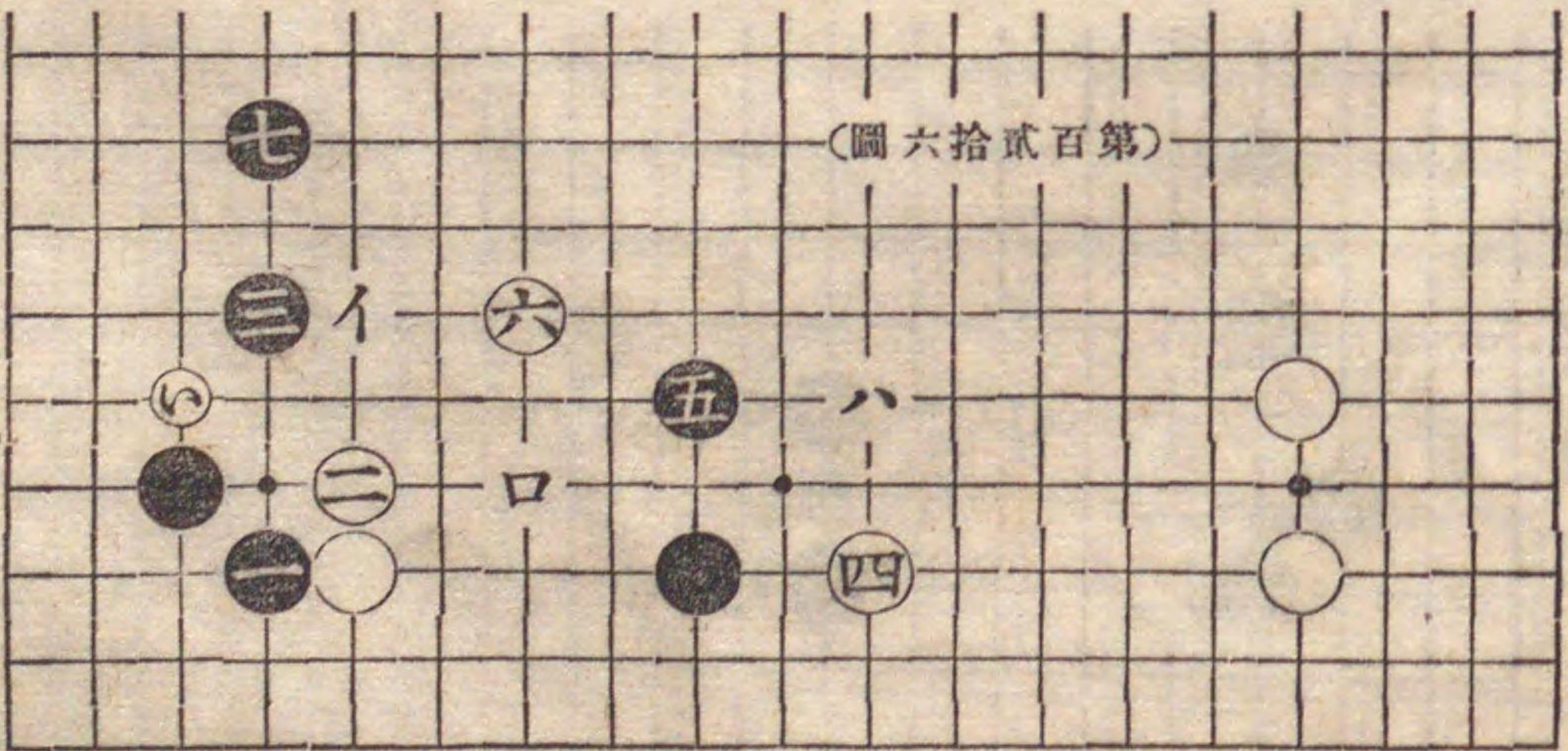
(圖四拾貳百壹第)

○(第壹百貳拾六圖) 黒五の飛の時、白は六と峽「ハザマ」をあけて飛ぶが普通である、其の時黒が七と飛んで⑥の頂越に備へれば、白手抜でよい、若又黒が(イ)と行ひて白二、六の間を突貫しやうと試みたならば、白は(ロ)と備へるがよい、次で黒は(ハ)の冠であらう。

○(第壹百貳拾七圖) 白六の時黒は急に白に迫つて兩斷す可く七と打つ事もある、白は之を拒くため八と頂け、黒が九と突張つた時は十と頂けて連絡を計るがよい、黒は自然の手順を以つて十一と要所を行ひる、要するに黒は白に十の手を迫り出させて十一と運ばうといふ意に外ならぬのである。



(圖七拾貳百第)



(圖六拾貳百第)

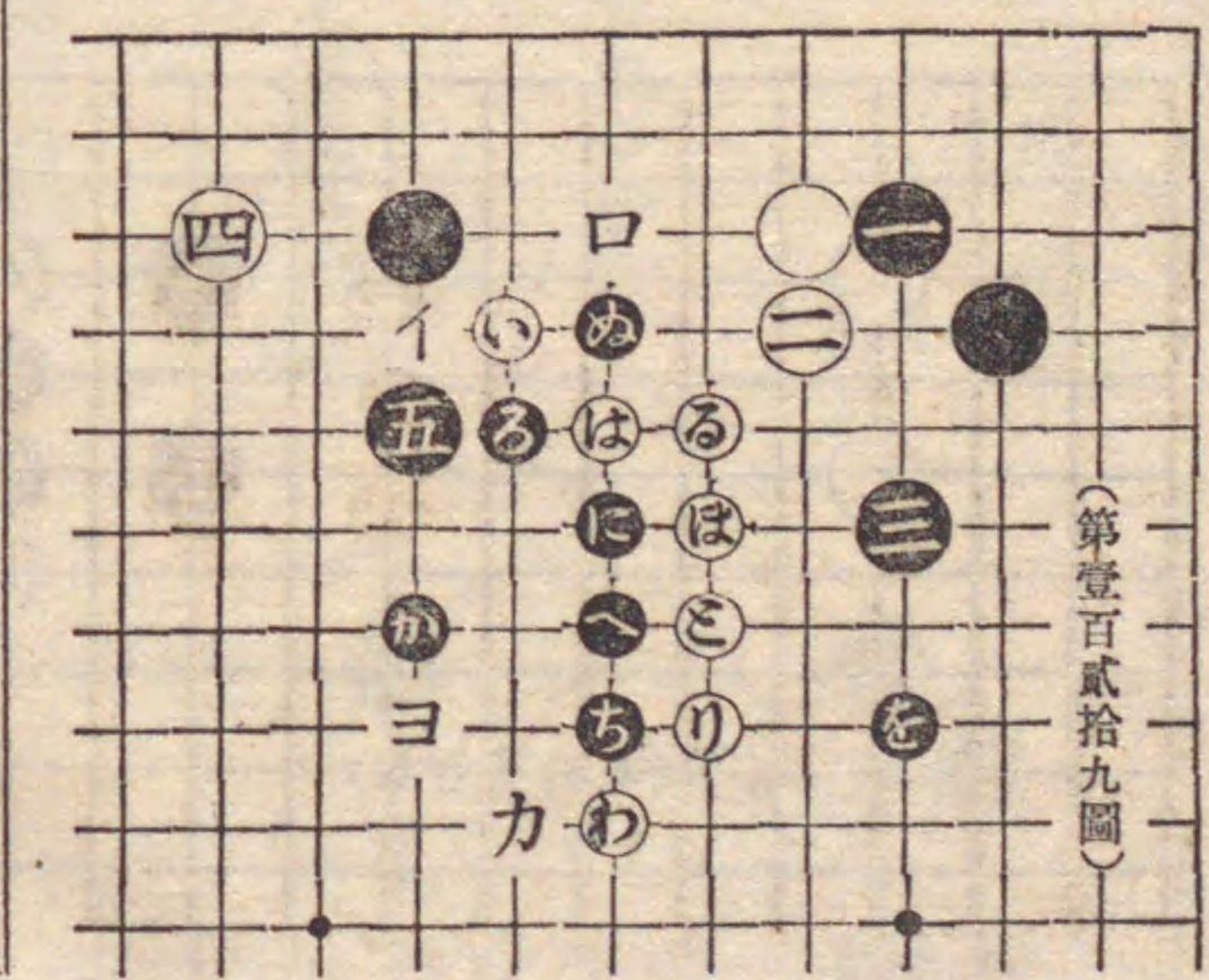
~~~~~(石 定 先 五)~~~~~



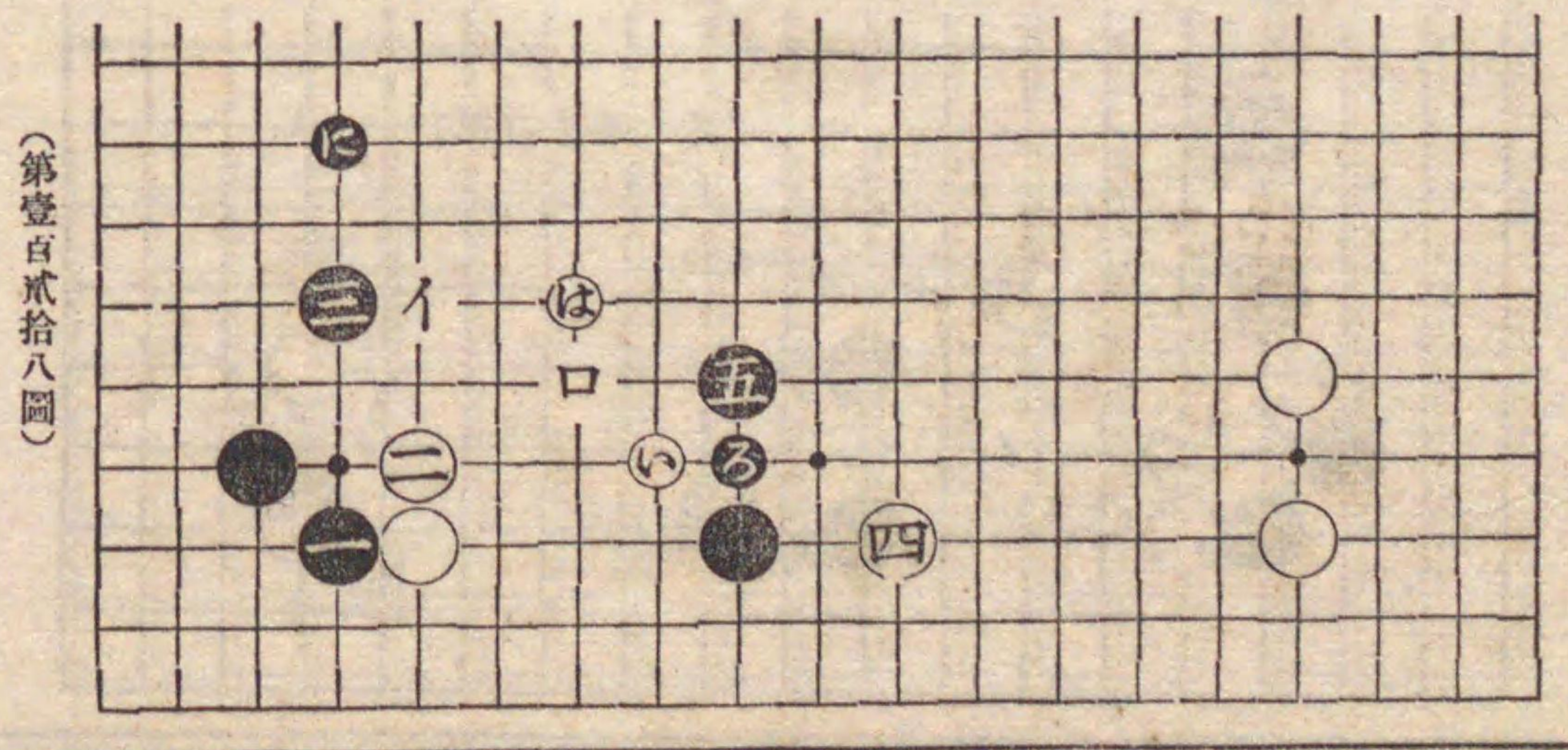
○(第壹百貳拾八圖) 前圖の如く白十と餘義なく頂けて十一と行びられるを避ける趣向で、白は本圖の如く㊦と覗き、黒㊧の時㊨と打つ手もある、然し此の形の時黒が次に㊩と飛ばば無難であるが黒は㊪と飛ばずに(イ)と行びて(ロ)の缺點を覗く手がある、即白六の手で㊫、黒㊬、白㊭、黒(イ)と來られると白は應手に窮する事になる。

○(第壹百貳拾九圖) 白㊮に應じて黒必しも粘ぐものとは限らぬ、本圖の如く㊯と上から抑へて來る事もある、其時白は㊰と二段綽をして㊱迄出た時、黒は㊲と一着截をして㊳と備へるがよい、此の㊲のキリは白に(イ)の點へ突出されぬための要心であるから只截つてあげばよい、此の手を更に(ロ)と下つて㊴の一子を提りキルなどは愚劣である、「註」白に㊵と綽ねられたら㊶と手堅く備へるがよい、此の手を(カ)とか(ヨ)とか打つて後に白に㊷の點へ來られると黒は形崩れとなるの不利がある。

要するに黒五に對して白が㊸と覗く手は熟考した上でなくては容易に手を下す事は出來ぬ。



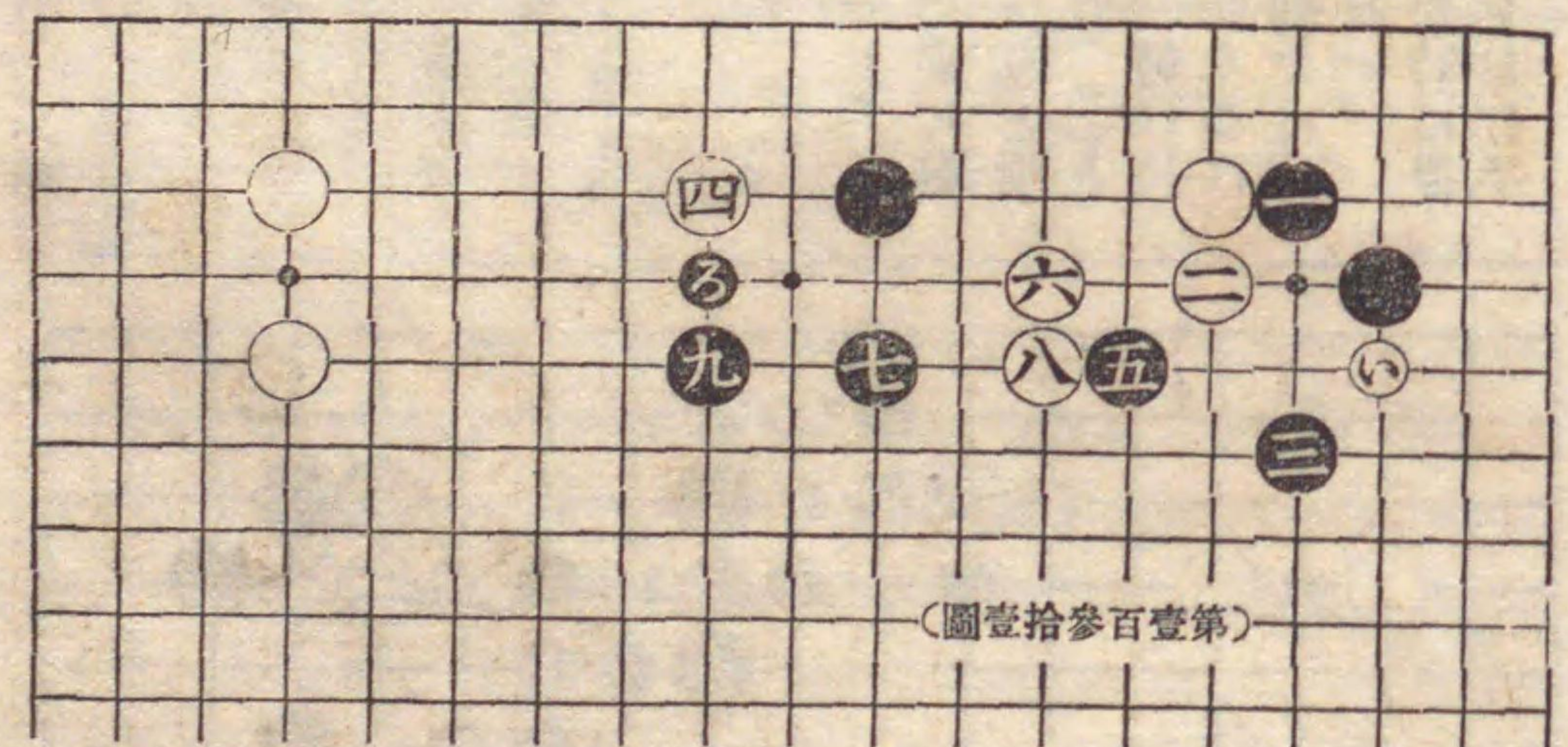
(第壹百貳拾九圖)



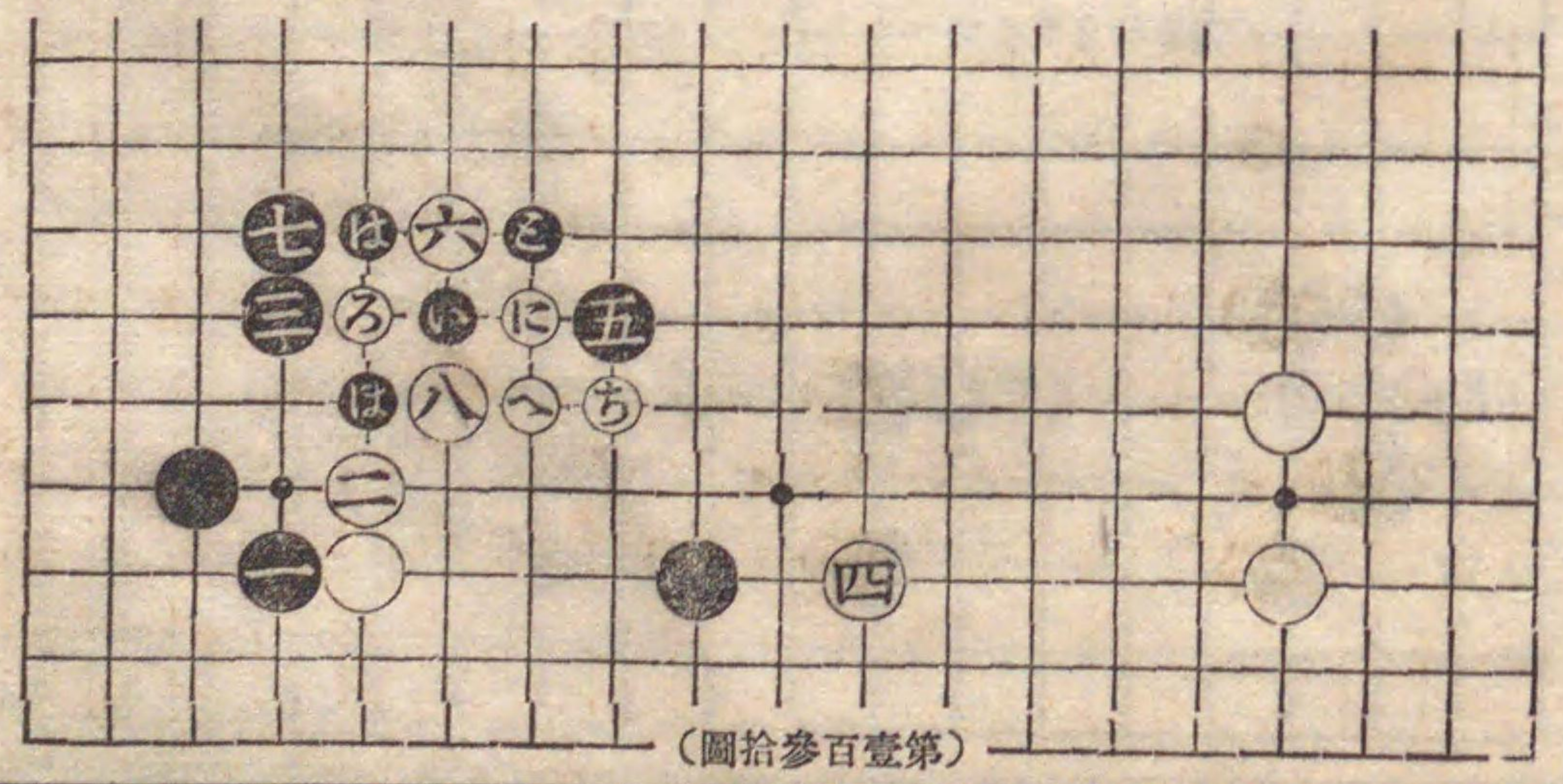
(第壹百貳拾八圖)

○(第壹百參拾圖) 白四に應じ黒五と圍うて來れば、白は六と打つのが着理である、黒若し七と行れば、白は八と控へておくのがよい、若し七の手で㊸と劇しく頂けて截つて來れば圖の通り黒㊹、白㊺、黒㊻、白㊼、黒㊽、白八、黒㊾と粘ぎ、白㊿、黒㊽、白㊾と手順を運んで出る手になる

○(第壹百參拾壹圖) 黒若し五と上から掛けて來れば白は六と飛ぶのが普通で、次で黒七と一問し白八と行びた時黒は九と冠する位のものであらう、本圖四子の白は極めて弱いから容易に㊿に頂ける事は出來ぬ、黒七の手で㊽と頂ける打方もあらうが棋が六々しくなつて、其の變化は計る可らざる結果とならう。



(圖壹拾參百壹第)



(圖拾參百壹第)

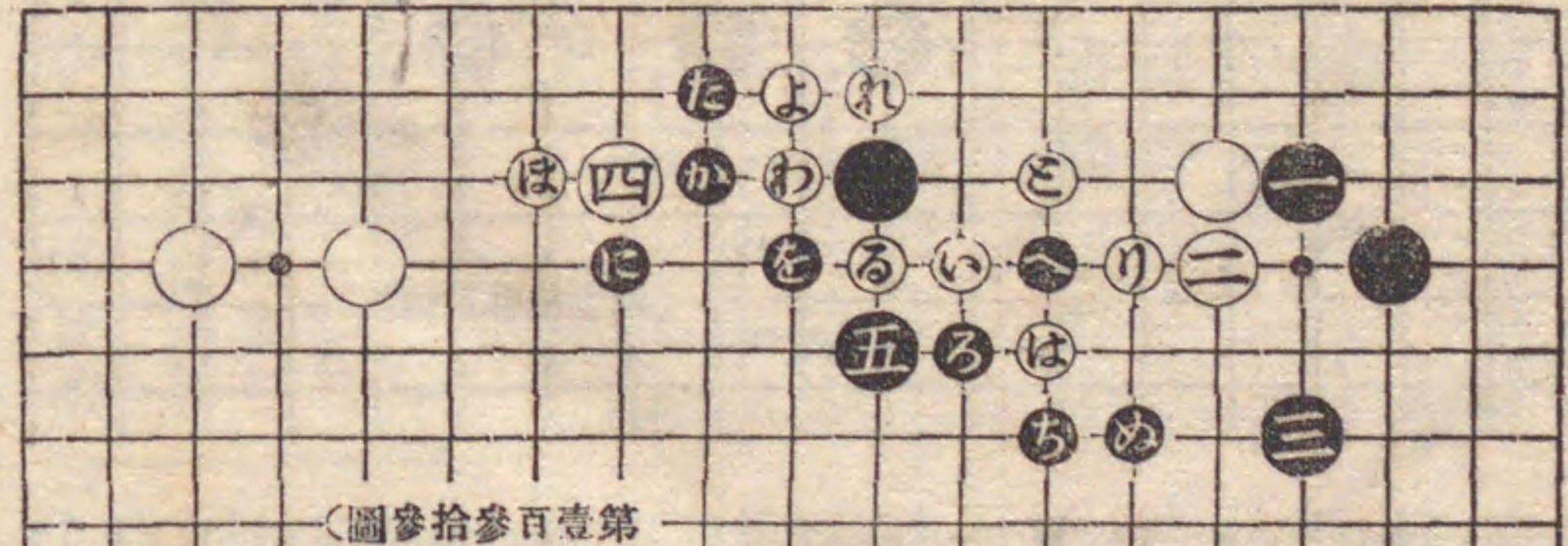
~~~~~(石 定 先 互)~~~~~



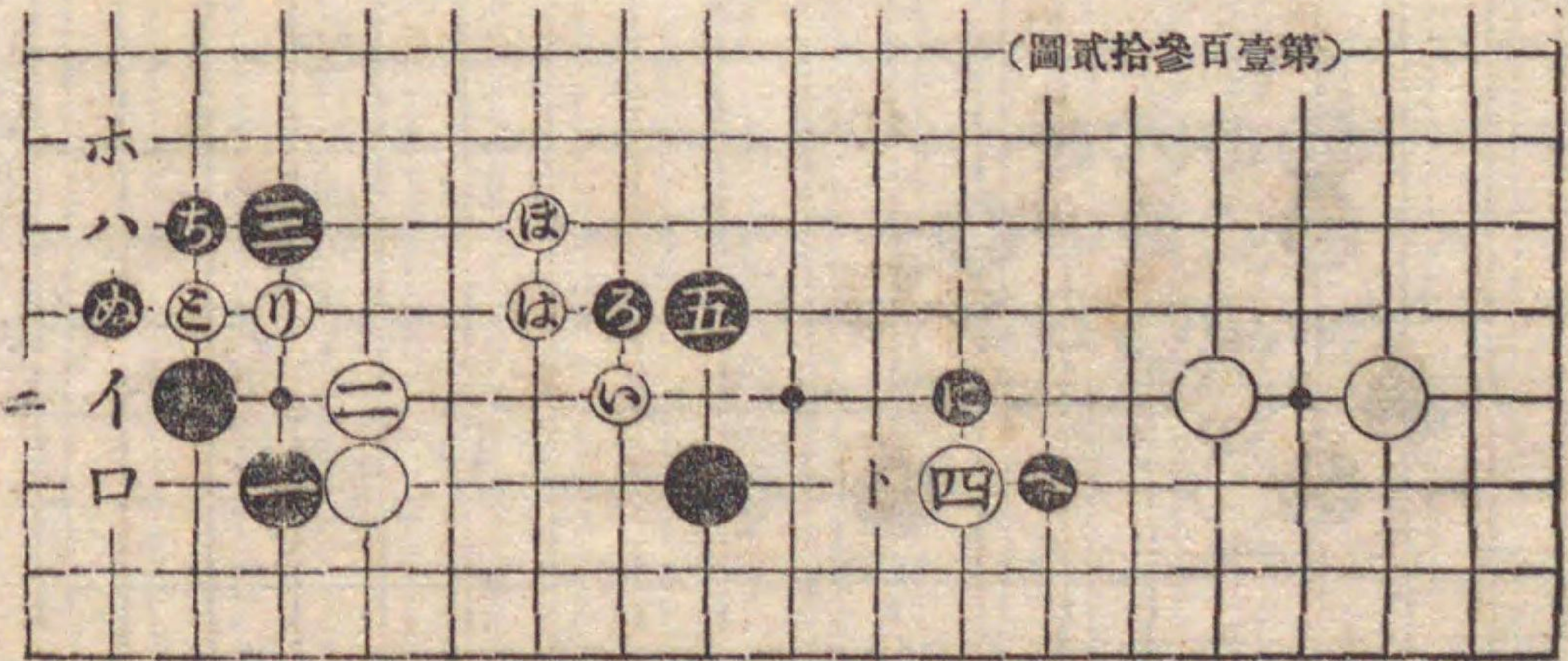
○(第壹百參拾貳圖) 本圖の如く白四と二間に詰めるのは、或は隣隅に圖の如き白の布石がある様な場合と假定して置く、白六の手で④之又考ふ可き手で、やはり③と單純に打つ方がよい、次で黒②と抑へ白④と縛ねた時、黒は⑤と頂けるのも一策である、此の⑤は白の應手を試みたので、此の時白は黒⑥に關せず中原へ③と出る手と、白四を⑦と引く手と、(ト)の點へ行出す手とある。

白若し③と出れば、黒は⑧と抑へ込むがよい、次で白が⑨と頂越して來たならば、(巳に白の勢力が⑩⑪と加はつた後故)黒が①の點に截るのは危険である、乃て⑫と夾み、白①と引いた時⑬と盤り、白が(イ)から截れば(ロ)と提る、又(ハ)から截れば(ホ)と提る、何れにしても截つた方の子を提ればよい、此くなれば巳に四の一字を⑭と抱へ込んで實利を占められた後であるから白は甚だ面白くない。

○(第壹百參拾參圖) 白が⑬と引いた時は黒は⑮と一子の犠牲を供して⑯と外を包む手段がある。



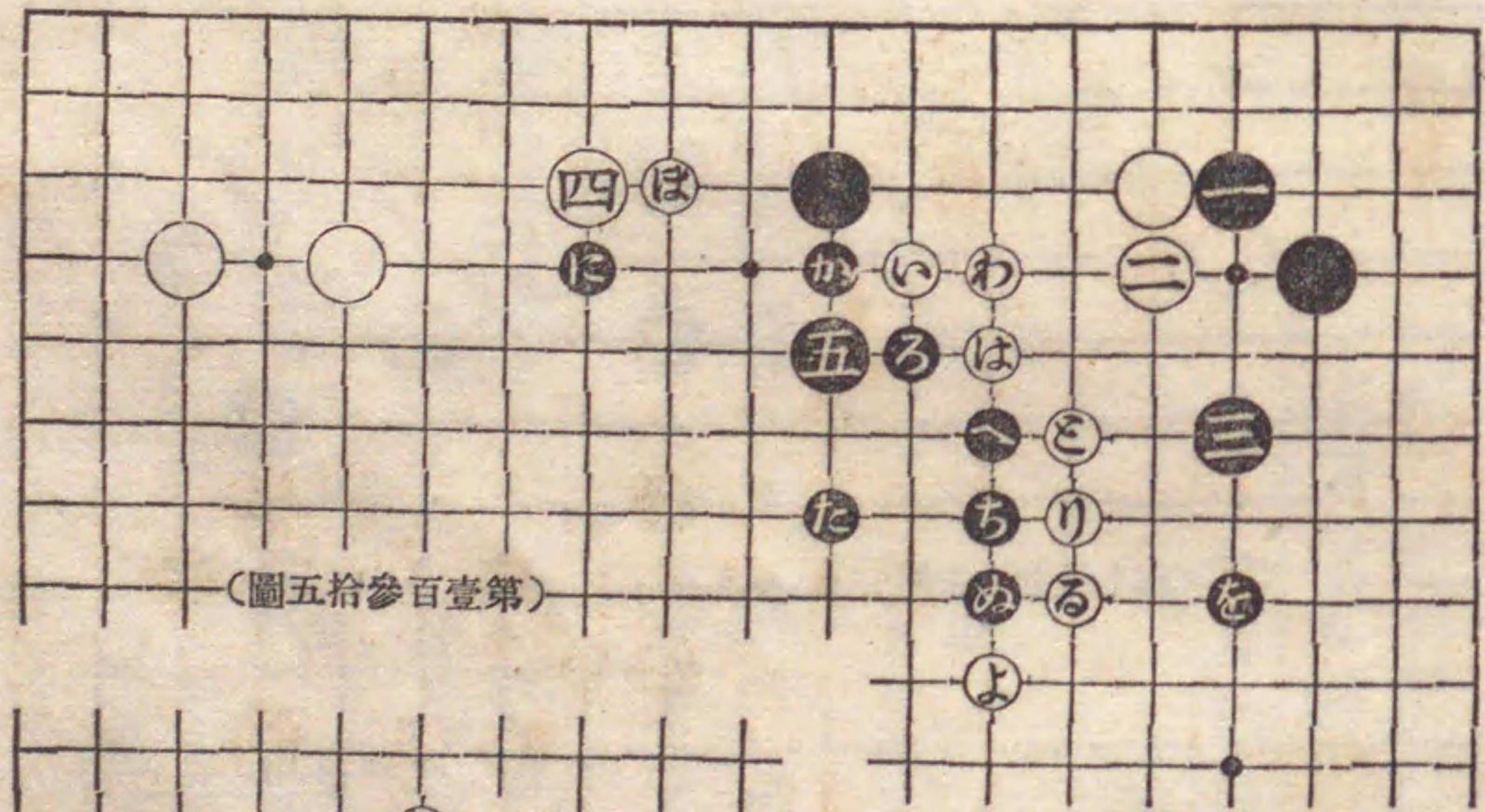
(圖參拾參百壹第)



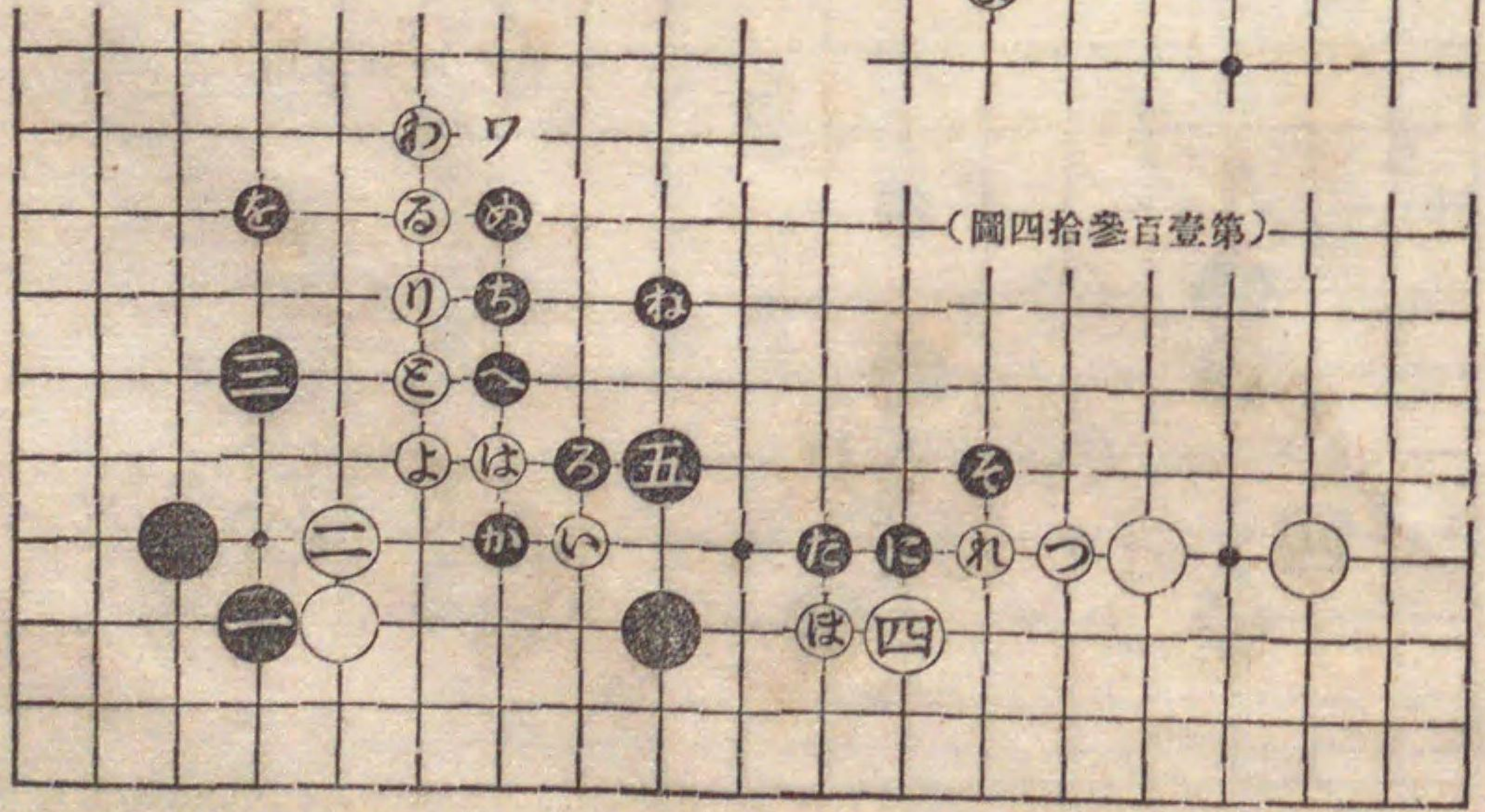
(圖貳拾參百壹第)

○(第壹百參拾四圖) 黒①に應じて白が②と突出したならば、黒は③と抑へ、白④の二段縛、黒⑤の行び、白⑥、黒⑦、白⑧の時黒をと飛び、白が⑨と行びた時黒が⑩と截り、白を⑪と粘がして、⑫と抑へ、白⑬、黒⑭、白⑮の後⑯と用心しておくのである、或は白⑰の手で(ワ)と縛ねて來れば黒⑱、白⑲、黒⑳と打つてもよし又㉑の前に黒㉒、白㉓、黒㉔、白㉕と運んで㉖と控へてもよい。

(第壹百參拾五圖) 圖の如く白㉗の手で此く粘げば、黒亦㉘と粘ぎ、白㉙に應じて㉚と備へるの一手である。



(圖五拾參百壹第)



(圖四拾參百壹第)

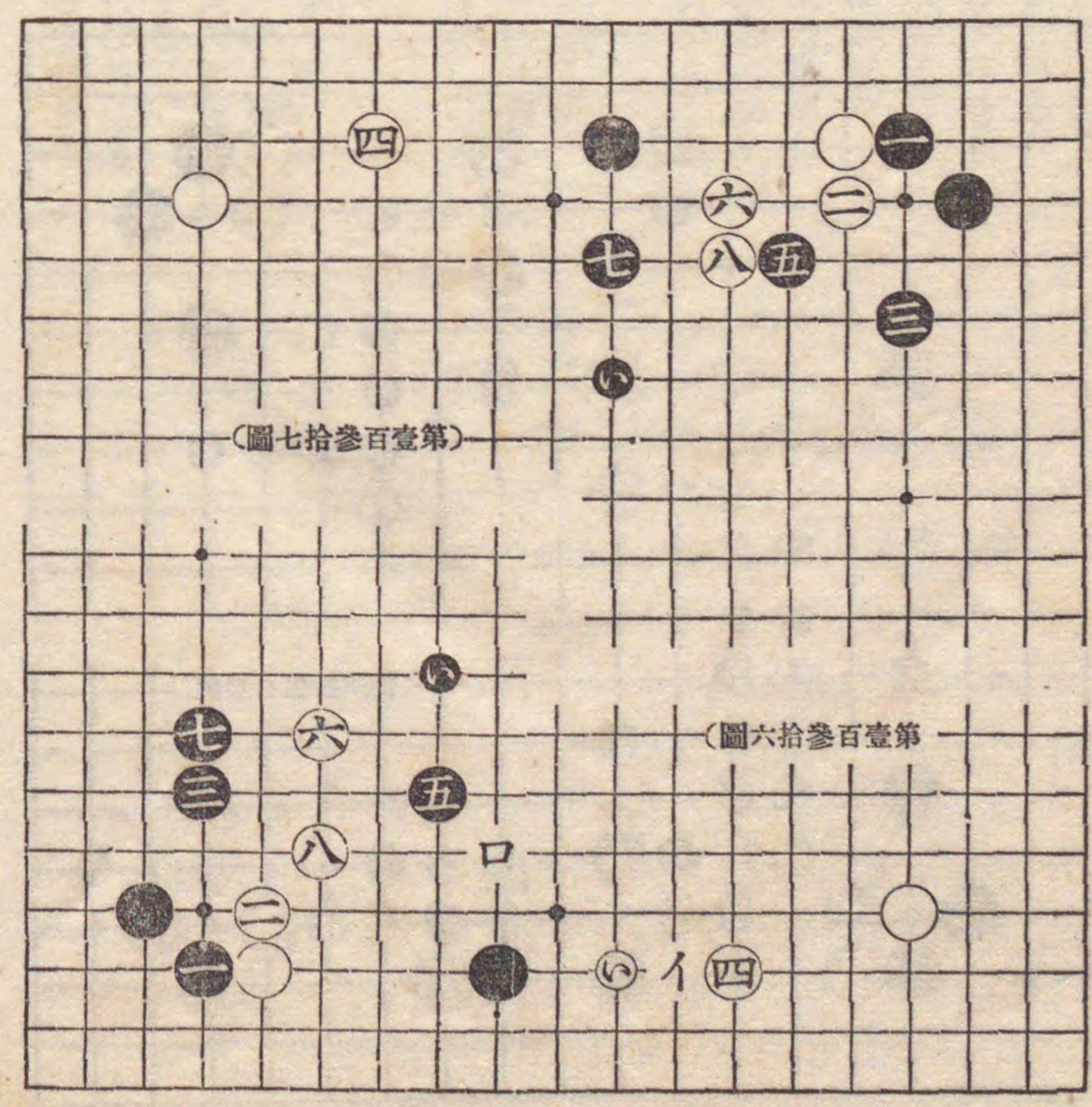
~~~~~(石 先 五)~~~~~



○(第壹百參拾六圖) 圖の如く隣隔星に白一子があれば、四と三間に詰るのも恰ど好い手である、或は④と一バイに詰る手もないではない、星の白から(イ)と二間に行くのは「ハンマ」の手である、白四に應じ黒五を(ロ)と一閒飛しても差支はないが左右の白が各三間といふ距離があるから少し緩慢の嫌がある、黒七、白八の後黒は⑤の飛位のものであらう、

(第壹百參拾七圖) 黒五に應じ白六、黒七、白八の應接は前に掲げた一閒詰二閒詰の場合と大差はないが黒九の手は何れへ運ぶか分らぬ、⑥と單關するのも一策である。

▲要するに前述「一閒詰第壹百貳拾六圖」より「第壹百參拾壹圖」迄に示した手順及策戰應接の大意は、之を後の二閒詰及三閒詰に應用して差支ない。



大正五年貳月拾貳日印刷  
大正五年貳月拾五日發行

著作  
所有

編輯者兼  
發行所

印刷者  
高桑基次

印刷所  
株式會社 秀英舍

發行所  
中央圍棋會

五先定石、三閒夾(奥付)  
正價金壹圓六拾錢  
郵送料金六錢

廣月凌  
東京市神田區美土代町四丁目五番地

高桑基次  
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

株式會社 秀英舍  
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

中央圍棋會  
東京市神田區美土代町四丁目五番地  
(振替貯金口座東京一〇五八九)



大正五年九月廿五日  
大正五年九月廿五日

大正五年九月廿五日  
大正五年九月廿五日

大正五年九月廿五日  
大正五年九月廿五日

大正五年九月廿五日  
大正五年九月廿五日

中央國報

中央國報



